



ピノコパパの
エッセイ集 時
に 句と詩集

pinokopapa

このサイトが閉鎖されることになったそうです。

このサイトで、毎晩のように文章を書き込みだして何年でしょうか。多分6年は経過していると思います。そのおかげで、香川菊池寛賞にも応募したりもしました。しかし、このサイトが閉鎖を予告しています。以前にも同じようなサイトがあって、そこでは少し俳句とも狂歌ともつかぬものを書き連ねておりました。そして暫く間をおいてまたそのサイトにアクセスしてみると、閉鎖通告が出ておりました。私はもうダウンロードもせず、消えるままに放置し、相当数の作品を失くしました。今回は何日か掛けてダウンロードし、保存しました。また何日か掛けて、こちらと同様の趣旨のサイトを見つけ、少しずつ書きためていこうと思っています。今日までお読みくださった方に感謝します。同じ

pinokopapa

で続けますので、検索して見てください。どこかで引っかかるかもしれません。これもこの土地から出て行って、奈良の方に転居することになった今と重なった、偶然のめぐりあわせかもしれません。奈良に行きます。

いきなりですが、国民という言葉が英語で言うと、

national

とか

people

citizen

ということになるそうです。Nationalといえば、いまのパナソニックの前身の松下電器の社名で、

明るいナショナル、 明るいナショナル

と繰り返すコマーシャルソングを思い出すのですが、これは覚えておられるでしょうか。ナショナル劇場のテーマソングでありました。といっても、この番組は二〇〇八年まで放送されており、ナショナル劇場というより、大岡越前、水戸黄門といったほうがわかりやすいのではないかと思います。江戸を切るとかもやっていたようですが、最後のほうは、水戸黄門と、大岡越前を半年交代でやっておりました。

そんなことは余分なことでした。国民の英語訳の national、people、citizenを逆に日本語に直すと、nationalは国定、国立、とといった訳の後に国民とでてきます。citizenは公民、市民、本国人といった、あまりなじみのない言葉の後に市民とでてきて、国民はそのあとになります。peopleにいたっては人々、住民、括弧がついて(その国に住む)国民となります。

なぜ執拗に国民という言葉の来歴、語源を探っているかというと、言葉はその社会に存在するものをのみ、表現するものだからです。言葉は概念です。社会に存在しないものにそれを表現する言葉は生まれません。ですから、どこかの未開地域の原住民の言葉は三〇単語ぐらいしかなかったそうです。彼らの生活はそれだけの言葉で成立しており、それ以上のものは必要ないのです。

しかし、突然ですが、これと真反対なことをいったのが、サルトルでした。言葉は非現実的なものと言い切ります。とはいっても、かれにとって言葉そのもののことより、言葉を使って成り立つ文学というものが非現実的なものだという意味ではないかと思っています。

さて、言葉が社会に存在する現実を表現するものであるということと、サルトルの言う非現実であるということの両方の意味を持っていると考えて、国民という言葉を考察してみたいと思っています。

に

国民という言葉の反対語はなんでしょう。国民という言葉を考えてみるのに、反対語は何かと考えるのはある意味、近道かと思いましたが。しかし、急には思い浮かばない。国民に対立、対抗するものって、何？とはいっても、わざわざ対立、対抗するものと考えなくとも、真逆のものは何と考えてもいいのではと思ったのですが、それでも浮かばない。しかし、政治学的には、国民を支配するのは国家であることは明白で、国民の反対語は国家としてしまうのは余りに定型的でありきたりに見えます。そこで、さらに考えると、国民の反対語として、国家から見捨てられたロヒンギャのような人たちのことが思い浮かびます。つまり、難民という言葉です。自分たちが平和に暮らしていた土地を追われてミャンマーを離れ、バングラデシュに逃れていきます。彼らはミャンマーの国民という地位を追われ、また、捨てて行った人たちでした。彼らは国民ではなく、難民となったのです。しかし、これには国家が入り込んできます。やはり、国家も関わってくるようになってきます。

しかし、国家、すなわち国家論というとなんでもないものを考えて行くのは、手に余ります。様々な様相を呈して、国家は歴史に沿って現れ、経済が変わるとその仕組みも変えてゆきます。また、国家論は政治学を中心として、世の英知が様々に論じてもおります。私のような浅学非才なものは、それを押し頂いて拝読するのみです。

そんな中、ちょっとしたトピックが報道されました。坂本龍馬が慶応3（1867）年に京都で暗殺される5日前に記した直筆の書簡が見つかったというものです。これは、将軍、徳川慶喜が大政奉還したことを受けて福井藩の重臣に宛てた書簡のことで、文中には「新国家の御家計（財政）」という言葉が使われ、同藩士の新政府の財政担当者への出仕を懇願しております。龍馬はこの後暗殺されますから、彼が出仕を懇願した福井藩藩士、三岡八郎の後の姿を見ることがなかったのですが、三岡八郎が後の由利公正であるといえ、龍馬けだし慧眼であったとわかつて思います。しかし、ここで注目したいのは、龍馬が版籍奉還も成っていない幕末のこの時期に、新国家と言っていることです。彼の中では、もう土佐藩も薩摩藩も長州もなく、日本という新国家があったのでした。こんな概念は、先に行き過ぎていて危険思想に思われたかもしれません。いや、頭の固い周りの者には理解できなかったかもしれません。

経済学書や政治学書から国家をかんがえるのではなく、歴史上のもう一つのエピソードを紹介して考えてみたいと思います。それは東インド会社です。

東インド会社については、ウィキペディアの、アジア地域との貿易独占権を与えられた特許会社。重商主義帝国下、特に貿易差額主義に基づく経済活動に極めて大きな役割を果たした、というのが実に簡潔な説明であろうと思います。そしてこの説明のなかで、重商主義、貿易差額主義という言葉が歴史上重大な意味を持っています。しかし、そんなこととは関係なく、東インド会社の世界への影響は計り知れないものがありました。何を大げさなと思うかもしれませんが。私たちの今の日常生活、洋服を着ております。ヘアスタイルはちょんまげを結ってはおりません。それはアメリカのみならず、世界中がそうになっています。そして世界の共通語といえば英語。肌の色が違っていても、それまでどんな服装をしていても、今は世界中の人が洋服を着、男性はスーツにネクタイを正装とし、女性もウエディングドレスを着ることに憧れます。これはもう、文明の潜在意識にまでなっています。東インド会社が世界をこう変えたのでした。東インド会社の影響力をここまで大げさに言い立てることはないだろうとおもわれるかもしれませんが。しかし、東インド会社を侮ってはいけません。東インド会社はインドだけを相手に貿易していたわけではなかったのです。この世界で初めてのグローバル企業は、インドをはじめ、中国。オーストラリア、アフリカ、アメリカまでも相手にして世界中と貿易していました。その影響から、英語は世界の共通語となりおおせました。言語が流布してゆくということは、文明が広がっていくということです。そしてそれが今はもう特別なものと意識されることなく、通用しております。今の日本は、かつてほどの影響力を失いましたが、それでもベトナムでは日本語を学び、日本で就職することを夢にしている若者が大勢います。そしてベトナムではバイクのことはホンダといい、これは辞書にもそう記載されているそうです。ミャンマーでは耕運機はクボタというそうですし、寿司、ラーメンは先進国でも同じく辞書に乗っているそうです。これらは、私たち日本の国際的影響力の一例だと思えます。

さて、そこまでの影響を世界に与えた東インド会社の行動理念を代表して理論だてたのが、トーマス・マンでありました。ドイツの文学者、魔の山のトーマスマンとは全くの別人です。こっちのトーマス・マンは東インド会社の役員であり経済学者でありました。そして、初期重商主義最後の人物といわれています。

こうしてまたも難題が出てきました。重商主義です。これについては、トーマス・マンの著作を通じて考えてみたいと思っています。そして、その言い分をみると、これは現代のどこかの国が今東南アジアと世界に繰り広げようとしている世界戦略と同一

に見えてくることに気がつかれると思います。しかし、そのトーマス・マンの経済論の先に国家、nation とnationalism までが見えてきます。

東インド会社の役員で経済学者でもあったトーマスマンの著作、経済論は今でも初期重商主義の理論的支柱として、よく論じられています。そんな中から一文を紹介すると、

わが国には財宝を産出する鉱山がないのだから、
貿易によって財宝を獲得する手段しかないことは
思慮ある人ならだれも否定しないであろう

とあります。これは当時、英国から銀が海外に大量に流出していて、その原因は東インド会社による貿易にあると非難が集中していたという背景がありました。続けて、

貿易差額こそイギリスの富を増大させるものだ
そのためには輸入額より輸出額を多くしなければならない
輸入品には多くの付加価値をつけて再輸出するのだ

と論じます。ここに、重商主義の理論があります。貿易などを通じて貴金属や貨幣を蓄積することにより、国富を増すことを目指す経済思想や経済政策が重商主義であり、その手段が貿易差額主義でありました。しかしここで注目すべきは、貴金属、つまり金、銀、そして貨幣が国の富であるという認識が確立されていたということです。さらに注目すべきは、加えて、貿易によって国富を蓄えるためには、外国の原料を使って国内で生産した財にかかる輸出関税を低減することも主張し、国内の消費を減らし、輸出に振り向ける財の量を増すこと、土地その他の国内の天然資源を有効活用して、輸入の必要を減らすことという国内経済政策をも提言したことです。

いま二点、注目すべきことをあげました。金銀、貨幣が国富である、国内の消費を減らし、輸出に振り向けよという点です。じつは、金銀貨幣が富であるということが大事なのではなく、国富を蓄えよという点が注目すべきことです。つまり、富の蓄積が次の時代を導く下地に成ってゆきます。ここに資本主義の萌芽が見えます。また、国内政策を論じる点が、国家という枠組みとその認識が出来上がってきていることに気づかせます。マルクス主義経済学は、国家は資本主義になって確立されたと断じます。トーマスマンの議論は、国家の認識がすでにできてきていたことを知らせます。

さて、貿易によって富を得るという手段は、世界の工場となった産業革命後の英国が

そうであったように、輸入品に付加価値をつけて再輸出するということにつきます。原材料を輸入し、製品に加工して再輸出する、この過程を繰り返す、国を富ませることは、かつての日本もそうしてきました。しかしそれをもって、膨大な人口と、国富の増大を背景にした軍事力の増大を図り、重商主義的な時代錯誤の拡大を図っているのが中国でありましょう。

本当の意味での植民地というのは帝国主義の時代になって表れてくるのですが、重商主義の時代に早や同様の収奪を目的とした植民地支配のひな形が現れてきます。イギリス東インド会社の人たちは、アジア各国に英国民を移住させ、その地を経済的にも政治的にも支配してゆくようになります。そして自国人を移住させる手段として、経済的、軍事的な侵略も行いました。重商主義時代に先立つ、大航海時代のスペインによるペルーの侵略は過酷を極めました。武器を持って戦うことを知らなかったインカ帝国の民を、フランシスコ・ピサロはたった百八十人で虐殺し、征服してしまいました。こういったことを契機として、未開の地を侵略、搾取して、自国の富を積み増していった時代が重商主義でありました。これが歴史に残した重商主義の影の部分といえます。

この植民地支配と貿易の独占は、他の欧州列強との対立も引き起こします。そのような経過から、国を富ませるということは富を積み増すことであり、軍事的にも強固でなければならないと考えられました。こうして列強は軍事力で貿易のネットワークを独占し、植民地を支配したのです。

重商主義経済は、その前の大航海時代が切り開いた地平の上に成り立ったシステムでした。大航海によって開拓された未知の大陸に富を求めて、欧州列強はしのぎを削りました。そして貿易のネットワークを独占するための軍拡を図り、その力によってまたそのうえの富を積み増してゆきました。そんななか、トーマスマンは、

国家間の競争に勝たなければ、
貿易商人は王国の富の管理者であり
他国民と通商を営むもの
当然その職務には責任と栄誉が伴う
優れた手腕と誠意をもって
私の利益が公の福祉に従うようにしなければならない

と語ります。彼は、彼が切り開いたグローバル競争の中でナショナリズムを芽生えさせます。国家を自覚するようになったということです。

重商主義経済の中で、国富を重金主義を持って金と貨幣で積み増してゆきます。資本の蓄積です。大航海時代が重商主義時代の揺籃になり、重商主義経済が蓄えた資本が、次の資本主義を迎える準備を整えます。時代はある日突然切り替わるのではなく、このようにして徐々に変わってゆきます。

国家観も同様です。国家の富を増すためには、自国の輸入を減らし、輸出を増大させねばならないと考え、はっきりと国境を意識するようになります。そして、そこに帰属する住民は一致して輸入より輸出を多くするように協力すべきと考えます。国民の誕生です。しかし、貿易によって蓄えた富の恩恵は、自国民の享受するところだと考え始めます。私の利益が公の福祉に、と使命感さえ感じています。自他を区別するナショナリズムが芽生え始めます。

さて、このイギリス絶対王政国家が取っていた経済政策としての重商主義と重農主義のどちらも批判して、労働価値説を主張したのが、アダムスミスでした。こうして資本主義が勃興してきます。国家の在り方も中世封建国家や近世の絶対主義国家が崩壊し、近代国家にとって代わられます。王や諸侯や聖職者が主権者ではなく、国民が主権者となっていくのです。

国民という言葉を考え始めると、つい国家とはとまで考えることになってしまいました。しかし、国と国家とはなんとなく違ったニュアンスに考えていませんか。国って、国民の入れ物といった感じにとらえていませんか。反対に、国家というと、国家組織を暗に指していて、例えば官僚組織とか内閣とか、政権を形作っているものを念頭に浮かべてはいるような気がします。はっきり言葉にしてしまうと、国家は国民を支配する権力組織であると思っているのではないかということです。事実、国家とは大統領と官僚組織であると局限してしまういい方も存在します。

これをもっと端的にいうと、

国家（こっか）とは、国境線で区切られた国の領土に成立する政治組織で、その地域に居住する人々に対して統治機構を備えるものである。領域と人民に対して、排他的な統治権を有する（生殺与奪の権利を独占する）政治団体もしくは政治的共同体である。政治機能により異なる利害を調整し、社会の秩序と安定を維持していくことを目的にし社会の組織化をする。またその地域の住民は国家組織から国民あるいは公民と定義される。

国（くに、こく）は、一般的に、住民・領土・主権及び外交能力（他国からの承認）を備えた地球上の地域のこと

(Wikipedia参照)

ということなんでしょう。いまさら、国家の三要素などとは言いますまい。あんな、国はどこ？と訊く感覚で、もう一度考えてみようと思ったまでですから。

しかし、いったん日本を振り返ってみると、端的に国民という言葉が現れてきたのは、現行憲法からであったということは明記しておかなければならないと考えます。それまで日本国民は臣民でありました。

臣民といっても臣と民は異なっていて、封建主義時代では臣は政府高官であり、民は調停に支配される人民であったという、時代を相当さかのぼった説明があります。しかし、それはこの稿ではあまり重要ではないのです。たぶん日本は海に囲まれていて、ずいぶん特殊であったのではないかと考えます。だいたい日本という国名自体がだいたい七世紀ごろに名乗られ始めたのではないかとされているぐらいですから、いまの日本列島を国土と考えるの国名だったかもあやふやであり、ましてや庶民が、自分は日本人とってなどいなかったのではないかと思います。日本国国民が自分は日本人であると意識するのは、たぶん明治も中ごろであったのではないのでしょうか。そしてその契機もたぶん日清戦争であったのではないかと考えています。江戸っ子、京都人、浪速っ子、長州人、と並べれば、今でも幕藩体制の名残りが残っています。それでも明治憲法下、臣民となってはじめて日本人という、国民の概念に包括される意識を、人々はいだくようになったと思います。

にもかかわらず、日本は海に囲まれた現在とほぼ変わらない領域と人民を持ち、これを維持し続けて、日本国の意識を持ってきました。地政学的にたまたまそれが幸運にも可能だったということです。日本という国家意識と民族意識を持って国家形態を維持し続けたこの国は、この意味において世界で一番古い歴史を持った国であるといえるわけです。そういったこともあり、日本人は国民という言葉とその概念に、昭和憲法以前から慣れ親しんでいたのではないのでしょうか。とはいっても、穿ち過ぎかとも思っています。

前節と矛盾することを言わなければなりません。明治半ばまで、人々は自分が日本国に帰属しているとは意識しておりませんでした。日本が海に囲まれ、外的に侵害されることがなかった故、他国を意識することが必要なかったからです。しかし、不幸なことに戦争がそれをどうしても認めさせました。日清、日露戦争が、国家の運命と自分の運命が一致していると思わせたのでした。国民国家としての日本の在り方がこうして決まりました。さらに時の為政者は、国民統合の象徴に天皇を据えることで、国民意識の浸透を図りました。日本国民が臣民となりました。

しかし、ここで考えておかなければならないことがあります。よく、右翼の人が、昭和憲法は米国によって押し付けられたもので、国民はこれに同意し、信任する機会がなかったといいます。たとえば、国民投票などが行われていないということです。憲法改正には、投票した国民の過半数の賛成がなければならぬと、この憲法には書いてあるのに、この憲法の発布にはそれがなかったと

いうわけです。では明治憲法はどうだったのでしょうか。もちろん、明治憲法は欽定憲法であったので、国民が口を挟むなど恐れ多い、とんでもないこととされ、国民投票のこの字も出ませんでした。その意味からいうと、昭和憲法も明治憲法も、その成り立ちは五十歩百歩といわなければなりません。

それにしても、現行憲法は一九四六年に公布され、七〇年余を経過しております。その理念は、基本的人権の尊重、国民主権、平和主義にあります。そして、憲法は国民を縛りません。憲法は権力の手を縛るものであり、憲法で国民の義務と定められているのは、教育の義務、勤労の義務、納税の義務のみです。戦後七〇年、日本人は国民として、この憲法下で過ごしてきました。たぶんもう、日本人はこの憲法のもとで、日本国国民としての意識を十分育んできたと思います。憲法はその国の国家体制を定めるものです。もし憲法改正が具体化してくるのであれば、国家と国の運命が、自分と自分の子供たちの運命であると自覚して決めなければならないと思っています。もう十分に国民として訓練されてきたはずですから。

この項は10で終わったつもりでしたが、途中でずいぶん思わせぶりな事を言ってしまったことを思い出しました。あの時代遅れの拡大主義に前のめりな国のことです。いま少しずつ、その経済にほころびが見え始めているようですが、それでもなお中央共産党という巨大な権力組織の力で強引に取り繕って、いまのところ一応成功しているように見えます。ところが先日、ネットニュースで

中国前財務相、「中国金融リスクは08年の金融危機より深刻

という見出しの記事を見かけました。以下引用します。

中国経済ニュースサイト・華爾街見聞電子版（1月31日付）によると、現在中国全国社会保障基金理事会の理事長を務める楼氏は26日に行われた企業の発展をテーマとするシンポジウムで、中国金融市場の混乱ぶりを批判した。

「中国の金融環境は緩和的だが、資金調達コストが逆に高くなっている。銀行融資や証券のほか、各種の金融派生商品が次々と発行されている。また、ねずみ講から個人間での金融仲介サービス『P2P』市場まで現れ、中国の資金調達市場は非常に複雑化している。この結果、資金調達コストが上昇する一方で、実体経済で経営難がもたらされている」と指摘した。

この記事に続いて、

あわせて読む：

「10年前の米国金融市場と比べても、現在中国金融市場の方がより混乱している」「中国で金融危機発生の確率が相当高い」と楼氏が発言した。

また、楼氏は過去数年間の経済成長の鈍化は、当局の信用拡大政策が功を奏しなかったことが反映されたとの見方を示した。

楼氏は13～16年まで財政部部長を務めていた。

米中科学技術交流文化センター（本部米ニューヨーク）の責任者・謝家葉博士は米メディア「ラジオ・フリーアジア」の取材に対し、中国金融システムはまだ不完全だと指摘した。現在債務問題も深刻化しているため、中国で金融危機が発生すれば、その後の経済的打撃と混乱は、08年世界金融危機より深刻だと警告した。

中国株への投資を勧めるサイトがたくさんあります。米国の格付け会社とか証券会社も盛んに中国株の先行きを楽観視した記事を出してきています。これを信用するかどうかは別な話で、一種の提灯記事と思えば面白い話だと思っています。

前頁にあったP2P投資というのが目新しく、あまり馴染みのない言葉でした。今中国には私募ファンドというのが横行しております。これをとかP2P投資というようです。今中国の流動資金は行き場を失っているようで、ここでもお金でお金を儲けようと、個人のお金を集めて個人に貸す仲介業が盛んになっています。これは日本のクラウドファンディングとは全く違った性格のものです。その利回りは最低でも20%、30%というものもあるように散見いたしました。それも貸付期間は半年。私がそれを知った内では、日本に留学した経験のある28歳の女性が数人の部下を雇い入れ、数千万円の資金の運用を行っていました。彼女が日本で学んだのは金融関係ではなく、声楽で、武蔵野音大といったたでしょう。それから米国に行き、中国にかえて私募ファンドを始めたのでした。中国でも、信用の薄い弱小業者には大手銀行は融資してくれず、ほんの50~60万円の運転資金に不自由している人がおります。そういった人たちに彼女は直接会い、その情報を集めてネット上にアップします。すると、それに対して大勢の人たちが応募し、投資する金額をネット送金してきます。彼女は言います。一件も失敗はできない。失敗すれば、それは自分で賠償しなければならない。そうしなければ、次がない。それでもこの商売は儲かる。利益の半分か六割が投資した人、残りが彼女の利益ということです。利益をあげられて当然です。それも長くて半年の期間です。ですから驚きです。しかし、こんな高利貸はない。中国ではこれが野放しになっています。また、これは言うところのシャドーバンキングとは違ったものです。そして、これも中国のこのような投資会社の常です。お金を集めるだけ集めて、姿を消してしまう輩も後を絶たないとか。しかし、中国政府自身が、あのリーマンショックの原因となった、不良住宅債権を盛り込んだ投資信託の販売を黙認しました。これによって大手銀行は不良債権の整理、切り離しが可能となり、みがるくなったのです。しかし、これに政府保証はしないといいはなっております。それでも一般投資家はただ高利回りに目がくらんで買っていますから、何をかいわんやです。元政府高官が公然と警告を発しているのは、実は政府は保証をしませんよとのアリバイ作りとしか思えません。そうでなかったら、今の中国で、このような不都合な真実を表立って発言できるわけがないからです。

世界最大の人口14億人を抱える中国に、いま次々と過疎の村が出現しております。過疎というだけでなく、日本でいう消滅都市ならぬ消滅村もできています。それを中国では空心村というそうです。しかしその実態は、日本の消滅都市とそう変わったことではありません。中国特有の土と煉瓦でできた家に、老人しかいないのです。ところが、その村のある地方の景色に、日本人は何か違和感を覚えます。中国奥地は一面の土色の景色が続きます。道路もありますが、舗装はされていません。舗装はなくてもいいのです。見渡す限り、土気色が広がって、緑がありません。草一本も生えていない大地です。山があっても、木々は見えず、岩肌も見えず。緑色が見えません。それが遠い地ならまだしも、北京郊外の村の周辺にある村でした。水はあるのでしょうか。それでもこの地でトウモロコシと少量の野菜が作られておりました。ジャガイモ、カボチャ、わずかの玉ねぎ、そして、ほぼ自給自足の生活をつい最近まで過ごしていたのでした。

空心村の数は中国全土で、約二百万とも三百万とも推定されています。しかし、あの強力な中央集権政府にして、正確な数を把握していないようです。そして、空心村となる原因は、日本と少々異なっています。日本の場合はその主原因が少子高齢化です。では中国はどうかというと、これも一人っ子政策の性で、少子化しております。加えて、お金の浸透です。かつて中国の改革開放以前の主産業は農業でした。この広い国土の中国ではありますが、この国は国民全体を飢えないようにすることができておりませんでした。あの毛沢東が、秋の取入れの時期に視察に出かけ、天日干しの稲をついばむ雀をみて、あれは害鳥だ、駆除せよと言ったおかげで翌年は害虫がはびこり、飢饉を引き起こして数多くの方が飢えました。そのうえ、中国は一度山の木を切ると、自然には木々は復活しません。木々が伐採されつくした山は、はげ山になるしかない、そういう気候なんです。ですから、中国の砂漠化は、余り話題にはなっていませんが、北京郊外のすぐそこまで迫っています。あのpm2.5が深刻な問題になってる裏には、この砂漠化を生む自然破壊が根本原因になっています。

唐突ですが、中華料理の道具には、中華鍋と中華包丁しか使いません。それだけしかないのですから、仕方ありません。そんなことに疑問を感じたことはありませんか。じつは農機具も同様なんです。日本では、包丁なら和包丁だけで出刃、小出刃、菜切、柳刃、蛸引、ふぐ引、寿司切と、数え上げれば切がないほどあります。そのうえ、関西と関東で同じものを料理するのに、包丁の型が違ったりと、その種類の多さに驚きます。農機具だって同じです。中国の農民は、ほとんど鍬一本でほとんどの農作業を行ってきました。それは、中国は、砂鉄と木炭をつかったたたら製鉄法が行われていたからでした。それでも後には木炭に代わり、石炭を使う方法を行うようになりましたが、そうなる前に、木炭を作る樹木は中国全土で切り尽くされたのでした。ところが、中国大陸は次の樹木を生き茂らせることはできませんでした。一部の森と山に木々がなくなると中国の気候は雨をもたらさなくなり、砂漠とはげ山になっていったのです。すると、中国の製鉄を行っていた技能集団は、海を渡って日本にやってきました。それが出雲地方でした。出雲が古代史上、大和と肩を並べる重要な位置を占めるようになった理由がここにありました。あの八岐大蛇の神話はいろいろな推論を生んでいますが、須佐之男命が八岐大蛇を退治したとき、須佐之男命の十拳剣が天叢雲剣に当たって欠けたと神話に書かれています。これは十拳剣が青銅製で、天叢雲剣は鉄製であったのではないかと推測されています。出雲はそれだけではありません。銅剣、銅矛の両方の供給地でもありましたが、鉄器の発掘量も最多でありました。中国の鉄事情から話が飛んでしまいましたが、弥生後期の日本と中国の関係もこんなところからみて取れます。しかし、中国の鉄は、それを得るために国の緑を食い尽くしてしまうほどのものでありました。彼らは、敵よりも優れた武器のために鉄をむさぼり、中国の自然も破壊してかえりみなかったのです。

現在進行している中国に関する最大の注目点は、一帯一路であると思います。

それにしても、最近中国から聞こえてくる日本についてのニュースは、目を疑うような内容ばかりとは思いませんか。ECの中で蜜月とっていい一番の友好国ドイツについては、まるで関心がなくなったかのように何も言わなくなりました。ドイツも中国について、まるで手のひらを返したように冷淡になってきたようです。それでもVWは中国と運命を共にするような勢いで、中国に全祖力を傾注しております。果たして中国は、米国を抜いて世界最大の自動車市場に発展しました。逆に日本はいまだ米国中心の事業展開と投資を繰り返し、トランプ政権になって、ますますその傾向を強めています。そして、遅まきながら、トヨタもホンダもこれから中国に製造工場を設けようとしています。それでも去年の出荷台数は、トヨタとホンダを合わせた数でも、VWに及びませんでした。そんな関係のVWですが、中国のニュースは、ホンダの車を十五年乗っているが、多少燃費は悪くなっているのにまだ元気に走る、だからこれからも乗り続けるといった内容を報道しています。それに比べ、欧州車は交換部品が多く、またその修理費がとても高くつくし交換もやりにくい、さらにその交換部品も取り寄せで、時には三カ月またなければならぬ、ところが日本車は交換部品も安くて交換もしやすい、そして部品も常に用意されていて、すぐ修理してくれると一般市民の言葉を伝えています。

そうかとおもうと、日本の車の外殻はとても薄くてひ弱いから乗らないほうがいいと一般人は思っているが、これは衝突の際のライフスペースを確保するためのもので、中国車とかVWとは違った設計思想からそうなっているのであって、逆にこの方が安全なのだと宣伝記事かと思うほどの力の入れ方で論評してくれています。他にも日本の技術には到底及ばないと言った提灯記事も見受けられます。これは習金平氏が再選を果たした後から目立つようになりました。巷間いわれているとおり、日本にすり寄ってきているのかとも思えます。

もう一つ、気になるニュースがありました。いま中国は春節で、億の単位の民族大移動が起こっているようです。ところが、今年田舎に帰る人たちは帰ったきりで、もう北京にはかえって来るなといった仕打ちを受けて、帰れなくなっているようです。一つには、出稼ぎ労働者がそれまで北京で住んでいた安アパートを政府が取り壊し始めたのです。また北京での仕事も解雇され、次の仕事も見つけられなくなっています。こうして政府は都会の農民工の人たちの仕事も奪いました。いわば、彼らは過剰労働力になって、整理しなければならなくなってきたのです。

この動きは去年初めから起こっていました。中国の出稼ぎ労働者は、戸籍の上では都会の住人とは違う農民戸籍に入れられております。都市戸籍のものは、どこに行ってもいいのです、また仕事も選択の自由があります。また、年金や医療などの社会保障サービスも受けられます。彼らの子供は当然中学からさらに上の学校へも進学できます。ところが、農村戸籍の所有者は、国から農地を配分こそされますが、こういった転居や教育、年金などについて実質的な制限を受けており、都市戸籍所有者と同じようなサービスを受けることができません。農民戸籍の人たちは、自分の子供を小学校にも通わせられないのです。しかし、一応これについての改革案を、政府は用意しました。農民工の者でも学歴を身につけたり、特別な資格を取れば、都市戸籍を与えたとしたのです。彼ら、農村戸籍の人たちは帰っても出身地にもう農地はなく、仕事もない、家もないと言った事情を抱えている人たちが大半なのです。そんな彼らにそれができるでしょうか。都市戸籍の者五億人、農村戸籍の者九億人。この数字だけで、先が見えた気がします。

中国国内の現状を語りすぎました。この頃の中国は、世界経済の景気回復に助けられ、輸出額が順調に伸び、貿易黒字を積み増しています。ところが、ここまでの何年かは外貨準備高を次第に減らしておりました。そんな中国経済は、GDP世界第二位となり、その経済規模を大きく拡大しておりますが、そこまでの転換は一九七九年から一九九二年までの改革解放政策によるといわれております。この間、たった一三年間で市場経済へ移行したということです。世界の経済が十六世紀から十八世紀にかけての重商主義から、さらに帝国主義、初期資本主義へ変革し、様々な危機を超えて第二次世界大戦で破局し、現在のグローバル資本主義に至った時間軸が普遍的なものであるとするならば、つまりこれがどの国もこの過程を通る世界経済のモデルであるとするならば、中国は植民地として搾取される側からいきなりグローバル資本主義へうつったこととなります。ですから、中国は何の準備もせずに歴史過程の最先端に立たされたのでした。西欧は重商主義の過程で、十分に時間をかけて社会資本の蓄積を果たしました。そして労働価値説により資本主義へ移行したのです。中国に、資本主義へ移行するのに必要な資本の蓄積はありません。マックスウエイバーの言う勤勉が資本主義の精神であるならば、彼ら中国人にはその精神は十分醸成されているとは言いにくいようです。清朝の崩壊後の辛亥革命による民主主義革命はうたかたでありました。勤勉と市民としての意識をもった中産階級は育たず、資本主義革命は成らなくなったのでした。さらに、イノベーションをきっかけとしての産業革命も知りません。資本の蓄積がマニュファクチャリングを生み、技術革新が大量生産とそれに続く大量消費をもたらし、資本主義はその基礎を完成させます。中国はこの下部構造も持ち得ないまま、グローバル資本主義を他国から持ち込まれたのです。文化大革命は資本主義への移行をつぶそうとするものでした。天安門事件は市民革命をつぶしたのでした。それゆえ、資本の蓄積のない中国の頼ったのが、他国からの投資と技術移転でありました。ここから中国社会の緊張が始まります。

マックスウェイバー氏の言う資本主義の精神は、プロテスタンティズムの倫理が結果として生み出したというのなら、禁欲主義が利潤の追求と資本の蓄積を肯定し、その結果として生み出したということになります。プロテスタンティズムは、勤勉、節約、約束を守る、という、近代人にとってはごく当たり前のあり方を肯定し、教えたのでした。この延長線上に個人の精神的自由と合理的国家による資本主義経済の発展がありました。つまり、近代人の誕生でありました。

しかし、それに正反対の精神がありました。儒教の精神です。仁義礼智信と、儒教をこの言葉で要約すると、結局身分制度を積極的に肯定し、その対極に君子による仁政を置くアジア的封建制を、精神の側から支える論理が儒教でありました。これがなんと、春秋の時代から二〇〇〇年以上の今も続いているのですから、アジア的封建制はいまだ崩壊していないと思えます。ただ日本人もこの影響に無縁ではありませんでした。ところが日本の儒教は本来の儒教とは異なったものであったらしいのです。ですから、下世話な言い方をしますと、水戸黄門と韓流ドラマの違いになって出てきています。実は結局儒教ですから、表立った相違点は見つけにくいのですが、江戸時代からの儒教は教の文字が消え、儒学となりました。そして儒学が幕府の体制維持、封建体制維持のための学問に成ったのでした。ですから、水戸黄門は絶対なのです。ドラマはそれまでリアルに悪がのさばり、庶民が苛められます。しかし、助さん格さんは阿吽の仁王様のように強く、悪の手下を懲らしめます。このあたりからドラマはおとぎ話になり、ついには印籠が出て完全超悪が完成します。

韓流はそうはいきません。王は絶対の身分制度の頂点にありますが、悪だくみあり、姦計あり、毒殺に暗殺、復讐と怨念の、行動規範、倫理としての儒教はどこへ行ったのか。身分制度の肯定と王の権威は疑うことなく肯定していますが、それが儒教精神なんでしょう。王個人は覆しても、暗殺しても構わなくて、それゆえ今でも大統領を殺す国に成り果てているのです。下剋上にも正義ありが韓国の儒教で、結局民族性そのものは学んでも学ばせても是正できないのが、二千年続いたということです。

では中国はどうか。中国に儒教は残っておりません。しかし、近年儒教精神は中国のアイデンティティーであると言い出し、孔子学院を世界中に作って、中国文化の浸透をもって経済制覇の一助にしようという戦略を展開しています。こういったところに、文化さえ、経済のためには利用しようという中国の国民性が見えてきます。

一帯一路が消えてしまっていました。

一帯一路については、もはや現実に動き出している、説明もひつようなないことになっています。しかし、それが持つ意味については、中国経済それ自体が十分に開示されていないだけに分かりにくく、かつ中国の野望のみが蠢いている経済戦略と解され、周辺諸国のほとんどが警戒心を抱かされています。それでも中国は、中国西部から中央アジアを経てロシア・西欧へ向かう陸のシルクロード経済帯と、中国沿岸部の南シナ海から東南アジア-インド-アフリカ-中東-欧州へと連なる海のシルクロードを前へ前へと進めつづけています。そして、進出してきた中国経済は、たとえばカザフスタンで巨大な商業施設を作り、安価な中国製品を売りに売っています。そこでの通貨は現地のもので元でもいいのです。中国の業者は売ることに必死で、高価で売れないと察すれば、より安価な材料を使い、値段を下げて売れるように努力します。一帯一路の現実、こんな実態で行われています。中国人は水を得た魚のように商売しています。そして、ここで成功しようと言い合い、中国が強くなれば我々も商売がいやすくなる、一帯一路万歳だと氣勢をあげています。また、買う側も安くて見栄えのいいものを必要な量だけ買えると、なんと往復五百kmとかの道を走って買いに来ています。ウクライナの商業特区では千キロを往復している人もいるぐらいです。そのウクライナの商業施設のトップは二十八歳のわかぞうです。そして、その下につく専務クラスの人、ウクライナの市場に三十年前から挑み続けてきた人材です。こんな、ちょっと首をかしげたくなるトップの体制はやはり中国であったかと思わざるを得ないのですが、これが実態です。

こんな事は、テレビのニュースでごく普通に扱われている内容で、数字でもなく、克明な経済分析でもありません。しかし、こういった事実の積み重ねを注意深く見つめる方法で、エマニエル・トッド氏は、たとえば中国の現実を見つめ、分析してゆきます。アメリカさえ、経済統計の数字によって未来予測しようとしても、科学的世論調査に依るとした大統領選挙の結果を見誤りました。ましてや中国です。各省の統計数字をごまかしましたと、党幹部が告白する国です。李克強指数さえ当てにはならなくなった中国でも、日々起こる出来事は一般に報道される事実ですから、誤魔化しはないと思います。これらを見ると、現実には透かし絵のように見えてくるのではないのでしょうか。

こうした傍証として、今日も日本の機械受注が減少していると報じた東洋経済の記事は、中国経済に黄信号？と言っております。この記事のもとになった数字は日本のものですから正確で、偽りはありません。また嫌韓とか嫌中といったたぐいのもので

もありません。では機械受注が減るといふことの意味は？と考えると、ある一定の推測はできるといふことぐらいしか分かりませんが、一昨年から、コマツブルドーザーが中国からの発注が激減したとか、ブルドーザー自体が動いていないということも言われておりました。そのあと、鬼城の報道が一時期盛んに言われるようになりました。それでも土地バブルの崩壊は言われていませんが、報道が沈黙しているだけかもしれないのです。あれほど土地収用を強引に行っていることが漏れ聞こえてきていたのにです。

昨日でしたか、北京の市長が解任されたと報道されました。それは、強引に安アパートを取り壊して、出稼ぎ労働者の宿泊施設を取り上げることによる追い出し策を誤りとされての解任だったという報道でした。この北京市長は習金平氏の側近であったそうです。それでも習金平氏はかばいきれなかったのだろうという推測がなされていました。そしてこれから全人代が始まります。この会は中国の憲法を改正して、現在の任期十年とされた国家主席と副主席の任期の制限を撤廃する憲法改正を行おうとしています。こうすることで習金平氏はこの先も権力を保持し続ける意図だと思われます。そのため、北京市長の事で、もめ続けたくはなかったのではないのでしょうか。今回の憲法改正に見せた習氏の強引さは、権力を失うかもしれない事への焦りと恐怖を見て取れる気がします。また北京市長の取った方策は、農民工戸籍の北京一極集中を何時までも許しておけない経済状態も垣間見える気がします。中国辺境の地の年収は22万円、上海などの沿岸部では66万円だそうです。これは平均ですから、爆買いを見ている我々は、こんなものなんだろうかと思ってしまうますが、他の調査では最富裕層は年収三千万ほどで、貧困農民層は六万だともいわれています。中国の人たちは、経済がうまくいっている内は黙っているけれど、格差が広まれば黙っていないといわれています。だからといって、中国国内でこういった出来事が起こっているかはうかがい知れませんが、そんな国民の不満をかつては反日で解消させていましたが、最近はその日本にすり寄る気配も見えることは前述の通りです。

ここまでで見てきたことが多々あります。一帯一路は西へ向かっていること、中国人の商売はその国の経済特区で流通する貨幣でも元でも支払える、中国の商品は衣料、寝具、バッグ、といった繊維製品が主である、農業物産も産地で生産されるもののほとんどを輸出に回している。こうした事柄を並べてゆくと、見えてくることがあります。低開発国へ向かい、その国では資金的に無理な高速道路、橋、商業特区の施設などを低金利で作って回っています。しかし、それを作るのは中国人労働者で、原材料も中国の物を使い、建設業者はもちろん中国公営、国営、もしくは政府要人の関わった建設業者、鉄材などの建築材も同様のこと。中国の建設業と不動産業は政府、中央共産党要人の関わった公営、国営業者がほとんどであるそうです。それに対して、IT、現金決済のインフラ、サービス業、流通などは民間が占めています。一帯一路は政府、共産党幹部の関与したハード産業の救済がメインの目的と指摘されています。過剰生産された鉄骨の持って行き場のない物をこちらで裁いているのでしょう。また、元と当地の流通貨幣については、中央も強く関与できず、手をこまねいているしか

ないようです。なぜなら、元が世界主要通貨に指定された以上、中央の意志のままにコントロールできなければ困るからです。元は強くなければ、世界からの投資が引き上げられてしまいます。かといって、強い元は輸出しか活路のない中国にとっては輸出減につながり、これも困ります。さらに、仮想通貨を中国は禁止しました。国内の富を仮想通貨によって海外に流出されては致命傷になるからです。そうでなくとも、要人さえ自分の財産をドルに換えて外国に持ち出しているのですから。そしてそれが、例えば日本とかオーストラリア、アメリカ、カナダ、ニュージーランドなどの不動産の買い占めにつながっています。一昨年末から昨年春ごろまで中国の外貨準備高は急速に減ってゆきました。それは元を買い支えたからでした。その時、米国債が相当売られたようです。つられて円も円安から円高に振れておりました。ところが、今も円高になっています。なにかあると、安全な通貨、円が買われる、それが世界的風潮であるらしいです。アメリカとヨーロッパの経済学者は中国を冷静に見ているようです。あのリーマンショックの前、米国の投資会社は、一ドルの利益を上げるために三ドル使ったとか。いま、中国は一ドルのために四ドル使っていると彼らは言います。リーマンショックは二千八年の末でした。中国はいまだその影響から脱していないとまでいう人もいます。反面、土地を担保に銀行が貸付を行うとき、その価値の十倍を貸し付けたからと言って、それが異常とは言えない、いま中国の土地はその価値が十倍にまで上がっているからだという経済評論家もいます。しかし、日本のバブル崩壊前にもそんなでたらめを聞いた覚えがあります。あの誰もいない鬼の住む城は十倍の価値を持った土地ですか。いま中国はあのバブル時の日本が抱えた借金と同じかそれ以上の借金を抱えています。いつか、あの××銀行とか××証券の破たんが、中国でも起こりそうな状況です。

一帯一路の問題点は、さらにあります。それはトランプ氏が言ったとおり、中国の安い品物が、一帯一路の先の産業をつぶして回っていることです。繊維工業しかり、農産品も同様です。重商主義の時代を経なかった中国は、国家に資本の蓄積を得ませんでした。それによって、産業の近代化に必要な国民の教育レベルの向上も、技術の革新もありませんでした。さらに、いきなり共産主義革命があつて、ブルジョア革命を知りません。中国国民は市民としての自立をなさないまま、そして資本主義経済で求められるそれなりの精神を知らないまま、世界の組み立て工場の組立工として働いてきただけです。その労働が、進出していった国の失業を産んでいます。低開発国は、持っている富を中国に吸い上げられ、それが底をついて支払えなくなれば、モルディブになるしかないのです。中国がイギリスに香港を取り上げられた例にならって、港

を取り上げられたのは、このモルディブだけでなく、ギリシアもそうでした。中国の軍事力はこのための用意だと思っています。モルディブでは中国とインドが対立しようとしています。どうなっていくのでしょうか。

中国と韓国、北朝鮮という現実。国境こそ接していないけれど、日本はなんという現実
に晒されているのでしょうか。不意にそら恐ろしくなることがあります。そんななか
、アメリカでは日本の核保有を認めようじゃないかという議論が起こっているそう
です。その前提は、北朝鮮を核保有国として認めるということで、そのうえで様々な
交渉をしようという議論が起こっているというのです。北が何らかの核を持っている
限り、戦闘行為は仕掛けられないのが現実ですから。つまり、戦争はできないという
ことです。

戦後、アメリカはネバダ砂漠で核開発のための実験を繰り返しました。空中爆発と地
下実験を含めてつごう九百回に及んだそうです。ネバダ砂漠といってもちょっとピン
とこないでしょうが、ラスベガスといえればお分かりになるでしょう。ネバダ砂漠はそ
のすぐ向こうでした。そのラスベガスでの観光の目玉の一つが、核実験の見物でした
。そう聞くと、驚かれるかもしれません。その時最も流行ったドリンクが爆発カクテ
ルでした。加えてミス核爆発のコンテストも行われました。それには水着に綿で核の
キノコ雲を張り付けたものを着せておりました。そして、アメリカ軍は核戦争を予想
しての演習に参加する兵士たちに、核爆発の脅威は熱線と爆風と放射線だが、爆発時
の熱線、爆風がおさまれば放射線は心配ないと教育しておりました。いま福島原発の
核汚染にセシウムボールというのが広く飛散して、それは首都圏を超え、静岡県にま
で飛んでいるそうです。北は長野県一帯まで及んでいるこの現実は、じつは四年前か
ら知られていたそうですが、最近になってやっと報道され始めました。ネバダ砂漠の
こうした核汚染は、もっと広大です。その汚染地帯は、東と西の沿岸地帯のみを残し
、あとは大なり小なり広がっています。なんと愚かなことをしたのでしょうか。彼らア
メリカ人は、核汚染の人体実験を長期にわたって今も行っています。というより、彼
らはノー天気なんですか。ジョン・ウエーンはこのネバダ砂漠で西部劇の撮影を
多く行っていました。そして、肺がんで早くに亡くなっています。知らなかった、と
いえばそうなんですか。しかし、こうした国家体制をアメリカ人は選んだのです。
私たちも、これから先の国家体制、新しい国家像を考える時かもしれません。

ku-kaiという映画を見てきました。Legend of a demon catが副題でありました。夢枕獏氏、沙門空海唐の国にて鬼と宴すが原作であることは知っておりましたので、私はそれなりに華麗な画面に見惚れておりましたが、家内や映画を見終わった観衆の人たちの帰り際にはなしている感想は、予想したのとは違っていたので面白くなかったということでした。香川県は空海の里でありますから、誰もが空海とつけばなんでも見たくになります。映画は原作とはだいぶ違っており、楊貴妃と玄宗皇帝の恋物語に李白、白楽天の二大詩人と長恨歌の事が中心に語られ、特に楊貴妃の安史の乱での死についての伝説が黒猫の登場で華麗に描かれます。傾城とは楊貴妃のことでありました。

これは異論があるでしょうが、中国王朝は三百年以上の長きにわたって続いたことがありません。中に四百年という例外もあるにはありますが、これは漢王朝であって、唐も宋、明、清も三百年ほどの、それでも長命とされる王朝があったのみです。これも他民族の住む、広大な大陸国家のありようから来るのかもしれませんが。ですから、常に侵略と破壊の繰り返しでした。そこから、せつかく築き上げた文化もすべて否定され、踏みにじられて破壊されます。未だに着物を呉服といたりして、中国から伝わった文化を後生大事に残しているのが日本であることに歴史の皮肉を感じます。

しかし、中国の歴代皇帝の有り様を、今の共産党最高指導者も受け継いで同様のふるまいをしていることに、これも歴史かとかんじます。小中華の国の高官も、記者会見に現れる時の歩く姿がいかにも重々しく振る舞います。儒教の国であることは、儒教で縛らなければならなかったことを意味します。仁義礼智信を教えるということは、それらのなかった国であるということです。皇帝が生まれた国は、これからもたぶん短命であると思っています。国の運命が傾いたとき、その責はすべて皇帝にあるからです。中国社会の緊張は、最高にまで高まっています。

やはり松江に住んだせいでしょうか。いろんな作家の文学を読んできたのですが、やはり小泉八雲氏は心に残るものがあり、いまだこだわっています。こだわるというと語弊があるかもしれませんが。好きな作家さんだという風に言い換えましょう。何度もその生涯を振り返り、中でも松江に住んでいたころの八雲氏には思いを馳せます。私が住んでいたころの松江は、まだ八雲氏の住んでいたころの面影がのこっていたのではないかとおもっています。雪が降ると、綿のようなひとひらが一面に舞い、黒い傘に音もなく、白く積もります。すると、次第に音が消えるのです。雪を嫌って車が通らなくなることもあります。雪が音を吸い取ってしまうのです。道路はわだちのみが黒く残り、木々も綿をまとった様に白い衣装を着て、だんだんと何もかもが覆われてゆきます。寒かったように思うのですが、いまはもうそんな景色しか思い出しません。

宍道湖は、普段は薄い緑の湖面を湛えています。それが一端台風とかで波立つと土色ににごり、嫁が島も波に隠れて沈んだのではないかと思うほどです。そんな荒れた天候の日、護岸の先二十mのところではボート部のレガッタが転覆し、女子部員何人かが溺れたのでした。目と鼻の先の二十mがおよげなかったのです。わたしが在学中の出来事でした。その誰かを知っていたわけではありません。しかし、あれて土色の湖面を見ると、目をそむけてしまいます。

いま松江に行くと、観光船がお堀と川面を走っています。城のお堀は幅も広く、水は緑です。まるで松江城の石垣に繁茂している木々の緑が溶けているようです。そのお堀の端っこの先に八雲記念館が建っています。小さな、まるで普通の家ほどの、二階に上がっても見るものもない記念館です。でも、懐かしい。もう日本人は小泉八雲なんて忘れているのでしょうか。この人の代表作、怪談は一九〇四年、彼が没した年に発表されたのでした。

八雲氏が松江に職を得て、奉職したのが島根県尋常中学校でありました。訊くと、松江氏奥谷町ということでしたが、そこはもう捜すまでもなく、小泉八雲記念館のすぐ北にありました。松江北高がそれでした。てっきり、大学のあったところかと思い込んでいたのですが、そこは松江高等学校と島根師範学校などが一緒になって発足した学校だったので、思い違いでした。

松江北高は松江城にすぐ近くにあり、八雲庵はすぐ接してありましたので、八雲先生は歩くというほどもなく登校できたと思います。にもかかわらず、先生は人力車で通っていたとか。本当かなあ？そう思いながら眺めてました。しかし、その時はさほどの思い込みもありませんでした。

しかし私が松江に長く、といっても大学生活ですから高々四年ですが、住んでみますと、下宿から松江駅までバスでお堀の上の北堀橋を渡るあたりにさしかかる窓の外に松江城の石垣が見え、その向こうに武家屋敷と松並があり、次第にそれらが心にしみこんできます。松江の空もそうです。弁当忘れても傘忘れるなど、岡山の叔父に教えられました。カラッと晴れ渡った空もあったはずですが。それなのに、いつも雨を含んだ重い雲しか思い出しません。暑くても寒くても、空はいつも曇っていました。島大の学生はもてたんです。よく娘の婿に、養子にと言われたそうです。それぐらい真面目でおとなしい学風でした。そんな学生の一人であった私も、六段変速の町乗り自転車で走り回るのが楽しみでした。そして、出雲の風土になじんでしまったみたいでした。たぶん松江は八雲先生のころと変わったところはなかったのではないかと思います。

しかし八雲先生の代表作が、お亡くなりになったその年に発表されたことは、あまり知られていません。もっとも、八雲先生はもともと新聞記者として日本に派遣されてきたのでしたから、日本に来た当初の作品何篇かはアメリカで発表されたはずです。そのあと、トラブルがあってアメリカの新聞社との契約が解かれ、無職になりながらも日本人の知り合いの伝手で松江に職を得たのでした。

このKwaidanですが、どうも八雲先生は日本語が得手ではなかったようで、英語で書かれておりました。

Never ever tell this to anyone... The boy kept the promise, as he grew into a man, a husband and eventually a father. But one day he confided to his wife

先生の英語の文章は平易で、それでいいながら深い情緒を表していると評されます。上の文章は雪女の一節です。ついでにKwaidanの正式な題名を記しますと

KWAIDAN Stories and Studies of Strange Things

で、目次は

THE STORY OF MIMI-NASHI-HŌICHI

OSHIDORI

THE STORY OF O-TEI

UBAZAKURA

DIPLOMACY

OF A MIRROR OF THE BELL

JIKININKI

MUJINA

ROKURO-KUBI

A DEAD SECRET

YUKI-ONNA

THE STORY OF AOYAGI

JIU-ROKU-ZAKURA

THE DREAM OF AKINOSUKÉ

RIKI-BAKA

HI-MAWARI

HŌRAI

INSECT-STUDIES

BUTTERFLIES

MOSQUITOES

ANTS

となっており、後半に昆虫の研究という文章が付録として一緒に掲載されています。

この本はTut Bookというところから一九〇四年アメリカで出版されたのでした。

耳なし芳一、雪女などはとても有名で、知らぬ人のないお話ですが、OSIDORIなどは知られていないと思います。ずいぶん短いお話ですから、簡単にお読みになれると思います。ついでですから、引用しておきます。

おしどり

陸奥の国、田村の郷の住人に村允（そんじょう）という名のたか匠がいた。

ある日、村允は狩りに出かけたが、獲物に恵まれなかったので家に帰ることにした。途中、赤沼というところまで来ると、川を渡ろうとしているつがいのおしどりが目に入った。

おしどりをあやめてしまうのは感心したことではないが、村允はあいにく腹を空かせていた。気がとがめたものの、つがいのおしどり目がけて矢を放った。矢は雄に命中して、雌は慌てふためいて向こう岸のい草の茂みに逃げ去った。村允は家に帰ると、射落とした鳥を調理して食した。

その日の夜、村允は不思議な夢を見た。美しい女が枕元に立ってさめざめと泣くのである。村允は胸が張り裂けそうになった。

女はやがて、村允に向かって大声で言った。

「村允さん、どうして主人をあやめたのですか。一体、あの人が何をしたというのですか。私たちは心の底から愛し合って幸せに暮らしていたのに、何の理由があって、こんなむごいことをなさるのですか。主人亡き今、もう生きていけません。あなたは、私をも殺しておしまいになったのですよ。きっと、犯した罪の重さをご存知ないのでしょうか。しかし、明日の朝、赤沼にいらっしゃれば、すべてが明らかになります」

次の日の朝、村允は夢に出てきた女の言葉が気にかかった。半信半疑ではあったが、赤沼に行ってみることにした。

赤沼に着くと、昨日見た雌のおしどりが一羽だけで泳いでいた。雌のおしどりは村允の姿を見つけると、身じろぎ一つしなくなった。

しばらくすると、雌のおしどりが突然、けたたましい声で泣き叫ぶやいなや、くちばしで全身をつついて命を絶った。

村允は出家して僧になった。

これだけの文章で、伝わってくるものがあります。

There was a falconer and hunter, named Sonjo, who lived in the district called Tamurano-Go, of the province of Mutsu.

原文は上記のような英語ですから、これは翻訳されたものです。一九〇四年は明治三十四年になりますが、翻訳は少しの間を置いてすぐに始まったようです。八雲先生は一九〇三年東大の教授を辞めざるを得なくなって早稲田の教授になり、ほどを置かず五十四歳で没されたのでした。

しかし、ご遺族は東京ではなく、松江にお帰りになりました。八雲旧居は今も曾孫さんによって守られております。

本当に、愚公山を移せたらいいのですが。

世界の未来という本を見つけました。エマニュエル トッド氏、ピエール ロザンヴァロン氏、ヴォルフガング シュトレーク氏、ジェームス ホリフィールド氏といった錚々たる叢知の新書を見つけ、読みふけております。しかし、社会学者が世界の未来を語るのは、危険なことです。中国は、二千三十五年ごろにはあの国の最大の資源である人口の多さが最大の厄難になって国の足元にまわりつき、身動きできなくなっていると聞けば溜飲の下がる思いですが、本当にそうなるでしょうか。未来を予言するのは容易ではありません。失敗すれば、社会学者の名声がどうであれ、週刊誌に書いた一行の記事ですべての業績を否定されます。

トッド氏は、垂直的なデモクラシーと呼ぶタイプのものが日本とドイツで採用されていると言います。このタイプは直径社会という家族の型の社会にみられます。この社会では権力を取り合うということについてあまり関心を持ちません。だから、たとえば日本では、政権をずっと自民党にゆだねるといふ民主主義が続いています。人々は投票はしますが、その結果は、議論は自民党の内部の派閥間でやるべきだと告げているようです。

この一文を読んでも、丸ごと理解するのは難しいのですが、なんとなく言ってることの雰囲気は、日本の政治シーンを言い当てているように思えます。もう日本で政権交代は起こらないでしょう。もう一度自民党が分裂すれば、また違ってくると思いますが。

トッド氏という稀有な社会学者の言辞は、少々斜めからだと思っても理解することをやめてはいけないと思っています。ヨーロッパ、とりわけフランスでは極左、反体制とされているようです。私たちからみると、きわめて当たり前のことを言っているように思えるのですが。たとえば、マクロン氏を、体制順応型の知識人だと言い切ります。これを言い換えると、点取り虫だということです。まさにいいえて妙だと思えます。しかし、この評価を普通のフランス人は是としません。彼はエリートだからです。

もう一度くりかえします。愚公山を移す。本当に愚公のように山をうつせればいいのですが。

「世界の未来」という本を読んでいます。やはり、社会学者の論説は、その一行に色々の概念を定義した言葉が展開されているので、それを理解する困難があります。とくにヨーロッパでは常識である歴史敵事象を連なれますと、まずそれから考えなければなりません。

しかし、民主主義を考える時、トッド氏はトランプ氏が選挙で選ばれたのに、新聞各紙はなぜ民主主義の脅威だと騒ぐのかと疑問を呈します。これは、大衆が間違えているという意味になるわけですから、そんなことを言う人たちが本当に民主的とは思えないといいます。そんな人たちに、人々は常に正しいというと、ヒトラーは選挙で民主的に選ばれたんだぞというでしょう。でも、これもまちがいです。ヒトラーは三五%以上に票をあつめたことはない、トッド氏は反論します。彼はそのあと、クーデターを起こしたのでした。

トッド氏は、民主主義は別にいいことだらけの政治体制ではなく、目いっぱい自由と普遍主義の政治体制でもないのだとすればどうでしょうかと問いかけます。民主主義が、ただ単に人々に選挙権があつて、政府が人々の期待することを実行する体制だとすればどうでしょうかと、民主主義を定義しなおして見せます。いま、民主主義はまるで神格化されたスローガンのようになっています。そこから単純化してみると、選挙権と公約に集約されることだといっているようです。そして様々な民主主義の形があり、また過去の歴史の中で様々な時に民主主義は存在したともいいます。

トッド氏のことは後にして、ヴォルフガング・シュトレーク氏の資本主義社会の敗者に目を向けよという項について、触れてみたいと思います。小目次は

グローバリズムへの不満
もはや後戻りできない
資本主義を守る二つの道
規律にあるグローバリズムを

とあります。グローバリズムへの不満では、インタビューアの、昨年のドイツの総選挙で極右政党が議席を得たこと、米国トランプ政権、他の欧州各国の右翼や左翼の極端な主張をする政党が支持されるようになったこと、ポピュリズムをかざす政党が勢力を増していることについて、危険な時代の始まりでしょうかという問いかけに答えます。

それについて、中道政党(リベラル)と左派政党がこれまで掲げてきた国際化することが国民に恩恵をもたらすという主張が色あせてきたことを指摘し、誰もが国際化の恩恵に浴してきたわけではない、これについて恩恵にあずかれなかった人々の不満が顕在化してきたのだといいます。この項ではないのですが、グローバル化によって恩恵に浴してきたのは、その国の1%に過ぎなかったという指摘もありました。こうした不満を抱いた人々が急速に増えてきたことによって、国内政治に目を向けた政党が支持され始めたのだということです。

そして、この人の著書、時間稼ぎの資本主義にあった、一九七〇年以降の世界は、貨幣というマジックで危機を先延ばしにしてきたという分析について話されます。インタビューアはこの先延ばしの魔法は永遠に続けることはできないのかと問います。それについて、できるかもしれないが、同時に大きなリスクを抱えることになるといいます。そして、リーマンショックの際見られたグローバル構造の崩壊は序章にしか過ぎない。いずれ、国際エリートたちは今の資本主義システムの代替案を出さなければならなくなる。そう断言します。

この著書では、世界は銀行危機、国家債務危機、成長危機の三重危機に見舞われているといいます。もう、こう聞くだけでその指摘が正鵠を射ていると分かります。いまや一千百兆円の国家債務を抱えている日本は特にそうです。借金はいずれ返さなければならない、この信頼の上に現代の社会は成り立っています。それにしても、ここか

らの氏の分析は明快です。

一九七〇年以降の世界は「貨幣」というマジックで危機を先延ばしにしてきただけだ。この指摘に対して、今思い浮かぶ政策は、年間2%のインフレにするというインフレターゲットです。では、この政策の目標とするのはなんでしょう。黒田日銀総裁が着任するまで政府が主張してきたことは、デフレがいけない、デフレが成長を阻んでいる、インフレターゲットは他の世界各国で取られている政策だということでした。これについては深く追求しないでおきましょう。本来は高騰する物価に対して、目標とする物価に抑えるように目標を設定し、そのための金融政策をとるということですが、これとは反対の物価を引き上げようという政策を政府と日銀は喧伝したのでした。物価が上がれば、企業の収入としての額は増加する。単純な考えではそうなります。そして社会的には、インフレになります。そうするための政策ですから当然の帰結です。しかし、賃金という形での庶民の富は、時間軸がずれているので追いつきません。企業と国家の収入のみ積み上がり、取り残され、つけを払わされるのは国民の側です。

氏の時間かせぎの資本主義での銀行危機、国家債務危機、成長危機については、一九七〇年代から世界は旧システムの崩壊、新システムの登場、というサイクルを繰り返してきたことを指摘します。それは、一九六〇年代の高度成長がこの時期に寿命を迎えたからでした。そのあとの様々の方策は、この高度成長を延命させるためでした。まず七〇年代での手段は「インフレ」でした。そしてそのマジックが効かなくなると、「政府の借金」が次の手段に出てきました。いまや1100兆円に膨らんだ国債です。日本はなおこの借金を膨らませ続けておりますが、何のためでしょう。景気を持ち上げるための国債であったはずが、借金を返すための借金と、企業減税、株価を持ち上げるためのフォロー資金になってしまっています。さらに、それも続けられなくなった九〇年代では家計の借金にバトンタッチします。そして、それが膨らみすぎて破たんしたのが、リーマンショックであったといいます。そして、国家は究極の延命手段を繰り出してきます。中央銀行に巨額のマネーをばらまかせ始めたのです。しかし、これとていつまでもそれを続けることはできないでしょう。近い時期にこれも破たんします。それもこの二～三年のうちにやってくるといった事態は大いにありうると思います。

氏は不気味な数字を指摘します。米国債は毎年、日本の国家予算並みの額が発行されている、米国の民間負債は中国のGDPの額よりおおきくなっている。借金に返済義務がある限り、いつまでも膨張させ続けることはできないはずだから、先の三重危機が

かさなって起きるだろうといます。

いま貨幣は世界規模での債務を膨らます道具になっていて、「サラ金の道具」

とまで表現しています。氏は、ケインズに訊いてみたいといます。「いま世界中に出回っているとてつもない規模の貨幣を、あなたはどう説明するのでしょうか。」

続けて、世界経済は実体経済と金融の結びつきがなくなり、金利がゼロであったり、マイナスのところさえあるのに実体経済はインフレにならないし、成長の停滞してしまっている。この現状はこれまでの経済学の常識では説明ができないと言い切ります。

いま経済成長が至上の命題になり、その成長の持続のために本来あってはいけない役割を中央銀行が担って、ひたすらお金をばらまいているのが現状です。そんな成長延命策がいつまで続くでしょうか。ケインズは「政府が貨幣の発行の独占機関になるべきだ。」と主張していました。現在の日本は日銀を政府の下に置き、政府の思い通りの貨幣の発行を続けさせています。これはケインズの意図を逆転しての実現でありました。政府の借金である国債によって確保した予算の額のお金が世に出回り、さらにお金の価値を薄めています。にもかかわらず、この国の物価はインフレになりません。その上に乗ったアベノミクスです。日本銀行による量的緩和がそのエンジンです。この手法を最初に考え出したのは米中央銀行FRBでした。そしてこれが世界的な傾向になってしまいました。それに対して、国際決済銀行は毎年これを中止すべきだと勧告しています。しかし、量的緩和をやめると株価は急落し、株式市場が崩壊してしまいます。それを恐れ、もはややめられなくなってしまっています。やめられない、止まらない、後戻りはできない、それが現状だと氏はいいます。そしてグッドラックとしか言いようがないといいます。先日来、トランプ氏が引き金を引いた保護主義の方針がアメリカと世界の株価を暴落に持っていかうとしています。それは保護主義的政策を嫌っての暴落だけではないかもしれません。リーマンショック以来、世界経済は点滴による延命策で生き延びてきたのですから。

さらに、グローバル化と国内資本主義機構の相克が目に見えないところで深まり、今顕在化し始めたのかもしれないのです。共産主義を捨てた中国共産党と国の発展の時間軸で後発であるゆえに安価で大量にある労働力、それが先進国の労働者を駆逐したのでした。中国の工業化という人もいます。世界は貨幣とそれが積みあがった数字の奪い合いになりました。もう残された時間はないかもしれません。

日本のグローバル化は、我々が今まで実体験として見続けてきたことではないでしょうか。グローバル化はまず欧州やアメリカの資本が中国に資本提供し、技術も移転し、そこで生産させることから始めて、次第に安価な多くの品目を作らせ、それを自国乃至他国へ自国生産と同じ価格で提供して差益を得る方法を取ったのでした。欧米の企業資本は商品の生産を商品の完成まで行わせ、それを世界に自社ブランドで輸出したのです。自分のブランドの偽ブランド品を自分で作らせ、中国から流すという手口を取りました。もちろん品質管理はしていたでしょうが、微妙に違うところがあったようです。それがいま、大量のコピー商品の流出につながっています。ベトナムへ行くと、バッグから腕時計、ネックレスなどのアクセサリ、絹製品、ありとあらゆるものが豊富に市場に並んでいて、しつこいほど付きまとして、買わないと見ると値段もいきなり半額に落とします。腕時計など、もともとの売価が日本の三分の一なのに交渉次第ではその半分以下になります。しかし買って帰って三日で動かなくなっても自己責任ということでしょうか。

そんななか、日本も遅ればせながら中国に進出しました。実はもうその時はメイドインタリーがメイドインチャイナであることは世界中にわかってしまい、プラダもグッチも中国から手を引き始めていました。ところがイタリアでは革製品の職人が足りなくなっており、逆に中国人がイタリアに移住して製品を作るという現象が起こっています。そういった時期に日本は自国の下請け会社を連れて中国に進出するという、ちょっと首をかしげるやり方で出ていきました。日本の垂直分業を中国に持ち込んだのでした。垂直分業という聞きなれない言葉が出てきましたが、この言葉の説明によく自動車が使われます。例えばプリウスを作るとき、トヨタ本社の設計部がそのコンセプトを考え、目標を立て、本社内のエンジン設計の部門、足回りの設計部門、ボディ設計といったところと協議し、次第に煮詰めていきます。そのうえで各パーツの設計を行い、それを関連会社、下請けに回します。こう言ったことは我々には何の違和感もなく受け止められます。これを垂直分業といいます。

これに対して水平分業というのがあります。これで一番成功したのがアップルでした。アップルはジョブズがとんでもないアイデアを考えだします。それが例えばiPhoneでした。彼はこのアイデアを実現すべく、アップルの開発陣に開発させます。そして、ディスプレイの仕様を決め、世界中からそれについて入札してくる？企業の中から何社か選定し、部品を集めます。つまり、部品を世界市場から、市場原理に従った価格で調達します。そして組み立て技術も、例えば日本から導入し、それで中国の労働

者を教育し、そうして組み立てさせます。その製品をアップルが世界中に売ります。資本が利益を最もあげられるのが開発と販売です。組み立て、部品製造、そしてその部品を作る機器の製作などの製造段階が一番利益をあげられないところです。開発では特許、著作権が企業に利益の独占をもたらします。その独占的な商品の販売も当然利益は独り占めです。日本はこの水平分業で立ち遅れたと指摘する経済学者が言います。

日本は製造段階だけで、開発も販売も関わっていない。日本は部品を作る製造機械と原材料と部品の生産だけだ。

たとえば東北大震災、阪神大震災で、そこで作っていた原材料の生産が止まってしまって、世界のPC生産が滞ってしまったということがありました。さらにトランプ氏が中国に対して特許権、著作権を大いに問題にしているのも、こう言った事情からです。サムソンは特許侵害訴訟で負けて、多額の賠償金をアップルへ支払わなければならなくなりました。

グローバル化が顕著になり、中国への進出が声高に言われ始めたころはグローバル化とはアメリカのルールで市場を開放することだと言われました。グローバル化＝アメリカ化であったわけです。そのころ日本国内では大規模店舗が展開され始め、大型ショッピングモールがあちこちに進出してきました。そして、海外への企業の進出は産業の空洞化を招くと言われたのでした。事実、様々な技術が外に出て行き、空洞化してゆきました。そうした中、最も負け組になっていったのが白物家電でした。テレビもそうでした。半導体、液晶、CCD、有機パネルと、いまま負け続けているものもあります。みな、日本が開発したものばかりです。しかし、いずれはそうなったのだと思います。製造機械さえあれば誰だって作れる、先進技術ではもうなくなった製品ばかりですから。こうして日本が制覇した世界のTV市場を、サムスンが焼野原手法で駆逐していき、日本は負け続けることになったのでした。アジアでは冷蔵庫、洗濯機など。そして、携帯電話においては、ガラパゴス進化した日本製は標準になれず、ついにはスマートホンの登場でとどめをさされたのでした。

こういった過程を踏んでなお日本は完成品である液晶パネルを作ることに拘泥し、結果、シャープなどは倒産の淵に立ったのでした。しかし、その裏で半導体製造装置では東京エレクトロンという、あまり有名ではない会社、日立二社、ニコンなど、世界のトップ十社のうち六社が占めています。やはり作ることにこだわるのは日本人だからでしょうか。

ところがアジア、欧米でサムスンの凋落が止まりません。巨大な半導体工場を抱えていて、世界的な半導体メモリー需要に支えられ、去年は半導体部門だけで韓国の輸出高の二十%を支える利益をあげました。しかしながら、スマホも他の家電も軒並み売り上げを減らし、特に中国での凋落は止まりません。LGなどは中国のスマホ市場から撤退しました。サムスンもトップテンからも外れてしまいましたし、今や世界最大の自動車市場になった中国で、唯一シェアを二ケタで落としているのが韓国メーカーでありました。ホンダ、日産、トヨタの20～30%増とは全く裏腹なことになっています。そして、中国の思惑はEVによって自国自動車産業での勃興を図ろうということですが、これについても全く前進しようといったそぶりさえ、韓国名メーカーには見えません。米国からも韓国国内の自動車市場の開放をFTA交渉で迫られそうですし、こちらへもひとこと、グッドラック、と言ってあげておきましょう。

一九七〇年以来、世界は未知のフロンティアを見失い、新しい成長の源を捜して金額の数字だけ増えるインフレに経済を持っていったり、国家が国内流通の貨幣量を水増しする借金を繰り返したり、ついには中央銀行が流通量の増加を狙って国債を買い、金利をマイナスにするという天地のひっくり返る仰天策を取ってきました。それがどこまで効をそうしたのでしょうか。積みあがったのは大企業の内部留保金だけ。そして連日余った金の流れ込んでくる、マネーゲームの株式市場でした。

ところがもはや地球上の空間にフロンティアがなくなるとサイバー空間に、仮想通貨が現れました。それも国家の手を離れた、何者とも分からぬ、誰でも発行できる通貨という得体のしれないものです。一般の人に理解できぬまま。それでもその仮想空間に大衆を引っ張り込もうと、電子商取引が日本は世界で一番遅れていると煽り立てる記事がネットでも配信されております。せめて国家の関わる通貨を日常生活では使いたいものと思っておりますが、このチョウチン記事は何をあおりたいのでしょうか。一日で20%も値上がりする通貨など、貨幣として呈をなしていないものと、それだけで分かります。株よりもたちの悪いギャンブルです。普通の通貨さえ、一時期から比べると10%以上円高になっているので、そう変わったものでもないところがありますが、国家の保証がある点について全く違っております。仮想通貨の出現は、貨幣とは何なのかを見直さなければならないという問題点を表出してきたことは間違いないと思っております。

突然と驚いたのは私だけでしょうか。ベーシックインカムという社会政策が浮上してきました。ベーシックインカムをウィキペディア風に言うなら、最低限所得保障の一種で、政府がすべての国民に対して最低限の生活を送るのに必要とされている額の現金を定期的に支給するという政策ということになります。これは、あの地域振興券とか、ふるさと助成金といった一時のばらまきとは違って、この先ずうっと給付するという性格のものです。あまりに突然の政策かと思ったのですが、実は自由党とか維新の党および大阪維新の会、新党日本といった日本の政党も公約として謳っていました。そしていま、グローバリゼーションによる格差拡大と、AIだのロボットによって人の雇用が奪われようとしている時代が到来しようとしていることを解決する起死回生の政策として討論されています。二〇世紀の経済学の巨人、ガルブレイスが何かの本に、共産主義と資本主義は互いに大きく振幅しながら互いの振幅幅を縮めてきて、やがて同じ地点に収斂すると言っていたと思います。しかし、二一世紀までに共産主義は共産主義を捨て、市場原理と資本主義経済を導入し、国民を管理する巨大な官僚組織とその上に乗った独裁者だけの国家権力になりました。ロシアも中国も、当然に行きつく果ての国家組織になったということです。そして共産主義は霧消してしまい、資本主義のアンチテーゼはなくなって、収斂しようにもできなくなっています。それにもかかわらず、反資本主義が見通せないまま、その資本主義が危機的状況、もしくは資本主義の最終段階にきているという終末論が言われております。まるでなんの論拠もなくささやかれる世紀末思想のようです。

その救済策がベーシックインカムなんのでしょうか。先進国の長期停滞に金融政策は無力と断言した経済研究員もおりました。IMFでの報告です。既存の資本主義システムは崩壊し、現在の経済学はこの長期停滞を説明できません。ガルブレイスもサミュエルソン、シュムペーターもケインズにはなれませんでした。ただガルブレイスは二〇〇二年に日本への最後の警告という本を出しています。失われた十年を失われた二十年にしないようにと彼はこの本で警告しています。しかし、無力な金融政策を小泉も安倍も金科玉条として、なおも日本を長期に停滞させました。いま安倍が一強から脱落しようとしています。これも時代の要請かもしれませぬ。日本は曲がり角に差し掛かり、先行きの見えない次の場所に向かっているのかもしれない。

ベーシックインカムについてももう一度説明してみましよう。これは国が国民すべてに、何の条件も付けず、一定額の生活に必要な額のお金を支給しようという政策です。そんな破天荒な経済政策なんてありえないと思われるでしょうが、実はスイスではこれについて実現する可能性が非常に高まっています。また、国民投票がおこなわれようとしている国もでてきておりますし、フィンランドではこれについての社会実験を行い始めております。こんなことがなぜ行われようとしたり、注目され始めてきたのかというと、やはり、世界で深まる分断と、その分断を生む原因となった、どんどんひろがってゆく格差問題にあります。

そのベーシックインカムには、肯定的には、これによって人々は生活に汲々としなくてよくなり、自由に生きられるようになるということ、そして、さらにその自由な生き方から潜在的な生産能力が高まるという議論が出てきます。それに反して、否定的に見る側からは、裕福な人々にまでお金を配るなんてお金の無駄遣いであり、もっと効率的で効果のある解決策がある、また、そんなお金など配ったら人々は働かなくなるという反論が出てきます。

しかし、なんの努力もなく、働きもしないでお金がもらえるようにしようという発想はどうしてでてきたのでしょうか。それはやはり1980年代に顕著になってきた、新自由主義的な経済が社会の主流になり、激しい競争社会になったこと、またより流動的な労働市場が求められるようになってきたことが、より深刻な格差を生むことになってきたことからでした。必要な時に必要な能力を持つ労働力を得て、必要でなくなったり、時代遅れの技術になれば後腐れなく簡単に捨てられる労働力を調達できる市場ということです。日本でいえば派遣社員であったり、季節社員、契約社員といった、企業に都合のいい労働力のことです。つまり、資本がより効率的に搾取できる労働力のことです。こんな言い方をするのであれば、ベーシックインカムによって生活苦からの自由によって、効率よい創造性のある生産力、発想力の高まりが期待できるという肯定的な意見も、単純労働力の搾取から、創造性の搾取に変わってゆくだけだという見方もできます。

経済格差が生まれるということは、その社会での所得の再配分機能が崩壊しているということです。資本家にだけ富が集中し、労働者の取り分はどんどん減っています。原始資本主義は弱肉強食であったと思い込みがちですが、実はそうでもなかったのです。あのフォード社は安価な自動車の開発に成功し、そのうねベルトコンベアーに乗せて車を組み立てるという生産技術を開発しました。そして、今までにない規模で自動車組立工を募集しました。しかし、そのとき組立工に要求したのは、それまでのような一貫してすべてを組み立てられる技術ではなく、会社で教育する内容を理解し、エンジンならエンジンの取り付けだけを、教えられたとおりに出来るという能力でありました。しかし、人員は集まりませんでした。それはフォードが今までにないベルトコンベアー方式で車を生産しようとしていることへの警戒感と、それに伴って予想される過酷な労働を嫌がったのでした。そこで、経営者側は当時の通常賃金、3ドル余から5ドル以上に引き上げました。すると募集した数の何倍もの応募があったそうです。その意味について、単に賃金を上げただけかと言われそうですが、いかにより安価な大衆車を作ってもやはり自動車ですから、おいそれと一介の労働者に買えるものではありません。そこで、フォードの経営者は、車の値段も下がるようにするが、それを買える消費者も育成することを考えました。いわば中間層、中流階級を育てようと考えたのでした。初期資本主義は、物の値段も大量生産で大きく下がり、まず衣食住について労働者が恩恵を受けました。そして働くことでよりよい生活を手にすることができるようになり、ここに良い方向への循環が起こり、大きく成長する社会が生まれたのです。日本の高度成長時代がそうでした。激しい労働争議もありましたが、これも所得の再配分の機構として機能していたと言えます。現在はグローバル化によって生まれた富の82%が1%の人に集中していると言われていています。所得の再配分機構が壊れてきたのでした。国内市場は商品売りつけるだけの存在になりました。もう労働力も要りません。安い労働力は国外にあります。安価な商品の輸出は失業の輸出でもありました。トッド氏の言う一国経済主義への立ち返りも、ガルブレイス氏の金融政策では経済は不況から立ち直らない、公共投資を行うべきだという提言も肯定してみようかという階層が、社会の分断、ナショナリズムへの回帰、そしてポピュリズムを生みだします。そして、ベーシックインカムは救世主になるのでしょうか。これも首を傾げます。

ベーシックインカムになんとか違和感を覚えるのは、人は自立し、自助努力をもって生活するものであり、世の中は競争の場であると考えからでもあります。天からお金がふってくるように与えられるというのは、どう見ても資本主義でも経済的自由主義でもなくて、こういった現在の通念に対抗する経済イデオロギーに裏打ちされた概念であるようです。かといって原始共産主義的コミュニティの相互扶助でもない。一種、未来社会のユートピア的在り様におもえます。テクノロジーの進歩によって、人はもう嫌なことはしなくていい社会がやってくるので、ベーシックインカムがもたらすのは真の自立と自由を手に入れる社会であると言わんばかりです。

反対にAIとかロボットとかによって今の職業に52%は失われ、人は要らなくなると言われています。その結果、大量の失業者が出ることになります。単純に考えればそんなことにしかならないように思えますが、それはそれで、また新しい職業が出来てくると、産業革命以来機械化された生産体制の下、また時代が要請する職の出現を例に出してきます。さらに、人に対するサービス業は人の手でなければ出来ないとも、あまり保証のない言い訳で反証してもきます。しかし介護ロボットの開発は急務だと懸命に開発が進んでいる状態です。一人暮らしの老人の話し相手になるペットロボットも出てきています。ホテルのフロントもロボットがすることを目玉にしているところさえあります。これらこそ、サービス業の典型だともおもいますが、どうでしょうか。AIが画像診断をして、人が見つけられなかった癌を見つける時代です。こんな時代が眼前にあるとわかっているから、ベーシックインカムだともいうのですが。

ベーシックインカムの論点は、実は一番最初に記したことに尽きます。次の時代の萌芽は、今ここにある。であるならば、次の時代を見るために、今を検証しつくさねばならないのでしょうか。2000年ごろを境に、国のGDP自体は上向きに推移しています。しかし、個人の所得は減り続ける一方です。経済格差は一国の中で人々を分断することにさえなってきました。ベーシックインカムを提唱したり、反対したりする人はその現象面をいうだけで、その原因はどこにあるのかを言いません。ベーシックインカムは単なる対処療法でしかないようにおもえます。熱があるから解熱剤、経済格差が大変だから、お金を配る。これでいいのかと思ってしまうのですが、それでいいのかもしれない。

ついでに、AIとロボットですが、いま人口減少の危機に直面し、労働人口の絶壁に立って途方にくれている日本は、これによって救われるのかもしれない。トラック運転手の不足に悩んでいる運送業界に自動運転の技術は急務であり、これができれば運転

手不足は解消されます。工場労働者不足も、今までもロボット化されては来ていますが、もっと自動化され、大量生産の同ルーティンの作業はAIとロボットによってすべての作業が行われるようになればいいのです。原子炉の廃炉作業も、そのためのロボット開発が急がれているのですから、いま必死に開発されているのでしょう。日本人は困ったときに、必死に考えるのですから。

2009年に発行されたジョージ・フリードマン氏の100年予測という本について考えてみます。この人は一時、中国は2020年になっても張り子の虎でしかない、韓国はいずれ統一されるだろうがどうしても日本をこえられず、たとえ統一がなってもその韓国のできることは、せいぜいチクチクと日本の脇腹を何時までもつつくことだけであると言いつつ注目されました。彼はもともとディッキンソン大学の政治学教授からルイジアナ州立大学附属地政学センター所長をつとめ、'96年インテリジェンス企業ストラトフォーを自ら創設し、政治・経済・安全保障にかかわる独自の情報を提供するようになりました。ところが、ストラトフォーは影のCIAの異名を持ち、各界の要人が彼の情報に頼っているようです。そのフリードマン氏の著書の一つが、この100年予測です。

この人の現状分析と未来予測の手掛かりは地政学です。この地政学、別に日本の大学で教えているところがあるときいたことはありません。この地政学という言葉が日本で一般的にしたのは、あの竹村健一氏でありました。ですから、この人のうさん臭さと運命を共にして、彼がマスコミから消えていくにつれて市民権を得ないまま、立ち消えてしまいました。日本の大学で、この地政学と関連付けられる学問領域をあえて考えるとすれば、国際関係論などでしょうか。

しかし、最近さりげなく所々にこの言葉が見受けることが出てきました。そこで、地政学とはと、予めその認識を整理しておかなければなりません。例によってウィキペディアに頼ると、

地政学は地理的な環境が国家に与える政治的、軍事的、経済的な影響を、巨視的な視点で研究するものである。イギリス、ドイツ、アメリカ合衆国などで国家戦略に科学的根拠と正当性を与えることを目的として発達した。「地政学的」のように言葉として政治談議の中で聞かれることがある。

こういった定義になりますが、100年予測の著者自身によると、

地政学は二つの前提の上に成り立っている。第一に、人間は家族よりも大きな単位を組織するが、その過程で必ず政治に携わる。また、人間は自分の生まれついた環境、つまり周囲の人々や土地に対して、自然な忠誠心を持っている。

第二に、地政学は国家の性格や国家間の関係が、地理に大きく左右されると、想定する。

と述べています。地政学についてのイメージは、この二つを読み合わせると、なんとなく具体的なものとして想像出来るのではないかと思います。地政学の紹介のされ方が少々うさん臭くても、一応それは忘れて100年予測を読み進め、かの人の言うことに耳を傾けてみましょう。しかし、この本の最後を読むと驚いてしまいます。奥村真司氏は解説の表題から、こう言い放ちます。

未来予測は絶対に外れる

これはなんですか？解説者はこう言います。

中国が分裂し、ポーランド、トルコ、日本そしてメキシコが大国化してアメリカに歯向かう。断言しておくが、このようなフリードマンの未来予測は絶対にはずれる。

こう、断言、します。しかし、そうは言っても、まず読んでみましょう。まるでSF小説のようで、興味深いです。志茂田景樹氏の荒唐無稽な架空戦記物よりは世界の現状分析は確かですから。

地政学の本、100年予測について、いきなり下田景樹氏の架空戦記物を不遜にも引き合いに出しましたが、フリードマン氏の分析には地政学のほかに、科学技術、人口動態、文化、政治および経済の形態を様々にとりあげます。しかし、地理的要因を考える時は軍事における動向を最重要視しているようです。そして、アメリカはいま没落していく国だと言われているが、そうではない、21世紀こそアメリカの時代だと高らかに言い放ちます。それは、アメリカが太平洋と大西洋の両方に接しており、また世界最強の海軍力を有し、それでもって世界の海を制しているからだといいます。彼は第二次世界大戦後70有余年を経てもなお軍事力が世界を制すると、当然のように、疑いもしないで大前提にします。これまでの世界の歴史がそうであったように、これからもそうやって歴史は動いてゆくと断じます。しかし、これを振り返ってみますと、そこに疑問を感じる私のような日本人は、平和の中にどっぷりとつかって世界の現状が分かってないのかもしれないかもしれません。今日にもアメリカはシリアにミサイルを撃ち込むかもしれないのです。アサドは毒ガスを使って、1000人の人を害し、60人の子供を殺しました。

さて、前項で「中国が分裂し、ポーランド、トルコ、日本、そしてメキシコが大国化してアメリカに歯向かうことになる」と書きました。実は、この本の内容はこれに尽きます。しかし、「未来予測は絶対の外れる」のです。フリードマン氏は、中国は2010年代で経済的に破たんしていると予想しています。今は2018年。中国はまだ安泰のように見えます。そのうえ、世界各国に無償の資金援助をし、様々なインフラを整備して、その影響力を広げています。

そうではあっても、フリードマン氏の2020年の中国は先ず張り子の虎と副題を付け、ここ30年で飛躍的な経済成長を遂げたが、これから先もこの成長を続けられることにはならない、中国はこの成長が減速すると政治的にも社会的にも重大な問題が生じる、私は中国が世界の主要国になるという説には賛成しないとまでいいます。

中国の経済基盤は見かけほど強固ではない。またこの国の政治的安定は、急成長が持続するかどうかに大きく依存するため、さらに不確かである。

そう語って、フリードマン氏はそう思っていないのだがと断って、他の人は中国が近い将来、アメリカへの世界的な挑戦国になる可能性が高いと思っているといいます。しかし、フリードマン氏は中国について彼の分析を通じて、中国が張り子の虎であることを実証します。

まず中国は陸の孤島であるといいます。中国は陸の勢力で、海の勢力ではない。それゆえ中国は一帶一路で陸に現代の絹の道を築き、ヨーロッパを目指しています。その中国も東シナ海から西シナ海へ周りの国と軋轢を繰り返しながら海軍力を広げようとしています。しかし、あの遼寧を見ればわかる通り、その海軍力はみすぼらしいものです。この人の分析によれば、内心、中国は、いまは日本ともことを構えられるとは思っていないようです。ましてアメリカは世界最大の海軍国となり、第二次世界大戦後世界に存在する艦隊をすべて合わせても、アメリカの海軍力には遠く及ばないほどになりました。

フリードマン氏は、中国は陸の孤島であると言います・確かに、地図を見れば、中国は砂漠と大山脈に囲まれ、東は海が広がっています。この中に閉じこもってれば侵略されることもなくすることもなく、この広大な大地の中でだけ角突き合わせる歴史だけで終われるでしょう。それには十分な広さというだけでは終わらない、あまりに広い台地が広がっています。まして多民族国家です。この国はいつも不安定であったと、フリードマン氏は分析します。エマニエルトッド氏も中国の家族型、直系家族はその性格から少しの不公平も我慢しない民族性を指摘しています。

彼は20年という年月を指標にあげます。何も変わらない毎日のように見えるが、20年経ってみると世界は激変しているというのです。フリードマン氏は様々なデータをあげてろんしょうしてゆきますが、その根底はアメリカ帝国のリアリズムにあります。アメリカ合衆国ではありません。アメリカはなりたくて帝国になったのではない、意図せずしてたまたま世界帝国になってしまったといいます。その上に崇高な使命をアメリカ人は信じている、アメリカは明白な運命にしたがって、自分たちが世界を治めることが神によって定められていると信じているといいます。

そのような不思議な使命感を持ったアメリカ帝国がアジア、ヨーロッパ、ロシアを含むユーラシア大陸とアフリカ大陸から離れ、北米大陸に生まれ、それが第二次世界大戦後、図らずも世界帝国となったとフリードマン氏は言います。まさにアメリカ自身は望んでもなかったことであり、意図せぬことだったということです。そして、それが地政学であるとします。

この本は大部であって、その一行一行がないがしろにできない内容です。その中でやはり気になるのは日本とそれを取り巻く中国韓国の先行きです。それで、中国の先行きを描いた部分を紹介しましたが、その部分の記述は、私たちは中国のことをどこまで知っているのかと思わせるに十分でした。日本は幾世紀も中国と向かい合ってきました。それゆえ、それなりの中国観を持っています。しかし、アメリカからパワーバランスの上に地政学をもって中国を見ると、こうも映っているのかと思ってしまう。中国は強大な国です。少なくとも我々はそう思っています。しかし、歴史を見ると、中国は自分から他国を侵略した歴史はないと指摘します。じゃあ、元寇はと口走ってしまいそうですが、まさに勉強不足をそれで証明してしまいます。元はモンゴルであって、中国ではありません。漢王朝の漢族でも清の満州族でもないわけです。

地理的に見れば、中国大陸は先に紹介した通り、中国は陸の孤島、島国です。そして

、歴史的には相対的な貧困と孤立化、もう一方は社会不安と経済開放があつて、その両極を振り子のように触れてきたのでした。1840年イギリスがアヘン戦争で中国を開国させた結果、一部の地方が外国によって暴力的に分割され、さらに繁栄もしました。ところがそこに共産主義が席卷するようになり、毛沢東が農民軍を指揮して外国人を追放し、国民の生活水準を押し下げることにはなつたが、鎖国して一世紀ぶりに結束し、安定したのでした。中国の近代史だけを抜き出してみるとこういったことになる、とフリードマン氏は言います。

中国がこういった過程を繰り返すのは、中国唯一の経済資源である安価な労働力のせいであるとも指摘します。中国が開国されると対中投資がその労働力を活用する工業所や事業所を開設し、中国国内で販売するのではなく、他国へ輸出する製品の製造に使ってきました。中国は彼らの市場ではなかつたのです。ですから、港へのアプローチが容易な沿岸地域へ、対中投資は行われます。

中国は元々、その大半が人の住むには適さない土地の広がりでありました。巨大な揚子江と黄河は有名ですが、それにもかかわらず、中国は草木の生えない山岳と砂漠が西に広がり、そこにしがみついて食べるものを育て、暮らしているのが現状です。近年そこも砂漠化が進み、1000万人の農民を北京郊外に強制的に移住させるという強硬策を中央政府がおこなったのですが、その結果をBS1でドキュメントとして放送しておりました。またあまり関係ないことと見過ごしていた、同じくBS1のドキュメント番組に、アメリカの地方都市に広がる麻薬の実態を取材したものがありません。アメリカのことですから、まさか中国の名前が出てくるとは思わなかったのですが、メキシコ経由でしょう、中国から大量のヘロインが密輸されているそうです。そういえば中国では麻薬に関係すれば死刑が適応されるという厳罰の実態が報道されたことがありません。

ASIAN INSIGHTという番組では、留守児童が取り上げられておりました。貧しい地方村から若者や若夫婦が大都市に出稼ぎに行き、祖父母に子供はまかせっきりにして、ついには帰ってこなくなるということでした。残された子供が留守児童と呼ばれるのです。

爆買だの大量に押し寄せてくる中国人観光客や、北海道の二束三文の土地を買いあさる中国人の話題のニュースがよく報道されますが、それは本当に一握りの裕福な人たちの話です。

続100年予測は、中国の現状を伝えてくれます。中国人民銀行の統計による数字です。世帯収入二万ドル以上の中流世帯が6000万人。ヨーロッパ大陸の大国(フランス)並みの人口ですが、これが中国であれば、全人口の5%に満たない数字です。そして、この人たちは沿岸部か北京に暮らしている特権階級の人たちでもあります。ところが世帯年収千ドル以下の人達が6億人。さらに千ドル以上二千ドル未満が4億四千万人。年収千ドルといえば、一日三ドル以下ということになります。今のレートでいえば三百三十円以下です。1000ドル以上2000ドルなら、3ドルから6ドルということは言うまでもありません。これは、中国人の80%の人がサハラ砂漠以南の貧困と同じ生活をしており、沿岸から200km以内のベルト地帯に住む人たちでさえ、とてつもなく貧しいことを示しています。加えて、その人たちの識字率は想像もつかないほど低い。ですから、熟練労働者にもなれません。その人たちは、例えば外国から輸入されてきたプラスチックごみの処理をして暮らしを立てています。ペットボトルのラベルを剥がし、山と積んで一定量たまるとそれに熱を加えて溶解し、もう一度

ペレットに戻して売るのが生業です。熱を加える浴槽に蓋はされず、有毒ガスはそのまま蒸散されます。そして、そこで使われた水はそのまま川に流されます。子供たちはその川に魚を取りにゆき、死んで浮いていた魚も生きていた魚も区別なく取ってきて、それが一家の食事に出されます。そのプラスチックごみの中に日本語も書かれています。アメリカからさえ来ています。子供の学校の授業料は払えません。

今度の東京オリンピックは都市鉱山と言われている携帯やPCの基盤から金やレアアースを取り出して、金メダルにすると言っております。中国の貧しい村では、山と積まれたプリント基板を、ガスの火で熱せられた金属板の上に置き、半田が溶けるとそれを叩きつけて部品をはずすという作業を続けています。プラスチックごみのリサイクルも、プリント基板の再処理も、それしかできないからとそれを続けている中国の村々で行われています。そうして中国全土が許容量を超えたカドニウム汚染、マグネシウム汚染の重金属汚染でまみれているそうです。あのスモッグで煙った北京の空は、それを証明しています。

中国もロシアと並んで独裁色を一気に強めました。トッド氏によれば、中国もロシアも外婚制共同体国家ですから、強い指導者というよりも独裁者が現れて、逆に安定に向かう性格の国家だそうです。ですから、外から彼の国を見ると圧政と弾圧に苦しむ国民を想像しがちですが、確かに言論の弾圧もあり、対立候補も排除し、自由意志での投票もゆがめられながらも、これはこれで受け入れているのがロシア社会です。中国も同様。強い父権、というより絶対的な父権を社会の制度としている中国社会は、習氏が独裁者として君臨することを許容し、安定を示します。

しかし、この中国の安定も、経済が順調で少しずつでも人々の生活がよくなっていき続けければの話で、その成長が止まって生活が苦しくなれば不満が一気に高まり、爆発してまいります。父権のみが突出して強く、他は平等であらねば我慢できないのが中国人の国民性だからです。習氏はこの高まってゆく中国社会の緊張を見抜いて独裁者になったのでしょうか。それよりも、中国共産党がこの先、高まってゆく緊張と暴発の危険の前で崩壊することを予見して、なおこの先、毛沢東のように国内を統治してゆこうと権力を集中させたのかもしれませんが。さりながら、あの習氏の顔を見てると、そんな崇高な意思を持っているとは考えにくいです。この先中国がどうなっていくかなんて考えもせず、ただ権力を握り続けたいとしか思っていないとしか思えません。中国はとんでもない格差を抱えながら巨大化してしまいました。そして、その格差を解決する方法が見つからないまま、経済成長を追求し、アメリカの握られているシーレーンを脅かすことで自らの存在感を世界に示し、力をもって有無も言わず市場を広げ、成長を確保してゆこうと画策しているように見えます。東と西のシナ海がそれです。ところが、それにあらがうだけの力を持った国々がそこにはない。それゆえ、財政的に苦しい日本が細々と軍事援助を行い、少しずつ同盟国を広げようとしています。しかし、間に合いそうにないように思います。尖閣への嫌がらせはエスカレートしてゆくばかりなのは、そんな日本が目障りなんでしょう。海軍力に関しては、中国は七位、日本は四位というのが通説ですから。

この100年予測では中国を筆者が語るとき、常に日本が比較されて詳述されます。その分析には頷かざるを得ないところが多いのですが、それでも偏っているとどうしても言いたくなります。

この人の歴史観は、国家は過去と同じ行動を繰り返すというところにあります。日本はかつて軍国主義国家でありました。それが突然平和主義国家に変化し、七〇年余を過ごしてきました。しかし、日本はかつての軍国主義を忘れていないといいます。そして、これからどうしても国家を防衛しなければならなくなったとき、日本はまた変貌するといいます。それもあつという間だということです。日本は地震型の国家で、長い時間ほとんど変化を見せないで過ごしながら、ある日激震が起こって、信じられないほどの速さで変化する国だといいます。それとは反対にアメリカは氷河型の国家で、何事かがつねにあつて、それにともなつて常に徐々に変化していく国家であるとしています。国家の性格はそれぞれですから、どのような見立てでもいいのですが、筆者の主調低音は、人は、そして国家も社会も、必然性をもって、愚かな歴史を繰り返すというところにあります。政治と社会形態はなにかしらの進歩的姿になつても、過ちだけは同じことを繰り返すと考えています。

歴史は繰り返す 一度目は悲劇として、二度目は喜劇として
いまさらですが、マルクスの言葉を引用し、やはり人間は愚かなんだと思ひましょう。しかし、この人はそれを価値判断しません。必然性といって、それが悪でも善でもないと言い切ります。アメリカアメリカと繰り返し、二一世紀こそがアメリカの時代だといひ、それが必然であるといひます。アメリカがなりたくてなつたのではない、意図せぬ必然でそうなつたと。

さて、ある日突然、がらりと国家の形を変える日本が、本当にアジアで覇をとなえるようになり、中国が経済に急ブレーキがかかり、没落するのか。そして日本はトルコと同盟を結び、ポーランドは取ること戦線を開いて大戦になだれ込むのか、そして日本はもう一度アメリカと戦うのか。筆者のいうところを考えてみます。まるでSF小説のようです。

日が空きました。実はもうこの本にうんざりしているところがあって、読み耽ってはいたものの、筆者の姿勢にうなずけなくなってきたからでした。しかし、このところの日本の周りの騒がしきは どうでしょう。このままいけば、日本は沈没しそうな勢いです。さもなくば、あの人の非道に目をつぶって外圧のまま、突如として大きく軍備拡張の方向へ向かわざるを得なくなり、一挙に軍国主義へと変貌してゆく勢いに見えてきます。これがまたフリードマン氏のいう通りになるようで、余計に苛立たい。なぜでしょうか。この本は、アメリカ帝国の国家戦略と陰謀の本です。アメリカはリアルに、そしてプラグティクに世界戦略を考えています。この陰謀を凶っているのは誰でしょうか。誰と特定出来ませんが、例えば、大統領さえ暗殺する者たちであり、歴代大統領と上下院議員たちのスキャンダルを握って、それをもって彼らを操ってきたフーバーCIA長官に象徴されるものたちではないでしょうか。またはティーパーティーの連中であつたり、エスタブリッシュとも言われる人たちかもしれません。しかし、彼らも実はそんな陰謀を思っていないでしょう。彼らは、自己の利益の実現を思っているだけです。そして、フリードマン氏などが、それを実現するための方策を立てます。それも自己利益のみが優先され、他を踏みにじるのも国家戦略であると考えます。フリードマン氏は日本の国の在り方が第二次世界大戦時と何も変わっておらず、資源とエネルギーを他に求めなければ、国が成り立たないのは、この先もあの時と同じだと分析します。確かにそのとおり。今もABC包囲網を引かれてしまえば、日本はもう一度、国の存続をかけて戦わざるを得なくなるでしょう。アメリカは台頭してくる日本軍国主義を容認しません。もちろん核も持たせはしません。日本が核を持つことに一番反対し、それを阻止するのは中国でもロシアでもなく、アメリカなのです。中国はそれまでもう没落しており、ロシアは二度目の崩壊をしております。そしてアジアで大国になっているのは日本であると考えます。それゆえ、アメリカはこの出てくる釘の頭を叩きます。潰しにかかるのです。ところが日本はのほほんと、アメリカがそんなことを考えているとはつゆ思いません。ただアジアの自国の利益を守ろうと、アジアの反対側に台頭してくるトルコと同盟を結びます。そのトルコにポーランドが襲い掛かります。それもアメリカにそそのかされてです。まずポーランドが戦いを始め、日本はその時それとも思わず、のんびりと構えています。そしてあわててアメリカに戦線を開くことになるというのです。

ロシアが超音速ミサイルを開発したと公表しました。アメリカはこれを迎撃できないと言っております。何故こうも簡単に、アメリカはロシアの優位を認めたのでしょ

うか。これからの戦争は宇宙を制覇するものが勝つとフリードマン氏はいいます。昔の世迷言が本当になるというのです。かつて、レーガンのSDI（宇宙防衛構想）がありました。あの時は全くのブラフでありましたが、2030年以降はテクノロジーの発達により、これが実現するといえます。ロシアはまたもこの軍事競争に負けてしまいます。かたわら、中国は10億の老人に足を取られ、崩壊するか、分裂に至ります。そして日本は、その中国に大きな利権を築いてしまっているのに、それを守ろうと軍備増強に走ります。こうして、日本はベトナム、フィリピン、タイ、カンボジアを巻き込んで、またもアジアの盟主になってしまいます。これもまた意図せぬ結果からでありましょう。インドはどうか、インドは相も変わらぬ二流国のままだといえます。

このシナリオは、仮想戦記に見えて、逆に怖い。日本がこれから中国に築く利権は、あの時の満州国のようです。まったく同じシナリオを、フリードマン氏は予測します。彼が正しければ、日本は滅びます。

フリードマン氏のいうところに陰謀の剣呑さを覚え、それでいて架空戦記のばかばかしさを見る思いがし、また、それだけで退けていいのかとどこか空恐ろしさも感じております。ですから、せめて未来は分からないものと思って、一応頭にとどめておくこととしました。

しかしながら、彼の人の言うところにうなずかされるところもありました。資本主義経済体制が深化すると、出産率が減少する。これはどんな国にでも見られるところだとトッド氏も言い、資本主義深化のメルクマールとしています。そして、現実には日本は少子化に悩んでいます。しかし、この少子化は何故なのか。この疑問に経済学者が答えているのを見たことがありません。現象としてこうなると言うのみです。しかし、フリードマン氏の言うところは明快でした。資本主義以前の社会では、避妊方法も発達しておらず、また人の性欲は止み難く、多々妊娠しておりました。しかし、乳幼児の死亡率も高く、出産も危険が大きかった。しかし、夫婦はそう言った危険をおかしても子供をもうける利点があった。それは、資本主義以前の経済体制、例えば農耕社会では子供に高い教育をつけなくとも、早くから労働力になった。つまり、早くから親の助けになった。ところが、資本主義では子供に高い能力を身につけさせるために長く教育をうけさせなければ良質の労働力とはみなされない。また、かつては親が教育することで親の仕事を子に伝え、一人前にすることもできたが、資本主義経済では一般的にそれもできない。加えて、親も生活を支えるお金を稼がなければならない。その結果、子供を多産するのは有利ではないと誰もが考えるようになった。明快な理論です。

日本の金融市場は異常であるといえます。日本で起業しようとする、創業者はどこから資金を得るでしょうか。日本じゃ銀行に事業計画書を出し、土地などの担保と保証人を用意し、自己資金も用意して起業します。運転資金も銀行から借り受けます。日本人はこれを常識として何の疑いも持っていません。ところがアメリカなどの資本主義先進国は、こんな非常識な資金調達法はないといえます。彼の国では、株式市場から資金を調達するのです。フリードマン氏は、株式市場は何のためにあるんだと言いたげです。投資家がいて投資会社もあり、資金はそこから調達します。そのとき、投資家、投資会社、ファンドに渡されるのが、言うまでもなく株です。株は売り買いして儲けるものではありません。株を市場に公開し、それで資金を得ることも行います。日本も株式上場を行います。しかし、それはなんだか会社のステータスを高めるためのようです。一部上場の会社だと言えば、社会的信用は大です。もちろん、ホ

リエモンのように本来の活用法で株式市場を利用した人間もいるにはいますが、株主は外部の者、会社はそこで働く会社員のものという感覚が、世界から見ると非常識なんです。そこをつかれて、ハゲタカなんかが横行します。日本も外国の会社は買収しますのに、国内ではどこか意識がずれているのです。

日本人は贅を好まず、華美に暮らさないで貯金をすると思われているが、そうではないとフリードマン氏はいいます。にほんの老後を保証する福祉制度が貧弱なため、日本人は自己防衛で貯金をするのだということです。ま、あそれも一理ある。日本人は心配性だから、先を考えて節約に努めるところはあると思います。その貯金が、郵便局に集中していたといいます。そして、郵便局は集まったお金を市中銀行に低利で貸し出すので、銀行もやはり低利でかしたすことができたと言います。郵政を民営化しろと、誰か言ってましたよね。刺客選挙までやって勝利し、民営化してしまいました。それは傍らに置いておいて、企業は低利の借金で済むので、さほど利益を上げなくても製品を輸出できる。また、返済も余裕があるので、短期の利益を追求しなくてもよかった。しかしこれは反面、利益率の低い商品の輸出にもつながり、自己利益も低いま次の商品の生産に移ることになる。大量に生産し、大量に消費され、はた目には大成功しているように見えるが、内実は自転車操業と変わらないと言います。さほど儲かっていな商品を廉売することで華やかな成功を上げているように見えたが、投下した資本に比べ、利益は上がっていなかった。それはそうかもしれませんが、これは近年の韓国の商法に見えます。日本製品では太刀打ちできない価格を設定し、市場価格を破壊して自国の製品を売りさばく。まさに焼野原商法です。かの国は開発のための初期投資が必要ありませんから、これで生き残れる価格設定ができたのでしょう。作る機械も資材も部品も日本から買い、製品の内容もすべてにほんの真似をすればよかったのですから。

しかし、こうして考えると、アメリカにとっては日本は韓国と同じ、焼野原商法をやったのける国に見えたのかもしれませんが。安い、高性能、壊れない、小燃費、そんな自動車がアメリカでは標的にされました。我々は韓国とは違うと胸を張っても、結果は同じなのですから。

左見右見、郵政民営化のうさん臭さはこんなもんです。働き方改革というのも、労働時間規制を見直して成果報酬制度を広く導入することを目指すとされていますが、これってどこの国の働き方？と首をひねりたくありませんか。ホワイトカラーは成果を上げればそれに見合った報酬を得るようにするという考え方です。日本って、成果を上げると昇進、抜擢といった優遇がなされるのがふつうではなかったでしょうか。こうなれば、益々の格差社会、競争社会になっていくでしょう。

フリードマン氏は日本の失われた20年に付いても言及します。しかし、バブル崩壊後の不況にじっと耐えて問題が解決するのを待ったとしか言いません。逆に言えば、政府は積極的な解決策を取らなかったということでもあります。しかし、この間、日本経済の問題点も顕在化してきました。少子高齢化という先進国がどこでも襲われる最大の問題です。それについて、ドイツは積極的に移民を受け入れ、社会の底辺の仕事を受け持たせました。また、過酷な肉体労働もやらせ、そのうえ税も払わせました。その日暮らしの移民たちは、稼いだ者をほとんど生活に回さなければなりません。こうして、消費も担わせました。社会の底辺の労働力と消費層を移民によって得たということです。ドイツは国家としての利益を得たということになります。では難民となればどうでしょう。ドイツ国民は拒否反応を示しました。フランスも、EU全体もと言っていいでしょう。今は小康を得ていますが、この難民とか移民の問題をスムーズに処理することができなければ、これからの先進国は成長を続けられないだろうと、フリードマン氏は言います。アメリカはEUとは違って、もともと移民の国であり、かつビジネスチャンスにあふれた国ですから、世界中から先進的な技術を持った移民が集まってきておりました。そんな事情をきちんと考慮せず、一括して移民を禁止したのがトランプでした。アメリカの成長はもう製造業にはないのに、知識集約型産業まで一緒くたにして暴政を振るうなんて、トランプらしいと言えますね。しかし我が国、日本はじっと黙って、移民も難民も来ないことをいいことに、移民問題に蓋をして日本は日本人だけでやっていくことを選びました。このことはフリードマン氏のみでなく、他の経済学者も指摘しています。いまだ尊王攘夷の国です。それだけでなく、日本は文化障壁が大きすぎて、外国人は移住しにくいのです。日本語は世界一難しい言語ですから。そうであるなら、日本は何に成長の原動力を見出せばいいのでしょうか。日本は先進技術からも、科学技術からも取り残されているという元官僚がいました。世界の大学ランキングで日本の大学はランクを落とし続けているといます。論文の引用回数も減る一方だと指摘します。教育に力を入れない国としての在り方は間違っています。確かにその通りと思いますが、すこし違うかなとも思うところもあります。日本は職人の国でもあると思っています。lotだのAIだの、iPhoneだのといった、ITばかりが先進的であるとは思いません。それでも、MRJの不出来さは、物作りさえダメになっているのかと心配はしています。なぜ国家事業として取り組まないのか。いま一番ダメになっているのは国家機構と政府です。ホンダのプライベートジェットは一躍世界一の地位を得ています。そして日本製のステルス戦闘機は、ゼ

口戦並みの衝撃を世界に与えました。三菱がだめなら、国の出番だと思えます。最も優雅な小型旅客機ができるはずです。そうしたことに日本は成長点を見出せると思えます。

日本は地震型の国家であるとフリードマン氏が評していることは、以前紹介しました。つまり、ある日突然、ガラッと体制を変えるというのです。日本はもう戦後体制のまま、即ち対米従属のやり方のまま、経済だけに注力していてもいい時代ではなくなってきました。つまり、憲法9条の問題に集約される戦後体制にこれからも居続けられるわけではなくなってきたということです。平和国家日本の旗を降ろすということではありません。その点、現在の首相は実に巧みな憲法改正をもくろんでいます。確かにもうすぐ地震は起こりそうです。今の日本社会には歪みが大きく溜まってきました。体制が大きく変化するとき、その表象として、政治が変わります。国民一人一人の中に、次の世界への不安が淀んでいます。今少しはその変化の顕在化はないと思います。しかし、あと5年すればどうなのでしょう。

憲法9条と申しあげました。戦後、表向き、最大の護憲派は野党でありました。絶対正義として、声高に戦後を平和国家たれと叫んだのは野党でした。しかし、この9条を実に巧みに利用してきたのは自民党ではなかったでしょうか。戦後日本の安全保障を日米安保に頼り、経済のみに注力し、何かしらの軍事貢献を要求されても野党の追及を良いことに、日本は憲法上武力行使はできないからお金だけだしますと、沿岸戦争のときはそれで済ませました。しかし、世界がそれでは満足しないと知ると、PKOを行うようになりました。しかし、その日報に戦闘行為との記述があるなしと、昨年追及されました。野党は今も、あの地点で足踏みしています。そして戦後の絶対正義の主調の前で、無能な女性防衛大臣の首がとびました。ところが、政府はこの野党の追及を今も巧みに利用しています。憲法9条がある限り、実力行使はできないといいわけますから。そして、ほら、こんなに野党の追及があるでしょ、と言い立てればいいのです。ですから、今の首相は9条の2項はそのままに、自衛隊のみ明記するという手法を考えだしました。平和国家の表看板にこれを加えて、GDP1%を超えた軍備を備えることのできる体制をこれで確立しようというのです。実に巧みな手法だとおもえます。こうすれば、たとえば、いずも、というヘリコプター母艦を、甲板の強度を上げてF35B戦闘機の空母にすることも可能となります。かが、という同様の仕様の母艦もあります。こちらの方がもっと戦闘力を持った母艦ですが、甲板の改良を行うことはどうも初めからけいかくされていた節があります。日本版ステルス戦闘機はここから離着陸ができそうです。それゆえか、中国が今から警戒して報じています。しかし、日本は9条がありますと言えば反論できます。そして尖閣を取られれば自衛権の発動で、取り返せます。かの国とは海軍力で三十年の開きがあると、言われてい

ます。尖閣に進行して敗れば中国共産党はつぶれます。台湾に軍事演習をもって威嚇しても、進行はできません。台湾は占拠できるでしょう。そうなったら、米国も手出しはできますまい。しかし、中国は経済が見てる間に破たんします。いま中国は、日本のお金にすり寄りなければならない事態になっています。

2030年ごろ、日本はなりたくなくとも、アジアでの最強国になっていると、フリードマン氏は予測しています。アメリカはこれをできるだけ先延ばしにする戦略をとる必要があるといいます。そのころ、中国は経済も軍事力も後退しています。むしろ崩壊の次元になっていると予測しています。トッド氏もその時は日本は中国に手をさし伸ばさなければならないといいます。この時の中国は中国共産党ではないでしょう。日本にとっての、かつての満州国になっているかもしれません。そんなフリードマン氏の予測を、どう理解するか、今から考えておかなければならないとおもいます。

台湾は驚きの国でした。この旅自体も、その始まりから驚きの連続でした。4月25日午後7時5分出発。高松空港からの直行便にのりました。むしろ、この旅は高松から出発できることがうれしくて行くことに決めたのでした。それでもやはり外国へ行くのですから、手続きにそれなりの時間がかかるものと覚悟して、家を出たのが午後3時でした。搭乗手続きは2時間前から行われるはずです。それに、台湾に着いても夕食は自分で何とかしなければなりません。それやこれやと取り越し苦労の末、そんな早い時間に出かけたのでした。しかし、車を置いて空港へ来ても、時間は持て余すばかり。夕食のことを考えて、ビュッフェで軽食を食べ、そこでだらだらと時間をつぶし、いつまでもそこにいるわけにもいかず、ラウンジに出てまたベンチに座って時を待ちました。そんな具合ですから、搭乗手続きにチャイナエアラインの窓口に向かった時には、まだ早い、窓口はあいてないだろうと思っていたのですが、どうなんでしょう、すでに窓口のあるホールは人が幾重にも折り返して並んでおりました。まさに目を疑うばかりです。さらに事情が分かってくるのですが、分かればわかるほど???と不可解としか思えなくなりました。ですから、人が見ると、私の頭の上にはクエスチョンマークが飛び回っているのが見えたと思います。私たちの前に並んでいるのは皆、台湾へ帰る人たちでした。こんな風な状況ですから、窓口も定刻を待たず、早くから開けて処理し始めました。荷物検査も警備会社の制服の人たちが検査の機械を列に途中に設け、次々となしてゆきます。そんな列の最後尾に着いた私たちの後ろに、中年の女性のグループが並びました。この人たちは、丸亀から来たと後で聞いたのですが、明らかに日本人でした。この人たちがまた、旅の初めの高ぶりからか、ところどころに東瀛の訛りがうかがえて、台湾の人たちよりけたたましい。グループは4人でした。また、持ってるケースの大きいこと。私たちも大きいほうのケースをもっては来ましたが、二人で一個です。ちょっと眉をひそめながら、順に詰めて搭乗手続きを待っていました。それでも、前の人たちのどこかに、まだ台湾の人とは違った人がいるだろう、日本人もいるだろう、他の外国人も、と、居ることが当然と思っていたのです。ですが、飛行機に乗り込んではいきりしました。彼らしかいません。私たち以外は全部台湾人。約二〇〇席のうち、六席が日本人。あと全部台湾へ帰る台湾人。なんで? そう思ったのは私だけではなく、妻もでした。ここは高松空港です。京、大阪、東京ではありません。日本一小さな県、香川県です。彼らはどこへ行っての帰りでしょうか。この疑問は解決されないままでした。

またくどくどと旅の顛末を書いてしまいました。前回だって、たかがホーチミンです。今回も海外観光旅行の入門編であれば、それに一番ふさわしい台湾です。そしてその旅行に先立っての搭乗手続きで、なんでこんなに大勢台湾の人がいるのかと驚かされたというだけのことです。ところが、帰りの便も同じで、高松へ行く便に十人そこそこの空席こそあれ、残りの席で日本人は私たち夫婦と丸亀からの一行だけ、他のすべて、約百六十人が台湾の人たちでありました。帰りですから、もう驚きはしません。と言いながら、来る時と一緒に、???とクエスチョンマークが頭の上を飛び回りました。

さて、桃園空港に着いてのことですが、もう外は暗くなっており、外の景色は機内からも空港内でも全く見えませんでした。そして、空港のラウンジまでが遠い。間で動く歩道に何回乗ったことか。私たちも最初はおとなしく横の手すりのベルトをつかんでおりましたが、台湾の人は気ぜわしいのか、キャスター付きケースを引っ張って、飛ぶようにどんどん歩きます。追い越されるのが口惜しく、こっちも歩きます。それでも、その横を追い越してゆきます。ところが、動く歩道の横を若い人が自分の足で追い越してゆくのです。走っているのかと思いました。しかしそうでもない。彼らは若くて、こっちが年取ってる、それだけでした。彼らは機内持ち込みのケースを引っ張っていても、早くて競争にならない。しかし桃園空港は広かった。

入国審査は台湾人と外国人を分けて審査してました。台湾の人は右、私たちは左。ところが入国審査官が、にこにこして私を招くではありませんか。台湾人用のすいてる窓口で、またすことなく審査をしてくれたのです。パスポートと入国カードを渡し、指示に従って両方の人差し指を所定の場所に乗せ、カメラに向かってにっこり。それで終わりです。パスポートを受け取ってさあどうぞ。妻も同様。それがどんなことかはわかりませんが、のちにひょっとしたらと思うところがありました。入国審査の窓口は、他に中国人用が特別に設けてありました。それも意味深長なところですよ。なにせ、つい二・三日前、中国海軍が台湾海峡で軍事演習を行っていたのでしたから。それでも入国審査官の笑顔はほっとさせられました。

台湾到着の日は、ただ椅子に座っていただけなのに疲れてすぐに部屋にこもり、風呂を入れ、テレビを点けて横になりました。テレビは、NHKのBSがそのまま見られました。それにはほっとしたのですが、困ってトイレに行けません。空港からホテルに来るまでの途中で、こちらの添乗員にくれぐれも言われたことがありました。トイレに紙は流さないように！紙を流して配水管が詰まり、賠償させられたトラブルが過去にあったというのです。えっ？じゃあどうするの？トイレの中のゴミ箱に捨ててください。これが台湾の常識です。この話はこれぐらいにしておきます。そしてこの話の救いは、ホテルにトイレにウォッシュレットが完備していたことでした。これがなかったらトイレにも行けなかった。

空港で小銭を換金した時も驚きでした。Can I exchange small Japanese Yen into taiwan dollers? そういって二千円を出すと、若いお兄ちゃんが起こったような表情で書類を出して、サインしてといます。日本語で。ここにサインして。サインすべき場所と思しき所に、漢字で名前を書いて、Is it OK? というと、はあ？まさに怒ったように、はあ？ちょっとひるんで OK? と重ねると紙をひったくり、両替の台湾ドルを渡してきました。ざっと見て、適切なレートと判断できたので Thank you. と言って引き下がりました。台湾の人は聞き返すとき、聞き咎めるように強く言うのだとは知っていたので、何とか気持ちを持ちこたえられたのですが、知らなかったら気おされていたと思います。

実は台湾の観光で鮮明に覚えているのは、この辺りまで。行天宮、忠烈祠、故宮博物館、蒋介石を記念した中世記念堂とおもだったところは行きました。中華料理も一応のフルコースは食べました。牛肉麺も野菜麺も、そしてウーロン茶も飲んでそれなりに買いこみました。その見物コースの盛り沢山だったことは、日本のバス観光と同様で、あまり記憶に残らなかったのです。しかし、お土産物も観光旅行者として買いこむほどの物はなく、バスの窓から見る風景に、台湾はやはり貧しいのだと思ったのです。街の小さな店はベトナムほど汚くはないけど、まるでハーモニカの吹き口のように並んでいて、それでも人がいない。いても年寄りか中年のおばさん、男は中学生か少し上で、働き盛りの男がいない。そういった人を見たのは、あの忠烈祠の歩哨たちと夜市の売り子と遊び歩いているカンカン帽とサングラスの男の子とその二～三人のグループだけ。ガードマンと工事をしているのもヘルメットを着た老人。まるで日本といっしょでした。

中華料理は本場だから、きっとおいしいに違いないと期待でいっぱいでした。しかし、食習慣の違いまでは知らなかった。少なくとも台湾の人は、麺ならつゆまで飲み干すのです。ですから味はとっても薄い。日本のうどんやそばとは全く違って、味が無いほど薄い。それは食習慣のことですからもう言いますまい。しかし、食事の席で同行の人と話をしている、この人たちが皆仙台から来ていて、花巻空港の試験的に飛んでいる台湾への直行便で来たことを知りました。奇遇！あれ以来メールもしていない彼女たちに便りをするいいきっかけができたと思ったのは私だけではなかったようです。ホーチミンで出会った女の子たち、たぶん私たちを友人の一角に加えていてくれるだろう子たちにメールするいいきっかけができたと思ったのでした。仙台はどちら？花巻空港まで行くのと成田へ行くのでは大違いなんです、成田だったらそれだけで二万五千円かかっちゃう、そしたらそのお金でちょっとした国内旅行ができちゃうでしょう。そうですね、前回なんか私たちは関空から行ったんだけど、それだけで疲れました、朝は五時から起きて、朝食もコンビニのおにぎりで済ませて、空港には七時に行って、チェックインなんか慣れてなかったからどこでどうしたらいいかわからなくて、大きな空港の一階から四階へ行くのも分からなくてケースを引っ張ってうろうろ、しまいにはサービスカウンターで訊いて、それでもおろおろ、兄夫婦に見つけてもらってやっと手続きしたぐらいで、と妻のおしゃべりは止まりません。その横で、私はある仕掛けをしておいたことがやっここで生きてくるとほくそえんでいました。あのとき、義理の兄夫婦と話したことがあったんです。そんなタクラミがここで生きてくるはずと思ってました。

九份での観光は、ちょっと危険なおいが立ち込めていました。メインの道以外、横道には決して入らないようにとガイドさんに言われました。九份はNHKの二度目の台北を見ていたので、一応期待していました。干し大根の詰まった草餅があるはずと、細い坂道を人に押されながら登ります。曲がって横道に入らないようにまた登って、石畳を上がります。その店を見つける前にタピオカミルクティーを飲みたいと妻がいます。昔のかき氷屋さんのようなミルクティー屋さんを見つけ、そこで一杯ずつもらって、指をねばねばさせながら太いストローで飲んでみました。ああ、日本のローソンのタピオカミルクティの方がおいしい。声には出さず飲み終え、机に散らばりっぱなしのカップを全部片づけて、布きんがないか探して、なくて、トイレの手洗いのような水道で手を洗い、店を出ました。大きな白人も髭の口にストローを加えて歩いています。ゴミ箱がないのにどうするの？そして草餅の店を見つけました。テレビ

通りの赤い前掛けで元気そうなおばちゃんが声をかけてくれます。指を二本立て、二個頂戴というと黙って渡してくれました。Did Japanese TV come to take films in this shop? まさにブロークンイングリッシュです。だから通じなかった。人の好きそうな笑い顔で、困り切って店の他の人を目で追います。Oh、sorry!

I'm sorry! 困らせてごめんなさい、逃げ出して、ガイドさんに進められてた茶館を目指します。そこで仙台の人たちに合流して店に入ります。そこは宮崎駿の千と千尋の神隠しに出てきた湯婆婆の館のモデルとなったと台湾の人は信じて疑わない阿妹茶楼でありました。本当は夜景がすばらしいのだとガイドさんはいっていましたが、あいにくと昼日中で情緒には欠けていたかもしれません。しかし木造四階建ての外観は情緒溢れたものでした。

九份で横道に入り込むと神隠しに会う、とガイドさんは真剣な顔をして言います。そんな言い方で、治安の悪さを暗に言いたかったのかもしれませんが。途中から見上げると、小学校が坂の上にあるといいます。それでも治安は悪いのでしょうか。日本でもそんな時代はありました。その町に犬と猫がいました。犬は四十五年続いている映画館の前。猫は坂を下った雑貨店の入口に。九份の猫は有名なのだそうです。そんな写真を撮ることも計算のうちです。このあと、温泉街を散歩して、盛りだくさんの観光地巡りも終わりました。夕飯の後は何もすることがありません。しかし自然と考えることは一つ。台湾へ行ってきましたと、あの子たちにメールしてみようか。それだけで妻は分かりました。してみたら？といいます。

翌日、あとは帰るだけ。二時間あります。私と妻はチェックアウト後フロントに荷物をあずけ、朝の街に出ました。道を間違えちゃあいけないと妻が言いますので、ホテルを出て右に曲がり、あとはひたすらまっすぐに歩くと決め、そこで出会ったのが関帝廟でした。上へ上へと威容を誇る建て方で、柱は朱色の極彩色、屋根瓦に竜が置かれ、玉を掴んでいます。その指は三本。皇帝の着る服に刺繍された竜は指五本。寺格の高い廟の竜は指四本。その下ならば三本。関羽は金儲けの神様。大陸の人は自分の願いを込めて、関羽に祈ります。ビルや車が走り回るこの時代にげんをかつぎ、おまじないをして厄を払う、そのために熱心に祈る。奇異なのではありません。どこか違って、驚きの国なんです。

もう九時ごろですから、早朝とは違うと思います。横道の奥をみると、木立のある公園がビルの谷間にありました。そこへ行ってベンチにすわって、こうして街を見て歩いて、始めて台湾を見て回ったという気がしました。私たちがすわったベンチの並びのベンチに痩せたおばあちゃんが袋をもって座りました。彼の人はその袋から半袈裟、首からかけるから輪袈裟ともいいますが、それをかけ、何やら体操を始めます。こっちは見ては悪いとビルや曇った空を見上げておりました。すると、おばあちゃんは私たちの前を通り、反対側のベンチに行き、また体操をします。見ると、おばあちゃんの手をせなかに回して片方が上、片方が下の指を絡めて引っ張り合ってみせるではないですか。いま五十肩で肩関節の痛みを耐えている私には脅威でした。見ろよ、妻をつついてそっちを見るように促しました。へええ！ちょっと大きな声で驚嘆してみせます。おばあちゃんはたぶん自慢なんだと思ったからです。

あとは帰るだけ。昼間のフライトでした。疲れているのかいないのか、いや疲れてはいるけど、旅の途中でまだその疲れに気がつかないのか分からぬまま高松に降り立ち、見慣れた景色にもう何も思わず、私たちは家に帰りました。メールにどう書こう、書き出しは？書き出しさえ決まれば、あとは何とか書きつづれる、そう思っていたの帰りの道でした。そして、思いついたのが、台湾は驚きの国でした、というフレーズでした。今回の台湾行きの大きな収穫がこれです。台湾は驚きの国。

三日して、peopleに入れておいた二人のメールアドレスにメールをつづりました。

先月、25日から28日までの3泊4日で台北に行ってきました。その折、花巻空港からの直行便でお出でになった二組のご夫婦と一緒に、お二組とも仙台からと聞いてあなた方のことをおもいだしました。

台湾は驚きの国でした。てんこ盛りコースを選んでいたからでしょうか、観光景勝地ばかりでなく、故宮博物館、国父記念館、北投温泉街、夜市二か所、九份、十分をめぐり、昼日中であったにもかかわらずランタンまで上げて、全く目まぐるしい観光でした。足ツボマッサージや夜市の混沌と猥雑さの渦はホーチミンとは違った驚きでした。

もしかしたら、台湾はもう行ってるかもしれませんね。しかし、実は、驚きは旅の始まりから出現してきました。私たちは高松からの直行便だったのですが、飛行機に乗ってみると、約200の席で、日本人は私たちを含めて6人だけ。あと全部が台湾の人たち。人が私をみると、私の頭に上に？？？とクエスチョンマークが湧き出ているのが見えたと思います。四国の片田舎、高松からの直行便で、この人たち、どこへ行って帰るんだろう？見るとこなんてないだろうという？マークでした。ところが、帰りも同様だったんです。やはり日本人はツアー同行者の私たち6人だけ。今度は8割しか、席は埋まってなかったけれど、全部台湾人。行きも帰りも首をひねるばかりでした。

驚きは、まだあります。別に取り立ててそれらしく振舞っているわけでもないし、日本語でしゃべっているわけでもないのに、妻と私に、こんにちは、おいしいよ、と夜

市で声をかけられます。民族博物館でも、いらっしやいませと、これも日本語。故宮博物館でもわざわざ声をかけてくれて、これも日本語でありがとうございました。中国語を話せないから、店の店員に英語で訊いても、・・・ですかと、答えは日本語。ほかの周りへは中国語での会話なのに、です。なんでわかるの？そう思うのですが、実際は私たちでも分かっちゃうんですね。顔みりゃ分かります。日本人は日本の顔をしています。もし台湾へ行ってないなら、行ってごらん下さい。驚きますよ。それはホーチミンの比ではありません。九份の、横道に入ると帰れなくなる危険な混沌と、関帝廟で毎朝祈っている人たちの善良さが併存している、また、ベトナムほどにもゴミの散乱した街並みに、忠烈廟の塵一つない清潔さが並列して存在している、それが台湾でした。

メールなので大容量の画像は送れません。少しだけ送ります。少しでも楽しんでくれたら幸いです。それから、四国へは来ませんか？遊びに来るといいですね。遊びに来られないなら、お嫁に来ませんか？いやいや、これは半分冗談です。でも、ホーチミンでの写真に私たち夫婦と若い男、いや中年の男が写っていたのがあったと思います。実はこれ、愚息です。愚息は今もホーチミンで、会社から派遣され、CGデザイナーのデータセンターを設立し、順調に運用できるまで持っていくプロジェクトをやっており、私たちはその息子に会いにホーチミンへ行ったのでした。これじゃわからん！どこの馬の骨だ、と思いますよね。愚息はあのドラゴンクエストではサブチーフデザイナーで加わり、他のゲームではチーフをやっていたCGプロデューサーでした。しかし、正直に言いましょ、イチとなり、心労も加わってヘッドハンティングがあったことを幸いに、現在の会社に転職しました。ところがDeNAからまたヘッドハンティングの申し込みがあったのですが、その時はすでにホーチミンでのプロジェクトが動き出していたので断ったそうです。とまあ、本気で誘ってみてますが、そんなことしたらいかんよと妻はいいます。そんなことするのは犯罪よ、というのです。年が離れすぎてます。それにCGデザイナーの在り様として愚息はへんこつ、無愛想、わがまま、協調性がない、視野が狭い、常識がない、と悪いことばかりです。ですから、冗談と受け止めてください。本当に半分冗談です。でも残り半分は100%本気です。しかし、それもだめなら、アラフォーでイチで、ホーチミンからそのあと、カンボジア、もしくは台湾で何年か過ごしてもいいと言う人いませんか。残り少ない人生の終わりに、親は気を揉んで暮らしています。

まさに、個人情報の垂れ流しです。でもいいんです。このメールは届きませんでした。一度は、添付した写真の容量が大きくて送れなかった。そのことは後からのメールサーバーのエラーメッセージで分かりました。ところが写真のデータ量を縮小し、メールを二通に分けても、返事がない。連休中だからどこか海外に行っていて、メールチェックができないのだろうと受け止め、待ってました。ところが来ない。二人に送ったのですから、どちらかから返事があってもいいはずだとも思い返してました。それで、こっちの何か思いつかないミスがあったのかと考えました。ホーチミンから帰る機内で、義理の姉と妻が小声で話してました。いい子よね、わたし、話してみようかしら。そう言ったのは義理の姉でした。えっ、私もそう思ってたのよ。妻が返します。私は目をつぶったまま、サイゴン川遊覧の船内で、お父さんも行こ、とって私の袖を引っ張って船のデッキに連れ出した若いほうの子のことを思っていました。それから、食事の時、飲み物は別料金と、支払いのお金を真剣に数えていた年上の子の顔も思い出してました。若くて素直で、はつらつとしているという形容は、この子たちにこそふさわしいと思ってました。義理の姉の子も離婚し、イチでした。わたし、若い子の方が息子にはいいと思うのよ。あら、じゃあケンカしなくていいわ、家は上の子に目を付けてたから。連絡先、きいてるんでしょ。何かの折に四国へ遊びに来るように言って、わたし、その時、見合いさすわ。そうね、家は息子が早々帰れないから、ホーチミン旅行をプレゼントして、おこずかいもあげて、あっちには優秀なガイドを個人的につけてあげるから、行ってきてって言うわ。悪だくみは帰りの飛行機の中で出来上がったのでした。

しかし、悪だくみのメールは返事が返ってきませんでした。どちらからもです。考えてみれば、こちらはあの子たちにとって、どこかの誰かさんでしかないわけです。旅先ですれ違ったどこかの誰かさん。そんな人をうかうか信用するはずがない。今度は四国へ遊びに行こうかと思ってますと言ってきてましたが、それは単なる外交辞令。そりゃあ分かってました。でも、ちょっとは気を許すところもあったのじゃあないかと思ってました。

返事の来ないまま日が過ぎて、私は思いつくところがありました。彼女らはメールアドレスを変更したんだ。それが一番合理的な理由だと分かったのです。若くていい子で、なお一層賢い子たちです。ああ、そんなことまで気が付くのなら、余計に息子の嫁にほしい！あのバカ息子の嫁になって、バカを癒して直してほしい。こんな年に

なると、若い子を見ても、こんな風に考えてしまうのでした。あほの顔を見たかったら、親の貌を見てろ。親ばかちゃんりん、桶屋の風鈴。

バンビチャン、お嫁に来て！お願いだから。

十月の三十一日にベトナムから三泊四日、内一晚機中泊の旅から帰った数日後、正確には八日後、私は高野山へ出かけねばなりませんでした。善通寺は高野町と姉妹都市になっており、市の助成もって格安ツアーで行けるのです。このツアーの要は、持明院という宿坊での宿泊と精進料理、朝の勤行です。この旅は、朝早く、七時三十分に市役所集合から始まりました。同行者は役三十名、年齢的には、行くところが高野山ですから若い人がいるはずもなく、ほぼ定年を過ぎた高齢者ばかりと見受けられました。それもほとんどが女性です。コースはほぼわかっています。善通寺インターから高速に乗り、鳴門経由で淡路島、次の神戸湾岸線を走り、USJを見ながら和歌山に入って高野山へと向かいます。この経路はまさについこの間往復したばかりのところでした。今回はさすがに妻も、キャリーバッグを持っていこうとは言いませんでした。私は例の肩掛けバッグ、それと二人の着替えを入れた旅行バッグ、妻はスマホだの財布を入れたバッグを一つ。一泊の気楽な旅でした。それも、市の観光課から職員が二人、それにツアー会社のバスガイドさんと社員一人が同行していました。ですから、至れり着くせりの旅です。

善通寺の住民だけのツアーですから、バスも停まるどころといえばトイレタイムぐらいで、一直線に目的地に向かいます。ですから、快適そのものであったわけです。朝早く市役所に集まり、少し肌寒さを感じながらバスに乗り込みました。あとはあなた任せで済みます。もう何も案じることもありません。バスが高速に入ると、市の職員がお茶のペットボトルとお菓子を配り始めました。お菓子も袋一杯にいろいろ入ったものでした。そのうえ缶ビールも配ります。これであの料金？と考えてしまいます。市の助成金が出ています。ですから、これも税金？まあそれは問わないでおきましょう。こうして楽しませて貰っているのですから。つまり私も同じ穴の貉です。

旅程の説明がありました。堺市のどこかで昼食ですが、なんとたこ焼き懐石だということです。とにかくそこまで一気に走り、一時出発で高野山には三時前後に到着し、それから高野山をめぐる宿坊へ行き、精進料理を頂いて就眠、翌朝は六時半に朝のお勤め、次いで食事の後もう高野山を下ります。そして神戸の中華街へ行って見物と昼食、その後神戸港の遊覧と全く盛りだくさんな内容でありました。これが国内旅行です。ガイドさんが同行し、右へ行け、左へ行けと言われるままに行けば、何の煩いもありません。海外旅行とは大違いです。安全と言えは安全、万全と言っていいほど安全に配慮されています。これに慣れていけば、海外へは行けません。業務命令で海外勤務を言われて、しり込みする人が多いのも解ります。息子も、資料まとめてプレゼンしたのは俺だけど、なんで俺が行かないかんねんと言っていたのですから。

ガイドさんはおばちゃんでした。もっと若い子だったらよかったのにねえと自虐ギャグを言いながら、なんと高松道から案内をしてくれました。五色台を分けて風が吹き、高松が雪なら善通寺は雨か晴れ、善通寺はお大師さんが守ってくれているから台風が直撃してもたいしたことにはならなくてすみます、水が足りないこの讃岐平野で水飢饉のなかったのが善通寺、市営プールも高松砂漠の時でも井戸水を使って泳ぎ放題、と年の巧でしょうか、讃岐弁丸出しで豊富な知識を語ってくれます。屋島が見えれば源平合戦、義経が嵐を突いて四国にわたり、東讃の武士を説得して平家討伐に加わらせ、回線では負けるはずがないと沖に浮かんでのんびりしていた平家の不意を突いて壊滅的なダメージと与えたと言釈師並みの語り口でありました。その中でも那須与一はクライマックスですから、今はもう埋め立てられているから海の中ではないけれど、ちよどこのあたりに船を浮かべ、与一はここまで馬を乗り入れ、屋を放ったと言われているところがありますと、見てきたように嘘とはいいません、まさに女講談師でした。

瀬戸大橋も、もうすぐ開通三十周年、そして明石大橋はあの神戸震災の時、橋げたが一メートル動いたといいますし、湾岸線から関空近くになると、あべのハルカスはその建物、甲子園はその黒い壁のところ、USJに早やクリスマスツリーが見えます、関空はと、寝る暇なく案内してくれます。そしてたこ焼き懐石でした。

大阪には何回も行っているのですが、たこ焼き、お好み焼きを食したことがありませんでした。ですからひそかに期待しておりました。しかし、たこ焼き懐石、珍しかったとだけ言うておきます。

このお店から少しだけ高速に乗り、あとは次第に人里離れた山道を登っていきます。四国に生まれ、ましてやその中でも善通寺に生まれたのですから、高野山は一度は行ってみたい霊地でありました。奥の院では、今も大師様が瞑想しておられます。お大師さまが入定されたのは六一歳の時でした。考えてみると、今の私より年下でいらっしゃる。しかし、お大師さんといえは弘法大師様のことと、だれもが思っています。それほどであるのは、日本全国、遠くは中国までお大師さま伝説が残っているからではないでしょうか。先ほどの入定留身伝説もその一つです。ですから、今も高野山では六時と十時半の二回、お大師さまに食事を作ってお供えしています。生身供というように、今回は午後の参ったので、見られませんでした。

ほかにも我拝師山捨身嶽の伝説がありますが、これはまさに善通寺にこの伝説の地がありますので、ごく身近な話です。それから三鈷の松。これは、私たちが出向いた時たまたまその松を剪定していて、切った枝から松葉を取り放題に取って、持って帰りました。これを持っていると、お金が溜まるのだそうです。ですから、妻にとってはこの松葉が一番好評なお土産だったそうです。

空海さんは善通寺の生まれですから、その善通寺に住んでいるところは空海さんが遊んだところ、ここは空海さんが学問を学びに毎日通ってきたお寺といった由来の場所が今も説話とともに、あちこちに残っています。善通寺の正式な名前は五岳山善通寺で、この五岳山は善通寺の裏の五つの山の連なりを言います。香色山、筆の山、我拝師山、中山、火上山の五山を一応五岳山というのですが、これに加えて弥谷山、天霧山を加えたものを五岳山とも七岳山ともいうようです。この五岳山は空海さんの遊び場であつたらしく、弥谷山の奥深くある弥谷寺の叔父さんのもとへ毎日通って学問を教えて貰っていたそうです。だからでしょうか、このお寺の縁起に、我仏道を修行成すはこのお寺にて、と書いてあります。当時空海さんは七才でありましたから、まだ真魚の幼名でありました。姓は佐伯氏。この佐伯氏は都と天皇を警護する武力集団の一軍であつたと、司馬遼太郎氏は言っております。佐伯はサエギで、さえざるように騒がしく話す軍隊であつたと司馬氏は言います。ほかにも、佐伯氏は大和朝廷の日本統一に貢献した蝦夷の一群であつたとも言われており、大伴氏とそこから分かれた伴氏は大和朝廷の武力集団の中核であつたことは間違いないようです。それゆえ佐伯氏は広島をはじめ、富山、大分など全国に所領をいただき、いまも地名として残っています。そんななか、善通寺の佐伯直氏は播磨、伊予、讃岐、阿波の五か国の佐伯部の国造でありました。この佐伯直氏が佐伯氏で善通であり、真魚の父です。そういった事情で、地方出身の空海は大学に入れないとされたのですが、中央の一大有力者であつた叔父の推挙で大学寮には入ります。十八歳の折でした。

十八歳まで空海さんが都のボンボンのように、のほほんと過ごしていたわけではありませんでした。空海さんが十五歳までは阿刀大足という、お母さんの父親に論語、孝経、史伝、文章などを学んでおります。さてこの母方のお爺さん、阿刀大足って誰、ということになりますが、この人が大変な人で、桓武天皇の皇子、伊予親王様の家庭教師でありました。つまりは、鄙にはまれな大学者さまであったわけです。そして十八歳で大学寮に入ったのですが、都のボンボンに身分卑しい田舎者とあしらわれたようです。なぜそんなことが解るのかというと、彼が遣唐使の正規の留学僧として唐に渡る寸前まで、それもまさに入唐（にっとう）直前まで、一介の私度僧に過ぎなかったからです。それは、その時一緒に唐にわたった最澄さんと比べれば良く分かります。最澄さんはこの時すでに天皇の護持僧である内供奉十禅師の一人に任命されており、当時の仏教界に確固たる地位を築いておりました。空海さんはまったく無名の一沙門に過ぎなかったというのにです。それにしてもエリート中のエリートであった最澄さんが開いた比叡山が、あの平家の時代には、何故あかも墮落していたのでしょうか。信長の時代では酒池肉林であったとも言われております。その解答は、比叡山が皇族官僚の天下り先であったということだそうです。余計な話でした。

空海さんは我が善通寺のスーパースターですから、つい自慢たらしくなりましたが、これほどの人であれば自慢してもいいのではないかと自負しております。また仏教という壮大なテーマは、とても手に負えないものなので、せいぜい空海さんの自慢ぐらいにしておきます。それにしても、もとは恵果さんから法印を譲り受けた空海さんですが、中国にこの密教は残っているのでしょうか。どうも、そうではないらしいのです。当の恵果さん自体、空海が日本に去ればこの地の密教は滅びるであろうと言っていたらしいです。中国の西安市にも空海さんの縁で青龍寺に空海さんの記念碑があるようなのですが、この寺は何度も何度も焼失し、また廃仏の憂き目にも会い、いまは市によって仏教遺跡として再興されただけで、そこには日本からの寄贈による空海記念碑と恵果・空海記念堂の建つ歴史遺物になり果てているようです。いまの中国に歴史は期待してはいけません。いまの中国は毛沢東と中国共産党の歴史しかなく、そのなかであっても天安門と文化大革命は最悪の歴史として抹殺されて語られません。

唐突ですが、天皇の正統の証たる三種の神器のうち八尺瓊勾玉・草薙剣は我々国民もあの時、目にしています。おぼえておられませんか。平成天皇即位の時、玉座つまり高御座に天皇様がお立ちになった、その後ろの左右に錦に包まれた八尺瓊勾玉・草薙剣が置かれていました。私たちはこのように伝統と文化を守って残してきました。仏教もそうです。仏教発祥の地インドでなくなった仏教は、世界に伝播してゆくうちにさまざまにかわってゆくのですが、そのすべてがこの日本に集まり、深化し、洗練された形で受け継がれてのこっています。高御座さえ、そうです。世界中の文化文明の吹き溜まりに、さまざまの花が咲いています。と胸を張るのはどうかとは思いますが、残ってきていることは事実です。

天皇が退位されることから、とんだことを思い出してしまいました。ついでに申し上げると、八咫鏡は天皇陛下の手元にはありません。じゃ、三種の神器じゃないじゃないかと言われそうですが、それは神宮に祭られております。

高野山には他にも思い入れがありました。六月は青葉祭りの弘法ねぶた、七月はビルマ戦没者の慰霊祭が行われます。ビルマ戦没者慰霊塔はこっちの善通寺にもあり、同様に慰霊祭が行われていますが、もう知る人も少なくなり、何のためか、だんだん解らなくなっております。ご存知でしょうか。ビルマ戦没者慰霊塔、つまり、インパール作戦で犠牲になった人々を慰霊するための塔も建っています。日本側戦死者二万六千、戦病者三万という戦いでした。あまりにも無残な戦いでありました。そして撤退戦は餓死、戦傷病での犠牲、マラリアと地獄の様相でありました。あえてカニバリズムとだけ書いておきましょう。そんなこともあったのでした。牟田口廉也は一九六六年、昭和四一年まで生きておりました。誰？と言われそうですが、盧溝橋事件を起こし、インパール作戦を立案、直接指揮した陸軍中將です。そんな男が昭和三十三年にまだ、インパール作戦はどうしてもやらなければならなかった作戦だったと、言い放っております。そしてそのあとまで、生き延びていたのです。やはり、司馬氏の言う通り、終戦までの昭和は狂った時代でした。

最近、明治維新って、本当にひつようだったの？あれは幕府を倒すための言い訳だったんじゃないのと思うようになりました。それは、薩摩と長州が作った明治以降の日本が、あまりに異常だったからです。大久保利通が暗殺された後を任されたのが伊藤博文と山形有朋でした。天皇の神格化をもって日本をまとめようと画策したのが彼らでした。ですから、坂本龍馬の船中八策は邪魔でしかなかった。それゆえ彼らは坂本龍馬を明治維新の表舞台から抹殺したのでした。暴走ついでに、これは不確かなことですが、国民という言葉は初めて使ったのが、坂本龍馬であったようです。もっとも、それも勝海舟の受け売りであったようなんですが。これについては、のちにまた再考したいと思っております。ごまめの歯ぎしりに書き加えます。

高野山への旅と言いながら、実際高野山を歩いたのは午後三時過ぎから六時前まででした。そしてその大半が中門から金剛峯寺、それから奥の院への墓石群の中の参道を歩いておりました。これはこれで意義深い宗教体験かもしれないのですが、たとえ織田信長のお墓を見せられても、通り一遍の説明を聞く限りでは、うなづくぐらいのことしか感慨はおこりません。金剛峰寺の中のお部屋を見ても同様、奥の院のお大師さんのごびょうの前に立っても、こちらの信心が足りないせいか、同じことでした。罰当たりなことです。しかし、奥の院の中で、金のしおりを見せられ、期間限定のお守りです。一枚一万円といわれると、ああお寺さんは高野山といえども困ってらっしゃるのだなあと思うばかりでした。比叡山もそうでした。いたるところで拝観料を取られ、見るのは庭であったり、襖絵であったり。こうも観光化していますと、もう一度とは思いません。

かつて、仏教のみならず、宗教自身が問われることがありました。あの二つの震災の時でした。神戸の阪神大震災の折も、東北大震災も、宗教人が何かしたというのを聞いたことがありましたでしょうか。そのことを責めて、宗教界に批判が集まったそうです。しかし、これは一部誤解があったことだと思っています。善通寺は自衛隊の町ですから、自衛隊の災害派遣のトラックが、それと分かるように横断幕をつけて走っておりました。私も、そのトラックが通り過ぎるとき、おばあさんが深々と頭を下げるのを見ました。手を振る人もおりました。今も九州へ災害派遣のトラックが走っております。しかし、お坊さんは法衣を着てはボランティア活動はしておりませんでした。そして宗教団体自身が、人心の乱れたときに漬け込むように思われないようにと配慮して、一般人として活動していたようです。また報道も宗教を後押しするようなことはしないように、報道しなかったのです。逆にたくさんの方が亡くなったので、葬儀に僧侶がてんてこ舞いだと批判的な、皮肉交じりの報道さえあったのです。私は善通寺からそっと三十人ほどの坊主頭の人たちが、バスで出かけて行ったことも知っています。そんなことが頭にあっても、金のしおりは世俗的だと思っています。薬師寺さんは大好きなんですけどね。

とにかく、高野山の観光は二時間半ほどで、駆け足もいいところでした。そんななか、ほっとしたのは先ほどの古いお土産屋さんでの買い物でした。それも三十分ほどと時間が限られて、大して吟味する暇もなく、慌ただしい買い物でした。しかし、妻と二人で少量のみやげを買って満足でした。

宿坊の持明院に着くと、まだ日が残っていました。その黄昏時、緩やかに上った坂の向こうに木々が高く伸びあがり、濃い緑と闇が溶け合っていました。山門をくぐると、左に塔院らしからぬ硝子戸の建物が広がり、飛び石沿いに玄関へと向かいます。書院造の高野山有数の宿坊です。堂宇に十棟余りの建物を擁し、お寺なのに寺院とは趣きをことにした雰囲気です。式台を踏んで玄関をあがると大広間を通り、そこで夕食と聞きました。ここで精進料理をいただくことになります。期待大でありました。善通寺では予約すると、宿坊のいろは会館で、この精進料理がいただけます。しかし、地元でわざわざという気がして、お願いしたことはありません。

ツアーの人たちがそろくと、食事となりました。すると、三人の修行僧がそれぞれの前に膳を運び始めます。三十数人ですから大変だと思っている暇なく、あっという間に整いました。この手際の良さは驚きでした。二の膳も付くのです。しかし、実は何をどう食べたのか、覚えていません。胡麻豆腐と湯葉の入った小鍋があったと思います。これは日本旅館の普通の夕食の形と同じです。逆に、旅館がこの形を見習ったということでしょうか。見慣れた、生臭物のない夕御前でした。

それにしても、寒い。外界とはガラス戸一枚でしか隔てられていません。部屋はこのガラスの引き戸と廊下が間にあって、障子戸を引いて区切るだけ。廊下だって外気のふきっさらしと同じ風が吹いています。食事が終わると割り当てられた部屋に大急ぎで入り込んだのですが、隣室とはこれもふすま一枚で隔てるだけで、ひそひそ声も聞こえてきます。暖房器具は小型のファンヒーターと小さなこたつ。布団はもう引かれていました。風呂が案内されていたので、行くことにためらうほど寒かったのですが、好奇心の方が勝っていましたので、ペタペタとスリッパを鳴らして行きました。廊下にはもう人影が見えません。途中の部屋から、大勢の外国人の話し声が聞こえました。彼らはこの持明院に日本の宗教体験を求めてきたのでしょうか。期待通りだといいいのですが。

風呂はさほど大きくなく、そう特別な作りとは思いませんでしたが、本当はさにあらず。浴槽も壁も木の板張りでありました。それもついこの前作ったのかと思うほど清潔に見えました。これが高野檜です。高野檜は木肌も美しく、水にも強く、汚れも付きにくいのです。これは期待通りでした。風呂は私が一番乗りで、他に人はいませんでした。体を大急ぎで洗い、湯船にゆったりつかります。そこへツアーの人が入ってきました。その時はもう十分ぬくもっていたので、ちょっと挨拶をして、私は出ました。しずくをぬぐい、服を半分着終わったころ、若い白人の男性が入ってきました。なにか気まずそうにしています。

Good evening.

と、ちょっとした蛮勇をふるって話しかけると、彼が急に打ち解けた表情になりました。

とても若い。しかしがっしりした背の高い若者でした。私がたった一言、

Good evening.

と話しかけただけで、なにかほっとしたような表情が見えました。それがなぜだか、解る気がしてました。彼らは日本に来ると、孤独にさせられます。道さえ訊いても教えてくれない。日常の会話など、どんな些細なことでも日本人と話せない。たぶん、この土地はこんなものがおいしいとか、これが名物だと会話したいのじゃないかと思ってました。それにしても、私もほんとは逃げ出したかった。英語は苦手で、外人と話したことなど一度もないのです。それでもちっぽけな蛮勇を振り起し、

It's cold today. Are you ok ?

と尝试してみました。すると、

Yes, very cold today. But, I am used to cold weather.

そうですか。Where were you from ?

I'm from Germany.

と言った気がしました。そう聞き取ったということです。

Thank you very much for your coming all the way.

これは決まり文句で、覚えてました。

There is someone in the bath room.

Can I take a bath with him?

と言ったとおもいます。

Yes.

There is no problem with you taking a bath with him.

これでいいのかなあと、受験英語を駆使して英作文を組み立て、くぐもり声で答えました。通じたみたい。

Have a good time!

これは間違っていたみたい。とにかく、私はタオルで顔をぬぐい、にっこりすると、若者も服を脱ぎ始め、私が次に振り返ったときは浴室の戸を開け、そっと湯船に足をいれ、次には浴槽一杯に手足をのぼして、その真ん中で大の字になって浮かんでました。

部屋に帰ると、妻はまだ帰っていませんでした。長風呂のようです。お隣の話し声が聞こえます。とにかく湯冷めしたくなくて、こたつに足を入れ、ファンヒーターをつけて待ってました。布団に電気毛布はありません。早くも背中に冷気が忍び寄ってき

ます。私は一計を案じました。

夜はとにかく寒かったのです。障子を隔てた廊下は外気と同じ状態です。これと同じことを私は経験しています。湯布院の古民家を移築した宿で、寒さに耐えながら泊まりました。よく古民家暮らしがテレビで取り上げられていますが、これが現実なら、古民家暮らしは私には無理と震えていました。高野さんは紅葉も終わろうとしている季節ですから、無理はありません。高野山大学の学生は毎月一回水垢離を、どんな季節でも行っているそうですから、大変な修行とご同情します。凡愚のこの身は、震えています。

一考を案じました。炬燵がないなら、檜炬燵に布団を押し込んで、足を突っ込んで寝られるようにしようと考えたのです。一組を炬燵のこっちに、もう一組をそれに直角に敷いて、と移動させました。それが終わったときに妻が風呂から上がってきました。二人で顔を見合わせ、にんまり笑って、やっと寝られたのでした。

夜も更けて、携帯を見ると二時でした。真夜中、廊下にさまよい出てトイレに向かいました。おなかのあたりに切れ込む寒さでした。アルミサッシのドアを開けてトイレのゴムスリッパをつっかけ、なお襲ってくる寒さに耐えました。部屋に帰ると、もぐりこんだ布団が早や冷たくなって、足元の檜炬燵のぬくもりだけが焼け付くようで、不快な熱さでありましたがそれに救われ、やっと寝付けました。

五時過ぎであったとおもいます。隣室の障子戸が開いたようです。そして、ガタンと人が足を踏み外した音がしました。いや、それが足を踏み外したと分かったのは、そのあとの、おとうさん、どうしたん？という奥様の声の後、足を踏み外したと返事してたからでした。しかしその出来事で、私と妻は目を覚ましてしまいました。それはそれで良かったのです。どうせ六時半には朝の勤行に向かわなければなりません。お隣に憚って五時半を待ち、ファンヒーターを点け、部屋のぬくものを待って二人して起き上がり、黙って服を着て朝の用意を済ませました。

六時です。朝のお勤めは六時半からです。ところが六時一五分に廊下に出ると、もう遅かったのです。廊下の向こうにたくさんの人が並んでぞろぞろ向かってました。どっちに行けばいいかわかりませんが、その人たちの後ろのついて行きました。ところがそのわたしたちのうしろに、でかい、ひげもじゃの外人が並び、低い声でなんかしゃべっています。見ないふりして妻と前についてお堂に入りました。

朝の勤行といっても、何がどうと知らないのですが、真言宗は第一に木魚は叩きません。お堂の暗やみに入り込んで、他の人にぶつからないように座ることからして大変でした。妻は膝が痛いので、お堂の後方に用意されていた椅子に腰かけるように勧めました。灯りといえばご本尊の前に灯されたろうそくのみです。そのほのあかりのみを頼りに私も用意してくれていた座布団に座りました。そんななか、銅鑼がなります。妙鉢と磬子が響き、ご住職が本座について脇の僧侶が読経を始めます。無学ですので、どのお経を読まれているのか解らないのですが、ご住職は袖に隠して印を結び、おりんを叩いて秘儀を行っています。そのうち、ご順にお焼香をお願いしますと声がかかりました。これには日本人だって戸惑います。横で、作法を心得てないよって言ってる声が小さく聞こえます。そんなときになって、横でもじもじしている外人さんに気が付きました。私より体格にいい、金髪を後ろに束ねた、体育館座りをした外国人の女性でした。その横にも髭の男の人もいます。プロレスラーかといいたいほどの大きな若い人でした。昨日のお風呂で出会った人かもしれません。その彼らが、本当にもじもじして困っています。私の頭の中で、

Shall we dance?

というフレーズが浮かんでました。

つまり、ここでまたしても私の中にお節介とサービス精神、それと恥を忘れた蛮勇が湧いて出たというわけです。

Shall we dance?

というフレーズは、二人で踊りませんかといったニュアンスだと思い、それに似た言い方をすれば伝わるのじゃないかと思い込んだのでした。

Shall we go to the Osyoukou?

こんな風に言い換えてみたのですが、私の頭の中では???飛び回っていました。それに、実際、お焼香の仕方をどう伝えたらいいのかもわかりません。だいたい、私自身が仏様の前でのお焼香の仕方をこころえてないのですから説明もないもんです。しかし、先の人がお焼香を始めるのを見ても、そのやり方はまちまちでした。いきなり抹香をつまみ、ぱらっと撒くようにする人もいて、それはないだろうと思ったりします。抹香をつまんで、丁寧に額に頂いて焚くやり方、それも二回の人、三回の人と、これも自分流のようです。暗がりの中で横を見ると、体育館座りの二人が顔を寄せ合って、何か相談しているようです。

Excuse me.

と声をかけてしまいました。もう、何とかなるだろうとしか思っていませんでした。

Do you go with me?

言っちゃいました。ぱっとこちらを向いた顔が、即座に二度三度うなずきました。

OKey. I'll give you a signal. And then go .

通じたみたい。向こうはうなずきます。それから様子を見てると、しだいに順番が回ってきて、いよいよということになりました。ここで、

Shall we dance?

の出番です。

Shall we go ?

というと、ふたりが私の後を付いてきて、三人連れになりました。ご本尊様の前に来ると、女性の方が早速抹香を取ろうとします。一言英会話が出てきました。

Don't need to rush. First of all,bow.

といって、お辞儀をしました。彼らもお辞儀をします。

The next ,

といって、抹香を取り、香炉に撒きます。すると、二人が続きます。

Once more.

And pray.

手を合わせ、祈って見せます。そして、

Okey Finished.

Go back to our seat.

今度は男の人から帰ります。

席に帰ってからは、お焼香もすぐ終わり、私が妻を待っていたせいで遅れてしまい、彼らと話もできませんでした。廊下に帰ると、ツアーの人はこの足で朝食になりますという指示もあったからです。妻と私は広間に向かいました。

Have a nice and safe trip.

とってあげたかったのですが。だから、八八カ所巡りの外国の人に会えば、そういうことにしています。

高野山への旅はもう帰ることになりました。持明院を出発したのは八時頃でした。バスの荷物入れは、ツアーの人たちのお土産でいっぱいになりました。しかしもう帰るだけでよかったのに、これからまだ神戸の中華街により、昼食に中華のフルコースを食べなくちゃなりません。そのあと神戸港の周遊が一時間半。その神戸まで、昨日走った山道と高速道路を帰るわけです。実際、中華街につくのに、三時間かかりました。神戸湾岸線は複雑に絡み、細くて走りにくいこと、この上ありません。そのうえ、寒くて寝られなくて、疲れ気味と来ています。バスが走っている間、時折意識が飛んでおりました。

それにしても、私たちはそんなこと、日常のありきたりのこととして、何の注意も払っていないことがあると気づきました。私たちは仏さまの前に立つと、南無阿弥陀仏とか唱えます。くわばらくわばらと唱える代わりに、ナンマイダーとか言うかもしれません。南無妙法蓮華経、南無帰依法、南無釈迦牟尼仏というものもあるみたいです。これらを称名念仏とか、お題目といいます。南無観世音菩薩というものもありました。これらは宗派によって、当然違います。しかしこのほとんどが仏様の名前であったり、お経の名前です。ところが、ちょっと異質な称名念仏があります。南無大師遍照金剛と、真言宗は唱えます。遍照金剛はお大師さまのなまえです。ご本尊さまに帰依するというのではなく、人であるお大師さまに帰依すると真言宗は唱えるのです。お釈迦さまも人ではありますが、仏教の開祖さまですから、これはちょっと別格です。それ以外では、真言宗の南無大師遍照金剛と人である弘法大師さまの名を唱える称名念仏は、やはり異質だと言えます。

では密教というのは何でしょうか。密というのですから、秘密のこと、という意味だと思って構わないのだと思います。

たぶん日本一有名な仏教僧である弘法大師さまは、ある一面では超能力者のようです。弘法伝説がそれを示しています。お大師さんが杖をトントンとつくと、水が湧き出て枯れることがなかったとか、温泉が湧いた、といったお話は数知れません。八八か所を巡っても、いたるところで出会います。そんな神秘的な超能力を真言宗は、加持祈禱することで発揮しようとしています。そんな光景が密教の所以とされていてしまいそうですが、超能力を引き出す秘密の技法を密というわけではないのです。

それにしても、だいたい真言というのがわからない。いちばん有名な真言は、おん あぼきや べいろしゃのう まかぼだら まにはんどま じんばら はらはりたや うん という光明真言であろうと思いますが、調べてみないと何のことかわからない。これは、ウィキペディアによれば、

オン。不空なるヴァイローチャナよ。大印を有する者よ。宝珠よ。蓮華よ。光明を放ち給え。フーン。

といったことだそうです。まるでハリーポッターの魔法の呪文のようです。さら他の真言を上げて、真言自体はよくわからないわけですが、日本語に直すと、ああ如来様とか、ああお不動様という内容で、決して難解なことではありません。

アクシオ

アグアメンテ

と並べると、これなあに？と思われるかもしれませんが、これこそハリーポッターの魔法の呪文です。アクシオは、来いという命令ですし、ルーモスは光よといった呪文です。そして、これらは単にラテン語だということではありません。真言は、今自分が拝している仏様にむかってのサンスクリット語での呼びかけです。ああ如来さま、あなたに帰依いたします。そう呼びかけます。このように、呪文も真言もラテン語か、サンスクリット語かの違いほどでしかないのです。ですから、加持祈禱とか真言に、秘密の力があるわけではありません。そして、密教の密は、こんな下世話な意味ではないのです。

密教と対比する概念は顕教ではありますが、顕教は言葉をもって解いて教えることをもっぱらとします。密教は一人一人が瞑想をもって、仏の秘めた世界を体感し、それによって仏の秘密を知るところを解いた宗教です。密とは、仏の秘密のことです。その象徴が、曼荼羅絵図です。

仏教とかに限らず、宗教は昔から人々の心に深く入り込んだ、下意識のものです。しかし、これも解釈が多々あるようですが、ニーチェが神を殺して、人間は孤独にな

った、という哲学者もありました。いや、超越的価値として固定されてきたものが否定されたのであり、人間が人として自立して生きることを解いたものだという人もいます。しかし、人はそれ以来さまよっているように思えます。いま日本人の最大関心事は、健康と健康についての最新情報にあるようです。しかし、世界はいまだ宗教戦争があります。それについても、結局は資本主義の進展の中で、個の自由という命題を追及することが是であるとする上部構造が出来上がってくる過程に見えます。

高野山への旅は、高野山を出発した後もいろいろなことが見えてきました。いざ高野山へはこれで終わりとして、また考えてみたいと思っています。ロヒンギャの人たちが追われて、バングラデッシュの雨季の地べたで出産しなければならなかったこととか、ミャンマーの軍隊に殺された人人の六割が女の人と子供であったこと、そして、ミャンマーの軍隊は仏教徒であること、そして耳を疑いたくなる言葉、民族浄化、世界は私たちの見ていないところで、まだこんなことが起こっているのです。

私の認識不足、勉強不足でした。ネパールという国名は知っていてもどこにあるのかを知らませんでした。ネパールはインドの上、中国の下にある長方形の国で、その国土のほとんどがエベレストを含むヒマラヤ山脈からなる山岳に覆われた国です。こんなことを知らないのは私ぐらいで、チョモランマを擁するヒマラヤ山脈の高地にある天空の国でありました。ですから、ネパール人にとって富士山は丘ぐらいのものでしかありません。可愛いね、きれいだけど小さいねと言った感想が、彼らの見た富士山です。大体彼らが普通に住む村さえ、富士山より高いところにあるのですから無理はない。

しかし、ネパールは神秘の国です。産業もほとんどなく、エベレストへ登る人たちの登山の補助と、観光だけで成り立っている多民族多宗教の、それでいて争いのない、逆に言えば、うらやましいほど平和な国です。それだからか、世界からも忘れられている国でもあります。そしてネパールは大変な親日国でもあります。貧しい国であることは不幸なことかもしれません。しかし、まずしいから心平穏で平和な日々を送っている国でもあるのです。まるで資本主義国家のアンチテーゼの見本かもしれません。

多宗教であれば争いがあると思うのが当然です。同じイスラム教で殺しあうのを見えます。自爆テロ、IS、宗教戦争。仏教徒は心優しいと思ってました。しかしミャンマーはどうでしょう。ロヒンギャ虐殺は民族浄化だとさえ言われています。スーチー女史も口をつぐむ実情です。民主化は三マンマー人だけの民主化なのか。その前に、命はどこへ行った。誰の命もすべて守られなければならないとおもうのですが。

ですから、余計にネパールを見てみたい。クマリの館に行き、生神様を拝してみたい。女神がそこにおられます。そして宗教がどれほど異なっても、皆がクマリを拝します。国王さえクマリの前ではひざを折り、拝して祝福を受けます。外国人も例外ではありません。拝観料を支払えば、クマリの館の前の広場で顔を見ることが出来ます。しかし、クマリが何か言葉をしゃべって、人々を祝福するかというとそうではありません。彼女の一挙手一投足が予言なのです。ご供物をとって食すれば財を失うという予言であり、叫んだり大声で笑えば差し迫った死、身震いは投獄の予言と、さまざまに予言します。しかし、クマリは言葉も発せず、表情も変えません。あのネパール大地震の時もクマリの館からは出ることなく、それがネパール人の人心を安んじたそうです。しかし、これは当代のことで、何代か前のクマリは歩いて非難し、クマリをやめることになったそうです。

初潮をむかえる前の少女を生き神さまとするのは奇妙でしょうか。乳歯が抜け落ちたり初潮をむかえると神ではなくなったとされ、クマリだった小女は普通の女の子にかえり、実家に帰されます。そして新たに三十二もの条件に適合した少女が捜され、星占いに基づいてまた女神となります。

女神？神には性別があり、男の神は男神です。しかし、最高神が女神なのは、大変稀です。ちなみに仏には性別はありません。胸の膨らんだ仏像はないのです。じゃ、七福神はどうなんだといわれそうですが、お寺に大黒天など祭られていて、弁財天は確かに女性です。しかし、これは後世のことで、それぞれに宗教的背景が違います。ですから、神社にも七福神は祭られていたりします。辨天さまは大変ふくよかであらせられます。

しかし、女神さまが最高神であることが稀な国の一つが日本です。天照大神さまは女神さまです。ところが天照大神さまは、最初は男だったとはご存知でしたか。

天照大神さまは女神であるとされ、今はなにも疑念が持たれません。しかし、異説ではありますが、天照大神さまは当初、男神であったと言われております。この説を主張するのに、日本書紀は持統天皇を即位させるために改ざんされ、天照大神も女であったから女も皇位に付いてもいいのだと正当づけたといえます。さらに古事記の記述のあちこちに男でなければ整合性を持たないところがあるというのです。例えば、伊勢神宮も遷宮のおり、ちょっとはばかれるような秘儀が行われているとか。また、天照大神さまを慰めようと後から立てられた外宮の豊受大明神は見目麗しい女神さまであります。

また、古事記・日本書紀とは別系統の古史古伝に秀真伝（ホツマツタエ）というのがあるそうで、この史料では天照大神は男性だといえます。さらにはアメノウズメが岩戸の前に桶を伏せて踏み鳴らし、神憑りして胸をさらけ出して、裳の紐を陰部までおし下げて踊ります。論者は、天照大神さまがこんな光景に誘われるのは男であるからだともいいます。古事記って、ちょっと卑猥なところがたくさんあるようです。

要は、日本書紀がうさん臭いということです。今も男系男子を貫いている皇統ですが、女系を認めさせるために改ざんされたとも主張します。神話をつづった記紀が、実は皇統の正当性を裏付けるものだったというのです。天照大神さまは女性であったでいいじゃありませんか。スサノオノミコトは姉様の天照大神さまの会いに行かれたのですから。

しかし、こうしたことを考えると、天照大神さまの逸話の以前に、女神はどうして誕生したかという疑問が起こります。日本神話にはイザナギ・イザナミ神話の始まりから女神さまがいらっしゃいます。ですから、あまりこういう疑問は浮かびませんでした。ところが、このイザナギ・イザナミ神話に答えがあるようです。神に代わって命を生み出すのは女性です。神話ですからイザナギも多くの神を生み出しますが、やはりイザナミほどではありません。神に代わって命を産む、これが女神さまが拝されるようになった理由のようです。そういえば、山の神も女神様です。山から様々な食料を得ていた古代人は、木々が成長し、実を結ぶのは女神の為す業と思ったのでしょう。この山の神が下に降りてきて田の神になります。時代が進み、米を作るようなことになって、こうした変化もあったようにうかがわれます。

ヒンズー教は知りません。仏教徒キリスト教は共に、釈迦もキリストも、偶像を作って崇めてはならない、教会とか寺を作って礼拝してはならないと言われました。キリスト教は聖書にそう記されています。お釈迦さまの場合は、はっきりとそう記されて残っているわけではなさそうですが、大涅槃経に、なんじらは、ここに自からを燈明とし、自らを依所として、他人を依所とせず、法を燈明とし、法を依所として、他を依所とせずして住するがよい

と、教えたとあり、これは自灯明、法灯明という仏教の大命題であるそうで、反対の言い方をして間接的に偶像崇拝を否定したと言われるようになったのだとか。お釈迦さまは、偶像に依ってもその像に何か力があるわけではないよ、自分をよりどころにきなさいねと入滅前に説かれたのです。それでも人は弱いもので、主キリストとお釈迦さまの意に反して、目の前にお釈迦様の姿を追えるように願い、キリストさまの最後のお姿を見て敬虔な気持ちになってお祈りできることを願ったのでした。

しかしどうして神は人の形をしているのでしょうか。キリストさまもお釈迦さまも人だったから？キリスト教は純粹一神教ですから、神さまはキリストさまのみですが、それでも天にましますわれらが父よとイエス様がつぶやかれたときの父は天におられるわけで、この父上様のお姿はどうなんでしょう。髪をかきむしる思いです。人は仏教だのキリスト小だのが誕生する以前から神を求め、救われたいと望んできました。仏教以前から存在したヒンズー教は多神教ですから無数と言っていいほど偶像は存在し、それも人の姿をしています。仏教もその流れの影響からか、お釈迦様以外の仏さまがいて、使徒も多数あって、あの阿修羅も十二神将も天邪鬼さえ人の姿をしています。しかし、私はあの東大寺三月堂本尊の不空羂索観音さまの前に立つと、何時間でも見ていたいと思ってしまいます。これは言わば偉大な芸術への畏怖といったものかもしれませんが、偶像崇拝でもいいじゃありませんか。日本人はこれを千三百年まえから拝んできたのですから。

クマリはネパールの生き神様であると知って、さらにそれが初潮をむかえる前の少女であることを知り、ひどく興味を持って調べてみました。その最中にネパールには死を待つ人の館があることも知りました。これを現代風に言うのならホスピスとかターミナルケアとかになるのですが、いったん英語に直せばオブラートに包んだようになって現実味が薄れます。しかしカトマンズの死を待つ人の館はまさに現実。薄汚れた塗り壁の狭い部屋に、余命いくばくもない人が運び込まれ、この館に来ることができて幸せといます。彼らがここへ来ることは、願ってもないことなのです。ですからこの部屋が空けば、すぐ次の人がやってきます。

クマリの館のある場所はカトマンズの中心の王宮広場。しかし、この死を待つ人の館は町はずれの川のほとり。世界遺産のひとつ、パシュパティナート寺院のなかにあります。カトマンズは日本と同様に火葬にするのですが、人が亡くなれば、用意できるとすぐに火葬にされます。闇に炎が幾箇所からもあがって、何もかもを焼き尽くすのが分かります。そして一時間ほどののち、燃え落ちて崩れた火葬の火を、そのままバグマティー川に落とします。なかにはお骨になれなかった黒こげの腕や脚がそのまま落ちてゆきます。人々は、これですべての罪が浄化され、天国へ行けると喜んでいきます。

夜になるとバジャンが始まります。単純なメロディに鉦と太鼓が加わり、人々が声を上げて共に唱和し、神に身をささげると歌います。それが終わって僧侶からマリーゴールドの花びらをもらい、これをバグマティー川に流します。ネパールの人はこのような人生の終わり方を願ってやみません。死はいつもそこにあり、死は終わりであって悲しむものでありますが、天国へ旅立つ祝福すべきことでもあると、彼らは思っています。

生き神様、クマリという少女の女神さまは国を守り、人々の願いをかなえ、病気を治します。国王さえひざまずき、祝福を願います。国難に当たっては、クマリの予言を訊きに來ます。ネパールは、今はもう王政ではなくなっていますが、象徴王政は残っていて、王位も継承されています。その王が、今もなお新年には車から降りて、クマリの元へ歩いて参ります。そして、死も現実として日常のなかに存在し続けています。ネパールは不思議な神秘にみちあふれた国です。

それをニュースとして放送したのは、NHKだけでした。

天皇皇后両陛下が、今年（2017年）3月にベトナムを公式訪問された際に、両陛下と面会した人々。

太平洋戦争の後もベトナムにとどまった旧日本軍の兵士『残留日本兵』の妻や子どもたちです。

この『残留日本兵』は、当時、数百人いたとみられ、軍事訓練などを通じて、ベトナムの独立運動に力を貸していました。

その残留日本兵の家族の1人が、父親の思い出を追って来日しました。

(放送時のアナウンサーのコメントを引用)

ベトナムの残留日本兵？戦争が終わって、もう何年たっているのか、そんな思いで聞いた言葉でした。戦後間もなくなら、その戦争を、太平洋戦争と呼んだり大東亜戦争ともいいました。それを今では第二次世界大戦というのが一般的になり、大東亜戦争太平洋戦争は死語になり果てました。しかし、この大東亜という言葉がまだ生きていた終戦に、ベトナムでは約600名の日本兵が、日本の敗戦に納得せず、帰還しませんでした。これが残留日本兵といわれることになった人たちです。この人たちは、例えばこの大東亜という理想を持ち続けていた人たちであり、また、故国に帰れば戦犯として罰せられるかもしれないと危ぶんだひとたちもおりました。たぶんいろいろな事情を抱え、理想も抱き、帰るに帰れないしがらみを抱え込んでいた人もいた、様々な思いの人たちと察せられます。その残留日本兵をベトナム独立のためにと誘った人がいました。ホーチミン氏です。ベトナム戦争終結後の今のベトナムでもやはり南北対立は残っているようで、ホーチミン市内の人は、あからさまには言いませんが、ホーチミン爺さんはベトナム戦争に勝って神様になったといえます。そして南北格差があり、南の税金をみんな北が取り上げる、と不満をいいます。そして今でもホーチミン市とは言いたがらず、サイゴン市と名乗ります。試しにネットでサイゴンホテルと入力してみてください。ホテル サイゴンとかシェラトン サイゴンホテル、ホテルニッコー サイゴンホテル、とサイゴンの名を残したホテル群の名前が列記されます。たぶんそれが一流の名の証だと今も思っているようです。

残留日本兵の運命は、当時の複雑怪奇な政治情勢に翻弄されます。日本敗戦の日から

、その国際情勢とベトナム独立の機運の対立が表立ち、それでもフランスはもう一度ベトナムを支配しようと目論みます。それを面白く思わなかった米国と、フランスと対立していた英国の思惑が絡み、動きの取れなくなります。その各国のすきをついて、ホーチミン氏がベトナム共和国の独立を宣言します。それに対してフランスはなりふり構わず、武力介入をしてきます。このインドシナ支配を再びもくろむフランス軍に対して、ホーチミンは日本軍の兵器の譲渡を求め、残留日本軍将兵らにベトナム人指揮官の養成を願い出ます。こうしてできたのが、ベトナム中部クアンガイの、グエン・ソン将軍を校長とする指揮官養成のための「クアンガイ陸軍中学でした。この学校の教官と助教官は、全員日本陸軍の将校と下士官で、いわばベトナム初の士官学校でした。こうした最中戦われた第1次インドシナ戦争ではフランス軍との戦闘で、これはあまり知られてはいませんが、多くの日本人が戦死しています。残留日本兵の半数以上、約360名といわれています。そしてなお、中には、その後のベトナム戦争でアメリカ軍と戦った者もいたとみられています。

第一次インドシナ戦争の最大の山場はディエンビエンフーの戦いでありました。この戦いにフランスは二万人の兵士を投入し、これに対するベトミン軍は十万人以上の人員をもって対峙したのです。これを見てもどちらが勝利するかは明らかでした。地の利を得ているベトミン軍はすでにフランス軍より火力でも兵の数でも勝っており、さらに人海戦術による昼夜を問わない攻撃でフランス軍を圧倒したのです。この時のベトミン軍の参謀の半数以上が元日本兵であったそうです。

この一戦は後のジュネーヴ和平会談の行方に大きく影響を与え、7月21日のジュネーヴ協定締結とインドシナ半島からのフランスの全面撤退へとつながることになります。

このディエンビエンフーの戦いが戦況を一気に決め、ジュネーブ条約が結ばれて、フランス軍の撤退と東西ベトナムの成立が決まったのです。しかし、この時期の複雑怪奇な国際情勢は、第一次インドシナ戦争の始まりにおいては、ベトミン軍をアメリカが支援していたことからわかります。しかし、共産主義がベトナムを支配することを快く思わなかった米国は南にベトナム共和国を作ります。この通称南ベトナムは反共主義を掲げておりましたが、実際はフランス政府やホワイトハウスによって作られた傀儡政権でありました。

一方、北ベトナムは、独立戦争に寄与した残留日本兵に新ベトナム人という称号とともに国籍を与え、優遇しました。しかしベトナムでの南北対立が激しくなるにつれ、北ベトナムは中国共産党の支援を大きく受けることになってゆきます。そしてベトナム戦争へと突き進むのですが、この南北対立とベトナム戦争で、中国からの支援を受けるようになり、侵略軍だった日本兵の手助けによって戦いに勝利したことがホーおじさんの重荷になってきます。南ベトナムにとっては独立戦争への日本兵の貢献はなかったことにしたいこととなり、突然、残留日本兵はベトナムでできた家族からも引き離されて、財産も一切持って帰れず、着の身着のまま突然日本へ帰国させられます。ところがそんな彼らを日本で待っていたのは、共産主義国家に協力した売国奴という冷たい仕打ちでした。帰国した彼らはもう何も語らず、日陰者のようにひっそりと生きたのです。そしてベトナムに残された彼らの家族も、ベトナムは父権が強いお国柄ですから、日本人と一緒にになった女、父親が日本人のこどもと、激しい差別に会うこととなります。北ベトナム政府は、彼らの夫、父が独立戦争に多大な貢献をしたことを一切公表しませんでした。それがこうした差別を生みました。そうした中、南北

対立がベトナム戦争を引き起こします。この南ベトナムとアメリカとの戦争に、わずかに残っていた日本兵は、第二次世界大戦の日系二世の部隊のように果敢に戦い、戦死していったのでした。これも公表されてはいません。しかし近年、いわばこの封印された歴史に日があたり、やっと認知されるような動きが出てきました。2005年の頃の話です。

両陛下が公式晩餐会の翌日お会いになったのは、フランスからの独立戦争後に日本へ引き揚げる元兵士と日本へ同行できず、現地に残されたベトナム人妻や子供の日系2世ら計15人でした。この面会は、陛下のたつての希望でした。陛下は一人ひとりの手を握って、

「いろいろとご苦労もあったでしょう」

「どうぞお元気で」

といたわりの言葉を掛けて回られたそうです。

優秀な政治指導者は、保守的でかつ冷酷であることが要件であるらしいです。ホーチミン氏が保守的とは言い難いかもしれませんが、自己の目的のためには冷酷になれる人だったんでしょう。その意味では、わが首相も十分冷酷かもしれません。自分のために財務省の下っ端小役人が自殺しても、厚顔にも権力の座に居座り続けられるのですから。それにしても、ホーチミン氏程の犠牲者数ではないので、物の数にも入らない小物かもしれません。

残留日本兵の家族と陛下が面会されたことをきっかけに、残留日本兵の家族が日本に来日したのでした。そしてまだ見ぬ父親がもうなくなっていたことを知って墓前にお参りするのを、報道番組で見た記憶があります。その中でもグエン・ティ・スアンさんのことは覚えておりました。スアンさんは、名前がベトナム語で春を意味するので、日本名としてハルコと名乗っていたとおもいます。そのスアンさんの家族は、ベトナムへ帰っても六年前に父親が他界していたことを告げませんでした。スアンさんが重い心臓病で入院していたからです。しかし夫の消息を聞かずにおれず、とうとう訃報を聞き出して、ベトナムで葬儀を営むことになりました。スアンさんは夫の葬儀を取り仕切るのは妻の役目と、医師の反対を説得し、葬儀に出席しました。そしてその数日後、ス

アンさんも後を追うように亡くなったのです。

近年、この残留日本兵の功績をベトナムでは見直され始めているそうです。残留日本兵の中には革命烈士の称号を与えられた人もいます。これもなんだか、政治の都合のように見えます。ダナンに三月二十八日公園というのがあります。そこに来ている若者に、三月二十八日って何の日？と聞いても知りません。ベトナム戦争が終結した日です。ベ兵連、ディエンビエンフー、サイゴン陥落、こんなことを私たち世代は時代の同時進行の出来事として見てきています。もうそんな時代ではないのかもしれませんが。

台湾のことを知っていますか？

台湾のことを本当に知っていますか？ただお人よしに、すごく親日的な国(?)だと思い込んでいませんか。私もそう思っていました。あの国やらこの国のことがありますから、余計にそう思い込みたくて、疑いもせずそう思っていました。わたしの先の台湾での一文も、まるっきり疑いもなく親日国と思い込んでの文章になっています。ただ、九份へ行く最中でのガイドさんの話に引っかかるものがありました。調べてみると、その経緯はガイドさんの言ったことの逆のようでした。学校に集まっていた子供と婦女子を虐殺したのは日本の警察、軍隊ではなく、セデック族の人たちでした。霧社事件と言います。詳しくは、1930年10月27日に台湾の台中州能高郡霧社（現在の南投県仁愛郷）で起こった、台湾原住民による日本時代後期における最大規模の抗日蜂起事件で、霧社セデック族マヘボ社の頭目モーナ・ルダオを中心とした6つの社（村）の壮丁300人ほどが、まず霧社各地の駐在所を襲った後に霧社公学校の運動会を襲撃した。このため事件の犠牲となった民間の日本人約140人の内には多くの女性、子供が含まれており、彼らは無残にも首を切り落とされていた(ウィキペディア)のだそうです。彼らには、首刈りの風習がまだ残っていたのです。しかしそれを直接には言わず、草刈と言っておりました。この言い方のほうが、逆に不気味ではありませんか。ガイドさんから草刈と聞いて、怖気がたつほど不気味さを感じました。

一九三〇年は昭和五年です。霧社事件の発端は、霧社セデック族マヘボ社の頭目が、たまたま通りかかった地元派出所の警官二人を、結婚式の披露宴だから酒を飲んでゆけと誘ったことでした。しかし、警官二人は、現地人の宴会の不潔さを嫌って、杖で殴りつけました。それに怒り、侮辱を受けたとマヘボ社のリーダーの長男、タダオ・モーナが巡査を殴打し返します。ほんの些細なことでした。現地の人々のささやかな宴席を不潔と嫌った巡査が、軽はずみに杖などで殴らなければ、こうはなりません。やはり、どこかに見下す差別意識があったのでしょうか。しかし、奇妙なことがあります。この巡査二人は花岡一郎、花岡二郎と言う名前でしたが、共に霧社のホーゴ社出身の現地人でありました。

ここで少し長くなりますが、彼らの日本名について語っておかなければなりません。台湾の統治政策として、改姓名が行われていました。この改姓名は朝鮮で行われた創氏改名とは違って、許可制でした。そして、花岡一郎、花岡二郎は、現地人としては高等教育を受けたエリートでした。それゆえ巡査とはいえ改姓名も許可され、官吏の道も開けたのでした。このふたり、霧社事件の勃発の最中、責をとって自決しております。

台湾のことを知っていますか？2

台湾のことで、大前提を言っておりませんでした。この時代の台湾は日本統治下にあつて、まだ中華民国ではありませんでした。ですから、戦争が終わって日本が撤退し大陸軍が来た時、現地の人はいこう言いました。

狗走了, 猪来了。 犬が去った後、豚が来た。
日本は犬だったんです。ちょっと衝撃的でした。

1945年10月17日に、降伏した日本軍に代わって、台湾を接收するために、中華民国軍約1万2,000人と官吏200余人が米軍の艦船から上陸しました。台湾の民衆は爆竹を鳴らし、晴天白日満地紅の小旗をちぎれんばかりに振り、歓呼の声で日本軍を打ち破ったはずの祖国の軍隊を迎えたそうです。しかしそれもつかの間のことでした。中華民国軍、祖国軍と言えども、大陸の軍隊は軍閥将軍の私兵に過ぎず、彼らは台湾で占領軍のようにふるまい、略奪、暴行、殺戮を好き勝手に繰り広げました。アメリカは日本に原爆を投下しただけだが、台湾には蒋介石を落とすという言葉が残っているぐらいですから、そのすさまじさがわかります。蒋介石とその軍隊がもたらした厄債は、原爆よりもひどかったのです。2.28事件の犠牲者は1万9,000人とも2万8,000人とも言われております。そのなかでも、台湾の知識層に対する弾圧は過酷極まりなく、全島で大学教授、弁護士、医師、教師などの知識人が次々と連行され、そのまま消息を絶ちました。その時、この人たちを連行するのにその人数の多さにこまって下級軍人が手をこまねいていると、上官が針金を渡し、捕縛人の手を貫かせて次々と結束して連行し、そのあと、そのまま海に沈めたそうです。

霧社事件に対する日本の報復は、すさまじいものでした。霧社公学校の運動会襲撃での日本人の犠牲者は約百四十人。小学校のようなものですから、犠牲者のほとんどが婦女子と子供でした。そして無残に、彼らは首を刳られておりました。日本側はすぐに警察と軍隊をもって鎮圧にかかり、2日後には早くも霧社を奪回します。霧社セデック族側は山にこもり、必死に抵抗しますが、識者たちが次々倒れもし、追い詰められて自害したりもします。日本側は親日派セデック族を動員し、二か月後には戦闘は終結します。この時、味方蕃の戦闘員たちに対しては、敵蕃の首級と引き換えに懸賞金が支給されました。賞金の対象は蜂起勢の壮丁のみならず、婦女子まで含まれていました。日本統治下では、この首狩りを禁じていたはずなのです。ところがこの措置

です。日本は判断を誤ったのでした。そしてのちに、霧社事件は日本の圧政に対する英雄的な抵抗運動と

位置づけられるようになった理由の一つがここにあったとおもわれます。

ただ、日本側の台湾総督石塚英蔵、総務長官人見次郎、警務局長石井保、台中州知事水越幸一も、引責辞任します。また全国大衆党は国会で当局の対応を批判します。そして昭和天皇までもが事件の根本には原住民に対する侮蔑がある、と漏らされたそうです。このことが、のちの日本人である我々にとって、一つの救いかもしれません。

九份の町の看板に、いかにも映画の宣伝だろうと思われる言葉が書かれたものがありました。非情城市とありました。この言葉は日本に帰ってきても、のど元に突きつけられた匕首のように気になって仕方がありませんでした。しかし検索に掛かってくるたくさんの情報は空疎な中身ばかりで、納得できるものではありませんでした。

第一、YouTubeには非情城市の全編があるのですから、これほどの情報はありません。しかし、中国語はわかりません。残念です。日本語の非情城市はありませんでした。ウィキペディアで読むあらすじも何か持って回った内容で、なにが非情なのかわからないのです。それでも、この映画の描いていることは、日本統治下の台湾ではなく、蒋介石が、乱入、して来た後の台湾のことであるらしいとだけはわかりました。

台北、中正記念堂、国父、蒋介石と単語を並べてみれば、台湾のすべてだと思っていました。戦後の歴史を振り返ると、日清戦争後は日本領土となっていた台湾は、第二所世界大戦の終戦後、1949年、大陸から蒋介石をリーダーとする国民党が入島したことによって大きく様変わりします。とうぜんのことです。日本によって統治されていたのですから、それまでも抗日運動は当然ありました。先に紹介した霧社事件のほか、西来庵事件というのがありました。これをきっかけに日本の統治のありようが様々な議論され、後藤新平の特別統治主義と、そのあと取られた科学的植民地主義への変遷、そして内地延長主義へと変わってゆきます。そして日中戦争の勃発に伴い、台湾でも徴兵が行われ、結局およそ軍属を含めて21万人が戦争に参加し、3万人が死亡します。

蒋介石は国父とされ、彼の偉業をたたえ1980年に首都台北に中正紀念堂が造営されました。中正は蒋介石の本名だそうです。この中正紀念堂は、孫文が唱えた「忠、孝、仁、愛、信、義、和、平」の八徳を象徴する八角形の屋根が乗っています。そしてその本堂に入ると、高さ6.3mの蒋介石のブロンズ像があり、その台座には倫理、民主、科学の政治理念が刻まれています。この威厳と政治理念はどうでしょう？台湾人ではない私が批判はできません。しかし、高尾の228記念館に行けば、彼が台湾にもたらしたものは何か、如実にわかります。日本統治下の台湾についての、日本の統治姿勢は前回述べました。しかし、そのころの台湾はまるで未開の地でありました。ですから、今でいうインフラなど皆無、教育制度も義務化されておらず、山ばかりの地に農業を主に経済を立て、やっと食いつないでいたのです。そんな台湾は、日本統治になる前もそうでしたが、大陸から来た役人どもが台湾からむさぼるだけむさぼり、私腹を肥やすことに専念しておりました。これを言うと、身びいきになるかと思いますが、日本統治下では日本の役人は貪りませんでした。むしろ識字率の低いこと、ライフラインの未整備、農工業の未発達等を是正し、精糖業を振興させ、砂糖を日本に輸出させて現地の人々が豊かになるようにしました。そしてそれとともに、一応の民主体制の確立を図ろうとも努めたのです。それが五十年続きました。そういった秩序ある社会が一応確立していったのですが、それが災いの元になろうとは思いませんでした。日本の統治となって、日本軍が進駐してきたとき、兵は簡素にして手入れの行き届いた装備を身に付け、歩調をとって整列して行進してきたのです。しかし、国民党軍はまるでならず者の集団にすぎず、だらしない服装と低い士気、そのうえ、見るものほしいものは略奪し、暴行し、殺戮さえ平気で行われました。大陸の軍隊はそれが当たり前のことでした。というより、自分たちが占領した地域は、自分たちが思い通りにしていいのだと、それが大陸での常識だったのです。そしてそれが彼ら大陸の兵への恩賞でした。奪い、犯し、殺す、やりたい放題の豚どもが台湾に進駐して来たのです。しかし、台湾の人たちはそれを知らなかった。五十年です。日本に統治されていたのは。もう台湾は小さな日本になっていました。戦前のことから、今ほどのことではありませんが、法と秩序を保たれた日本型の社会ができておりました。日本統治後の台湾の社会は、中国本土が及ばぬくらい先に進んでいました。インフラもそうでした。台湾には水道が普及していたのですが、大陸の者はそれを知らず、蛇口さえあれば水が出ると思い込み、壁に蛇口を付けただけで、水が出ないと激怒したとか。電気もそうです。鉄道も知らなかった。文字は読めず、台湾人が新

聞が読めると言うことだけで怒り、射殺したという事例もあったそうです。ですから顔家一族である一青窈さんのお兄さんの友人二人が、中学生なのに手足を縛られられて殺され、遺体となって帰ってきたそうです。金美玲さんも同じ経験をしています。

一青窳さんの名前を出してしまいました。この人と二二八事件を、彼女の語るところを引きながら、綴ってみたいと思います。

彼女は才媛です。台湾に帰ると、顔妙と名乗られるそうです。顔家は台湾の五大家族として知られている、台湾では知らぬ者のいない名家でした。でしたと過去形で言いました。一青窳さん自身が語っています。

戦後、大陸からやってきた国民党政府による一党独裁が続いた台湾において、顔家以外の有力な財閥は、政府にうまく取り入り、事業を拡張した。

しかし、当時の顔家の当主であった祖父・顔欽賢は、むしろ政治から距離をおき、世の中の流れに逆走するように、事業を縮小し、ひっそりと目立たぬように徹した。そのせいか、五大家族のなかで顔家は最も没落した存在になっている。

顔家の運命はこの一文一つに込められた意味に集約されています。

顔家は日本統治時代の台湾で、基隆から近い九份などの鉱山開発で財をなします。その台湾に、非情城市の冒頭のように、昭和天皇の終戦勅語が流れます。台湾は中華民国に接收され、台湾に暮らす人々の運命を根底からひっくり返します。それでも、当初は台湾人の誰もが祖国復帰を喜んでいました。しかし、その日から、国民党による搾取が横行し、圧政と暴力が始まり、かつ深刻なインフレに苦しめられます。そんな中、闇たばこを売っていた老婆を兵士が銃の台座で殴りつけるという事件が起こります。それが二二八事件の発端でした。この時、一青窳さんの祖父の顔欽賢氏は、当時の台湾の有力者、有識者メンバーとともに二・二八事件の処理委員会を立ち上げ、国民党当局に政治改革要求を出します。国民政府側は、当初は交渉に応じる構えを見せていたのですが、大陸からの派遣軍の到着すると態度を急変させ、処理委員会の解散を命じ、主要メンバーを指名手配犯とし、実力行使で鎮圧に乗り出します。これに対して、顔欽賢氏を含めた委員会のメンバーは命の危険を感じ、直ちに逃亡を強いられることとなります。実際には半年以上、逃亡し続けたようです。しかし、顔欽賢氏

は自首し、自新します。自新とは何でしょうか。治安維持法下の日本での左翼分子の転向のようなものでしょうか。自新を宣言した者には更正の証しである自新証が与えられ、刑も軽くなったようです。そして、祖父もまた、自新を宣言した一人だったのであると、一青窈さんは言います。

しかし、その裏には、人に語れないような事情があったように見受けられます。一青窈さん自身、真相はわからないままのようですが、一青窈さんの父上とそのご兄弟、つまり一青窈さんの叔父君が国民党当局に逮捕、拘束されたことがきっかけとなり、ご祖父様が自首し、それなりの取引をしたもようです。この後、なんの理由も記されない形で、顔家の土地6万坪余りが当局に寄贈されていることがわかります。

当時の台湾人の誰もが、苦渋の選択を迫られたにちがいない。財産を持っていた祖父らのような顔家の人々はまだ幸運だったとも言える。取引ができない人々は、無実のなかでろくな裁判もなく、命を奪われていったはずだ。

こう一青窈さんは述べています。ご祖父君のことを、「金と引き換えに命拾いした人間」として、忌み嫌う人もいました。ですから、顔妙と名乗ると、今でも顔をそむける人が台湾の中にはいるのです。

のど元に突きつけられた匕首のような非情城市という言葉についてこだわりながら、ろくに調べもせずでしたが、知ってみると台湾は日本の戦後に残した、何もしなかった、もしくは何もできなかったゆえの惨劇であったかもしれません。台湾にも日本からの差別はありました。しかし、台湾人の日本への恨みは、戦後日本が台湾を捨てたことにありました。金美麗氏は昭和九年生まれ、昭和二十年には十一歳になっておりました。この人は言います。私は十一歳まで日本人でした。

終戦になって日本兵が帰還するとき、台湾の人は、われわれを捨てていくのか、私たちも日本人だと言ったそうです。もちろん、祖国に復帰すると、中華民国に返されることを喜ぶ人もありました。たぶんそれが大半で、われわれを捨てていくのかと言った思いを抱いた人は少なかったかもしれません。しかし、二二八事件後の台湾で、祖国復帰を喜んだ人はもういなかったでしょう。その後行われた国民党政権の行った虐殺は、白色テロといわれています。殺された人、約2万人、すべては封殺されました。その後、1949年5月19日に改めて戒嚴令が発令されます。そして、この戒嚴令は1987年まで続きます。その間、約三八年。そのあと、いったん解除された戒嚴令も、刑法とかの関連法の改正で、戒嚴令下とほぼ同じ状態がもう十年続きます。台湾は民主化されてまだ二十年しかたっていないのです。蔣経国氏から李登輝氏へ総統が受け継がれて始めて言論の自由も認められたのでした。

一青窈さんの大家と言う歌は、ダージャと読むそうです。この歌は二二八事件の後没落した顔家をうたったものだそうです。申し訳ないが、そうとわかって聞いてもよくわからないところがあります。金美麗氏は、日本人は日本に生まれてきただけで恵まれていると言いました。

裁判官・医師・役人をはじめ日本統治時代に高等教育を受けたエリート層が次々と逮捕・投獄・拷問され、その多くは殺害された。また、国民党軍の一部は一般市民にも無差別的な発砲を行っている。基隆では街頭にて検問所を設け、市民に対し、北京語を上手く話せない本省人を全て逮捕し、針金を本省人の手に刺し込んで縛って束ね、「粽（チマキ）」と称し、トラックに載せ、そのまま基隆港に投げ込んだ。(ウィキペディア引用)

二二八事件は一九四七年のことでした。それからおよそ七〇年。戒厳令が解かれたのを一九八七年とするのなら、それから三〇年。しかし、本当の意味での民主化は蔡英文女史が台湾総統に就任してからのことでした。この人が始めて二二八事件の再調査を表明し、かつ見直しを始めました。しかし、それでも台湾の中で二二八事件は触れてはいけないタブーになっています。本省人と外省人の和解はなっていません。今なお、それを口にするのは憚られること、表立って言うてはいけないことなんです。これを戒厳令下で口にすると、またも共産分子として逮捕される危険があったのです。それゆえ、もはや体に染みついた台湾人の性になってしまっているのです。

二二八事件が台湾国内での出来事でおこったことであることが、対立を複雑にしています。本省人は生粋の台湾人、外省人は大陸から逃げてきた中国人。しかしこの大陸から逃げてきた外省人は現在の中国とは相いれない、現在の大陸の中国人と敵対する中国人ということになります。そしてこれは本省人も同じこと。しかし、そんなことにも七〇年の月日が流れました。いまじゃ、本省人と外省人の対立なんてありませんよと、台湾在住の日本人は言いますが、それははた目から見る第三者のことです。歴史はそんなに簡単なものじゃない。カタルニアはなぜ今頃スペインからの独立を目指すのでしょうか。スコットランドはなぜイギリスから独立しようとするのでしょうか。チェコスロバキアの分裂、ソ連の崩壊と衛星国の独立。グライラマは今も戦っています。

台湾で起こったことは、国際的な監視の目があるから、虐殺で黙らせる中国得意のやり方はできないでいますが、今香港で起こっていることは台湾でかつて起こったことの繰り返しのようです。私は今の香港をじっと見えています。そんななか、個人攻撃は本意ではありませんが、アグネス・チャンはどうでしょう。中国政府の意を呈した、まるで代理人のような物言いで日本を罵倒し、香港人を中国にしたがわせ、中国政府を擁護する議論を、この日本で展開しています。そのくせ、彼女の国籍は英国籍で、自分の身は英国に守ってもらえる安全圏にいます。この人は、蝙蝠より性質が悪い。この安全な日本で糧を得て、母国香港の同胞を裏切り、強い中国にすり寄る。これを知ってほしいと私は思っています。

今ベトナムで時々、日本へ行って働いているベトナム人が不当な扱いを受けているというニュースが流れるそうです。そんなことをする日本の経営者に対して、ベトナムで働いている愚息がとても憤慨しておりました。アジアは変貌しております。日本はもう日出る国ではなくなって、日沈む国になろうとしています。しかし、それでもアジアの一国として、他から信頼される国でいなければならないと思っています。そのために個人でできることなどたかが知れていますが、せめて理解しましょう。強い立場にいるものはそれだけで心しなければなりません。日本人はいつも相手の身になって考え、行動してきたはずなんですから。

本当はここでこの項は終わりたかったのですが、もう一つのシベリア抑留のことを書かないわけにはいきません。アローン収容所という本を知っていますか。ビルマの豎琴という映画を知っていますか。英国は紳士の国だと本当にそう思っていますか。あの英帝国の正体を見ないわけにはいけないのです。支那にアヘン戦争を仕掛けたのは英国でした。会田雄次著「アローン収容所」は、以前から知ってはいました。会田雄次氏はイタリア・ルネッサンス期のイタリアの研究を専門とする歴史学者で、京大名誉教授でありました。氏は一九四三年招集され、ビルマ戦線に従軍し、イギリス軍の捕虜となってラングーンのアローン収容所に拘留されます。

すくなくとも私は、英軍さらには英国というものに対する燃えるような激しい反感と憎悪を抱いて帰ってきたのである。

この本の前書きの一節は上のごとくです。そして、この本の副題が西欧ヒューマニズムの限界となっています。イタリア、ルネサンスの歴史の専門家が言うことですから、西欧を知らないはずがない。それでも、ここまでの言で前書きします。

戦後降伏した日本兵に対して連合国側は武装解除し収容所に収容したのですが、日本兵の数の多さに、その捕虜としての待遇を国際法並びにジュネーブ条約に基づいた戦争捕虜の取り扱いにはせず、「降伏日本軍人」という国際法が定める捕虜の待遇を与えなくとも済む別枠を英軍が勝手につくり、劣悪な環境の収容施設で家畜より劣る食料と衣服を与えて強制労働につかせたものです。それでも一応国際法には抵触しないとされる程度の取り扱いが行われたのですが、それも形を整えた言い訳のできる程度のアつかいでした。それでも多くの日本兵が一年以内に帰国（帰還）できたのですが、英国軍主体の東南アジア連合軍 (SEAC) は日本兵から「作業隊」を選び、過酷な労働に従事させました。それゆえ帰国を遅らせられた作業隊の死者1,624人のうち、その52%が労務の過酷さによってでありました。粗末な食事と危険で不潔な労働の実際は「弾薬の海中投棄、採石、樹木の伐採、下水掃除、糞尿処理、炭塵の立ち込める船倉内での石炭積載作業、一〇〇キロ入り米袋の運搬」などでした。そのような残酷な仕打ちは戦時中も行われておりました。激しい戦闘に逃げ遅れ、担架に乗せられたまま路上に放置された夜戦病院の重傷患者一五〇名が、英軍グルカ兵の手でガソリンをかけられ、焼き殺されたという事件さえもありました。

ビルマ戦線は泰緬鉄道を置いては語れません。

台湾を飛び越えてしまいました。しかし、アローン収容所のことを一つ一つ整理して取り上げるのはあまりに過酷です。ここは掛かれていることと、他の証言を引用するだけにしようと思います。ただ、もし父がフィリピンで降伏したのでなければ、こうして殺されていたのだと思ってしまいます。

「イラワジ河の中洲には毛ガニがいるが、カニを生で食べるとアメーバ赤痢にかかる。その中洲に戦犯部隊とみなされた鉄道隊の関係者百何十人かが置き去りにされた。英国軍は、降伏した日本兵に満足な食事を与えず、飢えに苦しませた上で、予め川のカニには病原菌がいるため生食不可の命令を出しておいた。英国人の説明では、あの戦犯らは裁判を待っており、狂暴で逃走や反乱の危険があるため、（逃げられない）中洲に収容したと言う。その日本兵らの容疑は、泰緬国境で英国人捕虜を虐待して大勢を殺したというものだが、本当なのかはわからない。その中洲は潮が満ちれば水没する場所で、薪は手に入らず、飢えたら生ものを食べるしかない。そして飢えた日本兵は生でカニを食べた。やがて赤痢になり、血便を出し血へどを吐いて死んでいった。英国軍の監視は、毎日、日本兵が死に絶えるまで、岸から双眼鏡で観測した。全部死んだのを見届けると、「日本兵は衛生観念不足で、自制心も乏しく、英軍のたび重なる警告にもかかわらず、生ガニを捕食し、疫病にかかって全滅した。まことに遺憾である」と上司に報告した」、と。会田にこのことを伝えた人物は「何もかも英軍の計画どおりにいったというわけですね」と締めくくった。

相田氏が伝聞で知った出来事の記述です。あの戦場にかける橋という映画で有名になった泰緬鉄道でのことに対する英国軍の陰湿な報復の一事です。

その日、私は部屋に入り掃除をしようとしておどろいた。一人の女が全裸で鏡の前に立って髪をすいていたからである。ドアの音にうしろを振り向いたが、日本兵であることを知るとそのまま何事もなかったようにまた髪をくしけずりはじめた。部屋には二、三の女がいて、寝台に横になりながら『ライフ』か何かを読んでいる。なんの変化もおこらない。私はそのまま部屋を掃除し、床をふいた。裸の女は髪をすき終わると下着をつけ、そのまま寝台に横になってタバコを吸いはじめた。

入ってきたのがもし白人だったら、女たちはかなきり声をあげ大変な騒ぎになったことと思われる。しかし日本人だったので、彼女たちはまったくその存在を無視してい

たのである

このような経験は私だけではなかった。すこし前のこと、六中隊のN兵長の経験である。本職は建具屋で、ちょっとした修繕ならなんでもやってのけるその腕前は便利この上ない存在だった。気の毒に、この律義な、こわれたものがあると気になってしょうがない。この職人談は、頼まれたものはもちろん、頼まれないでも勝手に直さないと気がすまないのである。相手によって適当にサボるという芸当は、かれの性分に合わないのだ

ところがある日、このN兵長がカンカンに怒って帰ってきた。洗濯していたら、女が自分のズロースをぬいで、これも洗えとやってきたのだそうだ

「ハダカできやがって、ポイとほって行きよるのや」

「ハダカって、まっぱだか。うまいことやりよったな」

「タオルか何かまいてよってがまる見えや。けど、そんなことはどうでもよい。犬にわたすみたいにムツとだまってほりこみやがって、しかもズロースや」

「そいで洗うたのか」

「洗ったるもんか。はしでつまんで水につけて、そのまま干しといたわ。阿呆があとでタバコくれよった」

N兵長には下着を洗わせることなどどうでもよかった。問題はその態度だった。「彼女たちからすれば、植民地人や有色人はあきらかに人間ではなかったのである。それは家畜にひとしいものだから、それに対し人間に対するような間隔を持つ必要はないのだ、そうとしか思えない」

ある日K班長が、青ざめ、顔をひきつらせて濠州兵の兵舎作業から帰ってきた。聞くとかれは、濠州兵の便所で小便をしていると、入ってきた兵士にどなられ、ひざまずかせて口をあけさせられ、顔に小便をかけられたという。二本兵は便器でしかないという表示である。

ちょっと読めばなんということもない出来事の羅列です。しかし、ここで語られているのは、人を人でなくする人格破壊のやり方です。彼らは日本兵をこの屈辱感に慣らし、そうされることが当然と思うまで繰り返し、その記憶を植え付けて忘れさせな

いことで彼らの人格を破壊してゆくのです。まるで家畜を慣らすように繰り返します。

アローン収容所だけでなく、ビルマで降伏した日本兵に対する仕打ちは、苛烈を極めたものでした。といっても、日本が捕虜に対して行った殴る蹴るの仕打ちではなく、もっと陰湿なやり方でした。

例えば宿舎一つにしても、

竹の柱に竹の屋根、上に携帯天幕を張り、土間には枯草を敷きつめ、携帯天幕を敷いている、雨露を凌げるだけの簡素な小屋である。

このような小屋を日本兵は自分たちで整え、改良して暮らせるようにします。

しかし、

収容所の中には、蠍（サソリ）など害虫・毒虫に悩まされた場所もあり、また、12月下旬から3月下旬ぐらいまでは日中の気温は30度を超すが、夜半になると気温はぐんぐん下がり、夏の衣服では寒くて眠れず、交替で不寝番を立て焚火を焚き、暖をとっていると言った状況であったそうです。

そしてなにより蚊です。連合軍側は自殺の恐れがあると、それまで支給されていた蚊帳を取り上げます。これによってマラリヤに掛かり、幾人も亡くなっていきました。

そして食料はもっと悲惨でした。量はもちろん、中身も碎米などというものが支給されたりするのですが、

この中には土、砂が三割ほども混じっており、これに抗議すると、牛や豚の家畜は支障なく、喜んで食うとはねつけられます。

場合によっては、敵国の残飯を仲間と奪い合って食べた場合もあれば、ヤシの木の芯、バナナの幹、現地の芋や、木の実、ヘビ、トカゲなど“あらゆる生き物”を食糧とせざるを得ない兵士もいた。

これが現実でした。資料に、ネズミを調理する日本兵という写真が残されています。

しかし、こうした日常のことに加えてイギリス兵の質が指摘されている部分もあります。彼らの日本兵を憎悪する原因が、彼らの識字率にありました。文字が読めない

、暗算ができない、強制労働をさせるのに図面など読めるものがない。このことが逆に日本兵を憎ませます。

そうした過程で、彼らの人種差別がおこなわれます。しかし、彼らにはその意識がありません。

植民地人や有色人はあきらかに人間では無かったのである。それは家畜に等しいものだから、それに対し人間に対するような感覚を持つ必要は無いのだ、そうとしか思えない。

敗戦国日本は戦争犯罪を問われました。ドイツも同じです。両国は、何もかもない交ぜにして人道上の罪まで問われました。敗戦国は人道上の罪まで問われても、これを問うことはできないのでしょうか。文民をまで焼き尽くす日本本土大空襲は戦争犯罪です。まして原爆は日本に対するというより、人類に対する戦争及び人道上の罪です。そして、かくもあざましい、ビルマにおける連合軍側の日本兵捕虜の扱いは、人道上の罪です。しかし、それすら敗戦国は問えない。ビルマの捕虜収容は二年続きました。そして、これは先に書きましたが、一万六千人余のうち、五十二パーセントが死にました。その数字からだけでも、何があったかわかります。戦争が終わっても日本に帰れない、戦争が終わった後なのに殺されなければならない、それがビルマでの降伏日本軍人の抑留の実態でした。

日本が手本とした英国のヒューマニズムは英国には無かった

すくなくとも私は、英軍さらには英国というものに対する燃えるような激しい反感と憎悪を抱いて帰ってきた

イギリス人を全部この地上から消してしまったら、世界中がどんなにすっきりするだろう

もう一度戦争した場合、相手がイギリス人なら) 女でも子どもでも、赤ん坊でも、哀願しようが、泣こうが、一寸きざみ五分きざみ切りきざんでやる

もう何も言うことはない、憎悪の言葉です。

少しの間ためらいがありました。これ以上書けば、あの苦し紛れに出してきた大東亜共栄圏というスローガンに言及せざるを得ないことになります。しかし、そのことの良し悪しはどうであれ、次の引用を試してみたいと思います。

すくなくとも私は、英軍さらには英国というものに対する燃えるような激しい反感と憎悪を抱いて帰ってきたのである。

私たちだけが知られざる英軍の、イギリス人の正体を垣間見た気がしてならなかったからである。いや、たしかに、見届けたはずだ。それは恐ろしい怪物であった。この怪物が、ほとんどの全アジア人を、何百年にわたって支配してきた。そして、そのことが全アジア人のすべての不幸の根源になってきたのだ。私たちは、それを知りながら、なおそれとおなじ道を歩もうとした。この戦いに敗れたことは、やはりリーフの天譴というべきであろう。しかし、英国はまた勝った。英国もその一員であるヨーロッパは、その後継者とともに世界の支配をやめてはいない。私たちは自分の非を知ったが、しかし相手を本当に理解したであろうか。

このなかで、私たちは自分の非を知ったが、という一節に共感します。そして、不思議なことに、これに共通する文章を寄せている歴史家の言葉もご紹介しましょう。アーノルド・トインビー氏です。

アジア・アフリカを200年の長きにわたって支配してきた西洋人は、あたかも神のような存在だと信じられてきたが、日本人は実際にはそうでなかったことを、人類の面前で証明した。これはまさに歴史的な偉業であった。...日本は白人のアジア侵略を止めるどころか、帝国主義、植民地主義、人種差別に終止符を打ってしまったのである。

同様の発言があります。

1840年のアヘン戦争以来、東アジアにおける英国の力は、この地域における西洋全体の支配を象徴していた。1941年、日本は全ての非西洋国民に対し、西洋は無敵ではないことを決定的に示した。この啓示がアジア人の士気に及ぼした恒久的な影響は、1967年のベトナムに明らかである

第2次大戦において、日本人は日本の為というよりも、むしろ戦争によって利益を得た国々の為に、偉大なる歴史を残したといわねばならない。

その国々とは、日本の掲げた短命な理想であった大東亜共栄圏に含まれていた国々である。

日本人が歴史上に残した業績の意義は、西洋人以外の人類の面前において、アジアとアフリカを支配してきた西洋人が、過去200年の間に考えられていたような、不敗の半神でないことを明らかに示した点にある。

著書、アローン収容所で会田雄次氏があれほど呪ったイギリスの、それも著名な歴史家が、自国の歴史を振り返って、かくも述べていることは、逆にほんのすこしはイギリスの知性の良心を信じてみてもいいのではないかと思わせます。

収容所の中では過酷な扱いを受けた日本兵も現地の人たちからは、いたわられたり助けられておりました。

- 作業に駆り出された日本兵や、輸送中に休憩している日本兵は、集落の村人から、煙草や果物、握り飯の差し入れや施しを受けることがあった

近隣国に逃れることができた者もいる

これを救いとしたいと思います。父もフィリピンで同様に助けられたと聞いております。

私自身は戦後生まれの団塊世代ですから、これが戦後と思ってもせずに生きてきましたから、戦後のことなどなにかを語ることもできないのですが、それでも時代のことは解っているつもりでした。しかしそれが浅かった。たかが一二度海外に観光旅行に行ったぐらいで、それもほんの物見遊山でしかないツアーで行っただけで、のど元に引っかかった言葉、非情城市にこだわってしまっただけで思いもよらぬ方向に向かって行ってしまいそうです。

私の生まれる前、昭和二十年八月十五日、日本の一番長い日に、天皇の終戦勅語があって、日本人の戦争は終わりました。しかし、それは日本本土の日本人にとってはという限局的なものでしかありませんでした。いまだに終戦勅語が流れて、戦後復興の中でたくましく生き抜く日本を描くドラマが作られ、八月十五日で戦争は終わりと自然と思い込んでおりました。私を含めて皆がそう思っているのではないかと思います。しかし、これまでも残留日本兵のことを知り、台湾のこと、フィリピン、ビルマのことを知ると、そんな思い込みは軽薄の極み、ノーテンキであったことがわかります。そういえば、父も復員に半年以上かかったとっていたと思います。もうそれ以上は話さなかったのですが、BC級戦犯としてとがめられることもなく帰れたのは幸いでした。

そうしたなか、兵ではなかった、一般人も戦地であったところから帰らなかった人々がおりました。最も周知されているのが中国残留孤児です。これに加えて、中国人の妻として生き延びた残留婦人も多くいたのです。

しかし、中国残留孤児については、誤ったイメージができています。大地の子はなんでしょうか。山崎豊子氏は長い期間を費やしてこの問題取材したようですが、この小説の中のことはほとんどありえない。残留孤児は養われはしたが、それは単なる労働力として有益であったからであって、教育もろくに受けられず、食べ物もろくに与えられず、中国人として育てられ、底辺を這いずって生きてきたのです。そして、中には東洋鬼の子として差別もされておりました。

ベトナム残留兵とその家族のことはもう記しました。しかし、それとは違った形での家族離散がありました。サハリン島です。サハリン島は今島全体をロシアが実効支配していますが、北緯50度より南の南樺太は、1945年までは日本の領地でした。いま北方領土返還問題がロシアとあれこれやり取りされていますが、実はこのサハリン島、南樺太も、北方領土とならんでもうひとつの領土問題ではあるのです。とはいえ、戦後、日本は領土を放棄していますので領土問題ではありません。じっさい、終戦後すぐに日本人は本土へ引き上げますが、日本人ではないとされた朝鮮人は別でした。彼らはサハリンに残留せざるを得ませんでした。その上、すべての日本人が引き上げたわけではなく、現地へとどまった日本人も多くいました。彼らには、生き別れになった肉親を探すためとか、あるいはもう朝鮮人やロシア人と結婚していた、というさまざまな理由がありました。こうしてサハリンの残留日本人が誕生しました。

終戦後すぐに日本人の帰還ははじまったのですが、そこに住んでいた人おおよそ40万人、帰還した人おおよそ三十万人といえは驚くでしょうか。それほどの方がサハリンにはおりました。そして、その帰還する船を、ロシアの潜水艦と思われる船からの攻撃で沈められたこともあったそうです。

どの家の屋根にも大きな白旗が掲げられていたのに、ソ連の航空機はどんどん爆撃した。駅前広場はおびただしい血で、私たちは横たわる死者・負傷者をまたいで山の神社に隠れたのです。

という証言もあります。ロシアは解放戦争だったと主張します。しかし、日本軍もおらず、抵抗する者はなおおらず、そんな日本人を攻撃して殺戮することが開放でしょうか。

コルサコフ（大泊）から出るはずだった郵便船も爆撃されていた。

8月22日には、北海道留萌沖で引き揚げ船3隻がソ連と疑われる国籍不明潜水艦の魚雷攻撃を受け、婦女子を中心に死者・行方不明者1700人以上を出した。

こんなことは列挙にいとまがありません。満州で起こったことがサハリンでも起きていました。

それでも戦後しばらくは帰国する機会があったそうです。しかし、帰るにもお金がなくて帰れなかった人たちもいました。

娘を（残留）朝鮮人に嫁がせ、その金で親を引き揚げさせた人も多かった

私たち親子には金がなく、帰れなかった。引き揚げる友人たちを見送り、同じ日本人なのにと隠れて泣いていました

これが実情です。そして1946年12月に米ソ協定が結ばれ、国の引き揚げ事業が始まりましたが、ここでも対象とされたのは日本人と子供のみ。もうすでに朝鮮人やロシア人と結婚し、子供も生まれていた人は家族と離れ離れにならないためには、帰国の思いを断ち切るしかなかったのです。いまもこの人たちはサハリンに生きております。しかし、日本に帰るところもなく、やはり子や孫をおいてなど行けないといひます。もう八十歳を超えた人たちです。まだ200人ほどおられるそうです。

樺太残留日本人の中に朝鮮人と結婚した夫人もありました。ところが、ここに複雑な問題ができてしまいます。強制的に残された朝鮮国籍の夫も次第に帰国できるようになるのですが、夫の帰る先が北朝鮮であった場合があったのです。それでもなかに、子供と一緒に夫について北朝鮮におもむいた日本婦人もありました。しかし、北朝鮮へ日本人の妻が入国するのが難しくなり、妻のみ樺太に残る、または夫のみ北朝鮮に帰国する、などといったいろいろな家族離散があったそうです。夫の帰国に子供が同行していった場合の、それから先のことはよくわからないとか。いまサハリンに残った残留日本人の中にこういった人々もおられます。

台湾のことから話が始まりました。中正記念堂の蒋介石像に赤ペンキが投げつけられたと報道がありました。二十日のことであったようです。かの地でもいまだ戦争は終わっていません。いや、戦争ではなく、戦後が終わってないのかもしれない。

フィリピンの残留日本人の方々に陛下はこう述べられています。

「戦争中は皆さんずいぶん苦勞も多かったと思いますが、それぞれの社会において良い市民として活躍して今日に至っていることを大変うれしく、誇らしく思っています」

陛下に直接お会いできたのは86人。そのお言葉を聞いて、残留日本人とその二世は慟哭しました。2016年のことでした。

とつぜんですが、ちこちゃんに叱られるという番組をご存知でしょうか。この番組でいい大人が三人、5歳の女の子にぼーっと生きてるんじゃないかと叱られます。多くの国で本当の民主化が進み、国民が日本のように自由に生きられるようになったのは、ほぼ1987年以降から1990年ごろでありました。台湾しかり、インドネシア、フィリピン、マレーシア、カンボジア、ベトナム、ミャンマー、タイもそうでした。つまり、東南アジアの国々はほぼ全部が太平洋戦争の終戦後も、戦後の異常事態のままです。しかしそれは、戦前、欧米列強によって分割統治され、植民地とされてきたことがもとにありました。だからといって太平洋戦争を大東亜戦争と呼んで、アジア解放の戦争であったという言い方には与しません。犬が去って豚が来た、わにの後にまたわにが来た、この言の先は台湾、後はフィリピンです。これを見ても大東亜共栄圏の論にくみするわけにはいかないのです。そして、そのような中で、日本でも現地でもなお今も戦後を生きている人がいるのです。ぼーっと生きてるんじゃないかと叱られました。

ヨーロッパはヒトラー以後、ソ連共産主義の拡大と侵攻の歴史がありました。それがベルリンの壁の崩壊で一応の終止符が打たれたのですが、その前にプラハの春があり、ビロード革命、チャウセスクの公開処刑などがあって、激動を繰り返したのです。その結末がソ連の崩壊でした。

私たちは現代史を知りません。知らなさすぎると思います。

日清戦争のころ、中国を支配していたのは西太后でした。そして当時の世界のGDPは清国が33パーセントを占めて、当時では世界一でした。ちなみに二位はインドで、占有率は19パーセントでした。

清はこれより以前、1840年より二年間、アヘン戦争をたたかい、これに敗北します。ちなみにこの時のイギリスのGDPは世界第五位で5パーセント強をしめるのみでした。これほどの国力の差があったにもかかわらず、また遠い中国国内での戦いにもかかわらず、戦争はイギリスの勝ちでした。これを第一次阿片戦争と呼び、1856年のアロー戦争を第二次阿片戦争ということもあります。しかし、その原因はというと、これはよく知られていますが、アヘン密輸販売の利権を守ろうとするイギリスと、アヘンを禁止し、国の安寧を守ろうとする清との対立でした。それにしても、阿片をイギリスは清に持ち込み、かつその利権を守ろうとしなければならなかったのでしょうか。それは、イギリスの一方的な貿易赤字が原因でした。つまり、当時のイギリスは、茶、陶磁器、絹を大量に清から輸入していたのですが、イギリスから清へ輸出できたものは、時計や望遠鏡のような富裕層向けの物品ぐらいのもので、清国に大量に輸出できるものがなく、イギリスの一方的な輸入超過が続いており、イギリスにとっては不都合な巨額の貿易赤字を積み重ねておりました。これを何とか解消しようとしたのが、植民地インドで栽培されて、大量にかつ安易に入手できる阿片の密輸でした。

もう一度言いますと、中国はこの時期、世界でも一番の工業国でありました。この事実はあまり認識されていません。封建的支配で民から搾取する貧困国家であったような誤ったイメージがありますが、産業革命があつて間もなくのイギリスが中国に輸出する商品がなかったという事実は知っておかなければなりません。それでも、それほどの工業力を持っていた中国が格下の国イギリスに負けたのは、やはり新しい技術を得ていなかったからでした。さらにイギリスは当時から世界屈指の海軍国であり、精強な艦隊を持っていましたが、中国はもともと陸戦国家で、主な戦力は陸軍でした。ところがこの陸軍も有力者の私兵といったところで、国家として統一された指揮命令系統がなく、各個ばらばらの、それも自分たちは生き延びようとする、まるで士気のない軍隊でした。これでは勝てるはずもありません。これまでも多々不平等条約を外圧で結ばざるを得なかったのですが、この敗北で清は、こののち列強の草刈り場となったのでした。

こうした流れの中で登場してくるのが日本でありました。しかし、日本は直接清に手を突っ込み、利権を漁りはしませんでした。日本にとっての一番の関心事は朝鮮であったからです。日清戦争の後、日本が求めたのは朝鮮の清からの独立と、台湾、遼東半島、そして多額の賠償金であったことから、これは解ります。しかし日清戦争まで引き起こして、なぜ日本は朝鮮を独立させようとしたのでしょうか。その背景には西欧列強のアジアと清への浸食と、ロシアの領土拡大への獐猛な意志にありました。このロシアの領土拡大の意欲と圧迫を日本は江戸の時代からひしひしと感じており、半ば恐怖にさえ思っ来ておりました。そのロシアの南下政策を防ぐためには朝鮮の独立が不可欠と日本は考えていました。というより、独立かつ親日的な政権の樹立が必要としていました。それゆえ日本は明治以来朝鮮に様々な形で介入してゆきます。しかし、日本の朝鮮へのアプローチは散々な形で返されます。その経過を見ると、韓国の今の日本に対する態度と何ら変わったところがないのは、むしろ驚きです。それはまず、明治維新によって日本が新体制になったのでこれを通知し、新しく国交を持ってもらいたいという通知を朝鮮に送ったのですが、この皇政維新の通知の国書の受け取りを朝鮮は拒否します。いわゆる書契問題です。その朝鮮の拒否の理由が、書契にある「皇」「天朝」などの文字が不当である、朝鮮通信使の様式にそぐっていないということでした。つまり、その国書の中の「皇」「勅」の文字について、「皇」は中国の皇帝にのみ許される称号であり、「勅」は中国皇帝の詔勅を意味するものであるからというのです。

朝鮮の在り様は現在の韓国とほぼ同じです。朝鮮は、清およびロシアとの間の緩衝地帯であり、彼らののど元に突きつけた剣先です。今の朝鮮半島は北朝鮮と韓国に分断されていますから、実は中国、ロシアの両国にとっても、最も都合のいい形であるはずなのです。ですから、中国、ロシアの両国は北朝鮮に本当は米国を刺激してほしくはなかったはずですが、しかしいま、それが変わろうとしています。どう変わるかはわかりませんが、制裁緩和を両国が言い出しているのは、北朝鮮を現状維持させ、いっそ中途半端な形でこのまま決着させたいからだと思います。トランプ氏が強硬路線をとっているのも彼の国内事情。しかし、中国への関税問題は本気です。実際の戦争ができない今、彼は中国と経済という手段で戦争し、つぶそうとしています。それがアメリカの世界中の権益をまもることになるからです。中国をここまで経済発展させたのもアメリカ、つぶそうとしているのもアメリカということです。

さて、書契事件で見せた朝鮮の日本に対する在り方は、こうした宙ぶらりんな、地政学的在り様とは違ったところから出たことのようにです。彼らの文化からいって、欧米を「洋夷」としたように、日本は「倭夷」でありました。今の韓国についてもよく言われる朝鮮小中華思想です。そしてこれは、朝鮮における近代的民族主義形成の基礎となってゆきます。

この朝鮮という国は、「朝鮮人が日本人をあつかうの6ヶ条の秘訣」なるものを策定しておりました。これは、日本でいえば江戸中期に作られたものであるようで、どういった人物が作ったかは不明です。しかし、このころから朝鮮人は日本人に対する交渉術なるものを編み出していました。

曾テ韓人 我ヲ待ニ 六條ノ秘訣アリト聞ケリ 偶 住永友輔 左ノ文ヲ得テ出セリ 果シテ 其 聞所ノモノナラン

朝鮮人待日本人六條

- 一 遜辭 屈己接人辞氣温恭
- 一 哀乞 勢窮情迫望人見憐
- 一 怨言 矢志慷慨激出怒腸

- 一 恐喝 将加威脅先試嚇動
- 一 閃弄 乘時幸會翻用機関
- 一 變幻 情態無常眩惑難測

右元禄年

- 一 謙遜する 自分を低くして接し言葉遣いも雰囲気もうやうやしくおだやかにする。
- 一 哀れみを乞う 困りきったような情をあらわし憐憫で見られるようにする。
- 一 怨みを言う 精神を失ったかのように憤ってはらわたから激しい怒りを出す。
- 一 恐喝 まさに威圧し脅しをかけておそれさせる。
- 一 閃くように弄する あらゆる機会を用い時に乗じて翻弄する
- 一 變幻 同じ態度をせず眩惑し推し量ることを難しくする。

これを見る限り、この国の民族性は今も変わっていないというほかはないとおもいます。

韓国に対して、日本の中で嫌韓の風潮が蔓延した時期、盛んに小中華思想について喧伝されました。先の書契問題の折にはもっと激しい論調がてんかきされ、征韓論が主張されました。そして、小中華思想について当時の日本の外交官がすでに下記のように報告しています。

朝鮮は明国から、その思想や法体系を全面的に導入した国である。つまりは、中国の傲慢自尊すなわち中華思想をまねたのであり、更に、明国が滅んだ後は朝鮮はもはや宇宙間における唯一聖教（儒教）賢伝の宗匠であるという自負があると。また、日本が国力において自国よりも上にあることを妬み、それらの感情から日本人自身が自尊心を持つことを快しとしない情がある。

こうした差別意識に満ちた作為をもって、書契問題は引き延ばしに引き伸ばされ、明治初年から7年間も受け取りを拒否されました。7年とは、日本政府も辛抱強いとおもいます。そうであっても、やはり憤る人もあって、そこから出てきたのが征韓論でありました。その征韓論が主張されるようになるまでに、日本各地から

「痛憤骨二至り」「屈辱」「非常ノ無礼」「朝鮮ノ傲慢無禮」

という過激な言葉が連なった建白書が出されるようになります。征韓論という字面をみると、まるで朝鮮を武力によって殲滅し、征服し、植民地化するといった風に見えますが、今の嫌韓論と同じで、要するに懲らしめてやるといった程度のものでした。このように熱くなった国民感情をより冷静に判断し、日本自体が暴発しないように、かつ朝鮮が地政学的に日本に有利であるように処理しようと考えたのが、西郷隆盛でありました。彼は、清の属国の地位に甘んじ、貧国弱兵の国となっている朝鮮を開明に向かわせ、独立国として、また中立の立場をとる富国強兵の国として発展するように説得しようとかんがえていたのです。西郷をずいぶんと持ち上げましたが、彼自身も、命もいらぬ、名もいらぬ人でしたから、熱くなった風潮の日本の針路をあやまらせないようにと考えたようです。

さて西郷は、自分が単身朝鮮に渡って宮廷で直談判して説き伏せる、それがかなわねば戦争だ、などという物騒なことを言い出します。その内心は解りませんが、交渉が決裂し、自分が殺されれば、それを名分として開戦すればいい、殺されなければ自決する、これも開戦の理由となると主張します。まさに決死の覚悟です。しかし、朝鮮からすれば、そのようなことは「倭奴の蛮勇」程のことで、たとえ西郷が腹を切っても格下の日本など取り合うほどのことではないと侮蔑、愚弄して終わったでしょう。それを見通したのが岩倉具視でありました。岩倉は西郷の意見に反対します。交渉が決裂し、西郷が朝鮮で憤死すれば、国民から人気がある西郷の死に日本が何もせぬわけにはいかなくなります。当然、朝鮮との戦争しかなくなります。そうすれば、朝鮮は必ず清に援軍を要請する。その当時、清は積極的に属国の内政外交にまで干渉しないことを建前としておりましたが、要請を受ければ宗主国として軍を出さざるを得ないこととなります。そして20年早い日清戦争、いや日清朝戦争となります。しかし、当時の日本にそれができる国力があるかと岩倉は考えました。そのとき、日本国内では既に征韓論賛成派の手によって西郷派遣が閣議決定され、天皇にまで上奏されておりました。さりながら、天皇は岩倉たち米国派遣組が帰ってから熟議した上で奏するように、と差し戻されます。そうして、岩倉達が帰国し、西郷派遣の閣議決定と岩倉の反対の意見を同時に上奏することになります。これによって天皇は即、岩倉の意見の嘉納を通知せられ、西郷派遣は無期延期を決定されたのでした。

しかし、征韓論は頓挫しましたが、朝鮮の日本蔑視はあらたまりません。この交渉の経過は当時の朝鮮の国内政治の在り様が深くかかわっておりました。この時期の朝鮮の実質的権力者は、かの興宣大院君でした。この大院君は、アヘン戦争などで宗主国の清が西洋列強から次々に侵食されていくのをそばに見ておりました。それゆえ徹底した外国排斥、鎖国路線をとり、激烈な攘夷を敢行し、「衛正斥邪（ただしきをまもり、よこしまなるものをしりぞける）」運動を展開したのでした。当時、西洋人は中華思想的には人間以下の獣類とみなされていました。その大院君から見れば、西洋と同化しようとする日本は、西洋の獣類に仲間入りをし、英仏の手先となって朝鮮に対して侵略してくるのではないかと思われました。だからこそ日本は「皇帝」と称して朝鮮を従わせようとしているのではないかと思ったのです。ここに、書契をはじめ国交も受け付けようとしない朝鮮側の理由がありました。大院君の意を受けて日本との交渉にあたる東萊府使や訓導らは大院君のその方針を実行し、それもすべて詐偽をもってあたるという姿勢で日本側と対峙続けていたのでした。

大院君とは朝鮮国王高宗の父親のことです。彼は、息子である高宗がまだ幼いという理由から、いわば院政を敷いて、権力をほしいままにしてきました。しかし、高宗が成人すると、この大院君を追い落とそうとする勢力が出現してきます。高宗の妻、閔妃（びんび）とその一族です。今もそうですが、朝鮮は政争の激しい国で、ひとたび地位あるものが出現すると親族が何らかの力やを得よう、利権を貪ろうと群がってきます。そして、この時台頭してきたのが閔妃の兄を中心とした閔氏一派でした。それまで高宗の摂政として豪腕を振るってきた大院君に対し、成人した高宗による政治体制への要求がつのり、明治6年（1873）ついに大院君は失脚します。そして、閔妃の義兄であり閔氏最高の実力者である閔升鎬が国政全般に参与するようになります。閔升鎬は開明派でした。ですから、これによって日本との関係も改善される方向に向かうこととなります。

ちなみに、実権をようやく手に入れた高宗は、日本との交渉経緯を初めて知ります。そして、大院君の腹心である東萊府使と、その部下である訓導や通事らが、詐偽を以って日本と接していたことに激怒し、「国王、即ち其書契の謄本を看て始て積年阻隔之上を知り、諸臣を譴めて云く。我国、数百年来、礼を日本に失せず。今猶、然く思いしに、豈凶らんや、其信義に反する、已に数年に及べりと。是、何等の事ぞや。諸臣、詳に陳するに依り、国王、盛怒。忽ち旧府使訓導等を法に抵し・・・」、東萊府使鄭顯徳と訓導安俊卿は斬首刑に処します。また通事崔在守は逃亡して捕らわれた時に服毒自殺します。しかし罰は財産や家族にまで及び、『拳家、老初と無く、数を尽して東萊府に縛送。家財、悉く没収せられ、殊に其妻、懐胎なりしに、猶、笞鞭を加えられ、肉破れ血迸るに至るといふ惨劇を招きます。大統領を殺す国という著作があります。今も変わらず、政権が変わると、前の権力者が断罪されます。これはもう政治風土でしょう。

朝鮮に深入りしすぎておりますが、清国を日本との関係で考える場合、朝鮮を抜きにはできないのです。朝鮮はそれほど重要な国でした。といっても飽くまで地政学的な意味だけで、当時の朝鮮はたとえ日本が植民地にして、さらに悪意をもって収奪しようとしても収奪するものはありませんでした。そのような当時の朝鮮については、日本語の資料を参考にすると、若干客観性が疑われますので、ここではあのイザベラ・バード女史の文章を信頼して引用してみます。

英国人女性旅行家イザベラ・L・バード女史は、1894年以降4回に渡り朝鮮各地を旅し他時のことを『朝鮮紀行—英国婦人の見た李朝末期』の中で、以下のように述べております。

都会であり首都であるにしては、そのお粗末さはじつに形容しがたい。礼節上二階建ての家は建てられず、したがって推定25万人の住民は主に迷路のような道の「地べた」で暮らしている。

路地の多くは荷物を積んだ牛同士が擦れ違えず、荷牛と人間ならかろうじて擦れ違える程度の幅しかない。おまけに、その幅は家々から出た糞、尿の汚物を受ける穴か溝で狭められている。酷い悪臭のすその穴や溝の横に好んで集まるのが、土ぼこりにまみれた半裸の子供たちと疥癬もちでかすみ目の大きな犬で、犬は汚物の中で転げまわったり、日向でまばたきしている。

古い都ではあるものの、旧跡も図書館も文献もなく、宗教にはおよそ無関心だったため寺院もない。結果として清国や日本のどんなみすぼらしい町にでもある堂々とした宗教建築物の与える迫力がここにはない

バード女史はこうした記述の中で、さらに李朝末期の朝鮮は「とにかく道が悪く、ほとんど貨幣制度もなく、世界有数の汚く悪臭のする都市だ」とも記しています。

文明人なら目と鼻を覆いたくなるような、凄まじく貧しい状況だったのである。こういった風だったというのです。このころはもう写真が一般的になっておりましたので、当時のソウルの様子が幾葉もの写真にのこされております。家屋はこの時代で

もまだ竪穴式の住居で、屋根は茅葺でした。道路もそれらしく整備されてはならず、もともと土地は国のもので、彼ら平民にはどうにもならない状態でした。

イザベラ・バード女史は朝鮮国の病弊についても見抜いておりました。それは、両班という身分制度でした。李氏朝鮮王朝時代には、良民（両班、中人、常民）と賤民（奴婢、白丁）に分けられる身分制度があり、両班はこのなかで最上位に位置していた貴族階級のことです。これについて、以下引用でこう述べています。

「朝鮮の災いのもとのひとつに、この両班つまり貴族という特権階級の存在がある。両班はみずからの生活のために働いてはならないものの、身内に生活を支えてもらうのは恥じとはならず、妻がこっそりよその縫い物や洗濯をして生活を支えている場合も少なくない。両班は自分では何も持たない。自分のキセルですらである。両班の学生は書齋から学校へ行くのに自分の本すら持たない。慣例上、この階級に属する者は旅行をするとき、大勢のお供をかき集められるだけかき集め引き連れていくことになっている。本人は従僕に引かせた馬に乗るのであるが、伝統上、両班に求められるのは究極の無能さ加減である。従者たちは近くの住民を脅して、飼っている鶏や卵を奪い、金を払わない。」

「当時はひとつの道に44人の地方行政官がおり、そのそれぞれに平均400人の部下がついていた。部下の仕事はもっぱら警察と税の取り立てで、その食事代だけをとってみても、ひとり月に2ドル、年に総額で39万2,400ドルかかる。総員1万7,600人のこの大集団は『生活給』をもらわず、究極的にくいものにされる以外なんの権利も特典もない農民から独自に『搾取』するのである。」

ついで、マリ・ニコル・アントン・ダブリュイ『朝鮮事情』より引用します。

「朝鮮の貴族階級は、世界でもっとも強力であり、もっとも傲慢である」

「朝鮮の両班は、いたるところで、まるで支配者か暴君のごとく振る舞っている。大両班は、金がなくなると、使者をおくって商人や農民を捕えさせる。その者が手際よく金をだせば釈放されるが、出さない場合は、両班の家に連行されて投獄され、食物もあたえられず、両班が要求する額を支払うまで鞭打たれる。両班のなかでもっとも

正直な人たちも、多かれ少なかれ自発的な借用の形で自分の窃盗行為を偽装するが、それに欺かれる者は誰もいない。なぜなら、両班たちが借用したものを返済したためしが、いまだかつてないからである。彼らが農民から田畑や家を買う時は、ほとんどの場合、支払無しで済ませてしまう。しかも、この強盗行為を阻止できる守令は、一人もいない。」

「両班が首尾よくなんらかの官職に就くことができると、彼はすべての親戚縁者、もっとも遠縁の者にさえ扶養義務を負う。彼が守令になったというだけで、この国の普遍的な風俗習慣によって、彼は一族全体を扶養する義務を負う。もし、これに十分な誠意を示さなければ、貪欲な者たちは、自ら金銭を得るために様々な手段を使う。ほとんどの場合、守令の留守のあいだに、彼の部下である徴税官にいくばくかの金を要求する。もちろん、徴税官は、金庫には金が無いと主張する。」

「すると、彼を脅迫し、手足を縛り手首を天井に吊り下げて厳しい拷問にかけ、ついには要求の金額をもぎとる。のちに守令がこの事件を知っても、掠奪行為に目をつむるだけである。官職に就く前は、彼自身もおそらく同様のことをしたであろうし、また、その地位を失えば、自分もそのようにするはずだからである。」

朝鮮と断りもなくこの呼称を使ってきましたが、もちろん李氏朝鮮のことです。韓国が建国したのは戦後のことですから、朝鮮は正式名称で、蔑称でも誤りでもないことをお断りしておきます。

それにしても、朝鮮の時代の身分制度をつまびらかにしようとすると、心が重くなってきます。(このおぞましさはどうだ!)それゆえ一行も文章が書けませんでした。

下級身分の呼称をまず挙げておきます。

七賤(しちせん)という言い方があります。これは高麗・李氏朝鮮時代の身分制度における賤民階級の総称で、商人・船夫・獄卒・逋夫・僧侶・白丁・巫女を指します。

ほかに、時代によって呼称も差別の内容も異なってきます。

李氏朝鮮末期には七般公賤といわれ、妓生(官妓・官卑)・内人(宮女。女官、医女)・官奴婢・吏族(胥吏)・馱卒・牢令(獄卒)・有罪の逃亡者をいいました。

さらに八般私賤と分けられ、巫女・革履物の職人・使令(宮中音楽の演奏家)・僧侶・才人(芸人)・社堂(旅をしながら歌や踊りで生計をたてるグループ、男寺党)・拳史(女連れで歌・踊り・芸をする人)・白丁という形をとるようにもなりました。これはかの国では厳密に定義され、施行されていました。彼らにとっては、孔子の唱えた儒教は

好都合だったのでしょう。社会を礼をもって治める。そのためには分をわきまえ、主に忠誠をつくす、この概念を理論化・体系化した孔子の儒教が、そのまま人を差別する免罪符になりました。

この賤民のなかに、奴婢といわれる階級があります。ところがこの奴婢にも官奴婢と私奴婢があり、官奴婢は、他の奴婢よりも地位が高く、良民と奴婢との中間ぐらいでした。しかし、ドラマで有名になった医女もこの官奴婢で、少し驚きです。

官であれ、私であれ、奴婢は主人の持ち物であり、時には市場で売買もされました。そして、生殺与奪の権は主人にあり、たとえ殺したとしても罰せられることはありませんでした。白丁も同様で、これも殺してもばっせられませんでした。

他に、身分制度の中ではありませんが、貢女というものもありました。これは太宗から孝宗の朝鮮王朝時代にかけて、明、清に九回、計146人が献上されています。しかし、記録に残っていない、中国の高官によって連れ去られたり、私的に献上されたこともあったようで、その人数は数千人にのぼったようです。公式のというのも変ですが

、正式の貢女を集めるときは美醜、処女性を吟味した集め方をしたそうです。しかし、中国高官に献上する貢女を集めるときは、兵や官吏が町を歩く女性を有無も言わず連れ去って行くという荒っぽいやり方をとったようです。そしてこの貢女はめったに帰国することはできなかつたのですが、帰ってくることがあると、彼女らは帰還女という蔑称でよばれ、家門からも捨てられた上に、あらゆる嫌悪・差別を受けました。

いまの韓国の描く慰安婦像に、日本人は違和感を感じはしませんでしたか。強制連行、のちに虐殺したと彼らは言います。いくら戦時中といえども、こうした行為と縁遠いのがにほんじんではなかったでしょうか。それから、慰安婦であったことが世間に知られたら、帰還女とよばれ、みだらな女として「あらゆる嫌悪・差別」を受けることになります。ですから、彼女らも暴虐日本の犠牲者を装うことで、それを逃れようとしたのではないかと思えます。韓国の人たちは自分たちの歴史の中から、こうしたストーリーを描いたのでしょう。

どこまでも嫌韓論になってしまいました。明、清という巨大な国家の衛星国であれば、これに従属し、表向きはあくまで逆らわず、従順を装わなければ生き残れません。それが朝鮮のお国柄を決めてきたのでしょう。朴槿恵女史の外交姿勢を思い出せば頷けます。

李氏朝鮮の最後の実力者、閔妃は日本と朝鮮、清との関係で逃すわけにはいきません。このあと閔妃について語ってみましょう。

閔妃の表舞台への登場は日清戦争の後でした。高宗の新政が始まり、大院君の政治への影響力が弱まると、それに乗じて閔妃とその一族が権力の座に居並ぶようになります。朝鮮はいつの時代も権力争いばかりに終始し、民のことは振り返られたことがありませんでした。日清戦争後の朝鮮では権力の座から滑り落ちたように見える大院君と、勝ったように見える閔妃とその一族の暗殺毒殺など手段も辞さない争いの時代だったと言えます。大院君は一線から引いたとはいえ、いまだ朝廷に影響力を残していました。それゆえ、権力争いは激烈であったわけです。

本稿は本来、日清戦争前後の清国を考察するつもりで始めたのですが、どうしても朝鮮に足を取られ、なかなか抜け出せません。しかし、日清戦争自体が、日本の望まない戦いであったのであって、それが朝鮮の取り合いであったことは明白な事実です。そして、その朝鮮の内では攘夷派であった大院君を廃そうとする側が開化派をとるだけで、心底から開化を望んで相対したわけではなかったようです。閔妃にとっては大院君が朝廷に残した財産を好き勝手に使い、閔氏一族が栄えればそれでよかったのです。そして、その財源が底をつくと民にさらなる重税を課し、官職を賄賂で売り、両班の身分も金で売って与えました。信じられないことですが、この身分制度は第二次世界大戦終戦まで続きます。当初約三パーセントしかいなかった両班が、終戦の時には国民の八〇パーセントをしめていたそうです。

そんな中、日本の朝鮮合併がはじまります。大陸はどこも一緒でした。識字率は低く、インフラはまったく整ってなく、日本にとっては台湾も朝鮮も重荷でした。日本はここに伊藤博文、井上薫などの重鎮を送ります。

伊藤博文、井上薫らによる日韓併合と朝鮮運営について考えるとき、今日の韓国からの反日についていわれなき言辞と切り合うのであれば、いまはもう古臭くて、幾たびも繰り返された謙韓論でおわってしまいます。謙韓論は言い尽くされて、繰り返すのも陳腐になってしまいました。やはりより自立した見解を持ち、右だの左だの、謙韓だのということからは無関係でかつ当時の朝鮮をリアルタイムに見た証言を見てみたいと思います。そうした観点から見れば、やはりイザベラ・バード女史の朝鮮紀行が第一級の証言になります。導入部としては長い引用になりますが、以下ご一読を。

日本人はかつてイギリスがエジプトに対して行ったように、朝鮮の国政を改革するのが自分たちの目的であると主張した。たしかに自由裁量が許されていたなら、彼らはそれをなし遂げたはずだとわたしは思う。とはいえ、改革事業は予想をはるかに越えて難航し、井上伯（引用者注：井上馨）がほぼにっちもさっちもいかない状態にあることは明らかだった。伯爵は「使える道具がなにもない」と考え、それをつくれたらという希望のもとに、上流階級の子弟多数を二年の予定で日本に留学させた。最初の一年は勉学に努め、つぎの一年は官庁で実務の正確さと「道義の基本」を学ばせるのがねらいである。

朝鮮人官僚界の態度は、日本の成功に関心を持つ少数の人々をのぞき、新しい体制にとってまったく不都合なもので、改革のひとつひとつが憤りの対象となった。一般大衆は、ほんとうの意味での愛国心を欠いているとはいえ、国王を聖なる存在と考えており、国王の尊厳が損なわれていることに腹を立てていた。官吏階級は改革で「搾取」や不正利得がもはやできなくなると見ており、ごまんという役所の居候や取り巻きとともに、全員が私利私欲という最強の動機で結ばれ、改革には積極的にせよ消極的にせよ反対していた。政治腐敗はソウルが本拠地であるものの、どの地方でもスケールこそそれより小さいとはいえ、首都と同質の不正がはびこっており、勤勉実直な階層をしいたげて私腹を肥やす悪徳官吏が跋扈〈ばっこ〉していた。

このように墮落しきった朝鮮の官僚制度の浄化に日本は着手したのであるが、これは困難きわまりなかった。名誉と高潔の伝統は、あったとしてももう何世紀も前に忘れられている。公正な官吏の規範は存在しない。日本が改革に着手したとき、朝鮮には階級が二つしかなかった。盗む側と盗まれる側である。そして盗む側には官界をな

す膨大な数の人間が含まれる。「搾取」と着服は上層部から下級官吏にいたるまで全体を通じてのならわしであり、どの職位も売買の対象となっていた。

ここでの当時の朝鮮についての考察は、この文章に依存していたといわざるをえません。

イザベラ・バード女史は閔妃とも面会し、その印象を下記のように語っています。

王妃はそのとき40歳を過ぎていたが、ほっそりとしたとてもきれいな女性で、つややかな漆黒の髪にとても白い肌をしており、真珠の粉を使っているので肌の白さがいっそう際立っていた。そのまなざしは冷たくて鋭く、概して表情は聡明な人のそれであった。（中略）話はじめると、興味のある会話の場合はとくに、王妃の顔は輝き、かぎりなく美しさに近いものを帯びた。

ついで国王にも謁見しております。

国王は背が低くて顔色が悪く、たしかに平凡な人で、薄い口ひげと皇帝ひげを蓄えていた。落ち着きがなく、両手をしきりにひきつらせていたが、その居ずまいやものごしに威厳がないというのではない。国王の面立ちは愛想がよく、その生来の人の好きはよく知られるところである。会話の途中、国王がことばにつまると王妃がよく助け舟を出していた。

どのときもわたしは王妃の優雅さと魅力的なものごしや配慮のこもったやさしさ、卓越した知性と気迫、そして通訳を介していても十分に伝わってくる話術の非凡な才能に感服した。その政治的な影響力がなみはずれてつよいことや、国王に対してもつよい影響力を行使していること、などなどは驚くまでもなかった。王妃は敵に囲まれていた。国王の父大院君を主とする敵対者たちはみな、政府要職のほぼすべてに自分の一族を就けてしまった王妃の才覚と権勢に苦々しい思いをつのらせている。

王家内部は分裂し、国王は心やさしく温和である分性格が弱く、人の言いなりだった。そしてその傾向は王妃の影響力がつよまって以来ますます激しくなっていた。（中略）しかし不幸にも、また国にとってはさらに不幸にも、その声明が国の法となる立場の人間にしては、彼はあまりにも人の言いなりになりすぎ、気骨と目的意識に欠けていた。最良の改革案なのに国王の意志が薄弱なために頓挫してしまったものは多い。絶対王政が立憲政治に変われば事態は大いに改善されようが、言うまでもなく

それは外国のイニシアチブのもとに行われなにかぎり成功は望むべくもない。

国王は統治者としてはきわめて勤勉で、各省庁の業務全般について熟知し、膨大な報告と建白を受け、政府の名のもとに行われるすべてのことがらを気にかけている。細部を仔細に考慮することにかけては国王の右に出るものはいないとはよく言われることである。同時に国王は全体的にものごとを把握することには長けていない。あれだけ心やさしい人であり、あれだけ進歩的な考えに共鳴する人なのであるから、そこに性格的な強さと知性が加わり、愚にもつかない人々の意見に簡単に流されることがなければ、名君になりえたであろうに、その意志の薄弱な性格は致命的である。

バード女史はこうして3週間の間3度にわたって謁見し、好人物だが意志薄弱で人の言いなりの国王、キレ者で王を良いように操る王妃、実権を閔妃から取り戻すべく陰謀を企てる国王の父・大院君という評価を得て、彼らを中心に繰り広げられる王族たちの王権内部の権力争いに国政の混乱の元を見ます。そして民は困窮し、疲弊しつくしてゆきます。その中から、閔妃暗殺事件が起こってしまいます。

閔妃暗殺事件の前に、もう一度両班について記しておきます。これを理解しておかなければ、朝鮮を、ひいては現在の韓国を理解できないからです。これを解説している文章は多々ありますが、持って回ったものばかりで、適切に言い当てたものは見かけません。そのなかでも、端的に言い切っている文章を引用します。

両班はやんばん、と訓む。高麗時代に役人の文官を文班（ムンバン）、武官を武班（ムバン）と呼び、その両者をあわせ、官職に就いている人を両班といった。

どこに違いがあるのかといわれそうですが、朝鮮という国家の成り立ちは両班の内、文班が圧倒的に力を持っていて、武班はお添え物ほどでしかないといういびつな形でした。朝鮮は文官による官僚政治で成り立っていて、武人による封建支配のなかった国家でした。この封建時代がなかったことが、朝鮮という国の在り様を今日まで強く性格付けしています。一つには、古代と言っていい時期に成立した絶対王政が近代まで続いたこと。朝鮮の歴史に、この絶対王政を否定し、別の政体を形作ったことは一度もありませんでした。それゆえ、彼らの歴史の中で王政は自分自身のアイデンティティを認識する唯一の価値体系でした。もっとも、官僚に都合の悪い王は毒殺暗殺も行った歴史はあります。さりながら、王様を打倒しても、王政はそのまま存続させてきたのでした。そして、そのなかで官職を得、出世することが最大の価値であったわけです。

もうひとつ、武人は文官官僚の下働きほどでしかありませんでした。軍と軍人は朝鮮では必要ともかんがえられていなかったようなのです。まず、朝鮮は侵略されたことがなかった。そして侵略されるという想定もされてなかった。いやいや豊臣秀吉が攻めたじゃないかと言われそうですが、確かに攻めました。今の韓国は、それさえ日本の侵略だと言い張ります。その文禄の役で、秀吉軍は上陸するや一気に攻め上がり、釜山から漢城（現在のソウル）に向けて進撃したのですが、連戦連勝でした。その時朝鮮国王は漢城をすて、平壤へ向かったのですが、三日に日本軍が漢城に入ると、朝鮮軍はすでに退却し、漢城は火をかけられて焦土と化していたそうです。こうして、秀吉軍は抵抗らしい抵抗も受けず漢城を落とし、平壤も手中にしたのでした。

ではどうして秀吉軍は敗退したのでしょうか。日本軍の悪弊です。伸び切った補給線が原因で、十分な物資補給を受けられなくなってきたこと、またその年、朝鮮の地は

飢饉に見舞われて食料を現地調達できなかったことが主な原因でした。当時も中国は清の時代でしたが、清国自体、朝鮮に出兵することには乗り気ではありませんでした。しかし宗主国としてしないわけにもいかず、形だけ整えて出てきてたようです。しかし、秀吉軍の強さに当たらず触らず様子見でおわらせていました。そうしたなか、飢えに負けて、秀吉軍は和睦をし、撤退したのです。

文禄の役を多く語ってしまいましたが、日韓併合の前には陸軍役二万人、海軍ほんの僅か、といった程度でしたが、これも記録の上だけのことで、じっさいは一般農民を徴兵し、訓練らしい訓練も施さず、形だけの軍を保持していたのです。のちに日韓併合で伊藤博文が軍を解散させますが、その時、陸軍は九千人ほどだったと記録が残っています。

軍事力の保持について、封建時代を経験しなかった朝鮮は、このような状態であったわけですが、封建制を経なかったことで朝鮮に欠落した社会的ファクターが、もう一つあります。土地私有制がなかったということです。これは重大な意味を持ちます。朝鮮では土地はすべて国王のものでした。そして、その土地は国民に均等に貸し与えられ、そこからの収穫物はすべて国王のものでした。封建制を経て荘園制が生まれ、土地大名の領地が何万石と数えられ、地主と小作が生じて土地私有の概念が根付いた日本と違い、朝鮮にはそんなことはなかったのです。ですから、王様の土地からより多くの収穫物が得られても両班たち土地管理者に取り上げられ、新たに土地を開拓してもそれは王様のものになってしまい、社会の成長につながる国民の意欲はなかったのです。つまり、成長なき社会というのが朝鮮でありました。

軍事力を持たない、成長意欲のない国家というのが朝鮮の実態でありました。美辞麗句で文章を飾り、巧言令色をもってこびへつらう官僚政治に終始する文班が人民を収奪してやまない国家像が見えてきます。中国と同じ科挙の制度を持ち、官僚支配を維持し続けた朝鮮王朝は王が絶対君主でした。この国家像が今の韓国の大統領制にそのまま移植されているように思われてなりません。今も立身出世した人間が出ると、一族がそれにまわりつき、国家から私利私欲をむさぼるのが習いの国です。これすらも朝鮮の時代から続いてきたことでした。

いつまでも触れないでおくわけにはいかないのが、閔妃暗殺事件です。1895年10月8日早朝にその事件は勃発します。乙未事変といいます。国際的な陰謀の常で、事の真相は解りません。事実のみを記すると、日清戦争翌年、朝鮮国王王妃であった閔妃に不満を持つ大院君や開化派勢力、日本などの勢力によって、閔妃は景福宮で暗殺され、遺体も焼却されました。この事件については魑魅魍魎の跋扈するさまが見え、悩ましいのですが、角田房子女史による閔妃暗殺一朝鮮王朝末期の国母という書籍が出ています。その本の表紙の装丁に閔妃らしき女性の写真が使われています。これはどうでしょうか。当時の貴人の正妻、妃、后は写真をとらせませんでした。この本に使われている画像も、当時朝廷につかえていた女官とほぼ断定されています。ではどの画像が閔妃なのかといろいろ追及されていますが、あいにくと断定されていません。そのような経緯はたぶん角田女史も知っているでしょうに、なぜこうした写真を使ったのでしょうか。と、また蛇足に走りました。結論として、角田房子女史はこの本の中で実質的に三浦公使単独首謀説をとっています。

崔文衡氏の、閔妃は誰に殺されたのか一見えざる日露戦争の序曲にあっては、日本が閔王后を殺害せざるを得なかった歴史的背景を国際関係から把握することを目指した研究書といった趣きで、井上馨首謀説を取っています。

金文子氏による朝鮮王妃殺害と日本人―誰が仕組んで、誰が実行したのかは、大本営黒幕説をとっています。

杉村濬氏による 明治廿七八年 在韓苦心録は研究書でもなく、読み物でもない、いわば資料集であって、杉村濬氏による回想録でもあります。その杉村濬氏は、閔妃殺害事件の重要な関係者の一人、在京城日本公使館の一等書記官で、1880年の最初の渡韓から、95年の閔妃殺害事件後に帰国させられるまでの約15年間、朝鮮に在勤しておりました。そして、この期間中の特に日清戦争期の明治27・28年に限定してこの回想録

を書いております。その杉村氏によれば、日本はあくまで大院君入闕による親露派追放・親日派政権樹立が目的であり、その目的のために三浦公使と杉村・岡本らが協議して王宮乱入を実行したものであって、閔妃殺害は日本人壮士輩を入れた結果、彼らの先走りによって生じた派生的な事件であった、としています。

これら、閔妃暗殺についての読み物、研究書、資料等を検証するにとどめて、犯人捜しは終わりにしたいと思います。この事件については相当いまわしい伝聞が流されていますが、それには触れないでおきたいからです。もはやそれらは、否定も肯定もできない過去のことになってしまいました。

ただ、閔妃という人には、名前がなかったことは付け加えておきます。閔妃というのは、閔氏からでた王の妃ほどのことで、この人の名前ではありません。というのも、朝鮮には戸籍がなかったからです。したがって、何かの呼び名はあったかもしれませんが、閔致祿の娘ほどのことしか、正式名称はありませんでした。戸籍については、日本が統治を始めてから作られたものでした。

さらに付け加えておきます。朝鮮は独立国家ではありませんでした。これは朝鮮国を貶めるために言うのではなく、冊封国であって、その意味では属国であったわけです。日本は自国の安全保障のために清と戦い、下関条約で朝鮮の独立を認めさせたのでした。下関条約に、朝鮮国が完全無欠なる独立自主の国であることを確認し、という一文をわざわざ入れております。こうして、清の朝鮮に対する宗主権を奪ったのが日清戦争だったのです。

いつまでも朝鮮にとらわれて、いつまでも進めなかった作業もようやく本来の道筋に戻れそうです。清国、特に日清戦争を中心とした時期の清国を考えてみたいと思います。しかしそのためにはもう一度朝鮮に目を向けなければなりません。

朝鮮という、いわば制限行為能力者のごとき国家は、宗主国に自国の騒乱鎮圧さえ頼らなければなりませんでした。東学党の乱から始まる朝鮮の動乱にあたって、朝鮮軍は東学党の軍に敗退に敗退を重ね、鎮圧するすべもなく、朝鮮国王は清国に援軍を求めます。清国は日本に、朝鮮に進駐する旨を伝えるのですが、同日、日本も朝鮮に自国民保護を理由に進駐すると通告し、ソウルに進軍してきます。ところが、日本軍がとて「自国民保護」に止まらない行動を取り出します。そのことについて、もう一度イザベラ・バード女史は次のように書いております。

なんと好都合な干渉の口実を東学党は日本にあたえてしまったことか。朝鮮にとって国の存亡に関わり、外交的に最重要な意味合いを持つ疑問は「日本の目的はなにか。これは侵略ではないのか。日本は敵として来たのか、味方として来たのか」であった。

極東政治情勢の学徒ならだれしも、この日本軍の巧妙かつ常軌を逸した動きが済物浦やソウルの日本人街を守るためにとられたものではないこと、とって朝鮮に対してとられたものではないことがわかっていたはずである。日本が何年も前からこのような動きを計画していたことは疑問の余地がない。朝鮮の正確な地図を作り、飼料や食料についての報告書を作成し、河川の幅や浅瀬の深さを測り、三ヶ月分ものコメを朝鮮で備蓄していたのだから。

どう見ても日本は朝鮮において完璧に清国の裏をかき、清国人のあいだにはパニックが広がった。日本軍がソウルにあらわれるや、清国弁理公使館、清国領事館関係家族の女性30人が帰国の途につき、わたしが済物浦に到着した日には、800人の清国人がこ

の港を発った。

その日わたしが泊まっていた清国人経営の旅館は興奮のるつぼでふだんは静かで控えめな従業員たちが不安に顔をゆがめてわたしの部屋におしかけ、どんなニュースを仕入れたか、いったい何が起きているか、清国軍は今夜こちらに着かないか、イギリス艦隊は助けに来てくれないのか等々と聞いた。（小略）そのあいだにも、厳格に統制された折り目正しい矮人（こびと）の大隊は着実にソウルへと進軍しつつあった。

これが日清戦争の前夜でありました。

たとえ制限行為能力者とか禁治産者と言われようと、朝鮮王朝も外国の手を借りて農民の起こした反乱を鎮圧するのは恥だとおもったはずです。それでも東学党の乱をどうしても治められなかった朝廷は清に対して援兵を要請します。それに対して清は天津条約に基づき、日本に朝鮮への出兵を通告します。日本はこれに呼応し、と言うより、清の兵の到着より前にソウルに進軍してきます。それが前回のバード女史の引用の主な内容でした。さらに、ここでいう天津条約とは、

1884年12月に朝鮮において発生した甲申（こうしん）政変によって緊張状態にあった日清両国が、事件の事後処理と緊張緩和のために締結した条約

でありました。天津条約については、他の諸外国と清が結んだ条約がありますが、ここでは日本側全権が伊藤博文、清国側は李鴻章によって締結されたものをいいます。そして、これには

将来朝鮮に出兵する場合は相互通知行文知照を必要と定める。派兵後は速やかに撤退し、駐留しない

という条項があり、これによって清国は通知してきたのであり、日本も自国民保護を理由に出兵したのです。日本はこの日をあらかじめ想定していたと思われます。そして、それぞれの軍がソウルにやってくる様子を、イザベラ・バード女史は綴っています。

奉天に向かうすべての道路は兵士でごった返した。行進とはほど遠いだらだらとした歩き方で、10人ごとに絹地の大きな旗をかかげているが、近代的な武器を装備している兵はごくわずかしかない。正確無比の村田式ライフル銃を持っている日本軍を相手に、このような装備の兵を何千人も送り出すのは殺人以外のなにものでもない。兵士もそれを知っていた。

医療設備も救急隊もなく、傷病兵は身ぐるみはいで置き去りにするのが清国の習慣で「傷病者には用がない」。兵站部はまったく無能であるばかりかとんでもない不正

を働き、物資が集められても請負人がそれを売って自分の儲けにしてしまう。したがってあらかじめ用意された食料や飼料はほとんどなく、ほんのしばらくで兵士たちは勝手にものを盗み出し、ウマや輸送用のラバを食べ始める。

と、当時奉天に滞在していた女史は語っています。そして、

戦地に向かう清国兵の装備のお粗末さ、戦意の低さを証言しています。

李氏朝鮮も末期でしたが、清朝も末期でありました。清を統治していたのは満州族、光緒帝でありました。そして、皇帝をしのぐ最高権力者が西太后でした。

ろくな装備も持たない、士気も低い、そんな清国の兵がどれほどの働きができるのでしょうか。数こそ大軍であっても、もはや近代戦の時代に突入していることは、軍の中樞でなくとも解っていたことです。さらに、清国はこれまでも越南でフランス軍に敗北し、イギリスとも交戦の結果、様々な時期を経て香港島の各部を割譲し、ついには九十九年間租借する羽目におちいるという事態になっておりました。そしてさらに日清戦争に敗北し、清国は欧米列強の草刈り場となっていきます。それを必死に支えていたのが西太后と光緒帝でした。清国の朝廷はこの二人の間の緊張関係で微妙に揺れ、ついには崩壊に導かれてゆきます。紫禁城は清王朝の幻のようなものでした。

その前に、日清戦争の経緯を追ってみますと、清国ばかりでなく、日本まで介入してきたことに朝鮮政府は驚き、恐怖します。また、農民軍もこの事態を想定外のことと慌てふためき、朝鮮政府といったん講和することに同意しました。この講和によって、日本と清国の出兵はその理由を失うこととなり、両国は交渉の末、同時に撤兵することになったのです。しかしここで日本はこの機会を逃すと大陸、特に朝鮮半島の足がかりを失うことになるとして、この合意を破棄します。これを指示したのは陸奥宗光外相でした。彼は清国との開戦の口実をさぐっていました。日本側は合意を破棄したのち、代案として、両国で朝鮮の改革に当たることを提案します。これを清国は拒否するだろうことは解っていました。こうして日本軍はソウルに居座り続け、陸奥は大鳥圭介公使に対し「いかなる手段を取ってでも開戦の口実を作るべし」と指令し、さらに王宮を急襲し国王を幽閉し、国王の父・大院君をかついで支配権を握らせるといふ強引な手段に打って出ます。かたわら日本は、巡洋艦浪速が清国兵を乗せたイギリス輸送船を撃沈します。くわえて、牙山の戦いで日清両国の陸軍による戦闘が行われ、やっと宣戦布告がなされたのでした。

日清戦争をもう一度整理してみますと、一八九四年から一八九五年にかけての戦争でした。これを日本側からみますと、明治二七年七月二五日から二八年三月ということになります。このとき、清国のGDPは日本の四倍でした。ちなみにもう一度、清国のそれまでの主な戦争履歴とGDPの比較を振り返ってみます。

一八二〇年において清国のGDPは英国の約七倍だったが阿片戦争に敗北した。

一八七〇年、清国は英国の1.8倍のGDPで、英仏合わせても清国には届かなかったが、英仏連合の円明園攻撃を阻止できなかった。

一八八四年から八五年の、ベトナムにおける越南戦争では、清国はフランスの二倍以上のGDPであったが、これも敗北した。

といったことでした。清国は乾隆帝の折には世界のGDPの半分以上を占めておりました。それがなぜ敗北に敗北を重ねたのか。日清戦争は中国における秦の始皇帝から始まる、王朝による二千年の支配を終わらせるきっかけになった戦争でありました。清はまるでよく太った豚のように、欧米列強に切り取られてゆきます。それを必死に支えたのは光緒帝ではなく、西太后という一人の女性でした。この人を世界三大悪女と言いつける向きもあります。しかし、このイメージを世界に喧伝したのがイギリスの職員であったことは、よく知られたことでした。名をエドモンド・バックハウスといいます。彼は、こんな悪女が支配する国だから、イギリスがこの国の民を救うために戦うのは正義だよねというプロパガンダを世界に広める役割を担っていたのでした。もちろん、これはイギリスの国策でした。まるでベトナム戦争での米国の正義の主張と同じ手法に見えてきます。イラクもフセインの打倒に大量破壊兵器、とりわけ毒ガスを持っているとかの国は主張し、日本の某総理は単純にすぐ支持しました。ベトナム戦争でのキッシンジャーの役割は忘れていません。ベトナム戦争の終結によって彼はノーベル平和賞を受けています。しかし、この和平のために彼は何をしましたか。それまでに倍する北爆と機雷封鎖、中国ソ連をベトナムから離反させる、こういった超大国だからできるパワーポリティクスを駆使して、米国の最後の国益を守ったのがこの人でした。

よこみちにそれてしまいました。

西太后という人は満州族の中流役人を親に持つ、さほど美人でもない普通の女の子でした。ただ一番最初に生まれた子どもが、それが男の子であろうと女の子であろうと家を継ぎ、一族を守っていくという長子相続が満州族の伝統でした。それゆえでしょうか、幼名は蘭兒、彼女は父によって厳しく学問を教え込まれ、書もよくしました。それゆえか、紫禁城には西太后の手になる扁額が数多くかけられています。また、当時の女性にしては珍しく公文書の読み書きが出来ました。それもまた、このような家庭環境によるものであったからでしょうし、これが彼女をして約五十年、清の最高権力者たることを可能にしたのでしょう。しかし、絶対権力であったかどうかは疑問なところではあります。

それにしても、たかが地方役人の子として生まれた女性がどうして清国の最高権力者にまでのぼりつめられたのでしょうか。清の皇帝は、台湾旅行の折にも触れましたが、神様より偉かったのです。西太后がそうやってゆくには、想像もつかない権力抗争があったとおもいます。

その第一歩が、一八五一年とも五二年ともいわれておりますが、選秀女への参加でした。この選秀女というのは、皇帝の皇后や貴妃を決めるための催しで三年ごとに催されます。その時彼女は十七歳。約二千人の応募があったそうです。選考はまず面接によって行われます。彼女はの中で最終選考に残り、そのあと最後に10人ほどの秀女（皇后候補）にも選ばれ、宮中に入りました。この時彼女は十人中三位でありました。この順位でかの女の位は三番目の序列の貴人であったそうです。そして、この順位による身分差は一生変わりません。それゆえ、正室と側室の皇后二人がともに皇太后となってからも上位の人が東太后となり、側室の彼女は西太后となって、その差が埋まることはありませんでした。

宮中に入って三年、彼女は無事男子を出産します。のちの同治帝です。それはさておき、咸豊帝は即位すると政治に興味を持たず、芝居と阿片と女色におぼれ、そのうえ元々虚弱体質であったせいも、結核にかかり、三十一歳で崩御されます。

この時期、清国は諸外国の侵略にさいなまれておりました。西太后が皇子を出産したころには第二次阿片戦争に敗北します。イギリスの宣戦布告の理由はアロー号事件にありました。これはアロー号という海賊船がイギリスの国旗を掲げて、治外法権の傘のもとにアヘンの密輸入をしていたのですが、清軍はその船をだ捕し、掲げてあったイギリス国旗を引き降ろしたという事件でありました。まさに清国としては国家として当然の行為を行っただけでした。ところが、これが国家侮辱罪に当たるとしてイ

ギリスの怒りを買って、戦争の大義名分になります。つまりイギリスに絶好の口実を与えてしまったのです。イギリスはフランスを誘い艦隊を送って各地を砲撃して清王朝を脅かし、ついに不平等条約を強要するまでに追い込みました。ところが、この和平交渉が妥結せず、英仏軍は北京に攻め上ってきます。この時、清国の騎兵隊は英仏軍にいいようにあしらわれ、敵の発砲と同時に怖じ気づいて敗走し、その多くは敵に思うままに蹂躪されてしまったと言われています。日清戦争の初戦もそうでした。そしてこのとき、咸豊帝は北京を脱出して熱河（ねっか）にある山荘に逃避してしまいます。こうした状況を生んだ咸豊帝ですから、のちに暗帝と酷評されます。

北京を逃げ出した咸豊帝は、英仏との交渉に弟の恭親王に当たさせます。この咸豊帝の弟である恭親王は、この先西太后と深くかかわります。というのも、この恭親王の正室は、西太后の妹でありました。そえゆえ、西太后は二代先の皇帝にこの恭親王の皇子を擁立します。光緒帝がその皇子です。

西洋列強が清国やインドといったアジアおよびアフリカに手を伸ばし始めたのは、イギリスの産業革命ゆえでした。他の列強も半世紀をおかず、イギリスと肩を並べる先進国に仲間入りをします。この産業革命は大量の生産物を市場に溢れんばかりに送り出します。この市場いっぱいにあふれた生産物は消費されねばなりません。と同時に、ものを生産するための原材料を調達しなければなりません。ものを消費させ、原材料を手に入れるために、西洋列強は科学技術の進展によって得られた近代的軍事力を背景に、清国やインドに進出していきます。植民地時代の幕開けでした。そして特に清国は格好の獲物でありました。清国は西洋列強の餌食になります。

当時清国は人口四億の民を抱え、かつ、広大な領地を支配する超大国でありました。この一見超大国の清が、インド洋を渡ってきた数隻の軍艦と軍隊に駆り立てられ、次々と敗北を重ね、まったく理不尽な不平等条約を締結させられます。

阿片戦争は、清国にさらなる社会的腐敗と混乱をもたらします。イギリスが清国に持ち込んだインド産の阿片は、さらに清国国内を墮落させます。アヘンの支払いには銀を要求されました。ところが清国の農民は税を銀で治めなければなりませんでした。しかし、膨大な量の銀が流出して、銀価格は暴騰し続けます。このため、農民の生活は堪え難いものになっていきました。そのうえ、官僚や軍隊にも阿片はまん延し、腐敗と質の低下はこの上なくなります。こうして2百年の間、中国を支配し続けて来た清王朝は、内外に手の施しようのない悪病を抱えた、足もよろぼう不随の大国になってしまいました。

これが阿片戦争から日清戦争、そして清国滅亡までの歴史です。朝鮮の要請により、清は兵を送ります。これに西太后は消極的でした。しかし、たかが日本と侮った気持ちもありました。あの小兵の何するものぞといった雰囲気は朝廷を取り巻いていたのです。それゆえ光緒帝は開戦を決意します。しかし、小兵のこぶしは硬かった。清国の総司令官は、西太后の寵臣、李鴻章でした。彼は葉志超提督を総指揮者として四軍を平壤に派遣します。ところが、この葉志超提督はあの牙山の戦いに敗走した将軍でした。そして今度も、「敵襲」との声で味方同士が発砲し、同志討ちで死者20人・負傷者100人前後を出してしまい迎撃作戦が失敗、さらに、次第に迫ってくる日本軍を見て、完全に包囲される前に撤退しようと各将軍に提案し、とっとと逃げ出します。そういった有様の中で、一人気を吐いたのが左宝貴将軍でした。彼は奉天軍を率いて1日本陸軍と交戦、ここで戦死します。戦後、左宝貴が倒れた付近に、日本人の手により柵が組まれ碑が建てられます。碑文には、「奉天師団総司令官左宝貴ここに死す

」 「平壤にて日本軍と戦うも、戦死」と記されたのでした。

イザベラ・バード女史もこのことは以下のように記しています。まずバード女史は左将軍の率いる軍について記録しています。

奉天を発った最初の軍隊のなかに騎兵5000の奉天旅団があった。これを率いる左将軍は勇敢かつ熟練した武官で、恐れられると同時に信頼もされていた。彼が平壤で敵兵と対して斃れた時、その死は隊の士気をくじき、日本軍は碑を立てて彼を讃えた。左将軍の率いた旅団は統率が行き届き、高度に訓練され、全般的に武装状態も良好だった。

左将軍が規律正しい旅団とともに出発したあとは無秩序がはびこり、頼りになる兵士がわずかしかいない高級将校はみずからの身辺を警戒するようになった。

そして、碑文については、

敵軍の名将に捧げた品位のある賛辞

と評したのでした。

敵襲の一声で大混乱のうえ、同士討ちして早々に撤退するなぞ、まるで平家の富士川の戦いのさまそのままのような気がします。

その夜の夜半ばかり、富士の沼に、いくらも群れ居たりける水鳥ともが、何にか驚きたりけむ、ただ一度にばつと立ちける羽音の、大風、雷などの様に聞こえければ、平家の兵ども、

「すはや源氏の大勢の寄するは。斎藤別当が申しつる様に、定めて搦手もまはるらむ。とりこめられてはかなふまじ。ここをば退いて尾張河洲侯を防げや。」

とて、とる物もとりあへず、我先にとぞ落ち行きける。あまりに慌てさわいで、弓とるものは矢を知らず、矢をとるものは弓を知らず。人の馬には我乗り、わが馬をば人に乗らる。あるいはつないだる馬に乗って馳すれば、杭をめぐることに限りなし。近き宿々より迎へ取つて遊びける遊君遊女ども、あるいは頭蹴割られ、腰踏み折られて、をめき叫ぶ者多かりけり。

どこの戦も同じでしょうか。はじめから戦意を喪失している軍の慌てぶりは、ともにぶざまです。余計なことでした。

すこし時系列が前後しますが、咸豊帝崩御の後、西太后の生んだ皇子が同治帝として後を継ぎます。しかし、同治帝はまだ六才でありました。このとき生母の西太后には皇太后の称号が授けられ、正室である皇太后と同格となりました。そして正室は東太后、彼女は西太后と呼ばれ、東太后とともに政務を代行することになります。

しかし、本当に政治の実権を握るまでには紆余曲想がありました。この時期、肅順という咸豊帝の側近の人物がクーデターを決行して権力を手中にしようとし、しかし、それを察知していた西太后に阻止されます。彼が咸豊帝の棺を北京に輸送中の所を西太后・恭親王奕訢らによって逮捕され、斬首刑に処されました。処刑の際、都

の人々は瓦礫を投げつけて快哉を叫んだという評伝が加えられていますが、どうなのでしょう。彼は満州族のみならず、漢人からも人を選出して重職につかせたり、汚職に厳しく対処してもおりました。それゆえ既存の官僚からはおおいに煙たがられていたようです。しかし、西太后は彼を除くことで実権を握りました。この肅順、汚職に厳しく対処したことで咸豊帝の側近に引き上げられたのですが、これも今なにやら繰り返されていることと同じに見えます。かたわら、このことによって西太后は紫禁城の権力争いに勝ち抜くすべを覚えたのでした。

西太后はこの後絶対権力者として君臨するのですが、それは結果としてそうなったというだけのことで、この人自身は権力を握り続けたいとは思っていなかったようです。じじつ、同治帝が十八才になると、政権を彼にゆだねています。ところがこの人は英仏軍との戦いによって国家財政はひっ迫していたのですが、それでも英仏軍によって破壊された円明園を莫大な費用をかけて修理しようとしています。のちに頤和園についても同じことが繰り返されますが、それは後のことです。円明園修理に対して、西太后は帝をいさめて工事を中止させます。ところが、同治帝は一年ほどして天然痘により崩御されます。

西太后は自身の妹の皇子、光緒帝を五才で即位させます。

光緒帝が五才で即位すると、西太后は東太后とともに光緒帝の後見として垂簾聴政を行いました。ところが東太后は政治にほとんど関心がなく、同治帝の時と同じく西太后と恭親王の二頭政治が続きました。そうしたなか、四十五歳で東太后が突然死去します。これも色々噂されますが、現在は脳卒中であったと考えられています。また、宗室の実力者恭親王については、清仏戦争敗北の事後処理に際し、開戦に危惧を表明していた彼に責任を被せ、失脚させます。これによって、西太后の権力は絶対になったのでした。こうした経緯の中、西太后と光緒帝の中は相性が悪く、次第に険悪になっていきます。

それでも光緒帝が成年に達すると、西太后は表舞台から身を引き、光緒帝の親政が始まることとなります。さりながら、三年間は訓政による政治の後見を行うということが条件でした。そして自身の姪を光緒帝の皇后に推挙しています。皇后は光緒帝のいとこということとなります。ここに、珍妃がでてきます。光緒帝は珍妃を溺愛しておりました。のちにこうした経緯が、西太后が紫禁城を脱出する際の珍妃を井戸に突き落としての殺害という事件につながります。これは、義和団の乱の最中に、西太后の命により、宦官の崔玉貴の手によって井戸に投げ込まれて殺されるという事件でした。

日清戦争の際、西太后は消極的だったのですが、光緒帝はことごとく強硬策を主張します。しかし、戦争はほぼ一方的な敗戦でした。特に北洋艦隊の敗北がこの戦争の勝敗を決めました。この艦隊を新編成は、清国をたてなおそうと始まった洋務運動の一環でありました。

光緒帝親政の御代に、清国にとって重大な国難と難問が続きます。一つは西太后が還暦を迎えること、日清戦争とその戦後処理、そしてそのあとかさにかかって強めてくる西欧列強の理不尽な要求でした。まず西太后の引退後に住まうための頤和園が壮大な規模で作られていました。おおよそ東京ドーム九十二個分、華麗な建築物二百余り。北京市の北西約10kmにあり、万寿山とその南麓に、泉水を引いて作られた人造湖昆明湖はその周囲8km、そしてその周りは多くの楼閣、長廊、湖上に浮かぶ石舟、蘭花、柳などの鮮やかな色彩で彩られています。この清国の残した名園はいま世界遺産に登録されています。しかし、この名園の造成、性格には修理なのですが、これには西太后への悪評が付きまっています。西太后は自分の還暦祝いのために大金を投じて大改修工事に着手し、その費用をイギリスから借りた北洋艦隊増強用金からこ流用したというものです。さらに、これによって北洋艦隊は装備および訓練も十分に行えず、

日清戦争敗北の一因になったと言われています。しかし、これには、エジプトのピラミッドと同じで、いわば大規模公共事業としてこれを行ったという見解もあります。現に、西太后は自身の還暦祝いの規模を大きく縮小し、その費用を節約したそうです。

さらにこの北洋艦隊ですが、北洋通商大臣兼直隷総督・李鴻章の主導および出資によって編成されたと述べました。この李鴻章と言う人も先の左宝贵將軍同様、西太后にも光緒帝にも信頼されていた、数少ない忠義の人でした。彼は洋務運動を推進し清後期の外交を担い、清朝の建て直しに尽力します。しかし、北洋艦隊は、日本海軍との間で行われた1894年の黄海海戦と1895年の威海衛海戦で、その戦力をほぼ消滅させます。このとき、光緒帝は、わが方には北洋艦隊がある、なぜ李鴻章は早く参戦しないのかと激怒したそうです。しかし、その結果が北洋艦隊の壊滅でした。国士李鴻章と言っておきましょう。私財を投げ打って艦隊を作り、勝利のためにここはまだ戦うべきでない、戦っても勝てないと臥薪嘗胆していた李鴻章は、皇帝の命にしたがって戦い、敗北したのです。そして、日清戦争は清王朝は知らぬこと、李鴻章の私兵が日本との戦いに負けたのであるとして、王朝をかばいました。もちろんこれにも諸説あります。

ここまでの歴史を振り返ってみますと、朝鮮にしても清国にしても明治維新に共通するところが多いと思いませんか。西洋列強のアジア侵出に対して、日本も朝鮮も攘夷を唱えて国を閉じようとし、とくに朝鮮では大院君はこの攘夷派の君主でした。ところが高宗は文明開化を指向します。光緒帝も同様でした。

洋化運動それ自体は、光緒帝以前に西太后の信任厚い李鴻章、左宗棠らによってすでに進められており、これによって清国の経済・術発展は進展し、清国の国力はある程度持ち直してきました。しかし、親政を始めた光緒帝は若さゆえか、性急に改革を進めようとし、とくに、それまで進められてきた洋化運動では、政治体制はそのままにしておき、西洋技術のみを取り入れることに終始しました。ここに限界がありました。その結果が日清戦争の敗北です。光緒帝はその限界を打ち破ろうとして、改革派でも急進派であった康有為を中心とする一派を重用します。そして、日清戦争の交戦相手であるにもかかわらず、日本の明治維新をお手本として改革を進めようとし、これを戊戌の変法といいます。きわめて短期間で終わりましたので、百日維新ともいわれます。光緒帝は「西欧各国が500年で成したことを日本は20年余りで成し終えた。我が国土は日本の10倍以上あり、明治維新に倣えば3年にして大略成り、5年にして条理を備え、8年にして効果を上げ、10年にして覇業を定める。」こう宣言して、光緒帝は科挙さえやめ、近代的学制・新式陸軍・訳書局・制度局の創設、懋勤殿の開設（議会制度の導入）など、主に明治日本に範をとった改革案を布告、推進します。しかし、その改革の早急さが西太后側の守旧派のみならず、他の改革派とも路線対立をおこし、康有為一派以外の人々の離反と西太后側の守旧派の勢力回復、巻き返しを招きます。こうした時計の針を逆回転するような周囲の動きへの焦りからか、変法派の一部が西太后を幽閉ないし暗殺して事態を打開しようとする。このとき舞台上に上がってきて、重要な役回りを演じるのが袁世凱でありました。この一地方の軍司令官に過ぎない男を改革派は抱き込もうとします。康有為一派は頤和園を包囲し、西太后を幽閉もしくは暗殺しようと計画します。しかし西太后の意を受けた、時の軍機大臣榮禄にかんづかれ、もともと理想とか信念などとは縁遠い袁世凱の寝返りによってことはならず、ぎゃくに光緒帝の幽閉という西太后側のクーデターで終わりました。これによって光緒帝は監禁されて実権を失い、変法派の主要人物六名は処刑されます。また康有為は日本に亡命します。彼が推し進めようとしたのは立憲君主制でありました。彼が亡命先から中国に帰れるようになるのは辛亥革命によって清王朝が倒れた後でした。そしてその時にはもう彼の掲げた立憲君主制は色あせ

、ほとんど影響力は失せてしまっていました。

西太后の側のクーデターは、百日維新の急進さが招いたことには間違いないのですが、なかでも西太后の逆鱗に触れるようなくわだてがなされようとしておりました。これについては近年、台湾の研究によって、解明されてきました。一人のイギリス人スパイが暗躍します。李提摩太（Timothy Richard）がその人です。この人は宣教師として清国に参ります。そして李提摩太という名前を得て、光緒帝以前にも朝廷に上奏文を送ります。洋化自強運動をより早く確実に推し進めるにはイギリスから人を招聘し、この者たちに政策の立案、実行なさしめるべきだと提言します。しかし、この時は齒牙にもかけられず、却下されました。ところが康有為一派の躍進を見た李提摩太は内容を変えて、光緒帝にではなく、康有為に進言します。内容は、日本の前首相・伊藤博文を清の顧問に据えて権限を与え、イギリスをはじめ、欧米列強の人材を登用し、伊藤にその座長なり議長にし、場合によっては総理に抜擢し、これを取りまとめ実行させようというものでした。このことについて、伊藤自身も伊李提摩太と「中、米、英、日の“合邦”」策を康有為に提案します。そこで、さきに朝鮮を訪問していた伊藤が清国に到着すると、変法派は光緒帝と伊藤の会談を画策し、ついに光緒帝に拝謁させます。

光緒帝への伊藤の拝謁は実現しました。この若い皇帝は、改革派の様々な上奏に、まるで洗脳されたようになっていました。改革派は次のように上奏していました。

「臣は請う：我が皇帝が早く大計を決め、英米日の三カ国と固く結びつき、“合邦”という名の醜状を嫌う勿かれ」

「李提摩太が来訪の目的は、中、日、米および英と連合し“合邦”することにあります。時代の情勢を良く知り、各国の歴史に詳しい人材を百人ずつ選び、四カ国の軍政税務およびすべての外交関係などを司らせる。また、兵を訓練し、外国の侵犯に抵抗する。．．．．．皇帝に速やかに外務に通じ著名な重臣を選抜するよう請う。例えば、大学士・李鴻章をして李提摩太と伊藤博文に面会させ、方法を相談し講じさす」

これはあたかも中国の軍事、税務、外交の国家権限を外国人に渡そうとしているかのようです。ここにきて、西太后は紫禁城に戻った後この話を知り、事態の重大さを悟ってクーデターを即断し、自ら政権の座に戻って変法自強運動に終止符をつけたのでした。

光緒帝と伊藤との面談で、帝は伊藤に、清と日本が手を携えていかなければ、西欧列強には立ち向かえないといったそうです。当時清の領土は今の中国の1.5倍、人口は世界の30パーセントを超えていたそうです。そして国力は、それで測れるものであるとして、GDP世界一位、これも世界のGDPの19パーセントを占めていました。その後、アメリカの台頭で、二位に転落しますが、それでも十七パーセントを維持し、イギリスの7パーセントをはるかに上回っていました。その国の皇帝が、日本に同盟以上の連帯を乞うたのでした。西太后はこれを、国を売るものと断じました。光緒帝は南海のえん亭に軟禁し続けられ、西太后崩御の前日、ヒ素により暗殺されます。

ここに至るまで、西太后は混乱を極める清を支え続けます。その混乱を象徴するのが、義和団でした。

義和団事件の遠因は、キリスト教の布教活動にありました。キリスト教を広めるこの美名の活動は、西欧列強がアジアのみならず、世界に植民地を広げるときの一番最初に始める常套手段でした。宣教師は信仰と使命感でいかなる苦難にも立ち向かって布教活動を行います。そして神のみ前ではすべての人が平等という、現地の人々がそれまで接したことのない神の摂理を説かれ、感化されてゆきます。そして、それは旧来のアジア的社会秩序を内側から食い破る破壊力を持っています。文明の衝突はこうして昔から起こっていたのでした。分をわきまえ、礼をもって仕えることを是とするか、人は神のみ前では皆平等であるとするかの衝突です。こうした西洋文化の浸透から少しずつ支配を強め、民衆を味方につけて、ついには牙をむいてとびかかると言うのが彼らのやり方でした。

清国においても、外国人宣教師は自らの宗教的信念と、アヘン戦争以後の戦勝国の側の人間としてのおごりとして次第に傲慢に振る舞うようになっていきます。彼らは次第に劣等国に文明をもたらし、唯一正しい神の教えを広めているという高ぶった姿勢で臨み、地方の慣習を無視してしばしば地域の官僚と衝突し、結果、弾圧されます。ところがそれすらも、差別され圧政に苦しむ人を救う行為として称賛され、なお一層民衆の支持を得て信者を獲得することになります。

また時として、飢饉や天災に寄るべをなくした民衆は、宣教師の慈善活動に頼ってライスクリスチャンとなり、一族一村すべてが入信するようなこともありました。ライスクリスチャンとは、教会で飯を食う者ということを行います。食べなければ、食わせてくれる人をあがめるようになるということでしょうか。

ひどく迂遠なところから義和団の変を語りだしたのですが、それまで西洋的なものを知らなかった民衆にとって、宣教師のもたらしたキリスト教は全く見知らぬ世界観でありました。そしてそれをもたらした宣教師が、信仰心に則って自己犠牲の精神と実践をみせるのですから教化されて当然かもしれません。しかし、ここに現世的な問題も派生してきます。信者と一般民衆との土地境界線争いに宣教師が介入するようになります。このとき、おなじ民であるにもかかわらず、不平等条約によって信者の方が保護されます。それが機能しない場合は、時には軍事力による威嚇も行われました。この不平等条約と軍事力による圧迫に対して清国の軍人も官僚も手が出ませんでした。こうして一般大衆の中に、西欧的なものへの反感と憎悪が醸成されていきました。仇教事件が頻発することになります。

その仇教事件で大衆が頼ったのが、梅花拳という武術団体でした。梅花拳は約三千人

の門下を集め、教会を襲いました。ほかに白蓮教の拳法集団も加わります。さらに、団練と言う地方官公認の自警集団もあって、これは太刀会という自警団がもとになっています。この集団は、カトリック信者と一般民衆との土地争いに介入し、カトリック側を襲撃して教会の破壊や神父の殺害を決行します。いわば攘夷派で、日本の生麦事件の様相でした。しかし義和団はこうといった流れがあって生じただけのものではなく、ほぼ大衆からの自然発生的に出てきた暴徒集団であったようです。しかし、これが所謂オカルト的な様相の集団でもありました。この集団を構成するものは、齊天大聖（孫悟空の神格化）や諸葛亮、趙雲など（庶民の娯楽の『西遊記』、『三国志演義』から神格化されたもの）を神格化し、修行を重ねれば神が乗り移って刀はおろか銃弾すら跳ね返すような不死身になると信じていたのですから。

山東省より溢れ出すように展開し始めた義和団は、天津から北京を結ぶ地帯へと進出を始めます。彼らは当初、外国人とその施設、中国人のキリスト教信者を攻撃するにとどまっていたのですが、この地域にあふれていた失業者や天災難民が合流するにつれ、急速に膨張し、攻撃対象も舶来物を扱う店や鉄道、電線へと広がってゆきました。そんな彼らが掲げたスローガンが「扶清滅洋」（ふしんめつよう、意味：清を扶〔たす〕け洋を滅すべし）、あるいは「興清滅洋」（清を興〔おこ〕し洋を滅すべし）でした。この時点で西洋列強からは清朝に鎮圧を強く要請してきましたが、義和団の掲げたスローガンに共鳴する清朝高官も多々存在しておりましたので、どうしても生ぬるいやり方に終始しました。そうしているうちに義和団はおよそ二十万人にまで増え、北京に乱入してきます。そして、ここで不測の事態が起こります。北京を警護していた兵士によって日本公使館書記官の杉山彬が殺害され、ついでドイツ公使クレメンス・フォン・ケーテラーが義和団によって殺害されます。この偶発的な事態に、清朝は不可解な決定を行います。欧米列強への宣戦布告です。膨れ上がり、暴徒化する義和団とその鎮圧を強く迫ってくる西洋列強のはざままで、この列強への宣戦布告はどう考えても狂気したかと思えない決定でした。

この決定に至るまで清朝朝廷は四度御前会議を開きました。この義和団及び列強連合軍に対してどう対処するかについての御前会議では、これまでの諸問題がいくつか議論されたようです。一つには大沽砲台問題でした。これは海河河口に備えられた、北京や天津へと遡航する艦船への防御の要となる砲台で、西洋列強にとってはたいへん目障りな砲台でした。それゆえ清国は防衛の要として、引き渡しや破壊を拒否しますし、列強はこれの引き渡しを要求します。ところが、清国の拒否したにもかかわらず、列強は無断でこれを破壊してしまうという暴挙に出ます。ほかにも仇教事件への多大な干渉など、「累朝の積憤」（積もり積もった怒り。剛毅の言）があって、宣戦布告に至ったと言われています。

つぎに「照会」問題ということがありました。この「照会」というのは、列強が西太后に引退を求めたとされる文書のことです。これを見て西太后が激高し、宣戦を決めたともいわれています。しかしこの「照会」は偽物であったようです。清朝主戦派が、どうにも煮え切らない西太后を怒らせようとねつ造したものであるらしいのです。

さらにもうひとつ、御前会議がもめにもめた理由として、清朝内の権力争いがありました。この時期、清朝朝廷内には戊戌変法、つまり百日維新を支持して推し進めた光緒帝を廃位しようとする計画がすすんでおりました。戊戌変法は、西太后側による戊戌の政変といわれるクーデターによって阻まれたのですが、そのあとの光緒帝の即時廃位は、列強と裏で動いた朝廷内の残留改革派による干渉によって阻止されました。その光緒帝廃位を阻止した朝廷内勢力を排除するために、守旧派は義和団を利用したのです。つまり列強に対しては義和団を充て、列強に妥協的だという理由で李鴻章と一部の親王らを媚外として批判し、失脚させようといくわだてたのでした。

そしてついにせんせんふこくときまったのでしたが、その宣戦布告に際しては、西太后は「中国の積弱はすでに極まり。恃むところはただ人心のみ」と述べたといわれております。

この狂気ともいえる宣戦布告後の戦況は、当然の結果でした。

列強の連合軍は、北京駐在公使館の要請により、宣戦布告がある前からすでに軍事介入を計画し、進攻をはじめておりました。その数約二千人。しかしながら、義和団によって破壊された北京―天津間の京津鉄道を修繕しながらの進軍でしたので、なかなか勢いをもってと言うわけにはいかず、また廊坊という地では義和団と清朝正規兵、董福祥の甘軍の連合軍による反撃にあい、天津へ退却をせざるを得ないありさまでした。しかし、この時の天津にある大沽砲台への攻撃が、清国の宣戦布告につながったのでした。

清国による宣戦布告後に編成された連合軍は八カ国からなり、その内訳はイギリス、アメリカ、ロシア、フランス、ドイツ、オーストリア＝ハンガリー、イタリアら欧米七列強と日本でした。また、総司令官にはイギリス人のアルフレッド・ガスリーが就任しました。総数約二万人でありました。そのなかでも一番多く兵を出したのが日本で、次にロシアであったことは、両国とも地理的に近いことで理解できます。この時、他の諸外国は色々な事情を抱えていたこともあって、日本へ大量派兵を要請してきておりました。それゆえ大軍の派兵になりました。しかし、日本には日本の思惑もありました。北京の日本公使館保護は名目でした。

日本の派兵の大義名分は公使館の保護でした。しかし、この派兵についての目論見は、まず第一に中国における日本の権益拡大にありました。日本は列強のように古くから清国に進出しておりません。ですから、彼らほどには利権をえておりませんでした。そこでこの機に一気に利権の拡大をはかったのです。さりながら、清国を叩くことで何より得たかったのが、朝鮮半島における日本の権益の拡大でした。日本は清朝に、共に手を携えて朝鮮の内政改革をしようじゃないかとさえ提案しております。これは、日本について大軍を送っていたロシアへの牽制が主目的だったからです。さらに加えて、列強側に立って派兵することで「極東の憲兵」としての存在感を誇示し、日本に残っている不平等条約の改正をれ峡谷に迫る好機にしようとも考えておりました。義和団事件、これは明治三十三年のことです。明治維新より三十三年を経て、日本は列強と肩を並べるほどになってきていたのです。

こうした中、大軍を派兵してきていたロシアについては特記するに値する行為をして残しました。これがのちの日露戦争への序曲であったわけです。

北京駐在の公使からの要請によって、イギリスをはじめ各国は連合軍を編成し、北京へ向かおうとしておりました。連合軍その数約二千人。清国から列強国への宣戦布告がある前から、西欧列強国はすでに派兵の準備を整え、天津に進出して義和団鎮圧を名目に掃討行為を行っておりました。しかし、この時の連合軍は義和団によって破壊されていた天津―北京間の鉄道と通信網を修復しながらのs進軍であったため、時間ばかりかかってなかなか前へ進みませんでした。そうこうするうちに、廊坊という地では義和団によって激しく抵抗され、加えて清朝の正規兵である董福祥の甘軍に手厳しく攻撃され、天津への退却を余儀なくされたりします。そんな戦闘の一つであった、天津にある大沽砲台の撃破は、清朝の無礼横行と激しい反発をよび、これが宣戦布告の一因になります。

そうしたなか、この大沽砲台攻撃にロシアは他との連携を無視し、抜け駆けのように攻撃を加えたのですが、義和団、清朝合同軍に手痛い敗北を喫し、這う這うの体で退却するを余儀なくされました。しかし、これを見てロシアはと判断すると高をくくったことになります。ロシアはここより遠い満州の血で、傍若無人に振る舞っていたのです。

帝政ロシアはかねてから満州進出を狙っておりました。そこに義和団事件が起こり、清朝は義和団と列強への対応に忙殺され、満州までは手が回らないだろうとロシアは判断し、軍艦ミハイル号を派遣して銃撃を開始、直後、コサック兵と清国人が共に暮

らしていた同地へ兵をすすめ、清国人約三千人を虐殺してこの地を奪還します。さらにロシア兵二千人が義和団への報復と称して黒河鎮へ渡河上陸し、清国人約二万五千人を虐殺、黒竜江へ投げ捨てたのでした。黒竜江、アムール川のことです。ここを遺体が次々と筏の丸太のように流れていったといいます。後に、江沢民はエリツィンとの間で、この地の主権を放棄します。ロシアの領土となった瞬間でした。江東六十四屯の虐殺、黒竜江の悲劇と言われたことを忘れたのでしょうか。

国家は歴史を繰り返すというテーゼがあります。終戦一週間前に突然ロシアが満州へ進出し、日本人を虐殺、暴行、強姦して満州を攻め取り、サハリン日本人地区を爆撃し戦車で蹂躪して占領したのも同じことです。彼らは国家体制が変わろうと、指向性は変わっていません。北方四島は、日本はうまく利用されて、帰ってこないでしょう。安倍は何を幻想しているのか。

清国についても、もうすぐ終わります。この国も朝鮮も、何も変わったところはないと思いました。昔のことを繰り返す。民主主義の国家体制になっても、習氏は皇帝のまま、文氏は王のままに振る舞って、政治も同様のことの繰り返し。日本はどうか。安倍は將軍の如し。どうでしょうか。

清国もあと十数年で倒れます。もう少したどってみたいとおもいます。

義和団鎮圧のために編成された混成軍の内訳は、イギリス、アメリカ、ロシア、フランス、ドイツ、オーストリア＝ハンガリー、イタリアら欧米七列強と日本でありました。ロシアを欧米列強というのなら、日本はアジアの小国でありながら、唯一軍を派遣している特異な国であることがわかります。この混成軍は、清朝からの宣戦布告ののち急派されて編成されます。というより、もうすでにに準備はされており、その編成も時をおかず、スムーズに行われました。その中でも日本は地理的に近いこともあって、ロシアと並んで最も多数の兵を送りました。他の欧米列強は各地にそれぞれ問題を抱えて、両面作戦をとりにくいといった事情もあって、特に日本には大量派兵を要請してきておりました。イギリスは南アフリカでボーア戦争を戦っており、アメリカは米比戦争の真っ最中であったのです。こうして編成されなおした混成軍を第二次連合軍といいます。この連合軍にとっての最初の正念場はやはり大沽砲台・天津攻略戦でありました。しかしそれも数日の激戦ののち、連合軍が清朝側を圧倒して終わりました。天津城南門上には、およそ4000名の義和団・清朝兵の遺体があったということです。

この激戦の後、連合軍は北京に向けて進軍するのですが、ここに各国の軍事作戦上の齟齬や思惑の違い、戦闘への積極性の違いが浮上ってきて、なかなか軍は進みませんでした。なかでも、北京に早く到達すべきかどうかという根本的な点で意見はことになっておりました。イギリスや日本は、北京の公使館を少しでも早く解放すべきと主張していたのですが、他の国には、北京に進攻すること自体がかえって公使館に対する清朝・義和団の風当たりを強くするという意見もあってなかなか一致をみなかたのでした。また、なかには、義和団による混乱をさらに拡大させることで、より一層大きく軍事介入をする名分にしようとする国まであり、こうしたことが足の引っ張り合いで、軍はすすみませんでした。こうした事情が、北京で救援を待つ人々に苦汁を強いることになって、後々批判されることになりました。

そのころ北京は、清朝の宣戦布告により清国内に在住する外国人及び中国人クリスチャンは孤立しました。特に北京にいた外国公使たちと中国人クリスチャンにとっては切迫した事態となりました。当時紫禁城東南にある東交民巷というエリアに設けられていた公使館区域には、およそ外国人925名、中国人クリスチャンが3000名ほどの老若男女が逃げ込んできておりました。しかし各国公使館の護衛兵と義勇兵は、合わせても481名しかいませんでした。

清朝の宣戦布告ののち、公使館の人々および在留外国人は二四時間以内の国外退去命

令を通告されました。しかし、そんなことがスムーズに行えるはずもなく、彼らはそれぞれに籠城戦を強いられることとなりました。この籠城戦は、連合軍が北京を制圧するまでの二か月間続いたのでした。

この籠城戦に大きな役割を果たしたのが、北京公使館付武官、柴五郎でした。かれは武官でありながら、英語・フランス語・中国語に堪能で、各国公使館の間の意思疎通に大きく寄与し、また実質的な指揮官の役割も果たしました。

この公使館地区には、先に述べたとおり、中国人クリスチャンも逃げ込んでおりました。彼らも義和団の攻撃対象であったため、残留公使館員や外国人とともに、この籠城戦を戦ったのでした。彼らは共に戦い、見張りや防衛工事、消火活動、負傷者の救護、連合軍との秘密の連絡も担いました。後に柴五郎氏は「耶蘇教民がいて我々を助けなかったならば、われわれ少数の兵にては、とうてい肅親王府は保てなかったかと思われます」、「無事にあの任務を果たせたのも信用し合っていた多くの中国人のお陰でした。そのことを明らかにすると、彼らは漢奸として、不幸な目に遭うので、当時は報告しませんでした」と回顧しています。

しかし、この籠城戦を無事乗り切ることができた主な理由が清朝側にあったことは、皮肉なことと言わなければなりません。

北京在の公使館に立てこもる外国人は当然虐殺されたり晒しものにされたりするものでしたが、清朝軍の攻撃は不徹底でした。それというのも、宣戦布告はしたものの、清朝側は列強に勝利するという確信をもっていませんでした。特に榮禄などの開戦消極派は、敗戦後の連合軍の報復を考慮したとき、公使館に立てこもる人々を虐殺することをためらい、逆に彼らを保護する様子さえみせました。清朝内の徹底抗戦派と和平派の綱引きの間に公使館は置かれていたということでもあったわけです。しかし、もっとうがった見方もあって、清朝側には、公使館の人々を人質とし、列強との外交交渉を有利に運ぶカードにしようと考えていたという節もあるといえます。しかし、この籠城戦、襲撃も夜襲もありましたが、ときおり清朝側と話し合いがもたれ、休戦することもあったそうです。その休戦の間に、公使団側は尽きかけた食料も弾薬も補給することができたというのですから、なかばなれ合いといえそうです。そうはいつでも戦争ですから、20名ほどの戦死者も出ました。特に日本は最も攻撃の激しかった肅親王府防衛を受け持っていたため、最多の戦死者を出しました。

この籠城戦にみられたような清朝内の思惑の相違は、地方でもありました。それが李鴻章をはじめとする有力官僚たちの離反でした。彼らは西太后の宣戦布告の上諭を偽勅であるとしてこれには従わないことを宣言し、列強各国領事と「東南互保」という了解を結んで、これをもって彼らは義和団を鎮圧し、列強の進攻がない限り、外国人の生命と財産を保全すると約束しました。これが、先に紹介したフリードマン氏のいう、地方を切り捨て、沿岸部の自分たちの利権を守ったということです。有力官僚は、清朝を裏切り、民をも切り捨て、利害を優先したのでした。

これに対する西太后側にも奇妙な動きがありました。この東南互保は、あきらかに西太后の命に背くものでした。ところが西太后は特段処分を下しませんでした。それは西太后の深謀遠慮による保険であったようなのです。つまり列強との戦争の雲行きが怪しくなった場合、「東南互保」を暗黙裡に認め、敗戦の総責任を負わなくてもいいようにしようという政治的駆引きの一つでありました。

このような戦況の変化に伴って、清朝側も態度を急変させます。清朝は、義和団を「拳匪」あるいは「団匪」と呼び、反乱軍と認定して義和団を掃討するようになります。これに対して義和団はこうした清朝に失望し「掃清滅洋」（清を掃〔はら〕い洋を滅すべし）とスローガンを変えて戦います。

西太后による宣戦布告は六月二一日、連合軍の北京進攻は八月二〇日、約二か月でこの戦争はほぼ終わりました。連合軍の総数約二万人。そして戦死者数は757名、負傷者数は2654名。そのなかでも、最も多くの死傷者を出したのは日本で、死者349名・負傷者933名でした。清朝側と義和団の方の人的被害は正確な数字が残っていないそうです。それでも天津での戦いで、清朝と義和団の死者数が四千人を超えていたとかですから、全体では相当なものであったことは容易にわかります。

これ程の犠牲者を出して北京は陥落します。そして、その前に西太后は紫禁城から脱出します。この時あの珍妃の事件が起こります。珍妃という名称からわかることですが、清の時代の後宮内では、妃は五番目に位で、この妃の位の側室は妃の前に漢字一文字を加えることが許されておりました。珍妃には姉がおり、この人は瑾という字を加えて瑾妃とよばれました。珍妃の事件は後々までかたられています。本当は瑾妃のほうが面白いかもしれません。この人の逸話として、朝から豚腿醤油煮を食べるなど、相当の食いしん坊で、胸囲、胴囲、腰囲のサイズは同じ、顔はまん丸で、「まんじゅう」という綽名を付けられていたそうという話が残っています。彼女はこの外見の悪さから、光緒帝の寵愛を受けることもなかったようです。しかし、光緒帝が西太后により毒殺された後も宮廷内に留まり、溥儀の庇護を受けながら、高い位を維持したまま天寿を全うしました。そんな瑾妃の嫁入り道具がすごいのです。あの台湾故宫博物院に飾られた宝物の中でも一、二を争う名品、翡翠で作られた白菜とキリギリス&イナゴがそれです。それを思うと、瑾妃は清国末期の後宮のなかの歴史秘話のように感じます。

珍妃は西太后によって殺されました。そう言い切っていていいでしょう。中秋節の日、戊戌の政変によって光緒帝は西太后の手に捕らわれ、中南海の瀛台に軟禁されます。一方光緒帝の愛妾珍妃は紫禁城内の冷宮に閉じ込められます。

珍妃は姉瑾妃とともに後宮に上がりました。十三歳でした。以来珍妃は後宮に暮らし、外の世界とは隔絶されたところで生きていました。珍妃についてはこれ以上語る場所がありません。聡明であった、時折男装をして光緒帝を驚かせた、後宮に上がった当初は西太后にも気に入られていたが、光緒帝の寵愛を一身に受けてもいたので後宮のしきたりを無視した思いあがった行動をとるようになり、西太后の不興をかうことになったといった短評があるのみです。珍妃は光緒帝の改革を支持し、表のことに口出すようになっておりました。ときに、身近の女官の噂から新たに任官するものが清朝高官と有力宦官にいろいろを贈り、獵官活動をしたといったことを聞き込み、それを光緒帝に告げ口したりもしておりました。それが西太后の聞くところとなり、強くとがめられたようです。以来、西太后は珍妃を疎んじるようになりました。しかしそれも西太后には珍妃をみると、合わせ鏡のように自分とそっくりな姿が見えたのかもしれない。

事件は連合軍の北京進攻が目の前となった時に起こりました。西太后は紫禁城から西安に逃れることを決意し、光緒帝と珍妃も連れて逃げることにしました。ところが、これに珍妃は反対し、光緒帝が紫禁城に残ることを主張します。彼女はこの事態を光緒帝によって解決させ、光緒帝の皇帝への復活を実現しようとい瞬考えたのかもしれない。西太后もかつてわが子同治帝を守って政変をくわだて、勝利することで生き延びてきました。西太后が珍妃を井戸に投げ込ませた理由として、連合軍が乱入して彼らに辱めを受けるようなことがあれば、清王朝の恥になると言い聞かせたにもかかわらず、一緒に逃げることを拒否する珍妃に怒って宦官に指図したとされていますが、こんな表面的な理由ではなかったと考えます。西太后は、光緒帝が珍妃と共に生き延び、もし皇帝に復活するようなことがあれば、その反動はどうなると恐怖したのではないのでしょうか。光緒帝を連れて逃げるということも、彼を自分の支配下に置いておき、いざとなれば抹殺できるようにしておこうとしたのだとおもいます。実際、西太后が没せられる前日、光緒帝はヒ素によって毒殺されたのでしたから。

もし本当に西太后が紫禁城から脱出し、光緒帝は残っていれば、連合軍にとってこれほど好都合なことはありません。如何に主張しようと、清国の正統な支配者は光緒帝であるからです。西欧列強は戊戌の政変のあとも、光緒帝の廃位を阻止したほどですから、彼を再度擁立しようと動くでしょう。この非常時にそれをとっさに思いつく珍妃の小賢しさは、西太后にはとても我慢がならなかったとおもいます。第二の戊戌の政変ほどのことでした。珍妃は紫禁城の井戸に投げ城内は略奪、強盗、殺人、強姦など込まれ、殺されました。

西太后はこの後漢族の衣装に着替え、西安に逃げました。この逃走の途中で、義和団を弾圧する上諭を出します。同時に列強との和議を図るよう李鴻章に指示しました。その時、後々まで語られることになる有名な言葉を李鴻章に伝えています。それが「中華の物力を量りて、與国の歡心を結べ」でした。これは、清朝と西太后の地位さえ保証されるなら金に糸目はつけるなという意味でした。李鴻章はこの言葉を守り、かつ敗戦国の立場から列強の言いなりになって和睦せざるを得ませんでした。

これは後のことです。宣戦布告時、北京には清国軍が約四万人の兵力が集められていましたが、列強の連合軍が北京に進攻してきたときにはもうその大半がうしなわれており、また残存兵も西太后が逃亡していたためか、戦意を喪失して逃げ去ってしまいました。それでも連合軍の紫禁城の制圧には、二か月ほどかかりました。このあと連合軍の北京占領はおよそ一年つづきます。

この占領直後から、連合軍による略奪が開始されます。特に占領直後の三日間は、城内略奪許可の措置が取られました。それをいいことに、北京市内は連合軍兵士による略奪、破壊、強姦などが横溢し、大規模の破壊がお行われることになりました。さらに紫禁城の秘宝などは、これがきっかけで中国外に多く流出しました。

この略奪行為は、日本も例外ではありませんでした。日本軍は他国軍に先駆けて戦利品確保に動き出します。日本軍は、総理衙門と戸部（財務担当官庁）を押さえて約291万4800両の馬蹄銀や32万石の玄米を奪います。これもまた柴五郎中佐の指示に拠るものでした。

その略奪品の中に、王羲之の書がありました。これは日本に持ち帰られて、のちに広島で保管されておりました。そして、そこで原爆により焼失してしまいます。

これまで説明抜きで上げてきた名前の一つに、榮禄があります。この人は西太后の幼馴染で、一時いいなずけだったのではないかと言われた人でした。だからでしょうか、常に西太后の股肱之臣として働き、軍事面での頂点に登り詰めます。西太后が袁世凱とともに起こしたクーデター、戊戌の政変にあっては、直隸総督兼北洋大臣として、その軍事力をもって康有為らの戊戌の変法を挫折させました。ここでいう総督とは清朝の地方長官の官職の頂点にある官職で、榮禄は直隸省・河南省・山東省の総督として管轄地域の軍政・民政の両方を統括しました。この直隸総督は地方総督の中でも首都北京近辺を統括する筆頭格の役職でした。政変後は軍機大臣となって兵部と北洋各軍を管理し、宋慶・董福祥・聶士成・袁世凱の北洋各軍を併せて武衛軍を創設しました。まさに軍事面での頂点に立った人でありました。このことからわかる通り、若く、実績もない光緒帝が、いかに皇帝の威光を振りかざし、改革を推し進めようとしても成功しなかったのは、彼の手の内に武力と軍事力をもっていなかったからです。西太后には榮禄という手の内の軍事力がありました。光緒帝は、実は袁世凱を抱き込もうとしたようです。しかし、袁世凱など、榮禄に比べれば地方の一軍閥の頭ほどでしたありませんでした。ですから、光緒帝側の白色テロのはかりごとなどつぶすのは訳ないことでした。袁世凱は当初、光緒帝につくそぶりを見せたのですが、榮禄の恫喝によって、手のひらを反すように寝返りました。彼は西太后の手ごまになり、先に立って戊戌の政変の鎮圧に動いたのです。袁世凱は後に様々な幸運に助けられ、中華帝国皇帝となりますが、要するに利にさとく、世の情勢を巧みに読み取り、上手に立ち回った、軍閥の頭の域を出ない男でした。

もう一度榮禄です。西太后は光緒帝の後の皇帝を宣統帝溥儀と指名してなくなりました。この最後の皇帝・宣統帝溥儀の母が榮禄の娘、幼蘭でした。

清国が崩壊するところまでもう少しですので、さらに清朝崩壊のキーパーソンを追ってみます。光緒帝の皇后、隆裕太后です。この人は西太后の姪でした。ですから光緒帝のいところにあたることとなります。

孝定景皇后、つまり隆裕皇太后のことをもう一度述べてみようと思います。この人は、西太后の弟桂祥の娘で、西太后の姪になります。後の珍妃、瑾妃らとともに、選秀女に参加して入選し、西太后の強い意向で光緒帝の皇后に立てられます。しかし、西太后と光緒帝が光緒帝親政を巡って厳しく対立したため、光緒帝に疎まれ夫婦仲は最悪と言っているほどでした。

この人は西太后の影に隠れて、表舞台にはほとんどでてきませんでした。ところが、溥儀が宣統帝として即位すると清朝朝廷のしきたりに従って、溥儀の嫡母となり、隆裕皇太后と徽号されます。

しかし、もう崩壊の一途をたどるしかなかった清王朝は、辛亥革命を前に、その内部で主戦派と和平派の流血の惨事さえ起きかねない大論争がおこなわれます。ここで、隆裕皇太后が和平派に傾き、皇帝退位の決断をしました。まさに清国、大清帝国のほうかいでした。この人はあまり賢くなかった。

西太后が北京を逃れ、西安に脱出したのは一九〇〇年のことでした。それから約一年、西太后は北京に帰りませんでした。連合軍によって制圧された北京には帰りたくなかったからです。その間に北京議定書が列強との間で結ばれ、西太后と清朝朝廷は安泰が保証されました。そして、西太后は義和団の乱に関して何ら責任追及を受けてませんでした。その裏には老練な西太后の政治手法がありました。それが先に述べた東南互保であり、栄禄による各国の北京領事館攻撃への配慮でした。

西太后が北京に帰還する際には鉄道を使ったのですが、これは西太后にとっての初めての鉄道乗車でした。その時の写真が今も残っております。それを見ると、西太后還幸に北京の多くの民が沿線や駅に並んで待っております。2万人の人だったといわれています。これには西太后もよほどうれしかったのか、駅に降り立ち、観衆に手を振る姿が写真に写っています。西太后を迎える人々にとって、西太后は恐れ多い君主の座にある人というのではなく、敬愛する国の象徴であったということでしょうか。それはともかく、西太后の帰還は北京に平和がもどってきた証しで、喜ばしいことでありました。

しかし、そのあとの戦後処理に清国は喘がなければならなくなります。北京議定書の項目の中で、一番過酷であったのは賠償金の額でした。当時清朝の歳入が8800万両強であつ他のですが、北京議定書によって課された賠償金の総額は4億5000万両で、年々の支払いに伴う利息をこれに含めると、9億8000万両に上る額に膨れ上がりました。この押し掛かってくる賠償金の負担は結局庶民にしわ寄せされ、庶民は困窮にあえがねばならなくなりました。それが義和団と庶民に「掃清滅洋」という清朝敵視のスローガンが広がって行くことになりました。

その流れの中で、西太后は光緒新政と言われる政策をはじめます。その具体的な政策は、「憲法の発布」、「立憲君主制への移行」、「科挙の廃止をふくむ教育改革」、「新軍の建設」、「商業の奨励」などで、ほとんど戊戌の変法と内容は変わりませんでした。さらに、西太后は学校制を実施し、各地に学校をつくります。さらに大病院を開設し、庶民も医療を受けられるようにしました。そして立憲君主制への移行を確かなものとするために、議員選挙制も行いました。こうした施策の中に纏足を禁止する項目もありました。中国映画の一場面、身分の高い女性が、例えば宦官の手を借りて歩くシーンがありますが、彼女らはそうして手を借りなければ長く歩けなかったのです。西太后はこれを禁じました。

こうした光緒帝の手では実現しなかった政策が、西太后によれば次々と実施できま

した。だからと言って、西太后には実現できる力があったというわけではなかったようです。清国と清朝廷にはもうこれしか方法はなかったのです。しかし、手遅れでした。義和団事件自体が、清国がもう手の施しようのない状態にあることを表していました。その崩壊へと傾いていく清国を、一人西太后が支え続けて、ここまで延命させてきたといえます。振り返ってみますと、西太后という人は、一介の地方役人の長女として生まれた女性にすぎません。ですから科挙に合格してくる文武官のように国家の政策論に精通していたわけでもなく、清国全土について、また世界情勢についてそれなりの知見と情報を持ってもない、紫禁城の中だけで生きた一人の女性にすぎませんでした。千九百二年に北京に戻ってからは西洋の文化に大変興味を持ち、西洋音楽にも親しく触れたようです。その西太后がひそかに手本というか、ライバル視していた女王がありました。イギリスのヴィクトリア女王です。西太后は彼女に倣って、美しく描かれた肖像画を残しています。西太后は、日沈む国の女王でありましたが、ヴィクトリア女王は、日の沈まない国の女王でありました。

西太后は一九〇二年に北京に還幸して、一九〇八年、七十二才で亡くなりました。当時としては異例の長寿でした。それから四年後、清は皇帝廃位によって滅びます。その清の朝廷には、葉赫那拉の呪いという言い伝えがありました。この歴史夜話は清国についてかたってみたいということがテーマでありましたから、そこに至る辛亥革命から中華民国への過程は述べることはしません。そこで、終わりに次回、葉赫那拉の呪いについて少し語って、この項を終わりとしたいとおもいます。

葉赫那拉の呪いという言い伝えが、清朝朝廷には残っていました。言い伝えですから、おおっぴらに語られることはなかったのですが、知らぬものはいませんでした。葉赫那拉はイエホナラと読みます。ここで思い出しておかなければなりません。清朝は満州族の王朝でありました。満州族の社会は氏族制であって、家族制ではありませんでした。そして、満州族は中国の中でもほんの一握りしかおらず、中華民国の時代には五十五少数民族の一つに数え上げられるほどでした。ついでにいておきますと、孫文などによる辛亥革命は「打倒韃虜」を革命スローガンにしておりました。ここでいう韃虜とは満洲族のことで、このスローガンは満従属を満洲に追い出して、漢民族の明王朝が支配していた黄河・長江流域とその周辺地域に漢族の国家建設を目指そうというものでした。ところが、辛亥革命後に「五族共和」を唱え始めます。これは一見美しそうにみえますが、革命の混乱期に乗じて、独立しようという動きを見せたチベット、モンゴルなどの少数民族を漢族の支配下に置いたままにしようとするスローガンであって、民族共和の理想なんかとは程遠いものでした。革命以前、革命を目指す各団体のスローガンは「満洲駆逐、中華回復」、「満洲駆逐、中華回復、民国建国、地権平等」と多彩に民族主義、民権主義、民生主義を唱えてはいますが、中華回復は共通していました。中華とは説明する必要もないのですが、漢族の支配する国家の建設をいっています。辛亥革命をなにか市民革命のように解しているようですが、一面そういった性格も持ち合わせてはいたものの、内実は民族闘争であったことをしておかなければならないと思っています。ちなみに毛沢東の共産党革命も共産主義革命ではなくて、農民闘争だったのではないかとおもいます。

大きくずれました。満州族は六百余りの氏族があり、それらが満族八旗にわけられ、社会を構成しておりました。その氏族の中でも満族八大氏族と言われる氏族があったのですが、実は名氏は八つにとどまらず十三ほどあったのです。さて、この氏族とは言い出すときりないのですが、満州族は同じ氏族内での結婚のみを認めて、他の氏族とは交わらないようにしておりました。しかし、これも時代が進むと当然壊れていきます。清朝末期になると満族のみの支配も崩れ、漢族も多く入ってきます。袁世凱は漢族であったとおもいます。

辛亥革命と中華民国のことは触れないことにしておこうと思っておりましたが、そちらのほうについて行ってしまいました。ついでですから清朝が袁世凱と宣統帝退位に合意した優待条例を引用しておきます。

承認された優待条件は下記の通りである。

1. 大清皇帝尊号は今後も使用可能であり、民国政府により外国君主と同等の待遇を受ける。
2. 民国政府は毎年400万元を皇帝に支出する。
3. 皇帝は暫時紫禁城に居住し、後に頤和園に移る。
4. 清室の宗廟は民国政府により保護を受ける。
5. 光緒帝王の崇陵建設費用は民国政府が支出する。
6. 宮廷内の雇人は継続して雇用される。
7. 皇室の私有財産は民国国軍により保護される。
8. 禁軍は民国陸軍に編入する。

皇帝退位に伴う優待条件以外に清皇室及び満蒙回蔵各王族の待遇条件7条も同時に定められた。

これを決定したのは隆裕皇太后でした。清朝末期にあって、この光緒帝の皇后であった人が朝廷内では一番高い位のひとでありましたから、この決定は絶対でした。これによって「退位詔書」が発布されました。

葉赫那拉の呪いとは、清朝は葉赫那拉の女に滅ぼされるということでした。これを詳しく言うと、下記の引用のとおりです。

ヌルハチに激しく抵抗した末にとうとう併合されてしまったイエヘ部の最後の首長、金臺吉（ギンタイジ）は、臨終に際して、ヌルハチに対して「清朝の一族にたとえ女一人でも葉赫那拉の人間が加われば、そのものがおまえ（ヌルハチ）の一族を滅ぼすであろう」と呪いの言葉を遺して死んだ。清朝はこの呪いを言い伝えて、決して葉赫那拉氏の女を后妃にしないという掟が守られ続けた。ところが清末の咸豊帝が掟を破って葉赫那拉氏の女を妃にした。はたして葉赫那拉氏は咸豊帝の死後に西太后となって権力をほしいままにし、ついに清を滅ぼしてしまったのである。

ヌルハチというのは清の初代皇帝、高皇帝、太祖のことです。ヌルハチは女真族を統一し、後に明を倒して清国を打ち立てました。そのヌルハチに最後まで抵抗したのが葉赫那拉氏の首長、金臺吉（ギンタイジ）であったわけです。その金臺吉が、葉赫那拉の女が清朝を滅ぼすと、呪いとも予言とも言えそうな言葉を残したということです。ところが、イエヘ部が滅ぼされたのちも、葉赫那拉氏は満州屈指の名族として重んぜられ、多くの重臣を輩出したし、またナラ姓の女性は、清の皇族である愛新覺羅氏の出た建州女直とは系統を異にする海西女直の名門であることから、清の後宮に入った者も多く、イエヘ＝ナラ氏の妃もたびたび出ております。さらに、ヌルハチがイエヘ部を滅ぼす以前に娶った夫人の中には、第3夫人の孝慈高皇后がおり、この人はのちに第2代皇帝となるホンタイジを生みました。また孝慈高皇后の妹もヌルハチの側妃となって、第8女を生んでおります。

さらに、清王朝の最盛期を創出した賢帝、乾隆帝も葉赫那拉氏の妃をむかえており、この乾隆帝の夭折した息子を産んだ舒妃がその人です。そして咸豊帝の後宮に入って同治帝を産んだ西太后がイエヘ＝ナラ氏の女性であったのです。

確かに西太后の没後四年で、清朝は崩壊しました。呪いは達せられたのかもしれませんが。ならば、その以前の葉赫那拉氏の後・妃はどうだったのでしょうか。呪いのままならば、その時滅亡していても不思議はなかったのです。たぶんこの葉赫那拉の呪いは、西太后への後付けの悪口だったんだとおもいます。実際には、西太后は反対に、滅ぼうとする清国を生きている間、必死に支え続けた人でした。しかし、ちょっと凄みのある言い伝えです。そう思わせるのは、

西太后という人の凄さからであろうともおもいます。

最後にちょっと付け加えておきます。光緒帝の皇后、西太后の姪、鎮国公にして満州貴族の愛新覚羅載澤の妹、字を喜子といった隆裕皇太后も、正真正銘の葉赫那拉氏でありました。そして、この余り賢くない人が皇帝廃位の証書の発布を決断したのでした。その瞬間、清はほろびたのですから、葉赫那拉の呪いは、本当は本当だったんです。

追記

瑾妃という人、朝から豚腿醤油煮を食べるなど、相当の食いしん坊。胸囲、胴囲、腰囲のサイズは同じだったと記しましたが、珍妃が西太后によって殺され、光緒帝まで毒殺された後も宮廷内に留まっておりました。そして、隆裕皇太后死去の後、実家が裕福でしたので袁世凱に賄賂を贈って残った四太妃のなかで主導的地位につき、紫禁城の奥向きを取り仕切りました。溥儀を皇帝に選ぶ時も同様に主導的な役割を果たしたようで、少年時代の溥儀の生活にはなにかと干渉したため煙たい存在だったようです。最後は溥儀の庇護を受けながら高い位を維持し、天寿を全うしました。

義和団事件の後、北西太后が京に戻ったのが一九〇二年。そのあと二年を経て一九〇四年に、日本は日露戦争を戦っています。この戦争は約一年七カ月つづきました。旅順攻略に約一万六千人の戦死者四万五千人の戦傷者を出す激戦であったわけですが、この一作戦にこれほどの戦死者を出して一応の勝利を手にした日本は、このあと列強に伍してゆくため、もう一度中国に目を向けます。袁世凱、張作霖、その子の張学良、蒋介石、毛沢東と、すらすらと名前が出てきますが、こうした人物がこれから中国の歴史の表に出てきて、それぞれに主役を務めることになります。

しかし、この中に孫文氏がないことに気づかれたでしょうか。辛亥革命は失敗に終わりました。辛亥革命は第一から第三までの時系列で行われます。しかし、その革命も結局孫文自身に軍と武力がなかったのが袁世凱などにいいようにされてしまいます。結果、孫文は再び日本に亡命しなければなりません。彼はのちに中華民国の国父とたたえられますが、彼の手では革命はなりません。三民主義も理想であったでしょうが、この人の死後、孫文の後継者であった宋教仁は袁世凱によって暗殺され、彼の妻も国民党から去り、彼の理想が作った国民党は、ついには蒋介石に奪取られて政党の形をした軍閥にすぎなくなりました。

それにしても、時代の残滓でしょうか、袁世凱はうまく立ち回って、皇帝になろうとしました。実際彼は、帝位式を行おうとしたのですが部下にさえ反対され、こっそり皇帝になっては見たものの、外国からも国内からも反対の声が上がって引きずりおろされます。その間わずか八十七日。三日天下ではありませんでしたが、そのことがショックだったのか、半年後には亡くなってしまいます。尿毒症が原因だったといわれています。

退位された宣統帝は、この混乱の期間も紫禁城に暮らしていました。皇帝以下、皇太后、妃、その他女官、宦官に至るまで、西太后のころと変わらぬ様式で生活していたのです。ところが袁世凱の死去の後には資金援助も滞るようになり、ついには資金も止まって紫禁城から追い出されます。溥儀さんはイギリス、オランダに助けを求めますが断られ、最後に日本大使館を頼ります。この後の経過は満州国建国へと突き進むことになります。この人、まさにラストエンペラーですが、世に知られていませんが、この満州国のことで東京裁判で証言しています。その内容は「自分の満州国皇帝への就任は関東軍の圧迫によるもので、皇帝就任後の在位期間中も常に関東軍の監視下であり、自由意志はまったくなかった」というものでした。ところが後年、これをひるがえしています。満州国建国は彼の強い意志だったというのです。そう熱望する契

機となったのが東陵事件でした。一九二八年に国民党の軍閥孫殿英の軍隊によって墓荒らしされ、略奪されるという事件が起きました。東陵事件は、これをいいます。中でも乾隆帝の裕陵と西太后の定東陵は墓室を暴かれ、徹底的な破壊と略奪を受けました。溥儀は国民政府に強く抗議したのですが、孫殿英は政府高官に賄賂を送って懐柔しており、何ら処罰されることはありませんでした。このことが溥儀を大いに憤慨させ、溥儀の対日接近、満州国建国への協力とむかう契機になりました。こういった事情は溥儀の家庭教師だったイギリス人、ジョンストン卿の手になる紫禁城の黄昏に書かれていたそうです。

愛新覚羅溥儀氏は、一九四五年の終戦の日まで皇帝でありました。先に言っておくと、この人は一九六七年まで中国に生きており、腎臓ガンでなくなっております。終戦直後、溥儀氏は日本に亡命しようとしていました。ところが、まさに亡命のための飛行機に乗り込もうとするところをソ連軍の空挺部隊に急襲されて、捕らえられてしまいます。この時、溥儀のほかに溥傑、毓 といった満州帝国宮中の人たちがソ連軍の手に落ちております。この人たちは直ちにソ連領内に移送され、さらにソ連極東部のチタとハバロフスクの強制収容所に収監されました。ここで彼らが一番恐れたのは中華民国に引き渡されることでした。しかしそうされることもありませんでした。ここにもソ連の満州に対する野望が垣間見えます。

この溥儀と満州王室の亡命にも、悲劇はありました。

婉容と申されるお方は、清朝最後の皇后さまであります。では文繡様はといいますと、側室にして位階は淑妃でありました。とは申せ、清朝朝廷自体がもう滅んでいたのですから、位階がどうか皇后がどうかといったことがどれほどのことでありましたでしょうか。のちに、文繡様は溥儀様を訴えて離婚を勝ち取っておいでです。それほどに時代は進み、清朝も過去のものでしかなくなっておりました。ちなみに淑妃とは側室の位で、貴妃、淑妃、徳妃、賢妃と続き、昭儀となります。この貴妃で有名なお方が、あの楊貴妃です。

しかしながら、このお二方が溥儀様に嫁がれたころはまだ溥儀様は紫禁城内にお暮らしになっており、その毎日は清朝開闢以来、そして西太后様がお暮らしになっていたころと同じく、千年一日のごとく、まるで変わらず、溥儀様、婉容様、文繡様は多くの宦官や女官、従者に付き従われて紫禁城内で平穏な生活を送られておりました。さりながら、一見波風の立たない日々ではありましたが、このお二人と溥儀様の不幸は、その結婚の儀のその日からはじまっておりました。

不愉快な話ですから、その話から先に述べてしましましょう。ここに資料があります。

私が彼女について知っているのは、吸毒（アヘン）の習慣に染まったこと、許し得ない行為があったことぐらいである。

子の一節は、溥儀様の自伝、わが半生の一文です。

落日の帝国の最後の姿はこうしたものでしょうか。満州国皇帝（康德帝）の愛新覺羅溥儀の正妃、婉容様のご身分は結局満州国皇后であられました。しかし、一九二四年の北京政変により清室優待条件が破棄され、もって紫禁城を追放されてしまいました。そこで溥儀様は各国に保護をお求めになったのですが、どちらのお国も面倒を抱え込みたくなかったのか、入り良い返事をしませんでした。そして、その返答の中には侮蔑ともとれる答えをなした国もありました。こうした中、日本のみが溥儀らへの支援を表明し、天津の日本租界の張園で保護され、一九二九年にはさらに静園へと移られました。

そのころ中国では国共内戦がおこり、国内は戦争の嵐が吹き荒れておりました。さりながら、そんな国内動向も張園までは届かず、

文繡様と婉容様、文繡様はむしろ紫禁城の中のしきたりに縛られた生活から離れて、自由なお暮らしをなさっておいででした。ところが、この張園で事件が起こります。文繡様が張園を逃げ出されたのでございます。一説には婉容様が悪意をもって文繡様を追い出したといわれておりましたが、さほどのことではございません。文繡様はこれでなかなか気がお強ようございましたから、溥儀様、婉容様との張園でのせいかつがほとほといやにおなりだったのでございます。文繡様は張園を脱出するとすぐに裁判所に離婚を求める訴えをお出しになりました。そしてその訴えは認められ、離婚が成立いたしました。これには溥儀様も相当打ちひしがれておいででした。だからと言って、溥儀様に文繡様への愛情があったというわけではございません。公けの場で離婚などといった不名誉なことが認められ、皇帝としての体面を貶められたとお考えでした。なんという不面目、なんという辱しめということです。それというのも婉容様の嫌がらせがそうさせたとお考えになりました。これにより溥儀様、婉容様のお二人の中はますます険悪なものとなりました。

そのころの政治情勢から、溥儀様は海外へ脱出することはあきらめられ、復辟を目指されるようになりました。復辟と申しますのは、一度退位された皇帝が、もう一度復位されることです。一九二八年といえ、清朝歴代皇帝と西太后様の墓が徹底的に破壊、略奪された年でもありましたから、そんなことも関係したのかもしれませんが。こうして心の離れていった孤立感からでしょうか、婉容様はアヘンに手を出すようになり、やがて中毒症状を示すようになっていきました。

婉容様のことを更に語る前に、文繡様のことを語り終えてしましましょう。

文繡様は張園に訪ねてきた妹の見送りを口実に、張園の外へ出ました。これは異例中の異例のことだったのですが、張園へ移ってきた直後の混乱の中でしたので、ほとんど誰にもとがめられることなく脱出できました。そして、即座に認裁判所に駆け込み、溥儀様との離婚の訴えを申し立てました。この裁判で訴えは認められ、文繡様は離婚を勝ち取られました。世間ではこれを、妃の革命と喧伝し、一時もてはやされたそうです。そのあと、文繡様は慰謝料要求の訴えもおこされ、その際、溥儀様の性癖や家庭内および宮廷内の内情をマスコミに暴露し、溥儀様がホモセクシュアルか性的不能であるとまで表ざたにされました。これをうけて、溥儀様は廷臣の勧めもあって慰謝料5万5千元を支払って和解されました。しかし、この離婚にはもう一つの条件が附されました。それは、文繡様が生涯結婚をしないというものでした。さらに、廷臣の要求の強い進言もあって、溥儀様は文繡様の位を剥奪し、更に平民にまで身分をおとしました。

その後、文繡様は私立女学校の教師(小学校の教師とも言われています)となりました。しかし、その身は常に旧清朝の廷臣によって常に監視され、国外脱出もままならず、退職後は次第に貧しい生活をするようになり、ついには餓死同然の死に方をされたのでした。一九五三年九月一七日、北京にて、四十三歳でした。

このスキャンダルで、溥儀様の隠し事はあらわになりました。婉容様の心もこうして壊れてゆきます。

文繡様の運命がそうであったように、婉容様の運命も帝国の滅亡にふさわしい道程をたどってゆきます。その行き着く先は文繡様よりも悲惨でした。天津のミッションスクールに学び、紫禁城では英国人の家庭教師からエリザベスという英語名で呼ばれていたお方でした。

婉容様が満州国皇帝（康德帝）の愛新覚羅溥儀の正妃として迎えられたのは、まだ十七歳の時でした。しかし、この結婚も文繡様の場合と同様にほとんど、いや、たぶん一度も同衾されることはなかったようです。そして、紫禁城から追い払われ、張園で日本の保護下に置かれるのも同じことでした。そしてこの張園で文繡様は逃げ出し、婉容様の心は壊れてゆきます。正妃は離婚することも逃げ出すことも叶いません。それゆえ、このお方は阿片に逃げたのでした。

満州国建国に伴い、溥儀様が満州国皇帝（康德帝）とおなりになったことも、そののちのこもごもとしたなりゆきも、ここでは語りません。婉容様のことであれば、阿片の吸引に取りつかれた婉容様は、関東軍から皇后にはふさわしくない見なされ、公式の場からは排除され、さらには告天礼の儀式にも即位式に参列することも叶いませんでした。

ただ例外的に、訪満していた秩父宮雍仁親王による勲章伝達式においては「伝達式には皇帝・皇后ともに出席すべし」との日本政府の主張もあって、関東軍も婉容様の謁見も式への出席も認めざるを得ませんでした。しかし婉容様は、関東軍の危惧するところと反して、勲一等宝冠章受賞の儀式でもその後の宴でも、さらには満州国皇帝による招宴の席でも噂されていたような中毒症状を見せることもなく、健康そのものの様子で儀式に臨み、宴の女主人役を務められたのでした。しかし、このような華やかな場所での婉容様は、この時が最後でした。

そうしたなか、満州国皇帝でありながら、単に傀儡でしかないことを思い知らされ、鬱屈した思いを抱える溥儀様の苛立ちと焦りがますます婉容様を追い詰め、孤立させていきます。婉容様の阿片への依存度はどんどん深まって、異常な兆候さえ見せるようになってゆきます。嵯峨浩様の証言があります。

見ていると、七面鳥のお皿に何度も何度も手を伸ばされるのです。あまりの健啖ぶり

に驚きましたが、（中略）あとでわかったことですが、皇后は阿片中毒にかかっておられ、意識が定かでないことも多かったのです。そのようなときには、いくら召し上がってもわからないということでした。

婉容様はもう新しいご衣料にさえ関心を持たれなくなっておりました。

前述の嵯峨浩様は溥傑様の妻で、嵯峨侯爵様の長女であらせられました。このお方については後に述べましょう。

満州国はわずか十三年で滅亡いたします。五族協和の王道楽土を理念として建国された国家ではありましたが、結局はいったん消えてしまった炎の残照か幻影でしかなかった国家でした。どんな国家でも滅亡するときは、どの国でも皇后も側室も哀れなものです。

しかし、かつてエリザベスと呼ばれ、西洋風の教育を受けていた婉容様を追い詰めたのはひとえに溥儀様であり、溥儀様を培った清朝の因習と歴史であったのでしょうか。溥儀様はなんら心の痛みもなく、自覚もなく、婉容様を追い詰めたのでした。満州国末期には婉容様はかつての面影はなく、ボロ屑のような服をまとって着替えもせず、化粧どころか顔を洗うことも忘れておられたそうです。婉容様はそんな不健康な生活の報いから、視力もほとんど失って仕舞われました。溥儀様はそんな婉容様を振り返ろうともしないで、逆に離婚して廃妃までなさろうとかんがえておいででした。

一九四五年八月八日、日ソ中立条約を破棄してソ連の日本にたいする宣戦布告がありし、直後に対日参戦して満州へソ連軍がなだれ込んできました。そこで行われたのは戦闘行為ではなく、無抵抗な満蒙開拓団や民間人の殺傷、略奪、強姦でした。葛根廟事件がありました。八月一四日、満州国興安総省の葛根廟（現在の中華人民共和国内モンゴル自治区ヒンガン（興安）盟ホルチン右翼前旗葛根廟鎮）で、日本人避難民約千数百人（9割以上が婦女子）が攻撃され、1,000名以上が虐殺された事件がそれです。ソ連軍の進撃が迫ると、皇帝溥儀および国家首脳たちは新京を放棄し、朝鮮にほど近い大栗子というところに避難します。その地で、八月一五日の昭和天皇による「玉音放送」を聞き、戦争終結と自らの帝国の終焉を知ることになります。溥儀は通化飛行場から飛行機で日本に亡命を図るのですが、奉天でソ連軍の空挺部隊によって拘束され、ソ連のチタの収容施設に護送されます。しかし、この時婉容様と義理の妹である浩様たちは、わずかな親族や従者と共に見捨てられ、取り残されました。もはやなすすべもなく、ソ連・モンゴル連合軍とともに満州にやってきた八路軍に逮捕され、そののち各地を転々と連行されてゆきます。その時婉容様はもう人ではなくなっておりました。嵯峨浩様と従臣の証言があります。

皇后は終日、狂気のように叫んだり、呻いたりしながら、板敷きの上を転げまわり、目を剥いて苦悶なさるようになりました。（中略）食事だけは自分で召し上がりますが、用便はもうご自分でできなくなっておられました。

小窓から覗くと、驚いたことに皇后は寝台からコンクリートの床に転がり落ちたまままで、お食事も遠くの入口に何日間も置きっぱなしになっていました。（中略）大小便が垂れ流しとなっていたため、ひどい臭気でした。

このような皇后を見物しようと、刑吏や八路軍幹部らが入れ替わり立ち代わり監獄に集まってくるというありさまでした。

嵯峨浩様の残された「流転の王妃の昭和史」には更に次のように書いております。

小窓から覗くと、驚いたことに皇后は寝台からコンクリートの床に転がり落ちたまま、お食事も遠くの入口に何日間も置きっぱなしになっていました。（中略）大小便が垂れ流しとなっていたため、ひどい臭気でした。

その後、も各地に転々とする八路軍とともに移動を続けるなかで親族、従者とも引き離され、もはや誰にも世話されることなく移動を続けます。そして釈放の許可がおります。しかし誰も引き取り手がおらず、各地の留置所、刑務所を更にたらいまわしされます。そして延吉の監獄内でアヘン中毒の禁断症状と栄養失調がすすみ、「どうせ死ぬのだから」と苦痛を和らげる阿片はもちろん、水すらも与えられず、やがて世話を訪れた浩のことも誰ともわからぬ錯乱した状態となり、孤独の内に死亡したといわれております。

婉容様死去の知らせは三年後、ソ連で抑留中の溥儀様にも知らされました。溥儀様は、自伝『我的前半生』（邦題は『わが半生』）で「私が彼女について知っているのは、吸毒（アヘン）の習慣に染まったこと、許し得ない行為があったことぐらいである」とだけ書き残されております。結局、溥儀様は、婉容様のことはこれだけのことしか知らなかったのです。

婉容様、一九四六年六月二十日没、三十九歳。

私たちは、中国という国が古代から続いてきたものと、当たり前のように思い込んでいますが、本当にそうでしょうか。日本人は自国がそうだからと、この大前提に疑念を抱いたりしないようです。たぶん、中国四千年の歴史という言葉をうのみにしてきたせいでしょう。大胆に言い切るなら、中国という国は、文化、文明を含めて存在したことはありません。今の中国は中華人民共和国であって、一九四九年十月七日建国の、ごく若い国です。ついでに韓国は、アメリカ軍政の終了を建国の日とするならば、一九四八年八月十五日がその日で、これも戦後建国された国家です。

なんとも紛らわしい言い方をし始めましたが、これが欧州であれば、ローマがあってカルタゴへ攻め入って、これを打ち負かして征服し、と語れるのですが、中国はそれとは違っています。中国と、今は言っておきますが、東ユーラシア大陸にあって、中国は東を海に囲まれ、西は砂漠、北は凍土、南はヒマラヤ山脈があって、広大な土地が広がってはいますが、それだけのことで、まるっきり陸の孤島であったといえようなずかれるのでしょうか。実は外界から途絶された大地の広がりでありました。その中に、大きく分ければ三十部族、細かく規定して分類すると五十とも六十以上ともいわれる部族と民族がありました。その部族が隔絶された大地を駆け巡り、他民族を制圧して王朝を打ち立てます。秦、宋、唐、明、清、あげれば切りないほどの王朝がありました。それは一民族が他民族を征服し、自らの王朝を築いて国を建ててきた歴史でした。つまり、歴史のほうでいう正統を継いで建国された国家ではなかったのです。ですから、征服した王朝は、以前の国を徹底的に破壊し、言語、習慣など一切を絶滅しました。この繰り返しが中国の歴史です。そこに中国という概念と言葉はありませんでした。

いかにも大上段に振りかぶった論調になりましたが、こう唱えたのは清朝末期に日本へ亡命してきた梁啓超氏でした。彼の中国史を説いた中から、一文を引用してみます。

吾人（ごじん）がもっとも慙愧（ざんき）にたえないのは、わが国には国名がないことである。漢、唐などは王朝名であるし、外国人の使う支那はわれわれがつけた名ではない。

王朝名でわが歴史を呼ぶのは国民を重んじるという趣旨に反する。

支那という名で呼べば、名は主人に従うという公理に反することになる。

中国・中華などの名には自尊自大の気味があり、他国から批判されるかもしれないが、3つの呼び名それぞれに欠点があるなかでは、やはり我々の口頭の習慣に従って「中国史」と呼ぶこととしたい。

それぞれの民族が自らの国を尊ぶのは世界の通義であり、これもわが同胞の精神を喚起する一つの手段であろう

中国という言葉は、この梁啓超氏によって造語されたものでした。日本では、この人はあまり知られておりませんが、孫文氏より影響を与えた人という評価があります。早稲田大学の教授でもありました。

このあといくつかのエピソードを語ってみたいと思っています。

紫禁城には、西太后と皇帝の身の回りを世話するものとして宦官がおりました。そのなかでも李蓮英は西太后の寵愛を受け、宦官の頂点である大太監にまでのぼりつめました。この人は西太后あってのわが身と心得て西太后の意を汲んで、率先して西太后の意に沿うべく行動しました。

そんな李蓮英ですが、裏では幽閉された光緒帝と珍妃を会わせる手助けもしていたようです。そんな折、義和団の乱で列強連合軍が紫禁城に迫ると、珍妃を殺せと西太后の命令がなされます。李蓮英はこれを幸いに、珍妃を井戸に投げて殺害します。実はこの時、珍妃は懐妊していたようなのです。これが発覚することを恐れて、李蓮英が殺害におよんだと、そういった風説があります。

宦官といえば、安德海という人がおります。この人は先の李蓮英の前任の大総管でしたが、西太后のお気に入りであることをかさに着て周囲の恨みを買って、宦官は北京より外には出てはいけないという決まりを破ったことを咎められて、東太后と恭親王奕訢により処刑されました。

最後の宦官秘聞という本があるようですが、読んでいません。最後の宦官孫耀庭氏によるラストエンペラー溥儀氏と皇后婉容様の生活などの貴重な証言と、彼の半生をまとめた本だそうです。

清東陵といえば、河北省遵化市にある皇清朝歴代の帝や皇后たちの陵墓群のことです。ほかにも清西陵というのがありますが、一九二八年のことです、国民党の軍閥孫殿英の軍隊によって墓室を暴かれ徹底的な破壊と略奪を受けるといふ東陵事件の舞台が、この清東陵でした。このとき、多々ある陵墓の中でも、乾隆帝の裕陵と西太后の定東陵は、白昼堂々とダイナマイトを使って爆破、盗掘されました。目的は墓に残された副葬品の金銀財宝でした。確かに莫大な財宝があったようで、その財宝を全部運ぶのに数十台の馬車が必要であったといわれています。金銀の仏像百体以上、大粒の真珠一万二千粒、四千の真珠を縫い込んだ掛布団の他、大量の翡翠など宝石の山でした。

西太后の墓室については特に念入りに、かつ徹底的に破壊し、宝物を探されました。兵士たちは西太后の木棺をたたき壊してこじ開け、遺体を棺の外に引きずり出して西太后の口を銃剣でこじ開け、口の中に詰められている含み珠を取り出しました。さらに兵士たちは遺体から服、下着、靴に至るまですべて剥ぎ取って裸にし、身につけている宝石がないか隅々まで捜し回りました。彼らは皇帝皇后が埋葬される時は、先ほどの含み珠のように、他のところにも宝珠を埋め込むことを知っていたからです。

西太后の墓所捜索と並行して、乾隆帝の陸墓も徹底的に破壊され、探索されました。ここを捜索した部隊は皇帝や皇后の遺体を棺から引きずり出し、金銀財宝を見落とすことなく略奪したのですが、ついでに帝の首を切り離して地下水の汚泥に打ち捨てるという所業をやったのけたそうです。

この何とも言えない、ひともなげな忌まわしい事件も、あまねく世間に知られるところとなり、かつ、世界中にまで知れ渡りましたので、国民党総統の蒋介石も放っておかず、特別軍事法廷を開かざるを得なくなります。ところが、孫殿英は罪を逃れようと、戦利品の中から逸品を選び出して、各重要人物に賄賂として贈ります。蒋介石には九龍宝剣を送り、もう一本は軍政部長の何応欽に、「翡翠スイカ」は宋子文に贈ったといわれています。また蒋介石の妻・宋美齡には西太后の口の中に入れていたという、最も価値の高い「夜明珠」を贈りました。こうした賄賂と買収によって、結局事件はうやむやになり、孫殿英は罪に問われることなく終わったそうです。

エピソードというには、あまりに忌まわしい話でしたが、これは前置きです。ここに出てきた翡翠のスイカと夜明珠について少々。

それは次回。

あのおぞましくも忌まわしい前置きはさておいて、翡翠のスイカの話をしてしましよう。と申しましても、翡翠にしてスイカのようなもの？と言われても、スイカ模様の珠でしょうか、スイカほどの大きさの玉でしょうかと、なんとも想像がつかないのでございますが、一応こうとわかりました。枕なんです。ですから枕ほどの大きさの、もしくは相当大きくてスイカ模様の枕だということなのです。これが一对、副葬品に加えられていたのです。しかし困ったことに、後世、これを見たものがおりません。ですから、そんなものは噂だけで、実在しなかったのではないとも言われるようになりましたが、これには確かな記録が残っておりました。その記録をつくったのが、李蓮英の甥、李成武でした。李蓮英は宦官でしたから、甥の李成武を養子にしておりました。それゆえ、李蓮英の取り仕切る西太后の葬儀に、李成武も出席しております。確かな記録とは、その李成武が副葬品の品目を逐一書き残した愛月軒筆記のことです。そこには翡翠のスイカが書き残されているのだそうです。西太后が最も愛した翡翠のスイカはどうなったのでしょうか。

それはともあれ、清国に最も輸入された翡翠の産出国はビルマであったようです。そのビルマ産の翡翠ではスイカのような色の組み合わせはあり得ない。であるなら、実在したはずの翡翠のスイカは何だったのか。それはどうも、碧璽、つまりトルマリンであったようです。西太后は、ほとんど毎年のように宮廷造弁処の官僚をアメリカのサンディエゴに派遣し、数トンにも及ぶさまざまな色のトルマリンを買い付けさせていたというのです。それもティファニー社に鑑定させてから輸入しました。その量、全部で百二十t。そして、清朝王室が滅ぶと、これを採掘していた鉱山が連鎖倒産したといえますから、たった一人の嗜好品でありながら、地球のうらがわまで影響があったことに驚きです。

西太后の口中にあった含み珠は、蟬の形をしておりました。古来中国では玉に対して信仰にも近い概念があり、貴人が亡くなるとその人の魂はいずれ元の身体に戻ってくる筈だから、その時まで身体を清浄神聖な玉で覆って守ろうと、金銀などの糸で縫合された玉衣で全身を覆いました。しかし、この玉衣を用意するのは相当高位の人にしかできないことで、位の低い人や庶民はそれに代えてまじないとして玉器を添えて埋葬するようになりました。その一つに玉豚があります。これは死後金銭的に困らないようにと、富の象徴である豚を模った珠のことで、この玉豚一对の握玉を両手に握らせたりしていたそうです。また身体の内部に邪気が入らぬように九塞孔玉と呼ばれる玉器を、目、鼻、耳、口、肛門等の身体中の孔に栓をすることもしておりました。そのなかでも、口中の含み珠は玉蟬、または含蟬と言われておりました。これも中国に根付いていた輪廻信仰に基づく風習であったようです。ちなみに、清朝はラマ教を信仰しておりました。

さて、含み珠が蟬の形をしているのには、それなりの理由がありました。蟬は土の中で長い時を過ごし、やっと地上に出てきたかと思うとほんの短い期間世にあって、再びその子が土中に還ります。こういった蟬の一生に輪廻転生をなぞらせ、蟬の形をした玉を含ませたのでした。

その玉蟬、含蟬ですが、西太后の場合、夜明珠であったようなのです。この夜明珠、重量134グラム弱もあったと具体的にわかっております。これを孫殿英は西太后の口中から奪ったのでした。しかし、国内外から大変な批判が起こり、これをかわすために多くの有力者に盗んだ財宝を分け与えました。そのなかで当の玉蟬の夜明珠は、蒋介石の妻、宋美齡に贈られたといわれております。宋美齡はこれを靴の飾りにしていたとか。しかし、これも混乱の中で行方不明になりましたが、のちにロックフェラーに買い取られてそのコレクションの一つになったという噂もあります。

それはさておき、夜明珠のことです。夜明珠といえば、伝説の宝石というかんむりがついて語られます。これについては、ダイヤモンドだ、サファイアだという解りやすい言い方は出てきません。まるで謎の宝石で、宝中之王とさえ言われますが、どうも単体の物質でできているのではないようです。

さて、この夜明珠のことですが、これにはよく伝説の宝石というかんむりがかぶされます。また、随珠、懸珠、垂棘、明月珠、夜光璧、夜光石と多くの呼び名があります。この夜明珠、光や温熱を吸収し、自ら発光するようです。かといって蛍石とは違ったもので、自然の状態で蓄光して燐光を放ちます。なかでも西太后の夜明珠は百歩離れても髪の毛一本一本が見分けられたといわれ、その価値は100億円以上と評されています。このような夜明珠ですから、歴代皇室のみが所有し、庶民にはとても手にすることはできないものでした。

ここまでいわれると、西太后の夜明珠のエピソードも本当かどうか、疑ってしまいたくなるのですが、西太后は宝冠に4個の夜明珠を嵌め込んでいたそうです。そして義和団事件の時、北京に列強の連合軍が迫ってくると、その4個の夜明珠を外して、それを列強諸国に渡す代わりに北京から兵を引くように、李鴻章に交渉させようとなりました。当然、西太后はこれを渡せば列強は引くだろうと考えたのでしょう。西太后は嚴重に包装した夜明珠を女官の王という17歳の少女に持たせ、西門賓館に来た李鴻章の使者に渡すように命じました。しかし、貴重な品が入っていると見抜いた少女は、夜明珠をもったまま姿を消してしまいました。その後、その夜明珠の行方はわからないままになりました。なんとも中国らしいエピソードです。ため息が出そうです。なんとも疑わしくて、ちょっと眉唾かな・・・。

ところが、このエピソードには続きがあって、一九六四年に西安の片田舎の住宅を掃除していると、黒い小箱に、一番上は赤い布、次に黄色の布、最後に油紙で包まれた4個の光を放つ玉が発見されました。発見者はこれを直ちに政府に連絡しました。考古学者はこれを鑑定し、これこそが一九〇〇年に行方不明になった西太后の夜明珠だと断定しました。発見者は夜明珠を国家に寄付をもうしでます。そこで政府は10万元の報奨金を付与しようとしたのですが、発見者は、もともと国家の宝物であるからと言って報奨金を受け取らなかったといっています。これも中国なんですか。

しかし、4個で連合軍の侵攻を止める取引材料になると西太后が考えた夜明珠、実態はどういったものかという点、他の宝石のようにこの元素から成っているとはいえないようです。ダイヤモンドなら「C」炭素であり、サファイアだと Al_2O_3 の酸化アルミニウム、アルミナといわれるものだし、ルビーも同じ Al_2O_3 に三価のクロームが入って赤く発色すると解るのですが、夜明珠はそうはいかない。夜明珠は必ずしも種類の物質で成っているものではなくて、また、ここを掘れば出てくるものでもないのです。一説には隕石であるといえます。ですから、夜明珠を見つけられれば、幸運に超がつくほど幸運であるといえます。したがって、その価値は、十億といえれば十億であり、百億でもあることになります。

しかし、太陽に5分あてれば一ヶ月から二ヶ月も光り続け、しかも、その明るさは照明器具並みだそうですし、衝撃を与えても、懐中電灯の光りにも反応して輝く夜明珠、これが二〇〇二年に初めて中国の宝石市場に、直径百六十センチのものが出品されたそうで、これには一四五〇億円という値がつけられました。それからしても、上述のことはあながち放言ではなさそうです。

それかこれか、この夜明珠、偽物というか、人工物とでもいっておきましょうか、そういった贗物がおおく出回っているようです。ご想像の通り、それなりの石に蛍光物質を注入し作ってしまうのだそうです。なにか目覚ましいものが出ればすぐにコピーし、贗作をつくってしまう、それも中国のお国柄です。試しに、ヤフーオークションを見てみてください。夜明珠の台座が初値三百円から始まっています。ほかにも、詮索の結果の中に、平均売買額は二千三百円ともみえます。

それでも西太后の夜明珠は紫禁城の最高の珠でありました。

最後の皇帝、愛新覚羅溥儀氏のことです。この人の二人の妃については述べました。溥儀氏は日本敗北の後、奉天から日本へ亡命しようとしてソ連軍に逮捕されて強制収容所に収監されます。ここで彼は身柄を中華民国に渡されることを一番恐れ、ソ連永住とソ連共産党へ入党を希望しますが、却下されます。そのころ中国では、国共内戦に中国共産党が勝利します。その中国共産党をソ連が援助していました。その関係からか、溥儀氏は中華人民共和国の方へその身柄を渡されます。彼の収監先の撫順政治犯収容所（撫順戦犯管理所）には他にも弟の溥傑や、同じくソ連軍にとらえられた満洲国の閣僚や軍の上層部61人、さらに千人を超える日本軍の捕虜らも収監されました。彼らはここで思想再教育を受けることとなります。正確を期するのであれば、彼らは収監中、この撫順からハルピン、そしてまた撫順と収監先を変わりながら、ずうっと再教育を受けておりました。

溥儀氏の収監中の態度は、模範囚でした。しかし、あの映画、ラストエンペラーにもありましたが、靴さえ自分では履けない、掃除の仕方を知らない、単純な作業でもこの人のところへくると滞ってしまう、といったことで、生活の基本的なことができなかったそうです。しかし戦犯として裁判されて罰せられることもなく、結局当時の国家主席、劉少奇の発布した戦争犯罪人に対する特赦令によって特赦されました。一九五九年一二月九日のことでした。なお、溥儀氏とともに収容所に収監されていた溥傑氏も一九六〇11月二〇日、釈放され、浩との再会します。

実は、こうした一連の過程の影に一人の大物政治家がいたそうです。周恩来がその人です。溥儀氏が政治犯収容所に収監されている間中、彼に対して何かと便宜を図るよう指示していたようです。そして釈放後まもなく、溥儀氏は周恩来首相と中南海で会談します。そこで溥儀氏の将来について相談し、一般市民として生活できるようにとの周恩来首相の勧めで、北京植物園の庭師として働くことになりました。周恩来氏は当時の中国共産党の中でもほぼ例外と言っていいほど高いレベルの教育を受けていて、日本に留学した経験もありました。そんなことから、溥儀氏の共感するところがあったのかもしれませんが。溥儀氏が庭師として働いていた時期までのドキュメントを、NHKが放送しておりました。確か、丸いふちの眼鏡をかけ、人民服を着た溥儀氏本人が放送に出ておりました。そういったことからでしょうか、溥儀氏は一生庭師をして終わったような印象が一般的にされていますが、庭師はほんの数年の間のことでした。

その庭師として働いた数年後に、溥儀氏は周恩来氏の計らいで、全国政治協商会議文史研究委員会専門委員という文史資料研究を行う職につきます。そして、1962年には看護婦で一般人の李淑賢さんと結婚もします。溥儀氏にとっては五度目の結婚でした。しかし溥儀氏も高齢に達しており、(溥儀氏はこの時五十六歳、李淑賢さんは三十七歳)、子供は授かりませんでした。といえきれいなんでしょうが、後年、李淑賢さんが回顧録を出して、そこには、夫婦生活とでも言っておきましょうか、そんなことはなかったと書いております。しかし溥儀氏にとっては唯一の恋愛結婚で、二人はとても仲睦まじく暮らして、幸せな結婚生活であったようです。

そうした中、これも周恩来氏の抜擢を受け、満洲族の代表として政協全国委員という国会議員相当の格式の職に選出され、その死去まで委員を務めることになります。これは溥傑氏の同様に、溥傑も全国人民代表大会常務委員会委員を務めています。

ところが、一九六四年のことです。血尿が出るようになり、そのことから腎臓ガンが発見されます。しかしこの時、中国では文化大革命の嵐が吹き荒れておりました。溥儀氏は元満州皇帝であることから反革命のレッテルを張られ、溥儀氏の治療を行えば紅衛兵から激しい攻撃を受けると多くの病院が警戒し、まともな治療を行ってくれる病院は一軒もありませんでした。このことに周恩来氏は激怒し、彼の指示で北京の病院にやっと入院することができました。ところが、これも紅衛兵の知るところとなって大勢の紅衛兵が病院に押しかけ、激しく攻め立てたのです。それゆえ医師たちは彼に治療を施さず、放置しました。これにも周恩来氏が激怒します。よって、やっとまともな治療が始まったのですが、もうその時はガンも末期となっており、一九六七年十月一七日逝去しました。この闘病生活の間、李淑賢さんはずうっと付き添い、賢明な看病をしていたそうです。溥儀氏六一歳、李淑賢さんとの結婚祖克は五年半でした。溥儀氏はこの時、もうエンペラーではなく、普通の人であっただろうと思いますのに、最後まで権力争いに翻弄されて終わりました。その溥儀氏にとって、李淑賢さんは救いであったと思います。

エピソードもあと一つだけです。溥傑氏と浩さん、天城山心中事件などを話してみたいと思っています。

どうしても溥儀氏については割れたガラスのような、危険で脆い印象を受けるのですが、溥傑氏はまだ健全な気がいたします。溥傑氏は日本にも留学し、満州の陸軍士官学校の教官も勤めました。この時の教え子に朴正熙氏もおりました。そんな点、やはり皇帝の弟の気楽さでしょうか。

溥儀氏にはこの溥傑氏以外にも兄弟姉妹がおりました。溥儀氏から並べてみると、溥傑、韞瑛、韞龢、韞穎、韞嫻、溥祺、韞馨、溥任、韞娛、韞歡となり、溥傑氏が次男、溥祺さんが三男(この人は夭折されております)、そして溥任氏(ふにん)が四男となります。ですから、溥儀氏から見ると三人の弟、四人の妹がいたということになります。以前にも紹介しましたが、父親は満州貴族の第2代醇親王、母親が幼蘭で栄禄の娘です。一応出自を述べておくと、こういった家系になります。

ところが、この溥傑氏、初めての結婚では大失敗しております。1924年に、端康太妃(あの瑾妃です)の姪・唐石霞と結婚しましたが、価値観の違いからうまくいかず、唐石霞は実家に帰ってしまいました。昔の清王朝であれば、こんなこと、ありえないのですが、もうそんなしきたりは通用しない時代になっておりました。溥儀氏が離婚訴訟を起こされたことを思い出していただければお解りかと思えます。彼らの結婚生活は、その後の溥傑氏の日本留学とともに自然と消滅してしまいました。満州族の女性は気丈というか、気が強いのです。

そんな溥傑氏は、日本の華族、侯爵嵯峨実勝氏の長女の嵯峨浩(さがひろ)さんと結婚することになります。この嵯峨侯爵は昭和天皇の遠縁にあたり、詳しく言えば、父親同士が母系のまたいとこでありました。しかし、この縁談は、関東軍の主導でまとめられたまさに政略結婚そのものでした。ですから、のちに溥傑氏が浩さんに心許すようになるまでには、次女の誕生を待たなければなりませんでした。また、溥儀氏は毒殺を恐れて、浩さんの作った料理は、溥傑氏が食べなければ口にしなかったといわれておりますし、何か重要なことを喋れば関東軍に筒抜けになると、そんなことは一切話さなかったそうです。

また、浩さんのほうもこの結婚に深く落胆していたようでしたが、1938年に長女の慧生、1940年には次女嫿生が生まれます。溥儀氏もこの子供たちを大変かわいがっていたようで、のちに心中事件で慧生さんが亡くなると、日記に悲しみにあふれた一文を残しております。嫿生さんは後年日本に帰化し結婚されて、兵庫県でお暮しのようです。

日本降伏後、つまり終戦後の溥傑氏の運命は溥儀氏ほぼ同じ道筋をたどります。かたわら、浩さんは八路軍に拘束されて、長春、吉林、延吉、佳木斯とつぎつぎに身柄を移されますが、この佳木斯で釈放されました。ところが今度は日本への引揚船を待っていた葫芦島で国民党軍に身柄を拘束され、北京から上海へと移されます。しかしここで、上海の拘束場所から田中徹雄（旧日本軍の元大尉）の助けを得て脱出し、上海発の最後の引揚船に乗船して翌1947年（昭和22年）1月に日本に帰国することができました。なお、その間次女の孀生をずっと伴っての拘束生活でした。そしてその間、あの婉容さんの世話を一人し続けておりました。しかしその婉容さんとも引き離され、日本へ帰国します。のちにこの経過をインタビューに答える形で本にされています。浩さんはその本の題名から、流転の王妃といわれるようになりました。

日本へ帰国した後、長女の慧生さんが、周恩来市に直接、父に会いたいと中国語で書いた手紙を出しました。これが周恩来氏の心を打ちます。その手紙に感動した周恩来は、浩さん、娘の慧生、孀生と溥傑氏の文通を認めました。1960年（昭和35年）に溥傑氏が釈放されます。浩さんは翌年中国に帰国して溥傑と15年ぶりに再会を果たします。そののちは溥儀氏と同じく、周恩来氏の庇護のもと、全国人民代表大会常務委員会委員を務めるなどして社会復帰を果たします。溥傑氏、浩さんはそれまでともに暮らした期間こそ短かったのですが、再会後はそれを取り戻すように仲睦まじく暮らしたそうです。そして、1987年6月20日、浩さんは北京の病院で死去されます。

その後も溥傑氏は日中友好の懸け橋として活躍し、1989年1月昭和天皇が崩御されたときは日本大使館に弔問に訪れました。さらには、1992年10月25日、在中国日本大使主催のレセプションで訪中した今上天皇とも対面しております。

嵯峨浩さんは、愛新覚羅浩を名乗るとともに嵯峨浩も名乗っておりました。中国では嫁ぐ前の名をそのまま名乗ってもいいからです。また、溥儀氏は厳密にいうと、皇族ではありませんでした。一応皇弟ではあったのですが、醇親王の継嗣、つまり醇親王家の跡継ぎとなって貴族ということになったのです。それでも溥儀氏に男の子ができませんでしたから、溥傑氏と浩さんの間に出来るであろう男の子を後継にしようという暗黙の了解がありました。しかし、満州国は建国から一三年で滅びます。そのうち溥傑氏はソ連に拿捕され、中華人民共和国に移管され、そこで思想改造教育を受けるわけですが、溥儀氏も溥傑氏も模範囚であったようです。しかし浩さんのほうは孀生さんを連れての逃亡と収監、そしてさらに死地を潜り抜けての日本への帰還でした。

それから一六年経って、溥儀氏に続いてやっと溥傑氏も釈放されます。一九六〇年のことでした。溥傑氏と浩さんが再会を果たすのは、翌年の一九六一年です。そのころ日本はどうだったのでしょうか。六〇年安保の年ですか。溥傑氏は再会の時、伊豆・天城山で一九歳で逝った慧生さんの遺骨を抱かなければなりませんでした。天国に結ぶ恋とは何だったのでしょうか。

慧生さんと孀生さんの読み方を紹介しておきましょう。慧生さんは「えいせい」、孀生さんは「こせい」です。

天城山心中は、資料を読めば読むほど、不可解に思えてきます。慧生さんと大久保武道は一九五六年、学習院大学文学部国文学科に入学して知り合うようになります。それまで慧生さんは幼少期を満州国で過ごし、そのあと母、浩さんの実家である旧侯爵嵯峨家で育って初等科から学習院女子中等科、同高等科を経て同大学文学部国文科に入学するという、まったく免疫のない育ち方をしております。ですから、初等科卒業以来、学習院大学文学部国文学科に入学するまで、男子と同じクラスになったことはありませんでした。

大久保武道はその当時からどこかエキセントリックなところをもった、若者らしからぬ雰囲気、思い込みの激しい男であったようです。そんな男が、たまたま慧生さんの優しい気配りで声をかけられたことから、思い込んでしまいます。

気になっていたもので、ここでお断りしておきます。溥傑氏は先に述べた通り、皇族ではありませんでした。ですから、嵯峨浩さんを流転の王妃と出版された本の題名通り紹介しましたが、正確には王妃ではなく、貴族夫人であったわけです。

さて、慧生さんのことです。まさに男に免疫のない、上流階級にして深窓の令嬢であった慧生さんは、大久保の強引さによって次第に、ともに恋するようになります。彼女自身の大久保への恋文も残されています。次第に彼らは結婚をを意識し始めますが、それが婚約から結婚へといった通常の道筋とはずれたところを歩んでいったのはなぜでしょう。嵯峨家が彼らの結婚を拒否していたこと、さらに溥傑氏の保釈があれば、慧生さんは中国へ帰ることになる、それが大久保には耐えられなかった。そんな大久保に対して、慧生さんは心中するようは気はなかったようなのですが、引きずり込まれるように心中に同意し、1957年12月10日旅立ってゆきます。

私は大久保さんと一緒に静かなところでピストルで〇ぬ予定です。

大久保さんはお父さんのことで大変悩んでいます。私はそんなことで悩むのはオカシイといいました。しかし大久保さんの話を聞いているうちに私の考えが間違っているのに気付きました。こんどのは大久保さんと私が相談したことなので、大久保さんをうらまないでください。

学習院大学2年 愛新覚羅慧生・大久保武道

慧生さんの遺書と言われているものです。この事件のことは、もう忘れられています。今更のことかもしれませんが、一国が滅亡すると、皇后、王妃、皇女が悲惨な運命をたどります。彼らも、その運命に逆らえなかったのかもしれませんが。

西太后から物語ってきた清国滅亡の歴史ですが、この回で終わりそうです。

浩さんは1987年（昭和62年）6月20日、北京で死去されます。溥傑氏は人目もはばからず、浩さん浩さんと遺体に縋り付いて泣きじゃくったそうです。浩さんの遺骨は翌年、1988年に山口県の撰社愛新覚羅社に慧生さんの遺骨とともに納骨されました。

それから遅れること7年、溥傑さんが死去されます。1994年（平成6年）でした。この時、溥傑氏、浩さんの遺言により、溥傑氏、浩さん、慧生さん、三人の遺骨はそれぞれ半分に分骨され、一方は愛新覚羅社に納骨され、残りの遺骨は、中国妙峰山上空より散骨されました。

慧生さんについてはま、だご存命かどうか解りませんが、平成24年現在、西宮市にお住いのようにでした。

韓国は正式名称を大韓民国とといいます。この大韓民国はいつ建国されたのでしょうか。これが、韓国国内ではもめにもめています。どうもめているかということ、1919年だという派と1948年だという派に分かれていて、どちらも、自派の利益をかけた論争のようなのです。それはいいとして、韓国が建国された時、つまり、どさくさの中で一応の建国宣言がなされたとき、韓国国内では誰も李氏朝鮮時代の王族には見向きもしませんでした。当然のことだといわれるかもしれませんが、しかし、1945年まで王族は存続しておりました。

1945年まで王族は存続しておりました。この言い方は多くの問題点を含んでおります。しかし、あえてこう言い出して検証してみます。

まず大韓民国の以前の朝鮮国であった大韓帝国は、韓国併合ニ関スル条約、いわゆる日韓併合条約で消滅しております。1910年のことでした。これに深入りするつもりはありません。この追記は李氏王朝の王族の話です。ただ、この日韓併合条約には、その第3条に

日本国皇帝陛下は韓国皇帝陛下太皇帝陛下皇太子殿下並其の後妃及後裔をして各其の地位に応し相当なる尊称威厳及名誉を享有せしめ且之を保持するに十分なる歳費を供給すべきことを約す

として、韓国皇帝以下韓国皇族に対し、相応の待遇や称号付与をすることを定めていました。同時にまた、第4条でそれ以外の韓国皇族についても類似の規定をして、この条約に基づいて王公族として李王家が立てられ、日本の皇族に準じる待遇を受け、「王」「王世子」「公」等の身位と、殿下の敬称が与えられました。

では、彼らはどこにすんでいたのか。その大半は日本国内でした。併合しているのですから、朝鮮に住もうと日本国内ということになりますが、王族、皇族はたぶん東京に住んでいたと思われます。「李王家」、「李鍵公家」、「李 公家」には、それぞれ麹町区紀尾井町1番地、及び渋谷区常磐松町101番地上に「東京御殿」が存在していたことが昭和14年版の時事年鑑に記載されているという記述がその根拠です。また、1897年に高宗と純献貴妃嚴氏との間に生まれた李垠は大韓帝国最後の皇太子でしたが、年少時から日本で教育を受け、日本の陸軍士官学校を卒業、その翌年日本の皇族梨本宮

守正王の第一女子である方子女王と婚約し、1920年（大正9年）に結婚しております。そして日本の軍人として宇都宮連隊長などを経て、終戦時には中将にまで昇進しました。

長々と李王族末裔の跡をたどっても、大韓民国建国の際の疑問は拭われないので、とにかく、李王家は李垠、方子夫妻の次男、李玖氏が亡くなったことで途絶えたとだけ述べて終わりとします。因みに、この李玖氏が亡くなった赤坂プリンスホテルは、李王邸のあった赤坂プリンスホテルでした。あれほどの場所に、あれほどの土地を持って邸宅を構えていたのですから、李王家が日本でどれほど優遇されていたかが解ります。

大韓民国が建国される際、500年続いた王家の復活は一顧だにされませんでした。それはなぜか。それが筆者の疑問でした。日本が戦いに敗れた時点で、日韓併合とか朝鮮併合といわれる状態は解消されます。正確には、日本による統治は1945年（昭和20年）9月9日に朝鮮総督府が米国に降伏した時点で、日本から離れます。しかし、それから1948年まで朝鮮半島に空白ができます。国家が存在しなかったのです。朝鮮半島の北はソ連が、南はアメリカが占拠し、にらみ合っていたからです。

韓国、1948年、1919年、これらの言葉でキーパーソンとなる人がいます。李承晩氏です。この人によって、良くも悪くも今の韓国が建国され、この国のありようが定められました。そして1919年も1948年も、この人の都合と韓国という国の都合で、あれこれ議論されているにすぎません。

1919年をとってみても、ウィキペディアによれば、

中華民国の上海で大韓民国臨時政府樹立。李承晩によってワシントンD.C.に欧米委員部設立

とあります。

1948年は

8月15日- 朝鮮半島南部単独で大韓民国政府樹立を宣言。初代大統領に就任。

ということです。李承晩氏は朝鮮の独立運動家でありました。そして初代から第三代までの大統領でした。

この人のもとで朝鮮が動き出す以前の1945年から1948年までの期間、朝鮮には国家がなく、この地を統治していたのは連合軍という名の米軍でした。実は、ポツダムおよびカイロ会議で三八度線以北はソ連が、南は米軍が統治するとの密約が行われました。米国は日本の占領統治で手一杯で、朝鮮まで手が回らないと考えたからでした。しかし同時に、終戦間際のソ連の参戦の密約があったのですが、現実に侵攻してくることによって朝鮮半島がうやむやのうちにソ連に占領されるのを防ぐためでした。その歯止めとして、アメリカの官僚たちの策定したのですが、その北緯38度線で米ソの占領地域を分割するという案をトルーマン大統領は承認し、同時にこれをソ連に提示して同意を取り付けました。こうして朝鮮半島の分断が決まりました。

ところが、これに先立ち、終戦後の間際に、日本の朝鮮総督府は政務総監の遠藤柳作が治安維持のためとして朝鮮人への行政権の委譲を決め、朝鮮独立運動家の呂運亨に接触を図って臨時政府の樹立を促したのです。これにこたえて、呂運亨は玉音放送を聞いたその日のうちに安在鴻らと朝鮮建国準備委員会（建準）を結成し、組織的な独

立準備を進めはじめました。その後、日本政府が降伏文書に調印したのを受けて呂運亨は李承晩を大統領、自身を副大統領とする朝鮮人民共和国の建国を9月6日に宣言したのです。このように、時の日本政府は自国の混乱も顧みず、朝鮮の自主独立を手助けしようと動いたのです。しかし、これは連合国によって無視されました。アメリカ及びソ連は、朝鮮人が自主的に樹立した政府に対して一切の政府承認を行わず、9月7日には米軍司令部が朝鮮における軍政実施を宣言し、朝鮮の即時独立は明確に否認されるという結果におわったのです。

終戦直後の事情はかくのごとくでしたが、そののちも混乱は続きます。そして、北も南も、自主独立とは程遠い、傀儡政権の樹立をもってやっと北も南も国家としての形を整えます。これは悪口に聞こえそうですが、結局彼らは自分の力で国の独立を得たことは、一度もなかったのです。歴史がそれを物語っています。

さて、李承晩氏の登場によって、傀儡政権であっても大韓民国は成立しました。だが、北は共産主義国、日本はかつての支配国、そんな中で、韓国は自国のアイデンティティーを反日に求めます。彼らの憲法の前文です。

悠久の歴史と伝統に輝く我が大韓国民は、三・一運動により建立された大韓民国臨時政府の法統及び、不義に抗拒した四・一九民主理念を継承し、祖国の民主改革と平和的統一の使命に立脚して

朝鮮の歴史を知らないと、何のことか分かりませんが、三・一運動は朝鮮の日本からの独立運動で、これに依拠することで自己正当化を行おうというのが、この憲法前文です。

前文の続きはこうなっています。

不義に抗拒した四・一九民主理念を継承し、祖国の民主改革と平和的統一の使命に立脚して

この不義に抗拒した四・一九民主理念というイデオロギーも、憲法に記されている通り、韓国の国家の性格を決定づけます。四・一九運動は四月革命ともいわれ、一九六〇年四月十九日に起こった大規模デモのことをいいます。学生デモ隊が李承晩大統領を四選させようと不正選挙を行なった政府に激憤し、大統領官邸にまで押しよせます。これによって李大統領の下野を余儀なくさせてしまいました。そのあと、李承晩氏はハワイに亡命します。そのほかの政府要人も潜伏先で一家心中したり、逮捕されて死刑になったりいたします。もちろん、李承晩氏によるデモ隊への発砲とか実力行使が容認されるわけではないのですが、不義、正義、民主理念といった言葉がこの憲法には踊ります。政府に法はなく、民に発砲すれば、民も正義を行い、不義に抗拒すれば、法をも越えられるというのが、この国のありようなのです。民の声は天の声と、この国では言いますから。こうしてこの国の大統領は大衆によって打倒され、時に死刑にもなるという習わしになりました。

もうこの国の王族が、なぜ建国にあたって振り替えられなかったかという疑問は吹っ飛んでしまいました。朴正熙による軍事クーデターでなければ、この国は治まらなかったぐらいですから、過去の民衆の敵が復活するはずもありません。米国の袖の下で守られての建国であっても、一応の独立を果たした韓国は、国内ではいつもこの緊張感の中で政治が行われています。暗殺があり、大統領候補の拉致があり、済州島事件で民衆を6万人殺して、この国は成り立ってきたのです。中国で民を一番虐殺したのは毛沢東でありました。韓国で民を一番殺したのは、李承晩とその後継者、朴正熙でありました。そんな国に基王族は帰れません。

もっとも、李承晩氏は、自分も李氏朝鮮王族の流れであることを誇りにしていたのでした。これが朝鮮民族に染みついた下意識でしょうか。そして過去も現在も未来も、大国に振り回されるのが韓国です。

またしてもスピーカー作りのお話です。どうも大きな事ばかりにこだわりすぎました。極めて私的なことに戻りたいです。どうしても日本と日本を取り巻く国々が、これからどうやってゆくのが気になって、解りもしないのに頭を悩ましてしまいました。それでどうなるというわけでもないのですが、どうしても気がうずうずします。それで始めた清国の話でした。文章の表題が歴史夜話。その程度のものでしかありません。それでも、いま習近平氏は日本に媚びを売るほど急接近してきております。東シナ海では、日本のヘリ空母、かが、に接近してきた中国海軍の船から、おはようございます、お目にかかれて光栄ですと打電があったとか。米艦船には立ち退けと警告したのとは対照的なやり様です。かつての清国でも同じことがありました。日清戦争の後にもかかわらず、光緒帝は伊藤博文を政治顧問に迎え、清国を立て直そうと考えました。そして、清国と日本はともに手を携えなければ、西欧列強には立ち向かえないと言っていたそうです。習近平氏は今窮地に立っているそうです。例の対一路は失敗だった、米国との貿易戦争は一方的に中国が負けそう、国内経済は口で言うほど順調ではなく、むしろ破たんしそう、そういった理由から、日本の手を借りたいと目論んでいるようです。それに対して、日本はしたたかに外交を行っています。インドと結び、トルコとも何やらやろうとしているみたいです。フィリピンとも、マレーシアとも、ベトナムとも、いい関係が出来ているようにみえます。中国に、一帯一路で協力すると言って米国を牽制し、中国へはインドというカードを見せ、マレーシアのマハティール首相に桐花大綬章をおくる、なかなかのものじゃありませんか。

極私的な話に戻りたかったのがでした。趣味の話です。私の趣味は立ち止まったままです。日長一日、ありあわせの木片で、そこいらあたりで拾ってきたり、ご近所様から頂いたラジカセからスピーカーを外してボックスに入れ、激変する音にご満悦をきめるということをくりかえしています。先日は、音源がFM放送であったにもかかわらず、シンバルの打音がその余韻までも忠実に響かせて聞こえ、むしろ感動しました。今日もハーブの倍音が聞けました。ボックスの板こそ15mm厚ですが、適当な板取りで、容積の計算もあったもんじゃありません。スピーカーユニットだってラジカセのもので、どれほどのものか。それでも作り方ひとつで音は変わります。特に今回は、形式に凝りました。一番複雑な形は、バックロードホーン。しかしこれには相当馬力のあるユニットでなければ効果はありません。しかし、非力なアンプと、由緒正しい安物ユニットでなにかしらカッコつけるとしたら、フロントロードホーンだと見極めました。

フロントロードホーンって何？ということになるのですが、言ってみればメガホン状のラッパをスピーカーの前にくっつけたものということです。本来だと、スピーカーユニットから出る音は、前に音道がなければ180度に広がってゆき、ついには拡散してしまいます。これはスピーカーそのものの音です。ところが、音道をつけると音は広がってはいかず、音道そのものの方向へ進み、開口部で波打って丸く拡散してゆきます。ですから、例えばトランペットの先端は丸く広げて、その拡散を制御して外へ出そうとします。それから、音圧は知りませんが、そのホーンのラッパ状の管の形によってある幅を持った音域は増幅されます。そんなことはない、音響理論はいいますが、円錐状に整えられた管の壁で、管の直径と音波の波長が合致したところで共振が起こり、音は増幅されます。音量が上がるということです。蓄音機のことを思い出してください。蓄音機はターンテーブルの横に鎮座したホーンとそれにつながるサウンドボックスがあり、そのサウンドボックスに鉄針をとめてSP盤の溝をトレースし、その波打った溝によっておこる振動を振動板に伝えて音に変えます。ふつう振動板はアルミの薄い板でした。この板は同心円のみぞが作られており、それによってより振動しやすくしてあります。音源はたったそれだけです。それなのに、一応の音量は確保されておりました。音域がどうのこうのなんて次元ではありません。人の声はそれなりに、オーケストラもそれなりに、といった貧弱なものですが、電氣的増幅もなしに一応聞こえたのですから大したものです。このホーンがヒントでした。JBLパラゴンはスリーウェイのフロントホーン型のスピーカでした。名機です。

それはさておき、この朝顔型とも水仙型とも称されるラッパを貧弱なスピーカーユニットの前にとりつけることを考えました。しかしここでも、理論値がとか、ラッパの広がりとか、管の長さなんて計算も設計もできなくて、いい加減で作るしかありません。手持ちの材料だけで作るのですから、形が整えばそれで満足しましょう。ここから四苦八苦が始まりました。

工作を始めるにあたって、円錐は断念しました。木で丸管を作るのはまず無理です。そこで道路に建てられている円錐状のコーンを考えました。しかし、これが売ってない。探しあぐねて、もう放棄しました。そして、四角錐に形状をきめ、工作にかかります。

その前に、スピーカーボックスを作らねばなりません。これは手慣れてきました。縦横左右、前後、上下の三組の板を切り出します。それをまたもや木ねじで止め、スピーカーユニットを取り付けて終わりです。そして取り付けたスピーカーの前にホーンを取り付けるための分厚い板を止め、そこに四角錐の形状の音道を取り付けます。この音道の長さは、何度も板で囲って実験しました。著名なスピーカーメーカーのフロントロードホーンスピーカーは、いわゆるショートホーンといわれるもので、普通のスピーカーボックスほどの大きさを維持するため、短いです。音の波長からいくと、音道は4mは必要とか。そんなもの、置くところもなければ、作る板もありません。それでも、出来るだけ長く囲ってみると、音が変わります。結局エイヤツと心をきめ、1mほどの長さを確保しました。作った時の苦心話は置いて、さあ鳴らすぞと、例のラジカセに作ったスピーカー端子につなぐと、ここで先ほどのシンバルの余韻まできこえたのでした。それもFM放送の音楽番組からです。こんな音、ステレオコンポからも聴いたことがありませんでした。バイオリンの胴を叩く固い共鳴音も聴こえます。ジャズは、指がベースの弦をすべる、こすれた音もきこえます。演奏者の唸り声、スティックの打撃音。FM放送を馬鹿にしてはいけません。音源としては、CDほどではなくとも、いい音を放送してます。というより、この1986年製造のラジカセがいいのでしょうか。そう思って調べてみました。結果、このパナソニックのラジカセは、見かけは知らず、名機でした。ヤフオクにもいまだ出品されて、捨てるほどの物にしか見えないチープな外見なのに、相当高く入札されていました。驚きです。私の作ったどんなスピーカーだって立派に駆動します。セカンドストアから買ってきたステレオスピーカーも、FOSTEXの2ウェイスピーカー、ケンウッドのも。そう思って、これらの一つと今度のスピーカーを比べてみました。おお、遜色ないと思っていたけど、音の質では見劣り、いや、聴き劣りすると解りました。名のあるスピーカーユニットの音質は、安物スピーカーユニットではかなわない。それでも、スピーカーはボックスを含めて初めて音が決まると合点しました。諸侯には、ラジカセのスピーカーユニットの実力を誤認識なさりませんように。入れ物が変わると、ここまで音が良くなります。ラジカセだって、FM放送だって、手を加えれば良質のオーディオ装置になります。きっと目からうろこです。

ラジオを諸侯はもう聴いてないのでしょうか。唯一聴く可能性があるのが、車でじゃないかと思えます。車を運転しては、テレビは見られませんから。私も、仕事で車を走らすときは、AM放送でNHKを聴いていました。その時でも、今のようにFM放送は聴きませんでした。しかしFM放送を聴いてみると、いやでもクラシックを聞かされます。それも交響曲。ああつまらない！そう思って聞き流しているのですが、耳学問だけは増えていきました。そして、好きな作曲家も出来てきたりしました。まず一般的でありふれた選択ですが、ショパン。それからドビッシェ。今更ですが、ベートーベン。バッハは敬意をもって聞くべきと思ってしまいます。バッハが始まると、背筋を伸ばしていなければならない気持ちにさせられます。以外にも。ベートーベンはあの怖い顔に似ず、親しみやすく感じます。もっとも、NHK-FMでこのご両所はあまり登場しません。マーラーですね、よく聴くのは。巨匠のようですが、どうも肌に合わない。それでもファンが多いのか、頻繁にでてきます。クラシック最後の巨匠のおもむきです。

しかし、やはり歴史があるせいか、次から次と趣向を変えて、教養のない私にはよくわからない交響曲が放送されます。そのどれも音楽なのですから、理解とかとは離れて楽しむ方がいいのかもしれませんが、クラシックは入ってこない。ジャズならどこまでも聴いていただけるのですが。しかし、考えてみれば、こんな風なのも私が立ち止まったままだからかもしれませぬ。少しは進歩してきたつもりなんです、変わリませぬ。ドビッシェとかショパンを愛でるようになったことを変化というのならそうなんでしょう。ですから、立ち止まらず、趣味くらいは変えてゆきましょう。最近、そう思っています。

中国という国は

ごく簡単に清国だけを見渡そうと、今まで勉強したことを述べてきましたが、それでは済まないことになりそうと覚悟して、中国の歴史を概観し、次回から述べていきたいと思います。

試しに、ネットの検索ワードとして、中国と入れてみてください。すると、ウィキペディアでも中華人民共和国とだけです。さらに、中国の歴史としてみると、同じウィキペディアの記述でも、

中国の歴史（ちゅうごくのれきし）とは、中国の大陸における歴史のこと。
なお、その対象は、中国大陸の地域史であり、漢民族の歴史ではない。

と、なんとも歯切れの悪い説明が述べられています。このことはすでに、清国の中で述べています。

中国という国の名称について述べるに、梁啓超氏の述べたところを引用しておりますが、もう一度この人のことを紹介したいと思っております。彼は1901年、1年間の期限で日本に留学してきました。そこで、少しずつ日本語が理解できるようになると、驚愕したそうです。彼は中国にない言葉を日本人は懸命に訳し、我が物にしようとして努力して惜しまないことを知ったからでした。彼が驚いた言葉とは、たとえば国家、自由、主義、演説、国体などです。これらは日本で考え出された、いわゆる和製漢語でした。なぜ驚いたかということ、梁啓超氏はこれらの言葉が意味する概念が中国にはないことを理解したからでした。国家と言っても、中国では王朝を意味するものでしかありません。英語で言うnation、stateの概念をもった中国語はなかったのです。彼をはじめ、中国からの留学生によって、これらの言葉は中国へ逆輸出されます。

そして中国という

概念すらも、梁啓超が作り、中国へ逆輸出します。このとき子の中国という言葉が意味するところは、天下の中心を意味する普通名詞の中国、つまり中華、Middle Kingdomではなく、列国の一国たる漢人たちの国民国家、China、Chineを意味する漢訳語でありました。

その梁啓超氏から一文を引用しておきます。

我々がもっとも恥ずかしく思うのは、なによりも我が国に国名がないことだ。よく使う通称は「諸夏」といったり、「漢人」といったり「唐人」といったりするが、いずれも王朝の名前である。外人の言い方では「震旦」とか「支那」とかいうが、どれも自分で付けた名前ではない。

(中国史叙論 1901年)

このような考察の果てに、梁啓超氏は中国という名称を選びます。このような模索は彼一人ではなく、彼のような開明的な人々によって成され、次第に中国という国名に収れんしてゆきます。いま私たちも同じ概念で子の中国という国名を共有するに至っています。しかし、このことが誤解も生んでしまいました。特に日本人は、自国の歴史を当然のこととして疑ってもみませんから、中国も同じと誤ってしまっています。しかし、中国はそれとはまったく異なった性格の国です。

まず、日本は、世界でも特異な国だと思ったほうがいいのです。日本人はあの縄文時代から海で隔絶された日本列島に住み、ほぼ同じ地域で同じ文化を育み、為政者こそさまざまに交代しておりますが、正統な歴史をたどってきました。そしてこの点を強調するつもりはないのですが、天皇を頂点にいただき、以来、日本という国家の在り方を変えては来ませんでした。地理的にも文化的にも一本の柱を貫いた歴史を持つ日本という国家の在り方は、世界ではまれだということを自覚して、他の国を、特に中国は見なければなりません。中国は東アジアの隔絶された、それだけで「世界」と言っているほどの広大な土地に多様性を展開した「世界史」を描き続けてきた事象の総体なのです。もう一度ウィキペディアの中国の歴史としたときの記事を引用しておきます。

中国の歴史（ちゅうごくのれきし）とは、中国の大陸における歴史のこと。

なお、その対象は、中国大陸の地域史であり、漢民族の歴史ではない。

この引用文の意味を解説すると、以上のようなことになります。中国は中国ではなく、中国大陸における閉ざされた地域の名称であり、その歴史は中国大陸の地域史だということです。そこへ梁啓超氏は無理やり中国という概念を植え付けたのでした。しかし、それは自分たちがいるところ、そこに自分たちが発展させてきた文化があるところ、ここからここまでは自分たちの文化圏だという自己認識を持ちたかったのでしょう。そして、その地域では民族の大移動と文化の衝突も起こしてきました。それが国家の実態を欠くことになり、その地域の変容を招きます。中国大陸という入れ物の中での「征服」によって、実態の変容はおこるからです。焚書などの文化の徹底的な破壊は、それを象徴することだと思います。また征服という行為だから、それが行えたのでしょう。歴代王朝の残忍さは歴史書に明確に記されています。

しかし、その中国の歴史は正統性をなぜか最重視します。歴代王朝はそれぞれに歴史書を作り、一つの流れとして王朝は受け継がれてきたのだと主張します。こうして仮想された歴史をその歴史書の中で展開してきます。中国に史書が数多く編纂されてきたのは、こうした理由からでした。

そしてその史書に貫かれた思想が儒教、朱子学でありました。たとえば司馬光の残した代表的な中国史書、資治通鑑には臣光曰という箇所がところどころに挿入されています。これは司馬光の意見を記述するときの前書きです。そしてそこで強調されることは「礼」でありました。社会秩序、身分制階級秩序を維持するための道徳的な規範が礼でありました。ここでは身分制を肯定し、これを破壊することは絶対的悪とされます。そしてそれを維持する作法までが、道徳とされました。こういった通念を一般化したのは、科挙の制度でした。この隋から清の時代まで、約1300年間にわたって行われた官僚登用試験では、官僚になろうと志す者は誰しものが朱子学を学び、研鑽しなければなりませんでした。これによって朱子学的価値観が人々に浸透して、社会通念となったのです。

中国正史というと、こんなところから説き起こすことにはなりますが、面白くない。もう少し、面白いことを語ってみたいと思います。たとえば蒼穹の昴の梁文秀は梁啓超氏がモデルであるとか、これが映像化され、中国でもほうそうされたとか。

中国正史と大げさに名乗りを上げたのですから、まずは古代から出発せざるを得ません。

よく中国は六千年の歴史と豪語されますが、確かに考古学的にその存在が確認されている王朝があります。殷です。この殷から周、春秋、戦国と中国の歴史は始まります。この中国の歴史の特色は、常に皇帝一人が国を統べられていたことです。この皇帝という存在が際立った特徴でありました。そして中国という国の地理的条件が、この中国の先史文明と国家像を特徴づけていきます。まず黄河、淮河、長江、珠江という大河がこの大陸を流れ、のちに四大文明の一つ、黄河文明を育みます。こうした大河は西の高山地帯を源流とし、東の海へ流れていき、この地が西高東低であることを表しています。こんな事、わざわざ断るまでもないとお思いでしょうが、西と東をヒマラヤ山脈と海に囲まれてることによって、この大陸に住む人々は、これが世界のすべてだと思い込みました。一つには、人の行ける限界がこれらによって決められてしまっていたからでしょう。では北はどうかというと、北はこの地に住む人々が自らの手で閉ざしました。それが長城です。長城は万里の長城と冠が付いて認識されていますが、実は秦の始皇帝によって作られた万里の長城の以前から、築かれておりました。

この古い長城は万里の長城に比べて北につくられておりました。この古い長城は土塁と水郷で成り立っており、現在の馬に比べて体も足も短い馬での騎馬攻撃にはこれで十分な防御線になりえた構造でした。古代中国の人々はこの長城で自ら半閉鎖的な空間を作り、これを「世界」、天下とっておりました。この世界観をこののちの中国人は持ち続けます。多少奇異に思われるかもしれませんが、水平線のかなたには巨大な瀑布があって、それが世界の果てとっていたり、地球は円盤の形をしていて大海に浮かんでいると考えた宇宙観の支配していた時代ですから、むべなるかなです。その中国における世界観を著実に表した一文を引用しておきます。紀元前一世紀頃の前漢の時代にまとめられた記録文書である塩鉄論です。

先帝 因勢變以主四夷

地賚山海以屬長城

(せんていせいへんによりてもってしかいのしゅたり)

(ちはさんかいにひんし もってちょうじょうにつく)

ここでいう先帝とは漢の武帝のことです。この皇帝は度重なる遠征によって、領土を拡大の限界まで押し広げました。上記の文はそれを記しています。

武帝は情勢の変化に応じて四方の野蛮人を討伐され、主としての地位を確立された。その結果、国土は山海の際まで迫り、長城に接するまでになった。

というのがこの文の意味です。そして、それは長城が地の果てであるという思いも表しています。この時の山海は、山はチベット高原、海は黄海、東シナ海、南シナ海のことでした。そして東シナ海を東海、南シナ海を南海と呼んでおりました。前漢のことですから、この世界は漢族の居住地であったことも、歴史的には重要な意味を持っていました。そのことについてはまたのちに述べます。

先に世界の四大文明についても触れておりましたが、昔は中国の古代文明は中国文明と言っていたはずですが。ところが考古学的発見が多々行われ、大幅な修正がなされました。1921年、スエーデンの学者、アンダーソンによって、河南省、仰昭村で彩色土器を伴う新石器時代の遺跡が発見されました。また1928年には、董作賓によって殷墟で甲骨文字を含む遺跡が発見されます。さらに上海の南に河姆渡（かぼと）という遺跡も出土します。長江流域には三星堆遺跡も出て、中国には少なくとも三つ以上の新石器文明があったとされるようになりました。

今回は気候変動と経済基盤の進歩による殷の成立の周の台頭を述べてみたいと思っています。が、面白くないですかねえ。酒池肉林の話です。

この時代、地球の温暖化が問題になっていますが、紀元前6000年ごろ、中国、というか、東アジア、中国大陸は今よりも温暖でした。当然、海面も現在より高いところにありました。その温暖な気候のおかげで、黄河流域では「天水」、雨水を使っての農耕が盛んにおこなわれるようになりました。この地域では粟、黍が盛んに作られました。長江流域では稲が栽培されるようになり、豚の飼育もおこなわれます。そして紀元前3000年ころには交易も盛んにおこなわれるようになり、長江からは稲が各地に伝播するようになり、黄河流域では麦が栽培され、羊の飼育も始まります。ところが紀元前2000年ごろになると、現在のような気候になり、寒冷化してきます。この時期、黄河流域では羊、牛、馬などの牧畜が盛んになってゆきます。

こうした気候による生産基盤の変化の中で、北の地方で小さな集落が出現してきます。近年、河南省各地から商代の前期、中期のものと見られる遺跡が数多く発見され、徐々にその期間の全貌が見えてきました。中でも、「偃師商城」と「鄭州商城」「荅北商城」の発見は次に続く殷王朝の前触れとして、この期間の空白を埋めるものとしてちゅうもくされています。

この村単位の小国を束ねて、殷が建国されます。この国では、牛の肩甲骨を焼いて占いが行われました。殷のト占は、ほかにも亀の甲羅や獣の肩甲骨も使われたのですが、実際にはこれらの甲骨に小さな穴を穿ち、熱した青銅製の金属棒を穴に差し込みます。そうしてしばらく放置すると、表側にト形のひび割れが生じてきます。骨には事前に占うことを刻んでおりますが、棒を差し込んだ後に生じた割れ目の形で事の正否を占います。そしてそれについての判断を甲骨に刻みつけておくのですが、さらに後に占いの対象について実際に起きた結果がこの占いに使われた骨に追記されました。その際に使われた文字が甲骨文字でした。この記録として使われる文字を操ることができるのが、この時代では特異な能力でありました。そして、このことにより、王の権威は確保されたのです。

このト占を行うのに、牛一頭が使われました。それも、毎日ではなかったかもしれませんが、一定の期間をおいて繰り返し行われました。そのたびに牛一頭が使われたこととなります。そしてこの時、酒もふるまわれました。その酒宴に盃として使われたのが、青銅器でした。この大量の牛を酒、青銅器、文字を手中にしての王朝が殷でありました。彼らは酒を飲み、牛を食らい、庭に裸の男女を放って、その痴態を宴の肴にしたのでした。これが酒池肉林の始まりです。殷の紂王についての記述が史記にあります。

妲己を愛しみ、妲己の言これ従う。賦税を厚くして、もって鹿台の錢を實（み）たし、鉅橋の粟そくを盈みたす。ますます沙丘の苑台を広め、酒をもって池と為し、肉を懸けて林と為し、男女をしてら僕ならしめ、あいその間に逐らわしめ、長夜の飲をなす。百姓怨望して諸侯畔く者有り、是において紂すなわち刑辟を重くし、炮烙の刑有り。

この紂王は、暴虐な悪政を行なった悪徳の王とされ、『史記集解』は「義を残（そこ）ない、善を損なうを紂と曰う」と記されておろます。このことをもって、殷は周に滅ぼされます。紂王は殷の最後の王でした。

奇書というから、奇抜で怪奇、変な書物とは思わないでください。中国では奇書というと「世に稀なほど卓越した書物」という意味です。この卓越した奇書が四つですから、いわずもがな、三国志演義、水滸伝、西遊記、金瓶梅のことで、この金瓶梅の代わりに紅樓夢ということもあります。このなかで、西遊記は中学生の時、三国志演義、水滸伝は大学で読みふけりました。なかでも水滸伝は、いてふ本刊行会の復刻版を今も持っています。監修は佐々木信綱氏、久松潜一氏、竹田復氏という豪華さで、題名も新編水滸書傳となっています。全六巻。訳本と言いながら、文章は漢文の読み下し程の文語体で、ところどころに木版画であろう画が入っています。一巻、約二九〇ページ。それが六巻、若かったとはいえ、古語辞典も開かず読み通しました。よくそんなことが出来たと思ひ返しています。のちに全集として整った水滸伝も読もうとしたのですが、あのころのような熱意はもう湧いてきません。つまらないのです。読むならこっちがいい、そう思って手元に置いておいたのですが、読まなかったですねえ。そして、図書館も寄付を受け付けてはくれませんでした。50年持ち続けたこの本も、今はただの古本の評価もなくなっていました。

そんな個人的な感慨は置いておいて、水滸伝です。この伝奇書は北宋の時代を背景にしています。北宋の徽宗皇帝に水滸伝の英雄たちが挨拶するシーンがあったと思います。書かれたのは明代、作者は施耐庵と言う人で、実際は講談をまとめたものだと思いますから、講談というものが中国にあったのかと思ってしまうのですが、逆に、中国にあったから日本にも講談があるという方が本当と思ひ返しました。あまり由来を語ってもつまらないですが、水滸伝の滸は ほとり という意味で、みずのほとりということになり、それは梁山泊ということになります。要するに水滸伝は実話ではありませんで、梁山泊に集まった百八星の英雄のはなしを面白おかしく描いた読み物といったたぐいのもので、しかしこれが一時期禁書になりました。つまりこれが農民革命を描いたものだから禁書になったのでした。その後、政治的評価は二転三転して浮き沈みしますが、いまは京劇も復活しているそうです。しかし、このあまりに有名な伝奇書はこれからも読まれてゆく・・・、でしょうか。ちょっと ? かなあ。

水滸伝の思い出話はこれぐらいにして、この水滸伝については改めて考察します。

さて、三国志演義ですが、この三国志演義、あまりに有名で、まるで独り歩きしている感がありますが、これには正史である三国志があることはご存知のことと思います。その正史である三国志、これは、魏（ぎ）・呉（ご）・蜀（しょく）の三国が争覇した三国時代の歴史を述べた歴史書で、元々は「魏国志」「蜀国志」「呉国志」として、独立した書物として扱われていたようです。と、ここまでくると、魏志倭人伝という言葉が浮かんでくるのではないのでしょうか。その魏志倭人伝の記載されているのが、この三国志中の魏国志でした。さらに言うと、呉服という言葉の起源も、この呉国の着物ということから発しています。

では三国志と三国志演義の区別はどのようなかということですが、その前にもう一つ、お気づきのこととおもいます。この両方とも、中国の正史であれば通常「史」とされる筈なのに、「志」となっております。これには特別な理由があるのかと考えてしまいますが、実はこれにはそれ相当のわけがあると言えはそのとおりで、しかし、かといって、深刻になるほど大したことではありません。これを、三つの国の天下統一の志（こころざし）を描いているから、なんて誤解はなさないように。「史」は、歴史哲学も含む、歴史的記録、史料のことを言い、「志」は 誌 の事で、メモ書き、単なるナマの記録といった意味を現わしているのです。元来、正史には、年表の役割を果たす皇帝の伝記「本紀」、人物の記録「列伝」、経済や文化の記録「書（志）」、様々なテーマで分類した年表「表」という体裁が整っていなければなりません。ところが、「三国志」には本紀と列伝しかありません。「書」、「表」という正史必須の項目がないという致命的な欠落から、「志」となっているというわけです。しかし貴重な歴史書であることは変わりません。なにしろ魏志倭人伝が入っているのですから。それに聊齋志異も同じことで、これも志となっております。

正史、三国志と三国志演義が異なるものであることは分かっていたかと思うのですが、では三国志演義は何かというと、結局後世の中国の街角で大衆を集めて面白おかしく語られた口談、講談がもととなったものであります。その口談講談では、漢王室の復興を主題として、劉備が聖人君子で善玉であり。曹操が献帝から篡奪を志す悪役となって描かれます。また、武功高き関羽、名軍師諸葛孔明の異能な采配、息子の諸葛亮も軍事的分野、戦術戦略を問わず、際立った才を持ち、縦横無尽に活躍します。しかしながら、そんな口談、講談の誇張された表現を抑え、より洗練された形に整えて纏めたのが三国志演義でした。作者は施耐庵あるいは羅貫中といわれていますが、定説はありません。それにしてもこの高い物語性と、正史に通じた知識に基づく逸話、記されているのが白話（口語体の事です）でありながら、十分に洗練された文章は、後世に読み継がれるだけのことはあります。

幸田露伴が娘、幸田文に三国志なんぞ学校で教えるほどのものか、あんなもの絵草子みたいなもんだと言っていたことを思い出します。芥川龍之介も子供のころ、親に隠れて読み耽ったと何処かで書いているのを呼んだ記憶があります。日本でもこの三国志演義は大人気で、昔から読まれてきました。ところが一部、これが戦術論として捉えられ、教材扱いされたこともあったというのですから、首を捻ります。しかしまあ、そうであってもいいのではないのでしょうか。近年でもさまざまな作家で脚色されて、世に出されているのですから、それほど名作ということでしょう。私も吉川英治さんの三国志は読みました。他に、平成でも

丹波隼兵等・・・『三國志』（平成6年）

北方謙三・・・『三国志』（平成8年）

宮城谷昌光・・・『三國志』（平成16年）

といった本が出版されています。

台湾へ旅行した時のことを書いた折、関帝廟について述べました。中国では金儲けの神さまとしてあがめられているのは、三国志が中国ではその文化に深く根付いていると解らせてくれました。やはり名作です。

西遊記と言えば、多分知らぬ人はいない中国奇書でしょう。西遊記はもう語るまでもない物語といえます。ウィキペディアでは、中国で16世紀の明の時代に大成した伝奇小説で、

唐僧・三蔵法師が白馬・玉龍に乗って三神仙（神通力を持った仙人）、孫悟空、猪八戒、沙悟浄を供に従え、幾多の苦難を乗り越え天竺へ取経を目指す物語、

とありますが、その時は忘れていても三蔵法師と聞けば即座にイメージガわき、玉龍は三蔵法師の乗っている馬思い出します。さらに齊天大聖孫悟空の名は即座に浮かび、さらに、こむつかしい猪八戒の正式名称は天蓬元帥猪八戒、沙悟浄も捲簾大将であることもおぼえています。そして三蔵法師、法名玄奘三蔵、しかし おっしょうさま と呼ぶ声が耳に残っています。たぶんそれはテレビや映画で繰り返し見てきたからでしょうか。

それにしても、この奇想天外な物語を成立させた中国の文化もすごいです。三国志演義と同様、口談講談が元とは言え、京劇のもっとも人気のある演目であり、最近では中国のゲームのテーマにもなっています。それにしても天界と戦う孫悟空はいかにも中国風でありながら、天竺へは仏典を頂きに行くのですから、この道教的と仏教的世界のごちゃまぜ具合はどうなんだと感嘆してしまいます。

西遊記はこれぐらいの紹介で十分かとおもいますが、ちょっと一言付け付け加えたいとおもいます。西遊記は、東遊記、南遊紀、北遊記で四遊記としてまとめられたものの内の一つでした。これは東海道中膝栗毛があまりに有名で、その陰に金比羅道中膝栗毛もあったことが忘れられていることと同じです。

windows10のことを差しはさみます

ついこの前、私のPCにwindows 10をインストールしました。それまでグズグズと考えあぐね、いじいじしていたのですが、ネットでひょいと、キャンペーンは終わっているが、現在でも無料でWindows 10にアップグレードできる方法があると読んでいました。それには、キャンペーン中に一度でもアップグレードしていれば、マイクロソフトにメールするなりすればいいのだとか、なにやら面倒なやり取りが書いてあったとおもいます。しかしです、Windows 8の私のPC、通常のタイル画面のうらのデスクトップをみていると、なんとWindows 10アップグレードの名のアプリがあるではありませんか。いやいやこれは、更新のためのアプリで、OS全体のダウンロードをするものではないだろうと高をくくり、ついクリックしてみました。すると動くのです。いやそのうち止まるだろう、無効ですとか表示されるだろう、そう思って、何と2時間見てました。間で電源設定の通り、30分すると画面が消え、1時間でPCはスリープしそうになります。じっとディスプレイを見詰め、マウスを動かし、風呂に入りそこね、あくびを押し殺して待ちました。長いです。とうとう風呂に入り、寝ました。どうにかなるだろう、そう決め込んで寝ちゃいました。案の定、それから先の5日間は大変な5日間でした。特に3日目までは、PCがろくに動きません。こっちはもう根をあげて、セーフモードから旧OSに戻す方法を模索しました。できるようです。例えば、SHIFTキーを押しながら電源ボタンを押して立ち上げるとセーフモードで立ち上がるとか。他に、電源を入れてすぐに電源ボタンを長押ししてシャットダウンさせるのを二回繰り返すと、Windows 10は自動修復機能があって、それでセーフモードがたちあがるという記事もありました。よし、これでやってみようと思ひ、立ち上げてみると、なんと見事に10が動いているではありませんか。それでこの文章も書き加えられました。ところが、翌日は10がたちあがっても、うんともスンとも動きません。Windows 10のタイルをクリックしても、画面のどこを右クリックしても反応なし。なんと強制ダウンさせたか。HDに損傷ができたかもしれないと戦きながら、4日目か5日目、何度目かの挑戦です、立ち上げてみると、インターネットエッジが立ち上がります。他のタイルには下向きの↓があって、そのタイルをクリックすると、これは後日つかえるようになります、の告知がでます。こうして結局、安定するのに半月掛かりました。

以上が事の顛末です。しかし今はこのWindows 10、気に入ってます。この非力なノートパソコンでも充分満足のいくパフォーマンスで10は走っています。Core i3、メモリー4ギガバイト、この程度でもだいじょうぶです。ほかに、Windows 7

のPCでも、そして全く10をダウンロードしたことがなくとも、10にアップグレードできるようです。もし、アップグレードせずに終わられた方がいらっしゃるなら、まだ大丈夫です。試みれば、10を走らせられます。ただ私の轍を踏まないように。電源設定は最大長時間でスリープなりシャットダウンするように変えておくということです。それから、半日PCのディスプレイを見ててください。PCは再起動をいやというほど繰り返えます。それから、ここが大事です。PCはずうっとネットにつながっているようにしてください。Windows 10へのアップグレードはネットにつながっていることを大前提にしているようですから。また、安定しても、PCはスタンドアロンで立ち上げないように。これからのpcは常にインターネットにつなげておくのが当然で、この前提で使うものになったようです。

水滸伝は三国志演義ほどにはスケールの大きい物語ではありません。それにしても、三国志演義、これが日本では戦術論のテキストになったというのは、ちょっと笑えます。何度も言いますが、これは庶民の楽しみであった口談、講談のたぐいをまとめたものであったのですから、いわば軍記ものの単なる読み物でしかなかったわけで、それが正確な記述もないまま真剣に研究の対象になっていたというのは、日本人のなんという生まじめさでしょう。本気で研究していたのでしょうか。いや、していたに違いないと思うのです。中国伝来のものですから、押し頂くようにして研究したのだと思います。

さて、水滸伝ですが、中国四大奇書のうち、紅樓夢、金瓶梅は知らないのです。読んだことがない。ところが、

『金瓶梅』は『水滸伝』の第二十三話から二十七話までの武松のエピソードを拡張し、詳細にしたものであり、『水滸伝』からのスピンオフ作品である。(Wikipediaより)

らしいのです。そして、

講談を基に編集された伝奇ものとは異なり、一人の人物が緻密に構成して書き上げたという点で、中国の白話小説でも画期的なものである

と評価されています。要するに、勸善懲悪とか、英雄豪傑の伝奇ものではなく、一步近代文学に近づいたものであったということです。そういった評価を紹介して、水滸伝を考察してみたいと思います。というより、水滸伝の書かれた時代の北宋の皇帝の事を述べてみたいと思います。

水滸伝の舞台は、北宋の徽宗皇帝の時代でした。徽宗は きそう と読みます。北宋、第八代皇帝。日本では、足利時代、足利将軍家によって、きわめて洗練された日本の美が花開いたのでしたが、その足利将軍家がコレクションした中に、桃鳩図という絵画があるのですが、これは国宝に認定されています。その桃鳩図の作者が徽宗でありました。この皇帝、日本では優れた芸術家として評価されていますが、中国では全く違った評価を下された皇帝でした。いまテーマにしている水滸伝も、梁山泊に108人の英雄が、この腐敗した社会の世直しを求める物語ですから、徽宗の時代も当然のことです、腐敗した、庶民の生きにくい時代だったのでしょう。こういうふう

に評される皇帝、徽宗は中国美術史に最高峰と言われる名品を数多く残しています。それゆえでしょうか、徽宗は美に溺れ、まつりごとをないがしろにした皇帝であったと言われて

います。たしかに、徽宗の時代に、異民族の侵略によって北宋は滅びたのでした。このことから、徽宗は亡国の天子とされました。正史に、

日君玩物 而喪志 . . . 著以為戒

とまで書かれました。この意は、皇帝は絵画などの文物をもてあそび、皇帝としてのこころざしをうしな

った。もって、戒めとしてこれを書きしるす、ということです。

このように蔑まれた徽宗でしたが、その実像は違っていました。確かに水滸伝の英雄からは、政治を顧みないと非難された皇帝でした。しかし、徽宗はどうも皇帝になりたくてなったのではなかったようなのです、彼はもともと11人兄弟の6番目の男子でした。ところが、皇帝の座を継いだ長子が25歳で早逝し、次の跡継ぎを誰にするかを見渡したその時には他の年上の兄弟4人も亡くなっており、すぐ上の兄も病弱で、徽宗（その時は趙佶の名でした）なら丈夫だからと、母である皇太后向氏の意向により趙佶に決まりました。徽宗はそののち25年間皇帝の座にありました。

その徽宗が政治に携わるとき、熱心に行ったことがあります。一つは古代の青銅器を発掘し、多くのコレクションを収集したこと。どうじに、その青銅器の複製も多く作らせました。そして、偉大な書家でもあった徽宗は、独自の書体、瘦金体を創出したのでした。彼の治世にはこの二つが大いに活躍いたしました。

思わせぶりに瘦金体と古代青銅器の事を取り上げましたが、それはひとまず置いておきます。

河南省開封、ここに北宋の都はありました。約1000年前の事です。今はかつての宮殿の後に龍亭が再現され、昔の偉容を忍ばせています。亭と言いますが、我々がつい想像してしまいがちなあばら家などではありません。一帯は1949年に再建され、今は龍亭公園となっており、潘家湖、楊午門、玉帶橋、朝門、照壁、朝房、龍亭、北宋皇宮宸拱門遺址、碑亭、北門、東門等が整備され、そのなかでも一番の建物が龍亭で、高さ13mの72段の石段があり、宮殿中央には龍が彫られて屋根は全て黄金色の瑠璃瓦で覆われているという荘厳さで、今もその威容を誇っています。

この都は当時、大繁栄しておりました。清明上河図という、日本での洛中洛外図に当たる絵図が残っており、これには当時の庶民が生き生きと生活している様子が描かれています。ここでは当時としては段違いの開明的な施策がとられていて、市場を開くのに制限がなく、何処の場所でも自由に商売することが許されていました。また都を取り巻く外壁にある門は夜でも解放されており、夜となってもまるで不夜城の趣きでした。このため開封は当時としては世界的な規模からみても大都市といえ、人口は100万人を擁していたのです。ところがこの清明上河図の端にも、物乞いの姿が描かれています。富む人がいれば、貧しさにあえぐ人も生まれてきます。当時、富は大地主に集中しました。そしてこの貧富の差の拡大が、水滸伝を生んだのでした。

開封の北東、250km、北東省梁山はそこにあります。この梁山泊に108星の英雄が集まり、大地主と腐敗した官僚を倒し、世直しをせんと立ち上がる物語が水滸伝でした。彼らの合言葉は「一つになって悪い官僚をたおすぞ」でした。その水滸伝の重要な場面の一つが、徽宗に目通りをするところです。彼らは徽宗に、自分たちの力を国のために役立てたいと訴えます。そんな彼らが徽宗に会ったのが、遊郭でした。徽宗が夜な夜な遊郭に遊んでいたのは有名な話でした。徽宗は毎晩のように愛人の李師詩と会っていて、「放蕩の皇帝」とまで呼ばれていたのです。

皇帝徽宗が遊郭に夜な夜な通っていたのは、この町一番の美女李師師に会うためでした。彼は毎夜李師師との逢瀬を重ねていたのです。そのことは正史に記されて、放蕩の皇帝と評されました。前回記した通り、水滸伝ではこの遊郭で、水滸伝の英雄たちは徽宗と会い、自分たちは忠義の為、戦っている、そして、民には迷惑はかけないと訴えたのでした。

そんな徽宗の毎日がうかがえる遺構があります。晋祠聖母殿です。これは山西省太原市にあり、今は公園になっています。晋祠は、周の武王の次男唐叔虞を祀るために北魏代に創建されたものでしたが、その後しばしば修理が行われ、北宋代に唐叔虞の母である邑姜を祀るために聖母殿が建立されました。その中に置かれた女官たちの塑像も美しく、徽宗の時代の優美さを偲ばせます。徽宗はこのような環境の中で、絵や書に親しむ毎日を送っておりました。

所事者 惟筆研

十六七、於盛名聖譽

徽宗の絵と書の巧みさは世に知れ渡っていたと正史にあります。こんな徽宗がたまたま皇帝の座に就いたのは、類まれなめぐりあわせであったことは先に述べました。しかし、この徽宗が皇帝になることについて重臣たちが異議を唱えます。

端王輕超佻 不可以君天下

徽宗は輕薄で、皇帝には相応しくない

これを母、皇后が退け、結局徽宗が皇帝となるのですが、18才。あの西太后の行った垂簾聽政を母親の皇后が行います。しかし、それも一年で終わります。皇后が崩御されたからでした。この時から徽宗の戦いが始まります。敵は水滸伝の英雄たちが敵（かたき）とした官僚たちでした。

そうした時、徽宗が有力な武器としたのが、殷の時代の青銅器とそのレプリカ、瘦金体の書体でありました。青銅器は殷の頃の祭器でした。この発掘された青銅器にはそれぞれに銘が彫られており、その謂れが権威となりました。

とはいうものの、官僚たちが始めから徽宗の敵であったわけではありません。母の皇后に先立たれた徽宗にとって、官僚たちは有力な支えでした。そんな徽宗のあまり知られてなかった一面が、近年わかってきました。河南省滑県（かなんしょう、かけん）で数多くの石板が見つかりました。それには、身分の低い人、例えば百姓（ひやくせい）であったとか、孤老とかの記事が刻まれておりました。これらは墓誌でありました。そののち、こういった石板が各地で出土し、これに注目した研究者が発掘してみると、多くの漏沢園が発見されました。北宋時代の、貧しい、身寄りのない人たちを葬った共同墓地です。なかでも、河南省山門峡市の漏沢園は最大級のもので、849もの遺体が素焼きの甕に入れられ、石板の墓誌も一緒に丁寧に埋葬されていました。その石板から、徽宗の時代には貧しい人々をひきとる仁先院、病気を治療する安済房、そして、亡くなると、引き取り手のない人を葬る漏沢園などがととのえられていて、福祉は充実していたのでした。

そうした政策を立案する有能な官僚たちが、徽宗をささえていました。徽宗の手になる 聴琴図 にそれが分かります。この絵には、琴を奏でる徽宗とそれに聞き入る蔡文が描かれています。この蔡文が皇后崩御の後の有能な補佐役でした。

こうした官僚制の大改革が行われたのが、この北宋の時代でした。そのことは徽宗の父、神宗の墓、神宗陵に伺えます。この神宗の墓を守るように、数多くの石像が周りに立っております。北宋は軍人に高い地位を与えず、文知主義を貫きました。このことがのちに、徽宗を亡国の皇帝ともすることになりますが、それは後の話です。しかし、そのために隋の時代から続いてきた科挙の制度を大きく変えられました。その改革された科挙の制度はあとあとの王朝にも引き継がれました。そして、そのことは科挙を目指す人々が学んだ国子監にみられます。科挙に合格した人の名を刻んだ石碑に、降格した人の出身地がかかれています。四川、河南、福建、江蘇、浙江、湖北と、全国の地名があります。また、身分は問われておらず、徹底して実力主義が貫かれていたのでした。

その国子監で学ばれていた教科書が幾つかあります。欽定四書文、易経、詩経、監本詩経などです。中国歴史で1200年続いた科挙ですが、必須科目が試作でした。上手に試作する、優れた詩を詠むことが出来なければ、完了にはなれませんでした。逆に、中国の歴史に名を残す詩人は、殆ど官僚でした。さて、北宋の科挙の最大の特徴は、殿試でありました。徽宗は科挙の改革に、この殿試を設けました。殿試とは、皇帝自らが試験会場に赴き、試験を監督し、面接まで行ってその合否を決定したのでした。つまり、皇帝が試験管であったわけです。こうして貴族からではない、皇帝が最も信頼の置ける人材を合格させ、任命する形式を踏むのが殿試でありました。こうして皇帝は「直臣」を育てることのできる科挙の制度をつくりました。これは清代のすえまでつづきました。

かつて放蕩の皇帝、某国の皇帝とされた徽宗でしたが、実際は30代後半となって益々まつりごとに深くかかわろうと努めました。それを証明するのが瘦金体でした。この瘦金体、徽宗が生み出した独特の書体で、現在の中国でもこれを書ける書家は、ほんの数人に過ぎません。瘦金体は字が細いが鋭く、力強い書体です。楷書や隷書は書くスピードがゆっくりでもいいのですが、瘦金体はスピードが遅いと力強くみえませんが、素早い筆遣いで力強さを生み出す高度な技法の書体です。この徽宗しか書けない瘦金体で書かれた命令書が見つかっております。

其諭朕意母忽忽 御名手詔

朕の意を人々に教え諭し、ないがしろにしてはならない。ぎょめいしゅしょう
これは徽宗が始めた命令書の形式です。これまでの皇帝は官僚が書いた文書にただ署名するだけでした。それを徽宗は自ら誰もかけない瘦金体で書いて発布させたのでした。この事は、皇帝が政治の表舞台に出て、権力のある所を示したことを意味します。

衝改御筆處分者、以大不恭論

御筆の命令書を改竄したものは極めて重い不敬罪にあたり、嚴重に処罰する
こうして御筆手詔は最も守られなければならない命令書であるという意味をもつことになりました。このような命令書の存在が、彼の汚名を払しょくするだけの力を持った確証であると言えます。

しかし何故徽宗はそこまで政治に関わろうとしたのでしょうか。それを示すのに、水滸伝の晁蓋のエピソードがあります。

晁蓋は痺れ薬を入れた酒を用意し、それを役人どもに大盤振る舞いいたします。そ

して薬が効いてきた時、彼らが運んできた荷物を奪って去ります。それは賄賂として中央の高級役人に送られる筈の金銀財宝でした。このことは徽宗の時代の事を書いた「宣和遺事」に記されています。

天下騒然 皆曾犯徒杖脊始因賄事蔡敬交結

犯罪の前科がある者でも、賄賂をうけとれば蔡京はその者を取り立てたとあります。

蔡敬、徽宗につかえること18年、その蔡京たち高級官僚と徽宗の間には確執が生じていました。或る時、高級官僚の一人が、徽宗に上奏文を提出して、進言します。

五日一視朝

皇帝には毎日政務を執られることはありません。五日に一回になさっては？という内容でした。徽宗はこれに怒り、

徽宗以其言失當、乖宵圖活之意

皇帝たるものは夜も昼も一日中まつりごとについて考えていなければならないそういったのでした。

こうした官僚との確執が決定的になる事件が起こります。それは外交面でのことでした。北宋の都、開邦の北600kmのところにその時代に、築かれた長城があります。その先には遊牧民族が建国した遼と西夏がありました。ところが文治主義を貫いていた北宋は、貧弱な軍事力しか持っておらず、外交で辛うじて平和をたもっておりました。景德四図という絵図には開邦を訪れた遼の使節が描かれております。この遼の使節は毎年やってまいります。そしてこの使節は大量の金銀をもってかえっておりました。これは西夏についても同様でした。北宋はこうして辛うじて平和を保っていたのでした。しかし、その平和も破られる時が来ます。

辛うじて保たれていた平穩が破られる日がやってきます。遼と西夏が手を結びました。そして、寮からの使者が、西夏と領有権を争っている土地を諦めよという要求を突きつけます。徽宗はこの問題を外交によって解決しようと、遼に使者を送ります。ところが、この使者が徽宗の意に反して、遼の王に無礼な態度を取って、遼の王を激怒させます。これは蔡京の差し金でした。蔡京は遼と西夏の連合軍との戦争も辞さないと考えていました。その結果、遼は北宋の国境線まで軍を押し進めてきます。まさに一触即発の事態でした。小手に対して徽宗は蔡京を罷免し、外交交渉を進めます。それが功を奏して、徽宗は領土を失うことなく、事を収めることが出来ました。

そういった事態を乗り切りながら、徽宗は在位20年近くを迎え近くをむかえようとする時、徽宗は官僚制度の在り様を変えようとします。彼はまず、それまで政務を執っていた場所を内殿から金中の宣和殿に移します。彼はより積極的に古代中国で作られた青銅器を発掘させ、それを宣和殿に起きます。そのために収集した青銅器はおよそ800点におよびました。宣和博古図というリストにそれが記録されています。その青銅器は殷や周の時代に作られたもので、それらはその時代では儀礼に使用されていたものでした。それ故、青銅器の銘文には王との契約とか、儀礼の方法がしるされており、これらは王の権威の象徴でありました。

徽宗はその他に、絵画や書の目録も作りました。宣和画譜、宣和書譜がそれです。これには6000点の絵画と1000点の書がリストされています。その中には国立故宮博物館の所蔵となる江行初雪図もありました。これは五代十国時代の趙幹の手になるものです。そして趙幹は山水画の先駆者と位置付けられています。たぶん、私はこれを見てると思います。そんな記憶があります。

こうした文物、美術品を置いた宣和殿に徽宗が信頼する官僚を呼び入れ、政務を執ります。その時、ここで徽宗直筆の瘦金体の命令書も作られました。時として、徽宗はこの美術品を彼らに披露し、共に楽しみ、謂れを披露していたようです。また、その中の青銅器、大晟鐘も開邦市博物館に残されています。これは徽宗が復元したものでした。

以鐘鼓奏之

大晟鐘は、儀礼の際に楽器として使われていたものです。科挙に合格した士大夫はそれを教養としてしてしておりましたので、容易に理解しました。

徽宗は何故そんなことをしたのでしょうか。それは、こうした青銅器が使われていた時代に古代中国の政治は、聖人による理想的なまつりごとが行われていたという思い込みがあったからでした。徽宗はこれを逆手に取り、自分はこの聖人たちによって行われていた理想的な政治を手中にしていると暗に官僚たちに見せつけたのでした。つまり、徽宗は、古代からの理想的な政治を受けついでいる正統な支配者として、こうした場所を設けることで、自らを権威づけたのです。正統性とその演出は、中国正史では強調されます。大晟鐘の音色を響かせた儀礼は、徽宗には大いに役立ったことでしょう。開封では今もその頃の歌謡が残っているとか。

ところがそのころ、北方では大きな変化が起こっていました。あれほど強大な力を誇っていた遼に女真族が反乱を起こし、まさに燎原の火のごとくその勢力を拡大していきます。そして金を建国し、遼を滅ぼしてしまいます。さらに女真族は南下して北宋を侵略します。開封はあっけなく陥落しました。1127年、北宋滅亡。

徽宗は北に連れ去られ、幽閉されます。同時に徽宗が収集した美術品はことごとく持ち去られます。徽宗が幽閉されたのは、黒竜江省五国城でした。

知他故宮何処

憑不思議

除夢裏有時曾去

無拋

いにしへの宮殿は何処ともしれず

おもいにおもえ

ただ夢の中

時に帰らんと思えども

よるかたもなし

徽宗はこうして亡国の天子となったのでした。

しかしながら金は北宋の文化を受け継ぎました。先の江行初雪図には、金の皇帝、章宋の印が押されています。そしてさらに、元の文宗、清の乾隆帝の印もあります。この乾隆帝は徽宗を高く評価しました。徽宗は仁の厚い皇帝であったのでした。

今回は三国志演義を派生的に考察してみたいと思っています。魏志倭人伝の魏はどういった王朝であったか。これこそ曹操の建国した国でした。

三国志の内の魏の国について述べるつもりでしたが、昔のノートの一部が欠けていて論になりません。今日は水滸伝の結末について語ってみたいと思います。

水滸伝はその構成として、前半と後半にわかれており、その前半は、それぞれの英雄豪傑のエピソードを連ねてまいります。その豪傑の個々の物語は、やはり講談が元なだけに痛快で、その超人的な活躍は生き生きとしています。しかし、水滸伝に登場する108人の豪傑たちは、運命のいたずらで結局は梁山泊に結集するのですが、もとはといえば山賊たちの親分といったところですよ。そして、その親分たちのもとには10万人の手下が終結しておりました。と、白髪三千丈のくにですから、ちょっと眉唾ですよ。

物語の舞台となった時代はというと、当時中国を統一していたのは宋という国でした。その宋の第4代皇帝・仁宗の時代に、都の東京（とうけい）で疫病が大流行します。皇帝と政府の高官たちは、道教の総本山である竜虎山の法主、嗣漢天師（しかんてんし）の祈祷で疫病を払ってもらおうこととし、使者として大將軍の洪信を派遣しました。洪信が法主を迎えに来ると、嗣漢天師は自分一人だけ雲に乗り、東京に向かいます。ところが洪信はその後で余計なことをしてしまいます。この竜虎山には、唐の時代に108人の魔王を封じ込めたと伝えられていた伏魔の殿という祠がありました。洪信は余計な好奇心をもよおし、その中を見たくて道士たちに命じ、無理矢理に伏魔の殿を開けさせ、さらに中にあった石碑をどけて穴を掘らせました。すると、そこから黒雲がわき上がり、天罡星36柱、地煞星72柱の魔王たちが金の光となって飛び散ってゆきました。この108柱の魔王たちがやがて人間に生まれ変わり、梁山泊に結集することになります。

ここでお気づきでしょうか。道教（天師道）の本山である竜虎山には、大上清宮、三清殿、九天殿、紫微殿、北極殿などが建立されていたのですが、そこへ唐の時代に道士・洞玄国師が竜虎山の地下に魔王を封じ込めるために建てられたのが、伏魔殿でした。これを詳述すると、周囲を赤い土塀で囲まれ、軒先には金文字で「伏魔之殿」と書かれた看板が掲げられていたといわれています。正面の扉には護符が何枚も張られ、銅で固められた錠前が付いていました。そして、社殿の中には神代文字が彫られた高さ2メートルほどの石碑があり、背面には普通の文字で「遇洪而開」と記されています。石碑の地中約1メートルには、3メートル四方もの巨大な一枚岩があり、その下は底なしの深い穴となっていて、この穴の中に魔王が封じ込められていたのです。代々の天師により、決して開けてはならない場所として厳重に守られていたにもかかわらず

ならず、軽薄な官僚洪進によって封印が暴かれ、魔王が世に放たれたのでした。これが水滸伝のはじまりです。しかし、これって、南総里見八犬伝の始まりと似てませんか。108の金の玉ではありませんでしたが、8個の玉が空を飛ぶのは八犬伝です。やはり影響はあったのです。そして水滸伝から伏魔殿という言葉が始まったのでした。

伏魔殿の故事が、水滸伝から始まったことであったことは、あまり知られてはいないようです。しかし、魔を封じ込める、そして、お札を外すとその魔が飛び出すという設定は、西遊記にも似たところがあります。

石猿、齊天大聖孫悟空は、天界の兵を相手に大暴れし、天帝にさえ押さえつけられません。そこで天帝は、雷音寺の釈迦如来に助けを求めます。如来は奢る悟空に身の程をわきまえさせるために賭けを持ちかけ、如来の手のひらから飛び出してみよといっています。これを馬鹿にした悟空は、筋斗雲に乗って世界の果てまで飛んでゆき、そこで立ちションをしてかえります。ところが悟空ここに至りたりと書いたのは、如来の指でした。如来に勝てなかった悟空は取り押さえられ、五行山に封印されてしまいます。それから500年後、三蔵法師によって五行山に貼られたお札を剥がしてもらい、弟子となって天竺へというのが西遊記でした。いまでも神社仏閣にはお参り札がはられていますが、これもこの中国の習慣に習ったもののようです。

導かれるように108人の好漢たちが梁山泊に集結し、それが運命であったことを知るようになります。それは、108人の頭目となった宗江が、前ボスの晁蓋のために盛大な供養を営んだときのことです。晁蓋というのは小者ばかりの山賊集団だった梁山泊を一大軍事拠点に生まれ変わらせた大豪傑で、残念なことに梁山泊が完成する前に死んでしまっておりました。ところが、七日七夜の供養が満願となった夜、不思議なことが起こります。空から突如火の玉が落ちてきて、そのクレーターの中を掘ってみると一枚の石版がでてきます。それにはなんと、天罡星、地煞星108星の名と豪傑たちの名がきざまれておりました。これによって、今こうして梁山泊に集まっている108人の豪傑たちは運命にみちびかれ、ここに集まることは定めだったことがわかったのです。

こうして集まった108人は盛んに攻めたててくる官軍を、さんざんに打ち破ります。その頃、宋は内憂外患であったことは徽宗皇帝の事を述べた時に記しました。史実としてはその通りでしたが、水滸伝では、北方の遼が宋を侵略する構えを見せ、内には華北の田虎、淮南の王慶、江南では方臘などが反乱を起こします。また、こうした内憂外患のうちに、四奸六賊とされた蔡京、高俅（こうきゅう）、童貫（どうかん）、楊戩（ようぜん）なども肅清されそうになってゆきます。その事態を憂いた宋江は梁山泊の仲間から大反対されるのを押し切り、宋王朝へ忠義を尽くそうとします。彼は開封府の芸妓李師師に賄賂を贈り、徽宗に会うことに成功します。結果、梁山泊の軍勢は招安され、官軍となります。

というのが、水滸伝の流れですが、この王慶、田虎などの四大叛徒は、史実としてそれらしい人物はいても、ちょっと違っておられます。また四奸六賊の内の蔡京は実在ですが、残りは、モデルはいても実在ではありません。高俅などは、この名の者はいましたが、仔細は違っています。モデルとなった人はそれなりに有能でした。ところが水滸伝での高俅は、ただ蹴鞠がうまいだけの、それだけで高位についた悪徳官僚となっています。ゴマすり坊主といったところでしょうか。

しかし、官軍となった梁山泊は、蔡京たちが握りつぶしていた地方の反乱を鎮圧に向かわせられます。元々、どうにも抑えられなかった梁山泊です。彼らの方から帰順してきたことは、王朝側には好都合だったのです。王朝側は、武力ではだめだから、何とか調略しようと画策していたからです。しかし、招安はしたものの、あと、彼らをどうするかについては大変悩ましいことでした。そこで、王朝側は彼らの忠誠心を逆手に取って、どうしても手に負えない地方の反乱の鎮圧に使うこととしたのでした。

水滸伝はそれ自体100巻本とか、120巻本として世に出された長編ものでしたから、後半だけでも60巻ほどもあります。その大半は遼とのたたかいであり、前回紹介した反乱軍との戦いです。しかし反乱軍たちは、結局突き詰めれば梁山泊と同じこと。彼らも梁山泊もともに、反乱軍であったわけです。そんな戦いで、最初こそ連戦連勝で勝ち抜き、梁山泊の英雄たちも死者を出さずに済みますが、そのうち悲惨な戦死の仕方をするものも出始め、終わってみれば108人の英雄達も、その大半が死んでしまいます。王慶討伐戦までは108人の中に死者は1人もいなかったが、最後の方臘討伐戦で59名が戦死し、10名が病死という結果になるのです。

そんななかで、武松は戦いに中で左腕を失い、そのことに絶望して杭州の六和寺というところの寺男になって一生を過ごすことになります。また獣医の心得のある皇甫端や印鑑職人の金大堅などは、皇帝の命で梁山泊軍を離れ、朝廷で働くようになります。さらに大魔術師・公孫勝などは、母親が危篤となり、方臘討伐戦前に梁山泊軍を離れてしまうというていたらくです。しかし、この物語の結末へ向かうとき、彼らは幸いでした。彼らにとっては幸いだったと言い直しておきます。残った英雄たちはそれぞれに悲惨な市にざまを見せることになるからです。

梁山泊軍は反乱軍との戦いで、その大半70余名が戦死します。生き残った37名については、再び結束されることを恐れた四奸どもの悪計でバラバラにされ、地方へ飛ばされます。総大将の宋江は凱旋後は高い官爵を与えられ、楚州の司令官に任命されるのですが、これを不満に思った朝廷の悪臣たちの陰謀で毒殺されてしまうという事態に立ち入ります。彼はもうご用済みということです。皇帝からの贈り物と称する酒に毒を盛られ、死んでゆきます。ところが、この宋江、彼は自分が毒で死ぬことを知ると、腹心の李逵を呼び寄せ、彼にも毒を盛り、毒殺するのです。李逵はどうしようもない暴れん坊だったから、宋江が毒殺されたと知れば、反乱を起こすに違いないとかんがえたからでした。ところが、宋江から毒を盛られたことを知らされても、李逵は「かまいませんよ。おれは死んでからも、兄貴のために働きますよ」と涙を流してしんでゆきます。

宋江の死には、まだ後が続きます。軍師だった呉用と弓の名手の花榮は、宋江の死を夢で見ると、すぐにもその墓を訪れ、その場所で二人一緒に首を吊って死ぬことを選びます。少李広の花榮、軍師、智多星の呉用の死をもって、水滸伝は結末となります。

彼らが居なくなると時を同じうして、北方の金から、完顔阿骨打(かんがんあくた)

の軍勢が宋に進攻し、一気に開封は落とされ、宋は滅亡します。徽宗皇帝のその後は、知っての通りです。

水滸伝、漢たちの物語です。

きっかけは中国の成都に拠点を置くメディアグループ紅星新聞の報道でした。

河南省・安陽市で2009年に発見された曹操の墓とされる遺跡で見つかった男性の遺体について、河南省文物考古研究院が「曹操であることを基本的に確認した

というのが記事の内容でした。これを引用する形で、このニュースは世界中に拡散します。しかし、本当でしょうか。1800年前の事です。しかしその懸念も後々の調査から一応決着しているようです。先ず傍証として、その墓から出てきた石牌に、

魏武王常所用大戟

と刻まれていたこと、そして、同時に発見された頭蓋骨と曹操の子孫のDNA鑑定から、この墓が曹操墓であると一応断定されたことがあります。正規の発見でした。しかし、その経緯は、詳しく述べることでもありません。三国志演義ではヒーローであった曹操の話です。何より魏志倭人伝など、日本に深く関わった魏の王であった英雄の事ですから。

曹操の事を王と言いました。彼は皇帝にはなりません。三国の内の他の国は、皇帝を名乗ったりもしたのですが、漢王朝をおもんばかって、他の諸王から皇帝になれと言われても、彼はこれを固辞したそうです。はや、悪役とは違った一面が見えてきました。曹操は案外義の人であったようです。

1800年前、漢の国のおとろえから、時代は群雄割拠の戦国の世になってゆきました。それまで400年君臨した漢は、長きにわたる政権の座にあって、太平の世に確たる軍事力を持っていませんでした。その漢に、黄巾の乱がおこります。漢が衰退してゆくきっかけは、この黄巾の乱でした。魏、呉、蜀の三国時代の幕が開きます。

曹操墓の発見は2009年でしたが、これも河南省安陽県安豊郷西高穴村で見つかった「魯潜墓誌」と呼ばれる刻石から始まります。それには、「故の魏の武帝陵の西北角より西に行くこと四十三歩、さらに北に二百五十歩進むと魯潜墓の明堂にたどり着く」と、墓の位置を「故魏武帝陵」の相対位置で示されていました。ところが、これは1998年に発見されていたのですが、この噂はたちまち広がり、2005年には盗掘団が先手を打って曹操墓を発見、墳墓内の財宝を持ち去ったのでした。のちにこの盗掘団の主犯格の男は捕まり、刑務所に入れられます。ところが、国家考古隊が組織され正式に発掘を始めるのですが、その場所が分からない。そこでこの盗掘団

の男を一時解放し、発掘に協力させます。そして結局この男の協力でやっと墓は発見され、本格的な発掘が始まることとなりました。

しかし、1800年も前の曹操の頭蓋骨と、1800年経った後の子孫のDNA鑑定が信ぴょう性を持つのだろうかと思ってしまう。一見科学的な裏付けのように見えて、眉唾のことこの上ないとも言えそうです。そんなことを言わずに、石碑の文言だけで曹操の頭蓋骨らしいとだけ言っておけばいいのです。ツタンカーメンのミイラはツタンカーメンの棺に入っていたからそうだとしかいわないのですから。

それはそれとして、曹操は三国時代において、魏を最強の国にした人でした。2009年に国家文物局によって発見された曹操の墓には数多くの副葬品が納められておりました。墓は河南省北部、洛陽の北300キロにある安陽の郊外、西高穴村にありました。墓の面積は740平方メートル。その墓道を下りると、地下に墓室があり、墓室は6室、後室には左右に側室があって、墓の主や妃などのひつぎが納められていました。また前室には、ここにも副葬品がその左右に収まっておりました。その数、約400。盗掘されたとはいえ、まだ副葬品の名称を刻んだ石碑が残っており、大方のところが推測できたようです。そして、そんな状態の中で、曹操の頭蓋骨も発見されております。河南省文物考古学研究院によれば、その頭蓋骨の縫合線と歯の摩耗についての鑑定から、60代の男性のものと判定されました。曹操は66才で亡くなっていますから、ほぼ一致します。ただ、その頭蓋骨の発見された場所が墓室の前室でした。これが曹操であるならば、後室のひつぎの中であるはずでした。またこの頭蓋骨は後頭部と側頭部が残っていて、顔の部分は破損し、無くなっているか、微塵にくだけているようでした。ということは、この顔の部分は盗掘によって損壊されたようだと推測されています。

さて、くりかえしになりますが、曹操は三国志演義では憎まれ役の悪役として描かれています。ところが、本来は時代を変えた、革新的な人であったようです。いわば、伝統とか因習にとらわれない、時代を超えた変革者であったということです。ところが、こうした評価は根付きませんでした。曹操をあつかった京劇に促放曹という演目があります。これは、曹操が命を助けてくれた恩人一家を皆殺しにするという内容で、まさに悪逆非道の大悪人として描かれています。

ところが正史三国志では、まったく違った評価が記されています。

超世之傑矣

(時代を超えた英傑である)

これが正史での評価です。そのことは曹操墓からもうかがえます。

曹操の時代より前の時代の墓を見ると、その埋葬の仕方は豪華絢爛たる副葬品であふれていました。所謂、厚葬でした。これは漢の時代の国学とされた儒教の教えに基づいて、目上の人は敬わねばならないという教えに従ったものでした。それ故、親が亡くなれば、できるだけ手厚く葬ることが奨励されていたのでした。また漢の時代では、貴族の葬儀はあまりにも行き過ぎが顕著でした。それに比べ、曹操の墓は、副葬品こそ400余りもありましたが、きわめて質素と言わなければならないほどのものでした。正史三国志には、曹操の言葉として、

僉之以平服

無藏金玉珍寶

遺体を包むには平服をもってし、金玉珍宝を納ることなかれと生前に言い残していたとあります。これは曹操の、儒教への反発からでした。彼は薄葬令を発布しておりました。それと同時に、貴族とか身分の高いものを重用するというのではなく、実力主義を徹底したのでした。そんな彼には、時代の革命児といった趣から、戦国時代を制する先駆者であった織田信長の気風が見えます。というより、革新者はこういう共通点を持ったものでなければならないのでしょう。

もう一度曹操の事を振り返っておきます。曹操は後に述べますが、決して高貴な家柄の出身ではありませんでした。それでも、自力で後漢の丞相の地位まで上り詰め、呉、蜀を上回る勢力を作り上げ、魏を三国の内の最強にまで持ってゆきました。そんな曹操でしたが、彼は漢王朝を滅ぼし、皇帝の地位に就くことも可能であったにもかかわらず、生涯後漢王朝を支え続けました。彼は治世の能臣でありました。しかしのちの人は彼を乱世の奸雄と言ったのでした。

そんな曹操が乱世で勝ち抜くためには、先に述べたとおり、儒教を否定しなければなりません。日本ではこの儒教を最初から政治哲学、もしくはイデオロギーといった捉え方から始まって、これが宗教だとは一顧の瞥もしませんでした。しかし、孔子廟を見ればわかる通り、中国では仏教、道教に並ぶ宗教でした。曹操がこれを否定するのは、聖徳太子が仏教を日本に広め、いわば宗教革命を起こしたことと同じ意味を持っていました。まず原始儒教と儒学は、中国がユーラシア大陸の一角で広大な土地を持った、区切られた世界中の世界であったことと深くかかわっておりました。中国は殷の時代からすでに官僚制が整っていたのです。また、官僚機構がなければ、あの広大な国土は統治できませんでした。その土壌の上に、先祖崇拜と靈魂の呼び出しを行うシャーマンがおりました。これを儒家といい、講師の母は背の曲がった儒家でありました。このような身体に障害を持った人は、当時葬儀が行われる場で演奏し、死者を弔う儀式を行っておりました。ですから、時には屋根にその理想の登ってほうほうと声をあげ、死者の魂を呼ぶなんてこともしていたそうですし、日照りの時は雨乞いの儀式を行っていました。孔子はこの母と各地を回っていたおかげで、こうした儀式に通暁した人物でありました。その孔子自身が、自分は儒教の創始者ではないと述べておられます。しかしこれは、この教えは昔からあったのだということで権威付けする言い方ではないでしょうか。徳をもって治世を行えと一介の儒家の息子が言うよりも、殷の時代はこのように徳をもって政治が行われていた、儒学は理想の治世が行われていた殷の時代からの教えであると孔子は言ったのです。その孔子がある国の大臣に登用されたとき、一番最初に行ったことは不穩分子の暗殺でした。

それはさておき、乱世では下克上も皇帝を廃することも、何のこだわりなく行われておりました。しかし、儒学はそれを否定します。祖先崇拜などのシャーマニズム的、儀礼的な信仰として続いていた儒教を、孔子は宗教性のある思想に作り上げます。それはシャーマニズムを基礎として、その中にあった孝という理念を中心に据えて、どこかしらに宗教性のある政治思想としての儒教を成立させたのでした。

霸道の時代だった春秋時代を生きた孔子は、周の秩序立った身分制度のもとで営まれていた社会を理想としました。

子曰 道千乗之國。敬事而信。節用而愛人。使民以時

(子曰く、千乗の国をおさむるには 事をつつしみて信あり 用を節して人を愛し 民を使うに時を以てす)

子曰 弟子入則孝。出則弟。謹而信。汎愛衆而親仁。行有餘力。則以學文

(子曰く、弟子入りては即ち孝 出でては即ち弟 則ち孝、謹みて信あり 汎く衆を愛して仁に親しみ 行い余力あらば即ち以て文を学べ)

すこし論語を引用してみました。孔子は自身では書を起こしませんでした。論語は彼の言葉を弟子が書きのこす形であらわされ、今に至っています。ですから世知に長けた格言集の呈をなしていると言ってよいでしょう。しかし、その根本は仁愛であり、徳を語って人を諭しております。それは彼の理想を語っていたのかもしれませんが。しかし、これを中国の特性に照らしてみると、身分制の固定と社会の硬直をもたらすものであったと言えます。皇帝一人が広大な中国を支配し、300余の民族を纏めなければならなかったのですから、徳をもってまつりごことに携わらなければならないと皇帝を諫めながら、皇帝に逆らってはならないと臣民に説くのが儒教でした。

これでは曹操は動けません。曹操は国教となった儒教を表立っては否定しませんでした。薄葬令などで暗にこれを批判したのでした。そして、曹操がどうしても儒教を否定しなければならない理由がもう一つありました。劉備玄德の存在がそれです。この元徳は漢王朝の末裔でありました。とするならば、儒教に従ってはいはこれと戦い、滅ぼすことは不忠に当たることになります。当然それはできません。曹操は、自分は丞相でとどまりながら、蜀を滅ぼし、呉と戦ったのでした。

三国志の中で曹操を語るのであれば、赤壁の戦いの事を避けては通れません。北魏の中の混乱を鎮め終えた曹操は、漢の海内一統を再現しようとして南に軍を進めます。時は後漢末期の208年、場所は長江の赤壁（現在の湖北省咸寧市赤壁市）でした。このとき、曹操軍は数十万の大軍勢でありました。そのうえ、漢王朝の権威をもち、右しております。明治維新の錦の御旗のようなものです。これに対して、呉の孫権も劉備も、漢王朝の権威と支配が採らいた地方の反乱軍の賊将でしかありませんでした。彼らはそれぞれ呉にも蜀にも干渉を立てることはできていなかったからです。劉備などは荊州に割拠した劉表の客将にしかすぎませんでした。その劉表は、曹操がこれを攻めるため兵を率いて荊州へ南下してきたその8日に死んでしまいます。そして、劉琮も9日に曹操に降伏してしまいました。ところが、荊州の一部の人間は曹操への降伏を拒み、劉表の客将にすぎなかった劉備に付き従って南へとのがれてゆきます。その数、十数万人。しかし、その全てが軍人、兵ではなく、多くの百姓（ひやくせい、一般人の意）であったものですから、行軍も遅々として進みません。劉備は陸路をはるばる江陵へ向かって南下してゆきますが、とうとう曹操の騎兵に追いつかれ、危うく全滅の憂き目にあい宋のなるのですが、懸命に長坂の戦いを戦い、何とか生き延びます。そして荊州の動向を探りに来ていた魯粛とあうことができ、さらに1万人余りの軍勢を率いる劉琦と合流して夏口へと到着します。このとき、曹操は劉表が創設していた荊州水軍を手中にしておりましたので、これを南下させて兵をはこび、長江沿いに布陣させました。

赤壁の戦いで劉備と共に闘った当時の孫権は今だ会稽郡の太守に過ぎず、

この時孫権はいまだ会稽郡の太守にすぎず、呉も混乱の最中に会って戦意も軍としてのまとまりもありませんでした。ですから、朝廷の錦の御旗に恐れおののき、早々に降伏しようという意見が多を占めようとなりました。それに対して、魯肅だけは抗戦を説き、鄱陽に出ていた周瑜を呼び戻させます。この魯肅と言う人は生来なかなかの豪胆な豪傑であったようで、当初袁術につかえますが、その袁術の傲慢で驕慢の質に失望し、孫権に仕えます。孫権のもとで彼は十分にその能力を発揮し、勇猛な武将であり、かつ有能な参謀にして、劉備との同盟ももたらす程の外交手腕を発揮し、最後まで孫権を支え続けます。この魯肅が曹操の迫ってくるときに周瑜を呼び戻して周瑜と共に交戦論を説きます。周瑜は、曹操軍は水軍による戦いに慣れておらず、土地の風土に慣れていないので疫病が発生するだろう。それに曹軍の水軍の主力となる荊州の兵や、袁紹を下して編入した河北の兵は本心から曹操につき従っているわけではないのでまとまりは薄く、勝機はこちらにあると説いたのでした 陳寿による魏志には、

衆寇寡、難与持久

然観操軍船艦、首尾相接

可焼而走也

(今寇(てき)は衆(おほ)く我は寡なく、与然るに操の軍の船艦を観るに、首尾相接す。焼きて走らすべきなり)

とあります。続けて

乃取蒙衝 鬪艦数十艘 実以薪草膏油灌其中 裹以帷幕 上建牙旗

先書報曹公 欺以欲降

又予備走舸 各繫大船後 因引次俱前

曹公軍吏士皆延頸觀望 指言

蓋降

乃ち蒙衝・鬪艦数十艘を取り、実たすに薪草を以ってし膏油もて其の中に灌ぎ、裹むに帷幕を以ってし、上に牙旗を建つ。

先づ書をもて曹公に報じ、欺くに降らんと欲するを以ってす。

又予（あらかじ）め走舸を備へ、各大船の後に繋ぎ、因りて次を引きて俱に前（すす）む。

曹公の軍の吏士皆頸を延ばして觀望し、指（ゆびさ）して言ふ、
蓋降（くだ）る

蓋放諸船 同時発火

時風盛猛 悉延焼岸上營落

頃之 煙炎張天 人馬焼溺 死者甚衆

軍遂敗退 還保南郡

備与瑜等復共追

曹公留曹仁等守江陵城、径自北歸

蓋諸船を放ちて、同時発火せしむ。

時に風盛んにして猛く、悉（ことごと）く岸上の營落到に延焼す。

頃之（しばらく）して、煙炎天に張り、人馬焼溺し、死する者甚だ衆し。

軍遂に敗退し、還りて南郡を保つ。

備瑜等と復た共に追ふ。

曹公曹仁等を留めて江陵城を守らしめ、径ちに自ら北に歸る。

魏書による赤壁の戦いを見たのであれば、三国志演義ではどう描かれていたのかも見なければなりません。たとえそれが脚色によるものとはいえ、そこには英雄たちが生き生きと描かれています。しかし、赤壁の戦いをその始まりから語るのであれば、冗長になります。少し端折りましょう。

発端は矢張り、208年、華北を制して勢いに乗る曹操が江南をも平定しようと、50万の兵を率いて南下を開始したことにあります。ちょうどそのころ劉表が亡くなり、後を継いだ劉琮と後見人の蔡瑁は戦意を失くし、曹操に降伏してしまいました。曹操はこれによって荊州の兵をも手勢に加え、合わせ軍勢100万を超える勢力となります。これに対して、諸葛亮は劉備に荊州を攻め取ろうと進言しますが、劉備はこれを是とせず、曹操軍に追われながらひたすら南に逃げます。しかし、大量の領民を引き連れただため、進軍速度が上がらず、長坂坡で追いつかれてしまいます。この危機を救ったのが趙雲と張飛でした。この時は彼らの活躍でなんとかしのいで逃れ、夏口の劉琦の下へ落ち延びます。

こうした情勢に驚き、孫権は文官武官を集めて降伏するか戦うかの会議を始めますが、文官のほとんどは降伏を主張します。そこへ、劉備の軍師である諸葛亮が訪問し、主戦論者の魯肅と共に孫権の説得を始めます。そんななか、孫権の兄・孫策の義兄弟の周瑜は、最初は曹操に降伏する考えでありました。ところが、諸葛亮が、曹操は「二喬」（孫策と周瑜の妻である姉妹）を欲しがっていることを告げ、更にその望みを謳った曹操の子曹植の詩「銅雀台賦」を諷んじます。周瑜はこれに激怒し、孫権に主戦論を主張します。

さて、この銅雀台賦ですが、諸葛亮は二喬姉妹のうち、少喬が周瑜の妻であることを知らないふりをして、曹操の息子・曹植の書いた銅雀台賦の一節をわざと「攬二喬於東南兮、樂朝夕与之共」と、それもわざわざ作り変えて暗唱してみせました。いわば挑発です。この詩の元は、唐の時代の詩人・杜牧が作った『赤壁』という詩の中の「東風不与周郎便、銅雀春深鎖二喬」の一句からきており、これをもちいて三国志演義の作者は、曹操が女一人の為に戦を起こしたと印象付けようと試みているのです。曹操、悪役！しかしどうなんでしょう、女一人のために戦いを起こす、言ってみると、なんと男のロマンのあふれたことか。男なら一度はやってみたいと思いませんか。

三国志演義の中では、この挑発は効をそうします。周瑜はこれに激怒し、孫権に対して主戦論を主張します。孫権もその言に説得され開戦を決意し、自分の机を刀で切り

つけ「これより降伏を口にした者は、この机と同じ運命になると思え」と言い放ちます。劉備、孫権の同盟が成った瞬間でした。こうして三国志演義には後の蜀の丞相、諸葛亮が登場してくるのですが、正史の方には諸葛亮はそれほど出て来ず、目覚ましい活躍もしません。それについてはまたのちほど。

劉備孫権の同盟について正史三国志の立場から触れておきます。

『三国志』呉書魯肅伝による。

魯肅から孫権と同盟を結び曹操と対抗するよう説かれた劉備は、諸葛亮を使者として派遣して孫権と同盟を結んだ。

『三国志』蜀書 諸葛亮伝による。

諸葛亮が孫権との同盟を献策し、劉表の弔問に来ていた魯肅を伴って孫権と面会した。

正史三国志の内の呉書と蜀書には、それぞれの立場から上記のようになっています。にもかかわらず三国志演義では、周瑜が主導して劉備、孫権の同盟がなったように記述されています。

それはさておき、早々の軍と劉備孫権の同盟軍は、長江に沿う赤壁で対峙します。ここで周瑜は、曹操の大軍を相手にするには火計しかないと考え、荊州水軍の要である蔡瑁・張允を謀殺。更に曹操の策によって偽りの降伏をしてきた蔡瑁の甥の蔡中・蔡和を逆に利用し、偽情報を曹操軍に流させ、しんじこませます。そして將軍の黄蓋の登場です。彼は火計の実行役になるため、周瑜に自ら「苦肉の計」を進言し、その策の通り、蔡中・蔡和を通じて曹操に偽の降伏を申し出ます。正史三国志にあった蓋降（蓋くだる）の一節がそれです。また、苦肉の計とありますが、慣用句としては「苦し紛れに生み出した手段・方策」という意味で使用されますが、本来は敵を騙すために自分を苦しめることという意味でした。兵法三六計のうちの三四計にあります。ちなみに三六計逃げるに若かずというときの三六計は兵法三六計のことです。そして苦肉の計はこの三国志演義が語源でした。

さて、赤壁に布陣した劉備と孫権の連合軍に比べて、曹操軍は3倍の大軍でした。これに対して、周瑜配下の黄蓋は、この劣勢を跳ね返す有効な対抗案を打ち出せない周瑜を罵倒します。怒った周瑜は兵卒の見る前で黄蓋を鞭打ちます。黄蓋は重傷を負い、かつこの仕打ちを恨んで曹操軍に投降を申し出ます。曹操はこの一連の出来事を問者から聞いていたので黄蓋を信用し、自軍へ招きいれます。しかし黄蓋の書面を見て、苦肉の計で騙そうという企みを一度は看破しますが、孫権軍の使者の闕沢が丸め込んで、黄蓋の投降を遂に成功させます。このあと黄蓋は曹操軍に放火、ついには曹操軍は壊滅においこまれます。

赤壁の戦いにあっては、この苦肉の計の前段として諸葛亮と周瑜の駆け引きがでてきます。

共に手を携えて同盟を成功させた周瑜は、諸葛亮の才に懸念をいだきます。彼は諸葛亮をこのまま放置しておくと思つたのでした。そこで、わざと難題を与えて処断させようと図り、武器が足りない、中でも矢が決定的に不足している、だから10万本の矢を集めて欲しいといただきます。しかしこれにたいして諸葛亮は、三日以内と自分から期限を決め、快諾します。諸葛亮には策がありました。夜霧が降りて視界が闇に乗り、藁人形を積んだ船を押し出して曹操軍を混乱させ、矢を思い切り射掛けさせます。ほどほどのところでこの船を回収し、周瑜の要求通り、10万本余の矢を手に入れたのでした。しかし、これが周瑜の更なる警戒感を呼ぶこととなります。

曹操軍を壊滅に追い込む策としての火計を成功させるには、二つの問題をどうにかしなければなりません。一つは、船同士が離れていては火の手が回らないこと、もう一つはこの時期、風が吹かない事でした。周瑜は最初の船同士が離れていることを、蔡中・蔡和を使って解決させました。それが赤壁の戦いの内の連環の計のエピソードです。彼らは、当時まだ野にいた龐統を曹操軍に送り込み、船同士を鎖でつなげることを進言させます。これは船には不慣れで船にすぐ酔ってしまう曹操軍の兵士のために船同士をつないで固定し、揺れを少なくするという方策でした。しかし、こうすれば火計の際に船同士は延焼しやすく、かつ兵も逃げられなくなってしまいます。曹操の陣営でただ一人徐庶だけがこの事に気付きますが、曹操に母親を殺されていた徐庶はそう言った懸念を進言することなく、万が一を恐れて巻き添えにならないように自らが出向けば北方の馬騰の抑えになると申し出て戦場から離脱します。

そのように事態は順調にすすんでゆくのですが、風の吹くのを待つばかりでは火計はなりません。しかし、当時の季節の10月には東南の風が吹かないことは解っていました。それでも、この方向に風が吹かないと火計を用いても曹操軍には被害が広がらず、却って火は自分達の水軍に向かってきて自分たちが被害を被る恐れがありました。時間は過ぎてゆくばかりです。こうした事態に周瑜は焦ります。ところが、それを聞いた諸葛亮は、東南の風を吹かせてみせると周瑜に言い、祭壇を作って祈祷をはじめます。すると東南の風が吹き始め、ついには突風となって曹操の船をゆらせます。

機は熟しました。黄蓋は投降を装って出船し、密かに積んでいた藁に火をつけて曹操軍を突撃します。これに対して、「連環の計」のために互いをがっちりつないでいた船は、すぐには切り離すことが間に合わず、曹操軍の船は次々と炎上、さらに東南の風で地上に配していた陣にも火が燃え広がり、曹操軍はまさに阿鼻叫喚の図となります。そのころ、風を吹かせ、妖力をも見せつけた諸葛亮を恐れ、周瑜は諸葛亮を取り除こうと計りました。このことを察知した諸葛亮は、東南の風が吹いた直後、その風を利用して船足の早い小舟で劉備の下へ逃げ去ってしまいます。

劉備軍は立ち返った諸葛亮の指示に従って、曹操の退却先に伏兵を置きます。そして敗走してくる曹操とその残党に追い討ちをかけます。しかし諸葛亮は「今曹操は天命がついておらず、殺す事は不可能であるし、殺しても今度は呉が強大になって対抗できなくなるだろう」と判断し、曹操に恩がある関羽をわざと伏兵として置いて、彼が曹操に対して恩を返す機会を与えて関羽が曹操を逃がすのを黙認します。これは後

々の事を見据えての諸葛亮の策でした。曹操はこの敗戦で荊州の大半を手放さざるを得なくなります。一方、孫権はこれを防衛せざるを得ません。こののち荊州は、劉備と孫権の係争の地となりました。そしてこの戦いの勝敗の結果が、三国時代の幕を開けたのでした。

三国時代、もしくは三国鼎立の時代を最も厳格に定義すると、三国が鼎立した222年から蜀漢が滅亡した263年までのほんの短い間のことでした。しかし、これがのちの中国の海内一統の原理と支配の在り様を決めて行きました。いわば天下の概念が根付いたといえます。天下とは、中国にあっては、中国王朝の皇帝一人が支配する支配原理のもと、一定の普遍的な秩序によって治められている地理的広がり、空間のことをいい、そこでの支配原理は、皇帝は天命を受けた天子であるということでした。そして、天下の中心にある中国王朝の直接支配する地域は「夏」「華」「中夏」「中華」「中国」などと呼ばれることになりました。またその周囲のことは「四方」「夷」などといった中国王朝とは区別される地域がありますが、これらの地域もいずれは中国の皇帝の主宰する秩序原理に組み入れられる存在であるという世界観で認識されていました。これが中華思想です。2000年以上、変わらないですね。

正史三国志はこの辺で終わりたいと思います。次は西遊記の三蔵法師に焦点を当て、この人の実像を述べてみたいとおもいます。

唐の時代、三蔵法師がお経を求めて天竺へ向かう奇想天外な物語、西遊記も今の時代、振り返られることがほとんどなくなりました。その西遊記、まるで史実に基づいているような語り口ですが、まったくの嘘です。第一、孫悟空がいるはずがない。しかし、往々にして三蔵法師はお供の者に助けられっぱなしで旅を何とか続けるひ弱な僧侶と思われがちですが、実はそうではありませんでした。玄奘三蔵は身長2 m近くの大男でした。その体格はまるで格闘家ほどに逞しく、唐の都、長安を脱するときには旅の行く先々で説法をするための絵巻物を蓑に背負って、相当の重さをもものともせず旅立っております。こういった実状を詳しく書き残した大唐西域記をみればそれがよくわかります。この大唐西域記（だいとうさいいきき）はもともとは持ち帰った經典の翻訳を許可してもらうために皇帝太宗へ出した報告書でした。であるがために、それが後には玄奘が記した見聞録・地誌としても認知されたのでした。これは646年に成立しております。

しかし、なぜ玄奘は報告書をもって經典の翻訳を願い出なければならなかったのでしょうか。それは、この時代、国外へ出国することは禁じられていたからでした。外から外国人が入ってくるのは自由だったのですが、自国民が出てゆくのは重罪でした。ですから、玄奘が帰って来た時、咎められなかったのは幸いだったと言えます。わけは、玄奘が帰国した折には唐の情勢が大きく変わっていて、皇帝太宗も玄奘の業績を高く評価するようになっていたからでした。玄奘の旅は、一国の状況の変わるほど長い、16年間に及んでいたのです。

この玄奘、俗名を陳禕といい、隋朝の仁寿2年（602年）、洛陽にほど近い緱氏（現在の河南省偃師市緱氏鎮）に、古史を研究する学者の4男として生まれました。その父に似たのでしょうか、子供らしく外で駆け回って遊ぶよりじっと勉学に励む方が性に合っていたという子供らしくないこどもだったようです。ところが、学問は父から学んだのですが、それが父親の鼻肩の引き倒しではなく、本当に神童であったようで、玄奘8歳の折り、父から孝経を習っていた時、曾子避席のくだりを聞いて、「曾子ですら席を避けたのなら、私も座ってはいられません」と、襟を正して起立して教えを受けたといいます。父はこれにいたく感動し、陳禕を褒めたたえたと、玄奘の行状記をつづった文章にも記されております。

同じく大慈恩寺三蔵法師伝によれば、玄奘10才の折りに父を亡くします。このとき、次兄の長捷が出家して洛陽の浄土寺で修行するようになります。玄奘もこれに続いて浄土寺に入り、仏教を学び始めます。玄奘はここでも天分に恵まれた才を発揮し、維摩経と法華経を誦するようになり、まです。そして、玄奘13才の折りに、僧侶になる国家試験、度僧の募集が行われることになりました。ところがこの時、度僧の受験資格は年齢が15才ときえられていました。彼は年が足りず、うけられません。しかし、どうしても諦められず、試験会場の門のところまで行って、佇んでおりました。するとそこへ試験管である、大理卿である鄭善果が通りかかります。そして玄奘を見つけ、声を掛けます。鄭善果は玄奘に様々な質問をし、最後にお前はなぜ僧侶になりたいのかと訪ねました。すると玄奘は遠くは如来を紹し、近くは遺法を光らせたいからと答えました。鄭善果はこれに感じ入り、特例として度僧の受験を認めます。玄奘はこの難関を突破し、度牒を得て出家して、はれて兄とともに浄土寺に住み込むこととなります。

624年、玄奘22歳の時、彼は長安に出てゆきます。彼はそこで、当時一番の高僧の講義を受けますが、玄奘は一回の講義でその全ての内容を理解してしまいます。

こんな風に天才ぶりを発揮する玄奘ですが、彼は長安での仏教修行に次第に物足りなくなってきました。なぜなら、長安に伝わって来た仏教は経典も断片的で、教義も一貫した、統一されたものではなかったからです。玄奘はこれに満足できませんでした。これが仏教なのか、釈迦の言う真実とは何なのかと彼は迷い続けました。

この玄奘の運命を変える出会いが訪れます。627年、玄奘25歳の時でした。天竺から来た高僧、パラバーカラミトラがその人でした。天竺の大学で仏教を学んだこの人は、玄奘の知り得ない多くの経典について教えてくれ、また天竺の大学と仏教修行についての最新情報を聞かせてくれたのです。玄奘は驚きました。天竺では、悟りを開くためには17段階の修業があること、誰が仏になれるか、など、唐にいたのでは解決しない疑問が学べると解りました。天竺から来た高僧の言葉に感銘を受けた玄奘は、天竺に行くことを決意します。ここで、西遊記では当時の皇帝太宗は仏教を信仰していて、玄奘の天竺へ行く旅は、皇帝の願いでもあったと描かれていますが、実際はそうではありませんでした。太宗は、老子の思想をもとにした道教をふかく信仰していて、仏教は日陰の身でした。しかも、唐は国外へ行くことを禁じておりました。それゆえ、国禁を犯してまで天竺まで赴き、仏教を学ぼうなんて考える僧侶など一人もいません。しかし、玄奘の仏教への思いは誰よりも強く、これを成就させるために長安を抜け出して片道3万キロの旅に出ます。しかもその道程には西遊記に描かれた妖怪変化や天変地異に負けずとも劣らない困難が待ちかまえております。彼は背中に説法に使う絵巻物を負って、昼間はおつての目を誤魔化すために身を隠し、夜一人で密かに歩を進めました。3カ月後、密出国を目指す玄奘はようやく瓜州にたどり着きました。

玄奘はここで砂漠を30回も往復したという老人に巡り合います。玄奘はこの老人から、砂嵐に合えば助かる人はいないと聞かされます。そしてどうしても行くというなら、悪いことは言わない、あなたの馬のこの馬を取り換えてあげましょう、この馬はこれまで15回も砂漠をおうふくしてきているから、さあこれに乗っていきなさいと助言してくれました。しかしその馬は、いまにも倒れそうな、痩せた赤馬で、玄奘は半信半疑で馬を交換したのです。

翌日玄奘はその痩せ馬とともに、国教越えに挑みます。それから先はタクラマカン砂漠へとつながる死の砂漠でした。玄奘は、

空飛ぶ鳥もなく、地を走る獣もなし

行き倒れた獣の骨のみが道しるべ

と心に呟きながら砂漠を歩き、次の町までの間にある筈の泉を目指し、さまよいます。ところがそうしているときに水袋が破れ、命の水ともいべき水がすべて砂漠の砂に消えてゆきます。それでも玄奘は、

私は天竺を目指し、一步も戻るまいと誓いを立てた。

どうして帰って、おめおめと生きていられようか。

そうおもい、一心に西へと進みます。こうして彷徨うこと5日間、もはや意識を失いそうになって馬の上で伏せってしまうと、馬が一人で歩いて行きます。そして玄奘は馬が連れて行ってくれた泉で水を得て救われたのです。こうしてやっと伊吾に到着します。この地は、天山山脈の最東端の南麓にあり、紀元前からの東西交易路上の要地でした。そして遊牧民と農耕民が入り混じって住む所でもありました。

玄奘三蔵法師を何故ここまで重要視するのかというと、彼こそが日本仏教の父だからです。というより、源流と言った方がいい。いま日本で一番唱えられているお経、般若心経の訳者が彼だと言えれば納得して貰える筈です。現在も般若心経は彼の訳したまま、読まれています。

彼が天竺から持ち帰った経典は675部に及びました。しかしその持ち帰った経典の三分の一ほどしか、彼は訳せませんでした。それでも、持ち帰った経典群の中核とされる『大般若経』16部600巻（漢字にして約480万字）を含め、その翻訳は76部1347巻（漢字にして約1100万字）に及びました。この翻訳は相当な困難を伴ったとおもわれます。その一例が般若心経。観音経に出てくる観自在菩薩でもわかります。この観自在菩薩の原語クマーラジーバーを旧訳では観世音菩薩としております。これは、観音経の趣意を汲んだ意識で、訳文としての簡潔さ、流麗さでは旧訳が勝っているとされていますが、サンスクリット語の本来の意味からいうと観自在菩薩の方が訳語として正確だと言われております。こうした訳業の困難さは、本邦でもみられます。解体新書の翻訳がそれだと言えましょう。この医学書の翻訳に、前野良沢と杉田玄白はまさに医学用語を絞り出し、全く新しい用語を作り出しました。「神経」、「軟骨」、「動脈」、「処女膜」、「十二指腸」などがそれです。玄奘も同様の困難を克服しなければならなかったのだらうと思います。

国境の町、伊吾を追手から逃げるように出発した玄奘の前に広がっていたのはタクラマカン砂漠と火焰山でした。火焰山は、地表の温度が最高に上がると70度を超えるという名前の通りの灼熱の山でした。西遊記でもこの地は最大の難関の地として描かれております。この山は実在の山で、中華人民共和国新疆ウイグル自治区の天山山脈付近にある丘陵のことをいい、タクラマカン砂漠タリム盆地の北部、トルファン市高昌区の東部にあります。この山の砂岩が侵食されてできた赤い地肌には、炎を思わせる模様が浮き上がっており、中国でも人気の観光スポットだそうです。

西遊記をみてみましょう。火焰山に三蔵法師ら一行が通りかかったのは早や肌寒い秋冬でした。しかし、進めば進むほど蒸し暑くくなってまいります。それで、通りがかった一軒の農家で訊ねてみると、年寄りがいいますのに、この先には火焰山があって一年中暑いとか。また、餅を売りにきた男から、火焰山を通るには山の炎を消さなければ通れないと聞き込みます。そこで悟空は、その炎を消せる芭蕉扇を借りるために翠雲山に出かけていきます。ところが悟空は樵夫から、芭蕉洞にいるのは鉄扇仙ではなく、羅刹女といい、またの名を鉄扇公主であること、そして牛魔王のかみさんだと聞き、がっくりします。と、こういったストーリーで西遊記は語り出します。

もはや長々と西遊記を語ることもないでしょう。金閣銀閣の逸話に並んで、火焰山の話は天上の守護神と観世音菩薩様まで巻き込んでの大立ち回りで悟空たちは勝利し、無事火焰山を通ります。ところが、現実の玄奘は、火焰山を登りませんでした。玄奘は、火焰山の南西にある高昌国の国王に招待され、そちらに向かうことで迂回ルートを行ったのでした。高昌国は今のトルファンに当たります。高昌国の国王鞠文泰は熱心な仏教の信者でした。玄奘はこの王、鞠文泰に招かれ、数日の間、寝食を共にし、請われるままに仏教の経典について講義しました。結果、王は玄奘に魅了され、国に残るようにと要請します。玄奘はこのことで、返って窮地に追い込まれました。玄奘は、旅を止めてこの地にとどまることは出来ないと断ります。しかし王はこれを聞き入れません。ついに王は怒り出し、私は王だ、あなたをこの地に縛りつけることも、唐に送り返すこともできるのだぞとまで言い出します。玄奘はこれに応えて、ここにとどめ置かれるにしても、それは私の体がのこるだけ、私の精神はあなたの自由にはなりませんと、死罪恐れず、猛然と反論し、さらに断食をして抗議します。これによって次第に弱ってゆく玄奘を見て王は恥じ入り、出発を許して玄奘と兄弟の契りを結び、さらに、天竺へ向かう途中の24カ国の国へ添え状を書いて玄奘の保護を依頼したのでした。こうして玄奘は無事、高昌国を旅立ちます。出発の時は来た時と違

って、総勢30人の供の人に守られての旅立ちでした。

それからおよそ一か月後、玄奘一行はサマルカンド、今のウズベキスタンに到着します。そこは火を崇拜するゾロアスター教を信じるソグド人の国でした。ですから、いかに高昌国国王の添え状があるとはいえ、サマルカンド国王は異教徒の玄奘に居丈高で傲慢な態度をもって接したのです。しかし現状は、一か月ほどこの国に滞在し、王に仏教を説いて聞かせます。すると国王は仏教に改宗してしまいました。これを可能としたのは玄奘の語学力にありました。彼の語学力は天才的で、高昌国から先は、コータン語、ソグド語、パシミール語、イラン語などがつかわれていました。玄奘はそれぞれの地に数日滞在するだけで、流暢に現地の人と会話できたそうです。サマルカンド国王も、玄奘は因果応報などの仏教教義を説いて理解させることができたのです。

天山山脈の難所を超え、崑崙山脈、ヒマラヤ山脈を迂回してナーランダーに到着したのは、長安を出発して5年余が絶った633年、玄奘31才の時でした。ナーランダーとは、知恵を授ける所という意味で、1万人の生徒、1500人の教員が勉学に励む仏教の中心地でした。玄奘はここで学長のシーアバドラーに拝謁することを許可されます。シーアバトラーはこの時106才であったといわれています。玄奘は彼から3度も唯識論の講義を受けました。さらに、仏教の様々な理論と教えも学びます。そして、ここでも玄奘は日を置かず頭角を現し、ついには生徒たちに講義をするまでになります。641年になると、彼はこうしてナーランダー大学の中でも10人の高僧にまでなりました。

そんな玄奘の名声が、北インドの王ハルシャの耳に入ります。ハルシャ王は玄奘を招いて、法師よ、あなたに他の宗派と論争し、相手をことごとく論破してほしいと頼みます。この討論会はそれから1カ月後、早くも開催されることになり、ガンジス川のほとりに会場が設営されました。ここには先ず全インドから18か国の王と大臣が集まりました。そして討論の参加者は、仏教の各宗派が3000人、バラモン教その他の他宗派から2000人、ナーランダー大学から1000人の人が参加しました。彼らはいずれも頭脳明晰で知られた、いずれ劣らぬ名だたる学者たちでした。それゆえ、この討論会は、空前絶後のバトルロイヤルとなったのです。

討論会はまず毎朝玄奘が自らの仏教理論を述べて、それに反論するものがあれば討論し、これを退けるという形で進められました。玄奘は討論会の初めての朝、もし私の話の理の通らぬところがあり、私を論破するものがあれば、私は首を切っておわびしますと宣言しました。

討論会は18日間続きました。会期が終了した時、ハシュラ王は、この討論会で玄奘を論破する者は誰一人いなかった、この事を皆の者はよく覚えておくようにと言ったのでした。

玄奘の知識はこの当時の最高レベルに達しておりました。他の各宗派、他の仏教宗派の理論にまで精通し、これを仏教の理論で反論する能力がとても優れていたのです。彼はこの地でもトップに登り詰めました。

そうしたある日、玄奘は観世音菩薩様の夢を見ます。そなたはもう帰国しなさい。玄奘は天竺に来てもう8年、39才になっておりました。

観世音菩薩様の声を聞いた玄奘は、その時ナーランダー大学に来て早や8年、39才になっておりました。玄奘はこの地に来て学問に熱中するあまり、経典を持ち帰り、正しい仏教を広め、人々を救うという当初の目的を忘れてしまっていたことに気がきます。玄奘は642年、40才で唐に帰還する旅に出発します。これが西遊記であれば、天竺に着いた三蔵法師一行は沢山の経典を持って雲に乗り、ひとつとびで長安に帰ったことになっておりましたが、現実の玄奘には多くの難関が待っておりました。

インダス川を船で渡ろうとしていた時のことです。突風が巻き起こり、船はあわや沈没というところまで追い詰められます。人々は沈没を免れようと必死に船の荷物を川に投げ捨てます。その時何より大事な経典50巻を間違えて流してしまいました。それと気付いた玄奘は、船が対岸に着くと、すぐさま現地の王に面会を願い出ます。彼はもう一度引き返し、写経し直していればどれほどの期間が費やされるかを解っていました。もうそんな暇はありません。彼は現地の王に面会し、手助けを乞います。王は玄奘の高名を知っておりましたので快諾し、近隣の寺から必要な経典を集め、多くの人によって写経させました。そのおかげで、失った経典の写本はたった2ヶ月で完成しました。

写本の完成を待って、玄奘はまた唐へと旅立ちます。しかしその先は山賊は多数出没する山岳地帯でした。玄奘はここで一計を案じます。ここまで付き従って来ていた若い僧を呼び、もしこの先で賊に会ったら、私たちは仏教を学んで唐へ帰る途中です、ですから持っているものは経典と仏像、舍利のみですと言うように言い含めます。そして、最悪の場合、一人先に行くこの若い僧だけを犠牲にして、自分たち一行は難を逃れようと目論んでおりました。玄奘は経典を持ちかえるという目的の前には、こうした犠牲は仕方ないと考えていたのです。実際玄奘たちは盗賊に何度か襲われますが、先に講じて置いた策によって被害を被ることなく済みました。

644年、玄奘42才の時、唐の国境は目の前のクスタナ国ホータンに到着します。この時、あの高昌国は玄奘が旅たった後3年で滅んでおりました。玄奘はホータンの地で、唐の皇帝太宗に直接文を出します。彼は密出国しておりますから、帰国すれば無事で済むはずがありません。彼は罪に問われないようにするために、これまで唐に伝わって来た経典は欠けた部分が多く、それを完全なものとするために禁じられていることも顧みず天竺へ旅立ちました。私はそこで、今まで聞いたこともない経典を学んで参りました。そう書き連ね、最後に皇帝の気を引こうと、また天竺や西域の諸王に、唐では皇帝の威徳があまねく行き渡っていることを啓発してまいりましたと付け加えました。

この書状を出して待つこと7カ月、皇帝から返事が返ってきます。それには、法師は西域を歴訪し、今帰って来たとのことである、ならば速やかに帰還し、朕と会見せよとありました。645年、玄奘は長安に帰ります。17年ぶり、玄奘、43才でした。

帰還すると、玄奘は旅の荷物を解く暇もなく、即座に皇帝から呼び出されます。当然ですが玄奘は不安を抱えて謁見に臨みます。ところが皇帝は快く現状を迎え、旅の労をねぎらいまでしました。実はそれは、天竺のハルシャナ王が前以って唐に使節を派遣し、玄奘の偉業を知らせて口添えしてくれていたからでした。太宗皇帝は、玄奘の行動力と知識の感嘆し、罪を問うきは元より無くなっておりました。玄奘の6万キロに及ぶ旅はこうして終わりました。

それにしても、往路の玄奘はまさに純粋な求道者でした。ところが復路の玄奘はどうでしょう。インダス川の災難にも、土地の王に取り入り、王の権力を利用して解決することを選びます。山賊、盗賊対策はどうでしょう。無慈悲な盗賊であれば、玄奘に言い含められた若い僧は殺されていたかもしれません。玄奘はそ唸るかもしれないと解っていて、若い僧にそうさせました。こうした行動は、後にも出てきます。ホータンで皇帝に書状を書いたときもそうだったのでしょう。彼ほどの聡明な人ですから、玄奘は皇帝にとって自分がどれほどの価値があるかを知っていたと思われれます。ですからハルシャナ王の口添えがなくとも自分は許され、帰国できると思っていたはずです。もうすぐ自分の野望は達成できると思った玄奘は、たぶん権力に媚を売ることが厭わなくなっていたのでしょう。それがいいか悪いかではなく、事をなすにはそういう決断が必要なかもしれません。政治家みたいですね。

玄奘は、皇帝からの還俗して朕につかえよという申し出に、私は僧ですからと断ります。玄奘の最終的な目的は、持ち帰った経典すべてを翻訳することでした。ですから、そのために玄奘は自分の価値を最大限に活用します。それは自分しか知らない西域と天竺の情報でした。かれには、それを使って皇帝を取り込む計算高さがありました。皇帝は今よりもさらに西へ勢力を拡大したい野望がありました。そのためには玄奘の持っている西域の情報は大きな魅力でした。それを見抜いた玄奘は皇帝に、天竺から持ち帰った経典の翻訳にご尽力賜りたいと申し出ます。それに対して皇帝は天竺や西域諸国の諸国の諸事情を書物にまとめてほしいと条件を持ち出します。皇帝は西域諸国の軍事、地理、文化、経済といった全般の詳しい情報を欲しがっていたのでした。玄奘が皇帝の要請でまとめたのが大唐西域記でした。この項の記述も、殆どがこの報告書である大唐西域記とその関連の文書に依っています。

こうして皇帝からの援助を手に入れた玄奘は、その代償である大唐西域記となる報告書を、弟子の弁機に口述筆記させ、これを整理し、まとめさせます。弁機は玄奘も認める、将来有望な若者でした。そして、玄奘は皇帝からの援助によって手に入れた多額の予算と優秀な僧侶、事務官合わせて30名をもって経典の大翻訳センターを開設しました。以来、玄奘の毎日は多忙を極めます。まず早朝から経典の翻訳を始め、昼は皇帝のもとに参り、皇帝に仕えて西域の諸事情をはなし、さらにご下問に応えるといった諸事務に追われます。夜になって帰っても、玄奘は弟子たちの翻訳したものを点検し、添削するといったことに努めます。

帰国して約半年で大唐西域記は完成します。これの巻頭には、

大唐西域記巻壹

三蔵法師玄奘奉 詔譯

大摠持沙門 辨機撰

とあります。玄奘は皇帝との約定をたがえず大東西域記を献上しました。その二年後、玄奘は念願の唯識論100巻を完訳します。四六才でした。皇帝は自らこの序文を書くことを引き受けます。これには、

法師は深い誠実な心で仏道を探求し、奥義を極めようとしている。また経典の翻訳では真実を示し、後世の人々を導くであろう

と書かれていました。これは中国仏教史にとって画期的なことでした。皇帝が仏教を認め、称賛したのですから。これこそ玄奘の偉大な功績でした。

ところが、大東西域記が皇帝に献上されて半年後、不可解な事件が起こります。これは事実ですから、述べない訳にはいきません。大東西域記をまとめた弁機が、皇帝の娘と密通した罪で処刑されます。それも殆ど審議されないでの処刑でした。しかし昼夜を分かたず玄奘につかえ、且つ玄奘に代わって翻訳の青書や添削に勤しんでいた弁機に、いつ深窓の皇帝息女と密通する暇があったでしょう。彼は顔も姿も見たことがなかった筈です。そんなことは衆目の一致するところでしたが、玄奘は固く口を閉ざして、一言も皇帝に抗議しませんでした。この大東西域記の中には秘匿しておかねばならない重要な軍事機密が書かれており、それが漏れないように後になって削除されたという風聞があります。そして、そのすべての内容を熟知している弁機は、知り過ぎてしまったと口を封じられたというのです。玄奘はこれを黙認した、というのならどうでしょうか。

659年、玄奘57才のおり、玄奘のもとに唐の高僧たちが大挙してやってきます。そして大般若経を正確に訳してほしいと皆で懇願します。大般若経は600巻、20万字以上ある大教典でした。玄奘はこの願いを聞き入れ、他の業務は一切投げ打ち、この翻訳に専念します。663年、わずか4年で玄奘はこの翻訳を完成させます。この時玄奘、61才。

翌年、玄奘は急に体の衰えを感じるようになります。玄奘は弟子たちに、最後の言葉を語りかけます。

私はもはや為すべきことは成した。だからもうこれ以上この世に長く生きる必要のない人間だ、これからはお前たちが、私の修めた英知を人々に広めてくれ。

こう言い残して、玄奘は664年2月5日、入滅します。62年の生涯でした。

西遊記から、三蔵法師の実像を知りたくてここまで来ました。もう何も付け加えません。ただ、玄奘法師は日本と無縁ではありませんでした。玄奘は法相宗の開祖とされています。そして日本の法相宗は、遣唐使の一員として入唐した道昭が日本につたえたのですが、かれは玄奘に直接教えを受けております。そしてその道昭の弟子とされるのが行基です。また玄奘の霊骨もこの日本にあります。そのあたりはまた明日のこととします。

日本での法相宗は、玄奘に師事した道昭が法興寺で広め、南都六宗の一つとして8-9世紀に隆盛を極めます。法相宗の寺として有名なところは薬師寺、興福寺などです。そして、日本における法相宗は現代まで存続しておりますが、中国では次第に勢力を衰えさせ、消滅してしまいます。当初、玄奘と基が唐の高宗の厚い信任を得たことから、法相宗は一世を風靡しました。さりながら、教理体系が繁雑をきわめており、次第に民衆の支持を失ってゆきます。そして致命的な打撃を成ったのは、安史の乱と会昌の廃仏でした。これによってその後、宋、元の頃には法相宗は姿を消してしまいました。

玄奘三蔵の遺骨、霊骨については是非語っておかなければなりません。これには日本が深く関わっていたからです。しかしそれは後の事です。玄奘が亡くなると、遺骨は長安の興教寺の舍利塔に納められます。ところがこの党は唐末期の黄巢の乱のときに破壊され、遺骨は持ち去られ、行方不明になります。ところが日中戦争のさなかの1942年、南京市の中華門外の雨花台で日本軍が玄奘三蔵の墓を発見します。それは小ぶりの石郭で、その中に更に石棺が納められておりました。その石棺の中に北宋代のものと明のものとの葬誌が彫られており、多数の副葬品もありました。そしてその中に納めてあったのは頭骨でした。この玄奘の霊骨を巡っては発見者の日本と中国の間で激しい応酬があったのですが、結局分骨ということで決着がつき、中国側では北平の法源寺とその他に分骨され、安置されました。そして日本では現在のさいたま市岩槻区にある慈恩寺に奉安され、後に薬師寺玄奘三蔵院に分骨されております。さらに1957年、周恩来首相からインドのジャワハルラー・ネルー首相に提案がなされ、ナーランダ大学へ分骨され、そこで奉安されています。

大唐西域記は奈良時代にはもう日本に伝来しており、これを写した写本が国宝になっております。もう孫悟空さえ忘れられたこの時代に、実は玄奘三蔵はまだ日本に残され、守られています。

私が中国史に興味を持ったのは、仕事をやめた頃にたまたま見つけた放送大学の中国史からでした。2013年放送で、全15回でした。それがまた先日来再放送されておりました。最初見た時に熱心にノートしたものが、今回の文章の下書きになっております。以来、時々興味を持ったことが下調べになり、それを長々と全部吐露してしまいました。

私が大学から帰ると、父がお前は法学部だろ、法律の本なんてほとんどないじゃないかと言われました。私の持って帰った本は、日本古典全集の今昔物語全5巻、日本霊威記、能楽論集、松尾芭蕉集、源氏物語2巻、平家物語第2巻、聊齋志異、新編水滸伝6巻、そして一番よく読んだ近松門左衛門集その他。他にロマンローラン集、中世の歴史、日本の歴史、シェイクスピア全集3巻、と上げれば切りない、変調の書籍ばかりでした。

それはいいとして、私がもう総括しなければならぬと思っていることが3点あります。

1968年

中国史

欲望の資本主義

欲望の資本主義については、NHKでこう命名した番組が度々特集されているので、そう規定しておきます。総括すべきと上げた3点は、結局欲望の体系としての資本主義で主調低音は形づけられていると思っています。

西遊記と玄奘三蔵の次はまた明日から何かテーマを決めて書かせていただきたいと思っています。

思い返してみると、1968年を語るにはそれ以前の戦後史全部を振り返って見なければならぬような気がしてきました。とんでもない作業です。世界はヒトラー以後ドイツの脅威は去り、繁栄へ一筋に歩み始めたなんてことはなく、戦争によって破壊されたヨーロッパは新たな混迷に導かれてゆきます。ドイツに代わって現れた脅威とはソ連でした。

日本はどうか。日本の戦後は敗戦国として出発しなければなりません。また、国際的に見ても日本とドイツは国連で共に敵国として扱われ、敵国条項に縛られました。敵国条項とは、国際連合憲章の条文の第53条および第107条と、敵国について言及している第77条の一部文言を言います。これは第二次世界大戦中の枢軸国に対する措置を規定した条文です。

アジアの混乱は戦後も治まるどころか、さらなる混乱に走ります。とまあちょっと展望するだけで手に負えない状況が広がります、しかし、私達はその時を生きてきました。これが私たちの時代です。

今日、堺屋太一氏が亡くなりました。私達を団塊の世代と命名したのは彼でした。私達は団塊の世代であり、全共闘世代です。極私的に言えば、こうなります。ほかに、怒れる若者たちとも、破壊的世代とも言われたのでした。私達は何か破壊できたでしょうか。そして今はどうでしょう。破壊なんかとは無縁な時の流れです。あの時私達は歴史の主演だと、自分のことをそう思っていたんじゃないでしょうか。そんなことを思っている人達って今いるんでしょうか。1968年。少なくとも私は今までこれを念頭に置いて生きてきたつもりです。もう少し冷静に考えてみます。

ドイツの敗戦に伴い、首都ベルリンには連合国とソ連軍が乱入してきました。ベルリン陥落です。ソ連軍はもはや死に体となったドイツに250万の軍で怒涛の如く侵攻します。ヒトラーはこれを見て自決し果てます。ベルリンが陥落した時点で後の歴史に大きく影響を及ぼしたことは、ベルリンへ先陣を切って突入してきたのが赤軍であったことでした。こののちヨーロッパは赤軍の脅威に晒され続けます。しかしそのことに当初アメリカはタカをくくっていました。その自信の根拠は、核兵器でした。アメリカは唯一の核兵器保持国である、この一点で自身を最強だと思い込んでいたのです。これが後の北朝鮮の核開発に固着することに繋がります。それは朝鮮戦争の後の話です。しかしそんな先のことではなく、ドイツ降伏の後のヨーロッパは破壊されつくした国土と失われた命の怨嗟で、各地に血の報復が始まりました。ナチスに同胞を売ったもの、ナチス将校の愛人になったもの、協力して栄利を貪った者、情報提供者その他、彼らは隣人たちに容赦ない仕返しをされました。ドイツ人移民は、ドイツがユダヤ人たちにそうしたように、服の腕や背に鍵十字を描かれ、家も財産も没収されて立ち退かされました。それならまだよかったです。別なところでは壁に向かって整列させられ、一人ずつ順に射殺されました。さらに、ドイツ移民はかつてのユダヤ人強制収容所に収監され、中で飢え死にしています。ドイツ人とその協力者への血の報復が続きました。ドイツへの怨嗟がふきあれました。

しかし怨嗟の繰り返しは、そう長く続きませんでした。それを上回る恐怖の圧政が迫ったからです。赤軍の途轍もない暴力がヨーロッパを席卷しようとしていました。

ナチスにも、スターリンにも、
ポルポトにも、毛沢東にも、
金日成にも、蒋介石にも、
独裁者に正義の美名を与えてはいけません。

国家は嘘をつきます。国家に正義はない。

フェイクニュースだと人を断じた者が、フェイクニュースで世界最高の権力を握った。

正義の顔を持った独裁者がかつての独裁者を引きずり下ろし、事実も歴史的真相も

捻じ曲げて国民を洗脳し、国を破たんへ導く。

たわごとでした。一点、独裁者に正義の美名を与えてはいけない。これだけはいつも思っています。スターリンは共産主義者ではなく、汎ロシア主義者でした。ヒトラーなど評するまでもない。ポルポトなど大量虐殺者でしかなく、毛沢東は人民の命など眼中にない皇帝でした。金日成は小皇帝を気取った策士気取りでしかなく、蒋介石は軍閥の大將そのもの。彼らに正義を与えてはなりません。

ヨーロッパ全土で吹き荒れたドイツへの憎悪と血の報復は、戦勝国の黙認と承認のもとに長く続きました。しかしそれを上回る恐怖の暴力が次第にヨーロッパ、とくに東欧諸国に広まってきました。スターリンは赤軍が解放した東欧はすべてソ連の支配下にあると考えていたからです。東ドイツ、ポーランド、ハンガリー、ルーマニア、ブルガリア、チェコスロヴァキア、ユーゴスラヴィア、アルバニアがそれです。特にドイツはソ連とアメリカ、イギリス、フランスが4分割して統治しておりました。ソ連と連合国はナチスを倒すために敵の敵は味方と手を握ってきたのですが、ナチスを倒した途端、覇権争いを始めたのでした。そして、ソ連の脅威を最初に警告したのがイギリスのチャーチルでした。ソ連の覇権主義を、チャーチルは鉄のカーテンと表現しました。彼はアメリカでの演説で下のように言っています。

バルト海のシュテッテンからアドリア海のドリエステまでヨーロッパ

大陸に鉄のカーテンが降ろされた

しかし東欧諸国はまだソビエトの脅威に気づいていませんでした。ナチスの悪夢に苦しめられた彼らにとっては、憎悪する的是以前ドイツだったのです。ハンガリー、ユーゴスラビア、チェコスロバキア、ルーマニア、ポーランドなどの諸国にとっては、戦時中の怨みを晴らす時でした。標的はドイツ系の住民でした。血の報復が始まります。彼らにとってドイツ系住民は*Persona non grata*、好ましからざる人物、でした。チェコスロバキアのプラハでは、ドイツ系住民は腕に白い腕章を巻くか、目立つところに鍵十字を描くように強制されました。そして、映画館、劇場、公園などに入ることは禁じられ、夜間の外出も許されませんでした。そうして最終的には国籍を剥奪され、国外追放となりました。ドイツ系住民は移住してきたのが遅かろうと早かろうとお構いなしに、手に持てるもの以外はすべて置いて行かなければなりませんでした。これはまだ中国や韓国から逃げ帰った日本人よりはましでした。日本人は着の身着のまま何一つ持たず、脱出するしかありませんでしたから。しかし、追放されるドイツ系住民の数があまりにも多かったので、彼らは収容所に送り込まれます。連合国はこの追放を黙認します。イギリス首相のアトリーは、

ドイツ人たちにはあらゆる手段を使って、この明白で完全な敗北を思い

知らせるべきだ

と演説しました。さらに、チェコスロバキアでは災いや悪事を全てドイツ系住民の性にし、何事につけても犯人探しにかこつけて100人以上の人が殺されました。ふっと、関東大震災のことがよぎります。しかし、ドイツ人にするリンチは増幅し、日

常化してゆきます。プラハでは大通りのレンガの壁に100人以上のドイツ人を並ばせ、それを後ろからランダムに射殺し、ついには皆殺しにするということも記録されています。これを見ていた学生が、

私たちは沈黙を守った。かつてのドイツ人がそうしたようにと証言しています。こうしてドイツ系住民、200万人以上がチェコを追放されます。これはポーランドでも同様でした。こちらでは、つい先ごろまでユダヤ人が収容されていたマイダネコをはじめとする収容所に、ドイツ系住民が今度は収容されました。そして、ここでも何千人というドイツ人が死亡しています。憎悪が人の死を麻痺させたのでした。

東欧ではさらなる混乱が続きます。そしてポーランドの悲劇は後の世界の様相を予言するものでもありました。勝利の分け前にどん欲なソビエトは強引な手段でロシア領と接するポーランド領を接收、併合します。その代償としてポーランドは旧ドイツ領を当時のポーランドの国境から200km向こうまでを与えられました。ポーランドはその地区に住んでいたドイツ系住民を追放します。

ドイツ系住民は1945年から47年にかけて東欧の地を追われます。これはヨーロッパ史上最大の難民の大移動を産みました。その数、約1200万人。ところが彼らはそこで、何とも皮肉な出来事に遭遇します。ナチスにあれほど迫害されたユダヤ人ですが、戦火が治まった後も、彼らは迫害され続けておりました。彼らも行き所がなくて彷徨い続けたのです。国を追われたドイツ系住民は、この行き場のないユダヤの人と同じ道を辿らなければならなかったのです。

戦争が終わった後で、このように憎悪と怨嗟の標的にされたのは、ドイツ人にとどまりませんでした。憎悪はさらに広がってゆきます。ヨーロッパ各地で、民族浄化と報復行為が連鎖します。もう戦争は人々から最低限の道德規範をも見失わせてしまいました。殺すなかれ、奪うなかれの命題はふり捨てられました。ポーランドでは国粋主義者の民兵が、ウクライナ系の住民を虐殺します。その報復に、ウクライナではポーランド人が殺され、追放されます。

ユーゴスラビアでは一人の英雄を生み出します。チト一元帥です。彼はナチスに協力したクロアチア民族団体ウスタシヤの構成員7万人を虐殺し、国民からの最大の指示を得、大統領として君臨します。クロアチア人7万人の血でつかみ取った独裁者の権力でした。

ギリシアの混乱はまさに無政府状態といつてよくなります。個々では国王派と共産主義派の内戦が勃発し、ここでも5万人以上が死亡します。

東ヨーロッパは血の匂いが充満した混沌に突入します。

カオスとなったヨーロッパ全域ですが、難民となった人々の移動は1947年ごろにはほぼ終息にむかいます。しかし、なお過酷な運命にあった人々がいました。東欧およびソビエトに抑留された元ドイツ兵でした。彼らは国際法に反して優良な労働力として酷使されました。そこには日本兵のシベリア抑留と同じ図式が見られます。劣悪な環境と栄養不足の食事、極寒の現場での重労働、そして監視兵からの冷酷な扱い、さらに、仲間内で監視させ、密告させる陰湿な管理法といった手口はシベリアで行われたことと同じでした。捕虜となったドイツ兵の約三分の一、100万人がソビエトの強制労働収容所で死んで行きました。

一方、ナチスによる大量虐殺から逃れて、やっと生き延びたユダヤ人たちにも試練が待っていました。彼等ユダヤ人のホロコーストはヨーロッパじゅう、世界中に知れ渡っていたにも関わらず、彼らはなお差別と迫害を受けました。ユダヤ人への偏見と差別は、キリスト教とユダヤ教の宗教的対立があったからです。ヨーロッパから見ればユダヤ教は邪教でありました。また職を制限されたユダヤの人が金貸しなど、キリスト教では禁じられた、卑しい職業につかざるを得なかったことも差別を助長しました。キリスト教は、金を貸しても利子を取ってはいけないと定めていました。もうベニスの商人を出すまでもない事です。ユダヤ人はさらなる迫害から逃れようと、西ヨーロッパからパレスチナを目指します。彼らが渡航しようとした船の一艘には、EXODUS 1947と書かれていました。EXODUSとは出エジプト記のことでした。この船には4500人余りの人が乗っていました。彼らは、約束の地を目指したのです。しかし、このパレスチナは当時イギリスの委任統治領でした。イギリスは移民を厳しく規制していましたので、この船を拿捕します。そして彼らをドイツの難民キャンプに押し込めます。このイギリスの行為に対して、世界中からの非難が集中しました。国連はこの事態が鎮静化したころに、パレスチナをユダヤ人地区とアラブ人地区に分けることを決議します。ホロコーストから逃れたユダヤ人たちに帰る国が出来たのです。そしてこれ以降、ヨーロッパは次第にこの問題から手を引いてゆきます。

調べたことは全部書いてしまいたくなるので、つくどくなります。アメリカはチャーチルによる鉄のカーテンの演説から一年経って、やっとソビエトの脅威に気が付きます。それでもアメリカはソビエトに軍事的脅威は感じていませんでした。なぜなら、アメリカは核を持っている唯一の国だったからです。しかし、これについては朝鮮戦争のことを述べる時詳しく述べますが、アメリカの核実験から4年後にはソビエトも核実験を行います。アメリカのこうした高のくくり方はほぼ習性だと言わなければならないようです。今の北朝鮮との非核化交渉にしても、中国は経済的に発展すれば民主化するだろうというオバマ政権の見通しも、この同じ習性から来ているように見えます。この習性からの見通しが成功したのが日本でした。日本は経済的発展に伴って、唯一民主化に成功した国です。アジアにこうした国はあるでしょうか。ついこの前まで同じ価値観を所有すると明記してきたのが韓国でした。いまはこの一文を削除しています。かの国は法に依る秩序を簡単に否定します。これは民主主義の根幹を否定することです。ですから、民主主義のない国であると言わざるを得ません。民主主義は国内の統治体制の事にとどまらず、国家間の取り決めも法に依ることが求められるのですから。

それはさておき、東西冷戦の前駆となる象徴的な出来事がマーシャルプランの発動でした。マーシャルプランは1948年から51年にかけて行われました。欧州復興計画です。アメリカのトルーマン大統領はチャーチルの鉄のカーテン演説から一年経って、米国議会で重大な演説をします。アメリカは鉄のカーテンの演説にも関わらず、ソビエトを軽く見ておりました。いかに軍事的拡大をなそうとも、ソビエトは核を持っていなかったからです。また国力としても、アメリカに比べて他国を支配下に置くだけの余裕は持っていないと過小評価しておりました。しかし、かの国は着々と軍備を増強し、影響力を拡大してきておりました。それは、ひとつにはヨーロッパが経済的にあまりにも疲弊していたからでした。トルーマン大統領はその演説で、

ソビエトの支配に抗う人々を支援し、共産主義の拡大を阻止しなければならない。アメリカ合衆国が政策として掲げるべきは、武装勢力や外部の圧力に抵抗し続ける自由な国民の支援である。今ギリシャの国家体制は共産主義者が率いる数千人のテロリストに脅かされている。今こそ迅速に決然と行動しなければならない。ギリシャの内戦で共産主義を勝たせてはならない。

こう演説して議会の全面的な支持を得て、アメリカは国王派に軍事的支援をし、かつ数百万ドルの援助も行いました。しかし、トルーマン大統領が最も恐れたのは、遅々として進まぬ欧州の復興でした。彼は貧困こそ共産主義のり込む隙を作り、病原菌のように繁殖させてしまうと考えておりました。事実、1947年当時のヨーロッパはいまだ経済は復興してきておらず、イタリア、フランスでも人々は済む家もなく、食料は配給に頼っているという現状でした。その頃の人々のデモのプラカードには、

A chaque Travailleur 300g de pain

労働者一人に300gのパンを！

Moins de pain C'est la mort

配給停止=死

du Pain pour Ces

Vient nos 60%

高齢者にパンを

といった文言が書かれておりました。日本にもこうしたデモがありました。米よこせと叫んでいたと思います。

マーシャルプランは議会の賛同を得てヨーロッパに実施されます。マーシャルプランはもともとトルーマン政権の国務長官マーシャルが発表したヨーロッパ経済復興計画で、これにはヨーロッパ諸国の戦後復興にアメリカが大規模な援助を提供し、経済を安定させて共産主義勢力の浸透を防止する狙いがありました。と同時に、これはトルーマン政権の共産主義封じ込め政策の一環でもありました。つまりソビエトの勢力拡大による世界の共産主義化を恐れ、それを防止するためにソ連＝共産圏諸国に対して政治、経済、軍事などあらゆる面で封じ込めようと立案された外交基本政策の両輪の片方であったわけです。マーシャルプランに沿って、ヨーロッパに膨大な量の機械類と原材料が運び込まれました。これに対してスターリンは自らの影響力の低下を恐れ、東欧諸国にマーシャルプランを拒否するように働きかけ、かつ様々な妨害工作を仕掛けます。スターリンは西ヨーロッパの共産党に行動を起こすよう、呼びかけました。各国の困窮し、疲弊しきった労働者を反政府行動に動かすのはたやすいことでした。イタリア、フランスでは、共産党の呼びかけに乗って、ストライキが爆発的に増加し、内戦さながらの状態にまで陥ります。こうした事態にフランス政府はクーデターを危惧しました。それほど社会の混乱と分裂は進んでいたのです。こんな中、フランスでは一つの重大な事件が起こります。アラス近郊でカーブに差し掛かった列車が脱線、転覆しました。原因は線路のボルトが25mに渡って引き抜かれていました。これによって死者24人、負傷者40人以上の犠牲者が発生しました。そして、被害者のみならず、社会的不安が巻き起こります。いってみれば、この社会的不安を描きたてることを狙った卑劣な攻撃でありました。こうした事態の收拾のため、フランス政府の内相ジュールモックは強硬手段に出ます。彼は8万人の予備役兵からなる保安隊を組織し、これに発砲を許可します。この体制が整った後、数週間して大規模の衝突が起こります。その衝突では数人の死者を出しながらデモ隊は鎮圧され、次第に事態は鎮圧され、秩序も回復してきます。共産党はマーシャルプラン妨害に失敗しました。他の国々でも同様に、アンクルサムの贈り物によってヨーロッパの経済は徐々に回復してきます。こうした様々な物資を輸送してきた船には、

AIDE IN TERIMAIRE

USA.FRANCE

600me.NAIRE

対仏支援600便目

とかかれておりました。これによって農作物は戦前の収穫量にまで回復し、やがて追

い越します。

この事態の進展の中、アメリカが特に重視したのがドイツの復興でした。アメリカおよび西側諸国は、ドイツは共産主義の拡大の砦として最重要だと考えました。これは東では日本が中国およびソビエトに対する地政学的位置での最重要点だと考えられたことと同様でした。日本の場合もマーシャルプランが適応されたのですが、その前にガリエラ資金、エロラ資金、ララ物資などによって、マーシャルプラン以前から援助が始まっておりました。

モスクワは自分の影響力の低下を恐れて、各国に様々な妨害工作を仕掛けます。今日まで東欧諸国に共産党勢力を支援してきたスターリンは、彼らに他の政党を取り込むか壊滅させるかの謀略を仕掛けるように命じます。これは一党独裁への布石でした。

ルーマニアでは、保守派が力づくで排除され、それによって多くの官僚がパージされます。これによって選挙結果まで操作されることが可能となり、共産党は大躍進します。これによって共産党が実権を握り、国王ミハイ一世は、1947年12月、退位を余儀なくされました。

ハンガリーの首相ナジ・フェレンツの場合はあまりにも卑劣な手段がとられました。彼は共産党の圧力に果敢に抵抗しておりましたが、息子を誘拐され、子供の命の代わりに辞任を迫られます。1947年5月、首相は身代金を払い、家族と共にアメリカに亡命します。

ブルガリアでは、まさに筋金入りのスターリン主義者であったレオミリミトロフが強引に権力を掌握します。そのけん力掌握の直後、彼の政敵であるニコラ・ポトホフが逮捕され、絞首刑に処せられます。1947年7月9日でした。

もう少し見ておきましょう。

ポーランドです。この国では農民党のスタニクワフ・ニコワイチクが共産党勢力を昂然と批判しておりました。しかし彼も命の危険を感じ、

ただじっと死を待つ羊にはなりたくない

わが党は力をうしなってしまった

と演説し、妻と共にイギリスに亡命しました。

スターリンはほんの数カ月で、東欧諸国を赤く染めてしまいました。ヨーロッパは鉄のカーテンによって分断されたのです。

しかし、こうした動きに果敢に抵抗していた国がありました。チェコスロバキアです。チェコスロバキア大統領エドヴァルト・ベネシュは小国ながらもそれまでソビエトと良好な関係を築き上げておりましたが、マーシャルプランの受け入れを拒否するよう、ソビエトから求められ、チェコ外相ヤン・マリスクがモスクワに赴きますが、

主権国家の外相としてモスクワに向かった私は、スターリンの手先として帰国したと言わしめます。

チェコではその時、連立内閣が成立しておりましたが、共産党以外の閣僚が、モス

クワと共産党からの恫喝ほどの圧力に抗議して辞任します。これに対してチェコの共産党は大衆を扇動し、労働者を民兵として武装させます。プラハにはこういった大衆が20万人、集まってきました。この内戦勃発の危機を回避しようとベネシュ首相は共産党書記長クレメント・ゴットワルトが率いる共産党単独政権を承認します。まさにクーデタでした。あの組織されたロウソク革命なるものも、裏でこんな工作があったのでしょうか。

チェコのクーデターは成功でした。チェコは、

STALINE L'HOMME QUE NOUS AIMONS LE PLUS

我らが敬愛する人物 スターリン

VIVE STALINE

スターリン万歳

と書かれたトラックが走りまわりました。

チェコの荒っぽいクーデターは世界中を震撼させます。そんな中、フランスの共産党指導者モーリス・トレースはこれを称賛します。

平和の使者、スターリン、ばんざい

我々はスターリンへの敬愛と全幅の信頼を宣言する。偉大なスターリン、ばんざい、共産主義ばんざい！

こう演説しました。

しかし他の戦勝国は、これによってソビエトへの認識を変えます。これらの国々は、もはやソビエトと共にドイツを統治することは出来ないと認識し、アメリカ、フランス、イギリスはそれぞれの占領地を統合して西ドイツを独立させようと考えました。そして、1949年9月6日、西ドイツではそれまでの通貨に代わってドイツマルクを発行します。ソビエトはただちに反応しました。ソビエトは新しい通貨を認めず、すぐさま反撃に出ます。それがベルリン封鎖でした。ソビエトはベルリンへの陸路を完全に止めます。列車、車両といった輸送手段全部です。スターリンはベルリンを支配下に納めようとしてきました。と同時に、ベルリン市民全員を人質にもしようとしたのです。電力も遮断され、市民生活はストップし、西ベルリンは世界から隔絶してしまいました。孤立した200万人の西ベルリン市民は生活物資を求めて困窮を極めました。連合国がソビエトの占領地を通ることなく、物資を彼らに届ける手段はただ一つでした。アメリカは同盟国と協力して、前代未聞の空輸作戦を展開します。何百機もの輸送機がソビエト占領地を飛び越え、一日に何千トンもの小麦、石炭、ガソリン、医薬品、ときにはドイツ製の乗用車まで届けます。西側がソビエトに対して対決姿勢を鮮明にした初めての行動でした。第三次大戦勃発の危機でした。しかしプラハに続き、ベルリンまでソビエトの手に渡すわけにはいかないという西側の決意のまさに正念場でした。

ベルリン封鎖は11カ月続きました。航空機による空輸は27万8千回に及びました

力と恫喝と陰謀でヨーロッパを屈服させようとした、そして、東欧では完全にそれに成功したスターリンは、ベルリン封鎖で致命的な失敗を犯しました。ヨーロッパ、特にドイツとアメリカを強い連帯感をもって結び付けてしまいました。さらに、共産主義の侵略的拡大を脅威と受け取った西側諸国が軍事同盟を結ぶきっかけをも作ってしまいました。1949年4月4日、北大西洋条約機構、NATOがせつりつされます。これには12カ国が加盟しました。これらの国は、アメリカの軍事力、とりわけ核の傘によって守られることとなりました。

こうした世界のうねりに抗しがたいと思ったのか、同年、5月12日午前0時、スターリンはベルリン封鎖を解除しました。これによって人も物資も自由に往来できるようになりました。まさに西側の勝利です。このあと、アメリカ、イギリス、フランスはそれぞれが三分割していた地域を統合し、民主主義国ドイツ連邦共和国を設立します。1949年5月23日のことでした。しかしこれにスターリンが黙って引き下がるわけがありません。一つは1949年9月、ソビエトは初の核実験を行います。そしてもう一つは1949年10月7日にドイツ民主共和国を設立させることで対抗しました。

大戦からわずか4年で、核の脅威の上に平和と繁栄が築かれる、危うい綱渡りのような新しい時代が到来しました。東西冷戦の時代です。

いきなり、ヨーロッパ戦後史を振り返ってしまいました。この冷戦はヨーロッパではドイツに集約されて現れましたが、もう一方では本当に戦火として現れます。朝鮮戦争です。この後、朝鮮戦争を追ってみたいと思います。

中国と朝鮮半島の事は、先に述べてきております。しかし、それは敗戦までのことでした。それから後のことは、日本史として語られることは多くても、世界史的に展望した通史はあまりないようです。アジアの中の日本の敗戦という視点はあまりとられていません。ですから、東アジアの残留日本兵の事も、当の日本人が知らないし、知らせていない。シベリア抑留も語られず、中国残留孤児もほんの一時期の事でした。

それはさておき、東西冷戦の主役がアメリカとソビエトであるならば、この二国は直接に戦火を交えたことはありません。代理戦争こそあれ、ソビエトはアメリカと戦ったことがない。その意味からいうと、中国は北朝鮮の同盟軍としてアメリカと戦いました。それが朝鮮戦争でした。その時、日本はどうしたのでしょうか。機雷掃海のための出動で56名、上陸用舟艇の乗組員として何十名か戦死。事実上の参戦でした。朝鮮戦争の後方支援ばかりで終わっていたわけではありませんでした。この事実はなお隠されています。憲法が制定されていましてから、参戦していたとは言えないのです。これは日本のこと。東アジアでの東西冷戦は、やはりソビエトが核を持ってから表面化してきます。これから追々お話したいと思います。

朝鮮戦争は1953年から54年の戦争でした。69年前ということになります。この戦争は休戦協定が結ばれているだけで、いまだ終わってはいません。先日のトランプと金正恩のハノイ会談で、終結宣言があるかもしれないとの前のめりな下馬評がありましたが、それはなりません。この未だ終わっていない戦争の後方司令部が横田基地にあります。そこに詰めているのは、アメリカ、カナダ、オーストラリアの国連軍の将校たちです。実際に朝鮮戦争の連合軍に参加していた国々はアメリカ、イギリス、フランス、カナダ、オーストラリア、などですが、意外なところを挙げますと、タイ、トルコ、フィリピン、エチオピア、ギリシャ、ルクセンブルクなども参戦しております。では韓国はどうだったのかというと、国連非加盟であった大韓民国は、1950年7月15日の大田協定により、作戦指揮権を国連軍に委ねているというのが、公式的な説明ですが、国連非加盟であったため、正式に国連軍に参加はできなかったが、指揮権を国連軍に委ね、その指揮に従って戦いました。

時制がまた逆戻りしてしまいました。ウッドストックから始めればそれでよかったと思うのですが、そして、戦後史を見直さなければ1968年は語れないわけではないのですが、どうしても朝鮮半島が目障りで、せっかく大戦中から日本敗戦までの中国と朝鮮を語ったのですから、もう一度そこから始めたいと思います。

まずカイロ宣言から始まります。このカイロ宣言で、米、英、中首脳は朝鮮に関して、

朝鮮ノ人民ノ奴隷状態ニ留意シ臆（やが）テ自由且独立ノモノタラシムル

ことを宣言します。つぎにヤルタ会談で米・英・ソ連首脳はソ連対日参戦に関する極東密約（ヤルタ協定）を締結します。その中で戦後朝鮮を当面の間連合四ヶ国（米・英・華・ソ）による信託統治下に置くことを取り決めました。その結果、ソビエトは1945年8月9日、ヤルタ協定の基づいてソ連は対日参戦を行い満洲国及び朝鮮・咸鏡北道へ侵攻を開始します。このソビエトの侵攻は9月2日まで続き、満州、南樺太、千島列島及び朝鮮半島の北緯38度線以北を占領してしまいました。そのような暴力的なソビエトの侵攻に対して、アメリカはその主力がまだフィリピンにあったため、アメリカ軍を両地域へ即時投入することはできませんでした。しかし、朝鮮半島をうやむやのうちにソ連に占領されるのを防ごうと、アメリカは「北緯38度線で米ソの占領地域を分割する」という案をソ連に提示し、8月16日に同意の返答を得ます。そうした外側の動きの中で、当事者の朝鮮側は、日本降伏の玉音放送のその日のうちに呂運亨、安在鴻らが朝鮮建国準備委員会を結成し、組織的な独立準備を進めようとしています。そして9月2日、日本政府が降伏文書に調印したのを受け、朝鮮建国準備委員会は李承晩を大統領、呂運亨を副大統領とする朝鮮人民共和国の建国を9月6日に宣言するのですが、朝鮮建国準備委員会は独立の方針を巡って、右派（民族主義者）と左派（共産主義者）が対立し、また当時中国で活動をしていた大韓民国臨時政府関係者も「朝鮮の正統な政府」としての自負から、朝鮮人民共和国への協力を拒否するという混乱ぶりをみせます。

そうした朝鮮側の動きとは別に、1945年9月8日、アメリカ大24軍師団が仁川に上陸し、9日には早くも朝鮮総督府と降伏文書を交わします。お断りするまでもないと思いますが、朝鮮総督府は1910年の韓国併合によって大日本帝国領となった朝鮮を統治するために設置された官庁のことで、朝鮮建国準備委員会なるものが作られ

ようと、国際法的には鮮半島の正統な統治者はこの朝鮮総督府であったわけです。これによって、アメリカは南朝鮮に在韓アメリカ陸軍司令部軍政庁を宣布することとなりました。そしてアメリカは朝鮮人民共和国と朝鮮建国準備委員会の承認を拒否します。一方北朝鮮では動燃10月に北朝鮮共産党臨時人民委員会が樹立されます。そして1945年12月にモスクワ三国外相会議が開かれ、朝鮮半島の英米ソ中の4か国による最長5年間の信託統治の必要性が決定されます。要はこうして朝鮮半島の分断が大国の意思で決定されたということです。それからの朝鮮半島では、通化事件など、中国共産党軍と朝鮮義勇軍による満州国での日本人一般市民3000人余りの大虐殺、大邱10月事件、済州島四・三事件、麗水・順天事件と暴虐の限りを尽くす事件がおこります。

1948年になって、米ソ両国が、南北にそれぞれ自国の傀儡政権を樹立します。南は、8月15日に李承晩初代大統領率いる大韓民国、9月9日に北側で金日成首相率いる朝鮮民主主義人民共和国が樹立宣言を行います。これによって、一応の形は整いました。これが戦後の朝鮮半島の歴史の概略です。西に鉄のカーテンが降りようとしているとき、東も緒戦半島で冷戦の現実がはじまりました。しかし朝鮮戦争まではまだ2年ありました。彼らは同じ民族同士で殺し合うのです。

東京、横田基地の在日アメリカ軍司令部の一角に朝鮮国連軍後方司令部があります。そこには朝鮮戦争に参戦した、アメリカ軍、カナダ軍、オーストラリア軍の国連軍の将校たちが今も有事に備えて、常に緊張感をもって待機しています。1950年から53年にわたる戦争でした。その間、300万人以上の犠牲者を出しました。そしてこの戦争が原点となり、北朝鮮はより独裁体制を強め、ひたすら核開発に走るようになりました。しかし朝鮮戦争がなぜ起こったのかは十分に分かっておりません。ただ金日成が韓半島の武力統一を目論み、共産主義の盟主スターリンと綿密に連携して戦争を始めた経緯はわかってきております。スターリンは当初、金日成を時期尚早ととめておりました。彼は東西対立の情勢だけでなく、中国にも陰謀を張り巡らせていたからでした。それだけにとどまらず、彼は独裁体制を共産圏全体に及ぼそうとも画策していました。

スターリンがアメリカと直接対決することを極力避けようとしたのは、やはり核兵器の存在に理由がありました。彼は対ドイツ戦でこそ連合軍と連携しておりましたが、ナチスドイツが倒れた途端から、覇権争いを仕掛けておりました。それはアメリカも同様です。米ソがドイツを舞台に繰り広げたのが、ナチのスパイや科学者の争奪戦でした。ソビエトはナチ科学者の頭脳を大量に確保し、ソビエトの研究機関へ送り込みました。そうして、アメリカに遅れをとっていたミサイル、化学兵器、核兵器の開発を推し進め、これらを急速に進歩させます。

これに対して、アメリカは1600人を超えるナチの残党、スパイ、科学者、ミサイルの専門家を取り込みました。アメリカは彼らを戦犯のリストから外すことを交換条件として提示し、それぞれの専門の研究開発に従事させます。ヴェルトナー・フォン・ブラウンもその一人でした。彼は戦犯のリストから除外してもらう代わりにミサイルの開発を推進し、ついにはアポロ計画も成功させます。

スターリンがアメリカとの直接対決を何としてでも避けたのは、彼の異常なほどの猜疑心と臆病さからでした。彼は内政的にも、たとえ一番の側近といえども信用せず、常に見えない敵に怯えておりました。フルシチョフ回想録に、

スターリンは誰も信用しない。
ソビエトは敵に取り囲まれており、
あらゆる人間の中に裏切り者がひそんでいる
と思い込んでいた。
スターリンの異常な警戒心は狂気の世界を
生み出した。

と語っています。このようなスターリンの人格がKGB、秘密警察を産み、国内外にスパイ網と人民への弾圧を作り出しました。そんな彼が原爆の破壊力を知らないはずがありません。彼はたぶん、原爆の威力はトルーマンよりよく知っていたと思います。ですから、ソビエトが核を自分の手に握るまでは、決してアメリカと対峙しようとはしませんでした。

そのスターリンは大戦中からアメリカに巨大なスパイ網を築きました。のちに判明しただけで、アメリカ政府機関を中心に349名ものスパイを潜入させています。アメリカ財務省次官補、ハリー・デスター・ホワイト。彼はIMF、国際通貨基金を創設した大物官僚でした。しかし後でソビエトのスパイであることが判明します。彼の暗号名はリチャードでした。またルーズベルトの対日参戦の意思決定に影響力を大きく発揮した側近の首席秘書官、ラフリン・カリーも暗号名ページというソビエトのスパイでした。彼は密かに外交機密をソビエトに漏らすだけでなく、大統領の意思決定をソビエトにとって都合のいい方向にさりげなく誘導しておりました。ほかにアメリカ国務省の高官、アルジャー・ヒスもスパイでした。アメリカ議会の調査員報告によれば、

ソビエトはどこまでアメリカの機密を握っているのか分からないほど、アメリカ政府の内部には疑心暗鬼が広がり、誰も信用できなくなりました。

とあります。そのソビエト、つまりスターリンの最大の狙いはアメリカから核兵器の

機密を盗み出すことでした。これを果たしたソビエトのスパイがゲオルグ・アベルでした。彼は原爆開発の秘密基地、ニューメキシコ州ロスアラモスに潜入し、原爆の設計図を含む最高機密を盗み出しております。

いきなり話が跳びますが、日露戦争の折、日本はロシア国内を混乱におちいらせようと様々な工作を行いました。その拠点となったのが駐ロシア公使館でした。その公使館駐在武官であった明石元二郎大佐が対ロシア工作を活発に行いました。明石は日露開戦と同時に参謀本部直属のヨーロッパ駐在参謀という臨時職につき、ロシア支配下にある国や地域の反ロシア運動を支援、またロシア国内の反政府勢力と連絡を取ってロシアを内側から揺さぶる為、様々な人物と接触も盛んに行いました。この点、司馬遼太郎氏は坂の上の雲で、

明石はジュネーヴにあったレーニン自宅で会談し、レーニンが率いる社会主義運動に日本政府が資金援助することを申し出た。レーニンは、当初これは祖国を裏切る行為であると言って拒否したが、明石は「タタール人の君がタタールを支配しているロシア人の大首長であるロマノフを倒すのに日本の力を借りたからといって何が裏切りなのだ」といって説き伏せ、レーニンをロシアに送り込むことに成功した。

後にレーニンは次のように語っている。「日本の明石大佐には本当に感謝している。感謝状を出したいほどである。」と

といったあらすじで記述しておりますが、このレーニンとの接触はどうも司馬氏のフィクションであったようです。しかし、実際、日英同盟が成っていた英国とは十分な情報交換を行っていたようで、対ロシア戦にとって有意義な情報をイギリスの諜報員から得たりもしております。また明石は、ロシア国内の反乱分子の糾合や、革命政党エスエル（社会革命党）などへ資金援助し、ロシア国内の反戦、反政府運動の火に油を注ぎ、ロシア国内の混乱を助長させます。さらには、欧州の明石工作をロシア将兵に檄文等で知らせて戦意を喪失させようと計ったりなどして、ロシア軍の後方攪乱活動を盛んに行いました。こうした明石の活躍は、陸軍10個師団に相当するとも評され、ドイツ皇帝ヴィルヘルム2世も、明石元二郎一人で、満州の日本軍20万人に匹敵する戦果を上げていると称えたともいわれています。このことから彼の一連の工作は、日露戦争を勝利に導くのに大きく貢献したことは間違いなさそうです。

しかし、一見正義に見えても、それがどこかの国の諜報活動に乗せられたことである可能性もあるのです。一国の大統領が敵対国の工作員であった例まであるのですから。ひょっとしたら、あの人もそうかもしれませんね。

朝鮮戦争は1950年に始まり、1953年に休戦協定が結ばれました。その当時、世界は、アメリカを中心とした資本主義陣営とソビエトを盟主とする共産主義陣営との間で、冷戦が深刻化しておりました。ヨーロッパでは鉄のカーテンによって東西が分断されておりました。そしてアジアでの東西対立の最前線が、朝鮮半島でした。この日本の植民地支配からようやく脱却した朝鮮半島は、南は李承晩を大統領とする大韓民国が1948年8月に建国され、これにたいこうして、同年9月に北の金日成率いる朝鮮民主主義人民共和国が設立されます。南はアメリカの支援を受け、北はソビエトを後ろ盾としていたことは言うまでもありません。朝鮮戦争はアメリカ、ソビエトの二大陣営が冷戦下で直接戦火を交えた戦争でした。

ところが、表面的な構図は、アメリカ率いる資本主義陣営とソビエト率いる共産主義陣営の対立と見えておりますが、この共産主義陣営の中での熾烈ともいえる駆け引き、ヘゲモニー争い、せめぎ合いといってもいい権謀術数が舞台裏で繰り広げられておりました。

朝鮮戦争の兆しは、開戦前年の金日成のモスクワ訪問から始まります。彼の孫が真似ましたが、彼はこのモスクワ訪問を北朝鮮の列車で訪問しております。金日成はモスクワにスターリンを訪ね、彼との会談で韓国への侵攻を強く提言します。これに対してスターリンは、この逸る金日成を前に、慎重な態度を崩しませんでした。金日成は、外交文書によると、ソビエトの支援と援護があれば、2か月で朝鮮半島を武力統一して見せるといっております。スターリンは、援助はできるが、今は用心する必要がある、と頷きませんでした。彼は、唯一の核兵器保有国アメリカと核兵器を恐れていました。

残されている外交文書によれば、金日成はその後何度もスターリンに支援を懇願します。それに対してスターリンは態度を変えませんでした。しかしスターリンには目論んでいたことがありました。それがナチドイツから連行してきた科学者たちでした。彼らはソビエトのために、懸命に核開発を押し進めていました。そして1948年8月、ソビエトは核実験に成功します。これによって、スターリンは態度を一変させ、むしろ金日成よりも前のめりになって、開戦準備を進めます。最初の階段から一年目、ソビエトは秘密裏に北朝鮮へ大量の兵器を送ります。その頃の暗号電報で、スターリンは金日成に、

このような大事業は大がかりな準備が必要だ。支援する準備はできている。と伝えていきます。

そのころスターリンは毛沢東をモスクワに招待し、彼とも会談を行っています。そして極秘であった原爆実験の映像を見せています。スターリンは核を保有したことで、アメリカに対抗する自信を深めていました。そして毛沢東との会談でも、

米国は、我々が核を保有したことで、我々と戦争することを何よりも恐れているはずだ。日本も未だ復活しておらず、戦争する能力はない。

と語っています。スターリンのこうした動きは、対米戦略のみならず、中国への工作でもありました。そして、その狙いは旅順港にありました。この中国屈指の軍港、旅順港をソビエトは借款し、自国海軍の基地として自由に使っていたのです。ソビエトにとって旅順港は、アジアにおける悲願の不凍港でありました。ソビエトは朝鮮戦争を金日成に仕掛けさせることにより、米国をアジアにくぎ付けにし、ヨーロッパまで手が回らないようにすること、そして、いまだ新興国に過ぎない中国をこれに巻き込み、かつ国力の差を見せつけて旅順港を手放さなくてもいいように誘導することを狙っていました。そのためには、中国をソビエトの核の傘の下にくくりつけておくことと、中国もソビエトの衛星国化することまでもくろんでいました。しかし、毛沢東はこの凄まじい映像を見せつけられ、中国も核を開発しなければならないと思っていました。スターリンの謀略は後の戦況にも表れてきます。

スターリンには野望がありました。

スターリンの1945年9月2日に行った対日戦勝演説。

「この（日露）戦争でロシアは敗れた。その結果日本は南サハリンを掠め取り、千島列島にどっしりと腰を据え、かくして我々の太平洋への出口を閉ざしてしまったのである・・・この戦争での敗北は、我が国民の記憶の中に苦い思い出となって残った。またこの敗北は我が国に汚点をしるした。我が国民は、日本が粉碎されこの汚名のそそがれる時が来ることを信じ、ひたすらその時を待ちつづけてきた。40年間、我々古い世代の者は、この日を待ち望んだ。そして、いまここにその日が訪れたのである」

彼の野望はとどまることを知りませんでした。スターリンは対日参戦の結果として、日本の領土に対しては、樺太、千島、北方諸島に加え、北海道の北半分の占領まで要求しました。そして中国の領地権益にあっては、日本軍が支配していた大連および旅順港の借款を要求しております。しかしソビエトが対日参戦をするまで、アメリカのトルーマンは中国の領土の問題だから、中国に同意を求めよと要求しております。これに対してスターリンはまるで火事場泥棒のように、北海道の半分を占拠し、支配することまで要求しました。トルーマンはこれも拒絶と言っていいほどの勢いで跳ね除けました。スターリンはこのことから軍を北方四島に向けます。彼はアメリカと事を構えませんでした。しかし北方四島からは退去せず、アメリカの抗議を無視しました。火事場泥棒は対日参戦で労せず日露戦争の屈辱をはらし、その上日本固有領土も中国旅順港も手に入れたのでした。

この太平洋に面した要衝、旅順港を巡って、中国を建国した毛沢東は、スターリンにその返還を幾度となく要求します。しかしスターリンは旅順港を変換しなくても済む口実を探し出します。その結果が中ソ軍事協定でした。その協定の中に、両国が戦争に巻き込まれそうになった場合、ソビエトは引き続き旅順港を使用できるという一文を入れることに成功しています。これによってソビエトは、極東地域に緊張が高まれば、継続して旅順港を使用できることになったのです。北朝鮮が武力統一を目指して戦いを起こせば、恰好の口実になります。スターリンは自分の野望のために、北朝鮮をけしかけたのでした。

こうした事態が動いている中、アメリカは北朝鮮を大した脅威とは見なしていませんでした。1950年1月に発表されたアメリカの防衛ラインは、韓国を除外した、日本海に引かれており、朝鮮半島は問題視していませんでした。つまり、アメリカ

はGHQによる占領下にあった日本を資本主義陣営の最前線と位置付けていました。この世界情勢の中で、北朝鮮はソビエトの支援を受け、着々と戦争の準備を整えていきます。日本はというと、吉田茂は、朝鮮を視察してきた当時のアメリカ国務省顧問ダレスの、決して心配することはないという言葉に信用しきっておりました。日米首脳陣は開戦になんの用意もしていませんでした。まさに寝耳に水の開戦でした。1950年6月25日、突如北朝鮮10万の軍勢が38度線を突破し、総攻撃を仕掛けてきます。200台を超える戦車群と大砲を装備した北朝鮮軍は、赤子の手をひねるように韓国軍を撃破し、3日で首都ソウルを陥落、占拠し、更に怒濤の如く南進します。当時の韓国軍は、兵一人に歩兵銃一丁ほどの装備しか与えられておりませんでしたから、戦車に対しては穴を掘ってやり過ごすほかに戦う術がありませんでした。それよりも、韓国兵は戦車自体見たこともありませんでした。

マッカーサー元帥による戦況大逆転の賭けのような作戦について述べる前に、韓国軍は兵士に歩兵銃一丁ほどの装備しかさせていなかったこと、戦車など見たこともなかったことについて疑問を持たなかったのでしょうか。第二次大戦時、朝鮮半島では戦闘などなかったのです。また、朝鮮人は徴兵されませんでした。日本人は壮年に至るまで赤紙が来ましたが、朝鮮人には徴兵制度がありませんでしたから、志願兵が少々いただけだったのです。それも軍属としてであって、兵として戦闘行為に加わったことはありませんでした。しかし戦況が差し迫った1944年からは彼らも徴兵されたことは事実です。それでも、彼らのほとんどは戦線に派遣されることはないまま終戦を迎えています。ですから、実際の戦闘など知る由がありませんでした。そんな朝鮮の史実を捻じ曲げ、被害者面して賠償を求める韓国人は後を絶ちません。と、これ以上言うとヘイトスピーチと言われるかもしれませんからやめます。

根っからの軍人であったマッカーサー元帥は、源義経の一の谷の逆落としか、信長の桶狭間の戦いのような作戦を立案します。それがインチョン上陸作戦でした。その当時の戦況をもう一度振り返っておきますと、1950年6月25日、北朝鮮軍の突然の襲来以来、韓国軍、アメリカ軍は後退に次ぐ交代を続け、ついにはアメリカ第八軍は西南部戦線を放棄、釜山橋頭保にまで韓国軍と共に追い詰められておりました。

ここまで来ると戦記物のようにになりますが、釜山まで追い詰められた韓国軍とアメリカ第8軍の救援のためにマッカーサー元帥が立案したインチョン上陸作戦は、アメリカでは大反対の声ばかりでした。これに対してマッカーサー元帥がこう述べます。

仁川の勝算は五千対一だよ。しかし僕は賭に勝つことに慣れているからね。

インチョン上陸作戦への反対の理由の第一は、仁川港は干満の差が平均6.9メートルと非常に大きく最大で10メートルにもなり、干潮時には港の周辺はおおよそ3.2キロメートルの干潟となってしまうといことでした。それに付随して、様々な困難が生じる要件がありました。インチョンに上陸しようとする、そのルートは幅2キロメートル弱、長さ90キロメートルの水道以外になかったうえ、上陸作戦が刊行されるとなれば、水道を機雷で封鎖される可能性がありました。さらに、作戦実行は大潮で潮位が最も上がる9月15日、それも朝晩2回の満潮時刻の2時間に揚陸を行うことが絶対で、10月以降は玄界灘・黄海の季節風の影響から延期が困難になるので、作戦意図が北朝鮮に察知された場合、作戦実行日だけでなく、実行時間まで特定されてしまうこととなります。くわえて、仁川港の入り口には堅固に防衛された月尾島（ウォルミド）があり、上陸作戦の前にこの島を占拠しなければならなかったが、事前の制圧射撃を加えると、作戦が奇襲にならなくなります。

そして、上陸用舟艇の接岸に適した砂浜も無く、兵士達は高さ5メートルの岸壁をよじ登らなければならないという厄介な地理的事情もありました。戦争に手段を選んでいられないのかもしれませんが、最良にして確実な作戦を行わなければ勝利はありません。ノルマンディー上陸作戦のような勝利への作戦になるとは、誰も思っておりませんでした。

ここで、小さなことですが、インチョン上陸作戦が成功した要因の一つに、LSTがあります。

LSTは戦車揚陸艦のことで、この船一艘で戦車なら2台、兵員は200人を浜辺まで運び、上陸させることが出来ます。といっても、第二次大戦の折りには一応使われてはありましたが充分ではなく、本格稼働させることが出来たのは皮肉にもこのインチョン上陸作戦の時でした。このLST、イギリスで開発が始まったのですが、さまざまな難点が見つかり、これを改良しながらも開発は続いておりました。そして、1943年6月のソロモン諸島でのアメリカ軍の作戦で実戦に初めて投入されました。その後ノルマンディーや硫黄島、沖縄などの多くの上陸作戦においては、欠かすことができないものとなりましたが。低速であること、船自身に反撃の火器を持たないこと、船底の形から不安定で、海底の障害物に弱い、砂浜にしか使用できない、潮が引くと離岸できないなどの脆弱性をもっていて、敵前上陸という過酷な任務から多数の艦が失われました。

しかし、インチョン上陸作戦の頃には、大戦時よりも改良が進み、より多くの兵員を乗せ、かつ大型化した戦車も短時間に上陸させることが可能なように改良も進み、橋頭保を持たない敵地に速やかに戦車などの重火器と兵員を上陸させることに成功しました。そして、その影に日本人がおりました。その数約2000人。結論から言うと、その中で57人が戦死しております。彼らはGHQの下部組織である日本商船管理局SCAJAPに管理招請された民間人および元海軍の船乗りたちで、彼らが乗って操船したLSTにはQから始まるコードナンバーが付けられておりました。そしてこの日本人が乗ったLSTは、インチョン上陸作戦で使われたLSTの6割に達していました。彼らは大戦中も朝鮮半島には何度も行っており、半島の海岸線の事は熟知していました。それが、彼らを乗せた理由でした。実際、彼らは反撃の砲弾が飛びくる中、迅速に活動し、米兵と重火器、戦車を驚くべき速さで上陸させたそうです。

その作戦決行の前に、米軍はインチョンに情報部員を送り込みます。上陸作戦のための情報集めでした。これに李承晩らが先ず携わります。彼らからの情報は作戦実行に好都合なものばかりでした。アメリカ軍は、彼らの情報を信用せず、自分たちの諜報部員を送り込み、再度検証させます。アメリカ軍はこうして得られた情報に基づき、様々な用意を整えて作戦を決行します。その裏で、正確な情報を集めるのに協力した霊興島民約50名が、北朝鮮軍によってスパイ容疑で処刑されるということもありました。

インチョン上陸作戦が決行される前に、様々なカモフラージュのミッションが行われております。群山あたりに上陸するから地元民は非難するようにとか、他の地区に偵察機を幾度となく飛ばすといったデモンストレーションなどです。しかし、それでごまかせるでしょうか。しないよりまし程度であったようです。インチョンの沖には機雷も敷設され、警備兵も配置されておりました。その機雷の除去には、元日本兵が携わりました。海軍出身者のみならず、船員であった者も加わっての除去作業でした。そして、この作業以外も含めてですが、この戦争で57名の日本人が戦死しております。あえて戦死と言っておきます。LSTでの業務死と違って、こちらの方は公的に発表されておりますので、戦死として差し支えないと思います。こののち、機雷除去は海上自衛隊の得意任務になっていきます。

北朝鮮軍の具体的な配備状況は、仁川地区では、仁川市街と月尾島から本土のあいだの堤防、月尾島に約2000名待機しておりました。月尾島は要塞化されており、周囲の道路は鉄条網が張られ、地雷も埋設されています。そして、山腹には洞窟が掘られ、海岸砲の砲台が築かれました。さらにソウルには約5,000名が配備されており、くわえてソウル・仁川地区全体には約1万名の兵力が備えておりました。

このインチョン上陸作戦を行う前に、群山には爆撃も行い、9月12日にはアメリカ・イギリスのコマンド部隊が威力偵察のための強襲上陸を行ったりもしています。さらに陽動作戦として9月13日に三陟（サムチョク）周辺や鎮南浦一帯に艦砲射撃と爆撃を行いました。

そのうえでインチョン上陸作戦は開始されました。その前哨戦としてどうしても撃破占領することが必要なところがありました。仁川港の前に位置する月尾島です。月尾島の北朝鮮軍陣地には砲台が設置され、外洋からは接近できませんでした。国連軍は13日からこれに激しく空爆を加え、駆逐艦6隻、重巡洋艦2隻、軽巡洋艦2隻の計10隻が砲撃を加えます。その結果、国連軍の船にも被弾、ししゃもですが、翌日14日には国連軍の艦砲射撃に、北朝鮮軍からは反撃らしい反撃はもう行われませんでした。

インチョン上陸作戦の前哨戦としての月尾島北西岸上陸戦が、9月15日午前6時30分、大潮の満潮に合わせて決行されます。これに対して北朝鮮兵約400名が洞窟陣地から反撃を行いました。島はほんの45分で確保されてしまいます。

なんだか戦後史発掘のようになってきましたが、あの第二次大戦のあとも世界は暴虐の限りを尽くしたりしないのか、百万人単位の犠牲を伴う戦争を繰り返しております。第二次世界大戦があまりにも大規模な戦争でしたから、のちの戦争が大したことではないと思いがちなのかと疑ってしまいますが、戦争は戦争です。我々は知らなさすぎます。

インチョン上陸作戦は月尾島を攻略すると、あとは三度に分かれて行われました。第一波は同日午後5時30分の満潮に合わせて行われました。国連軍、というよりアメリカ第五海兵連隊ですが、この連隊が仁川市南地区の干潟に上陸します。北朝鮮軍の反撃ですが、この日の第三波の上陸まで反撃は行われず、北朝鮮軍の守備隊は日没とともに撤退してしまいます。ですから、国連軍25000人、第10軍団、第7歩兵師団は機甲部隊、砲兵部隊と共に、毛期の抵抗を受けず上陸してしまいます。この勢いのまま、第5連隊第2大隊がソウルと仁川を結ぶ街道にまで侵出します。この日の戦闘ではアメリカ側は戦死20名、負傷者174名。北緒戦軍は500名あまりであったと推測されています。このような戦闘の後、国連軍は兵6万5000に人を更に上陸させ、60両以上のM26重戦車を揚陸させます。

インチョンへの上陸が成功裏に行えた後、国連軍は一気呵成にソウルの奪還を目指します。同時に釜山橋頭保の戦いで苦戦していた国連軍にも15日夜、上陸作戦に呼応して「スレッジハンマー作戦」が下達され、16日午前0時に発動が命令されます。インチョンに上陸した軍と釜山で劣勢に立たされていた軍による挟撃が始まりました。インチョン上陸軍は金浦飛行場の占拠、ソウル - 仁川の街道の制圧を開始しますが、ここでの反撃も散発的でした。上陸三日目の金浦飛行場を無傷のまま奪還。もう一方の師団は釜山の合流を目指して京釜本道を南へ進撃していきます。ソウルを目指す二個連隊は二つのルートに分かれてソウルに向かいますが、第1海兵連隊は北朝鮮軍第70連隊や第87連隊と戦闘を行いながら漢江を渡河、ソウル市内に達しました。第5海兵連隊は漢江を渡河した後、ソウルの西方を目指し、ここで高地に展開する北朝鮮軍と白兵戦を戦い、9月25日にはソウルに達しました。その後9月26日から29日まで市街戦を戦い、奪還を果たします。

インチョン、ソウルでの北朝鮮軍の反撃が散発的で、あまり効果のある物ではなかったのは補給部隊が貧弱であったことに原因がありました。まず、当初の戦闘での連戦勝利で、予想外に早く補給線が伸びてしまいました。その補給線の整備が間に合わないまま、38度線から300キロメートル以上離れた釜山周辺で激しい抗戦に会い、その戦闘で大きく消耗しておりました。さらに、兵力にも問題がありました。北朝鮮軍の兵力の3分の2が、実は韓国内で強制徴募した新兵で、命令に逆らえば即時射殺するというおどしによって部隊がなんとか維持されているという状態でした。そこへソウルを奪還されてしまう事態が勃発してしまいます。これは大変な痛手でした。北朝鮮軍の補給路は朝鮮半島の道路網の都合で、殆どの主要幹線が一度ソウルを通過するようになっておりましたので、国連軍による仁川への上陸とソウルの奪還は、北朝鮮軍の補給路を断ってしまう結果になりました。

仁川上陸作戦に成功すると、釜山橋頭保に追い詰められていたアメリカ軍、イギリス軍、韓国軍を中心とした国連軍にスレッジハンマー作戦の発動が命令され、大規模な反攻が開始されることになりました。これによって戦局は一変します。冬将軍に痛めつけられて撤退せざるを得なくなったナチスドイツ、補給の絶たれたフィリピン戦線の日本軍と、列挙するにいとまない戦線の崩壊でした。その上に北と南からの挟撃です。北朝鮮軍は雪崩を打って敗走します。この勝ち戦の影で、ソウルに帰還した李承晩たちと韓国警察により、親北朝鮮とみなされた市民が虐殺される高陽衿井窟民間人虐殺が起きたりします。そしてこの時敗走した北朝鮮兵は中央山地で南部軍として再編成されなおします。これには、中央山地沿いに潜入した北朝鮮政治指導部と、北朝鮮軍敗残兵、麗水・順天事件の韓国軍脱走兵、南朝鮮での共産主義シンパの活動家などが加わっていました。この南部軍の指揮官の李鉉相でしたが、彼は済州島4・3蜂起の指導者でもありました。国連軍はこの南部軍のゲリラ活動に悩まされ、数度の大規模な鎮圧作戦を行うことを余儀なくされます。このゲリラ活動は、リーダーの李鉉相が戦死したことによって収束に向かうのですが、完全に終わるのは朝鮮戦争停戦後の1953年12月を待たなければなりませんでした。朝鮮半島の混乱は、この間の事情を見てもわかります。のちにその実体が暴かれる済州島4・3蜂起とそれに続く済州島民の政府軍による大虐殺とその残り火が朝鮮戦争の経緯の中で復活してきたり、麗水・順天事件の韓国軍脱走兵が北朝鮮に味方したりと、朝鮮半島は同じ韓民族の中で武力闘争を繰り返してきています。今の韓国が大統領を殺す国と言われるのも、こうした歴史の反映に過ぎません。彼らは権力闘争を、愚かしく今も繰り返しているのです。

インチョン上陸作戦の成功とそれに続く国連軍の反抗勢に、北朝鮮軍は配送を余儀なくされます。この勢いに乗って、李承晩大統領は北進統一の構想を実現しようと図って、マッカーサーに無断で韓国軍に38度線を越えて攻勢に出るよう命令します。しかしこの時すでに北朝鮮軍が38度線以北に逃げ込んで戦力を立て直し、再度の侵略を図る懸念があるとの統合参謀本部の勧告もあったので、トルーマンはマッカーサーに38度線を突破する事を承認することを9月27日、伝えておりました。この承認には条件が付加されていました。ソ連、中国の参戦がないこと。マッカーサーはこの付加条件を重んじなくてもいいと受け取っていました。そのため、マッカーサーは李承晩の独断専行を余り問題視せず、10月7日にはアメリカ軍の第1騎兵師団がマッカーサーの命により38度線を越えて進撃を開始します。

ここでアメリカは国連の安全保障委員会をあえて避け、国連総会で朝鮮半島に「統一され、独立した民主政府」を樹立することを国連の目的とするという動議を提出し、これに賛成47票、反対5票で採択を得ます。これによって、ソ連は安全保障委員会での拒否権を発動できぬまま、マッカーサーの攻勢にお墨付きを容認させられました。しかし、このソ連の行動の裏にはもう一つの意図がたくらまれていました。

この国連での動きの最中にも、北朝鮮軍は中朝国境付近まで追い詰められてゆきます。ここで朝鮮戦争は新たな局面を迎えることとなります。中朝国境を流れる鴨緑江の向こうに、おびただしい中国軍兵士が終結していました。毛沢東は正規兵に加え、各地からほとんど軍事訓練も施さないままの人員をかき集め、大部隊を仕立て上げて配備していたのでした。そして国連軍が中朝国境まであと一歩というところまで北朝鮮軍を追い詰めた時、突如26万人の中国軍が越境して襲い掛かってきました。彼等中国軍は、殆ど装備らしい装備を持たず、攻撃開始のラッパとともに持っている手りゅう弾を無くなるまで投げ、無くなると小銃を構えて怒涛のように押し寄せてきます。米兵の証言によれば、25人を倒しても、あとから45人が攻めてくる、それだけの兵士がどこからやってくるのか、理解できなかった、といった具合でした。

中国軍、突然の参戦でした。しかし、この中国軍参戦に至るまで、スターリンと毛沢東、金日成の間で、それぞれの思惑が入り乱れておりました。インチョン上陸作戦以来、敗走を余儀なくされた金日成はスターリンに援軍を乞います。しかし帰って来た返答は、

勝利には少しばかりの挫折や敗北は伴うものだ。北朝鮮はアジアにおける帝国主義に対抗する解放運動の旗手だ。金日成同士、あなたは忘れないでほしい。あなたは孤立していない。

金日成はこの苦境に藁をもすがる思いでスターリンに書簡を送ったのですが、その返答がこうでした。自らは決して矢面に立とうとはしないスターリンに、金日成は激しく落胆し、今度は毛沢東に援軍を求めます。

敬愛的毛沢東同士

と始まる書簡で、金日成は、

我々の力だけでは、この危機を乗り越えることは出来ない。

とし、

中国人民解放軍直接出動援助我軍

と書き送ります。しかし毛沢東も当初は金日成を相手にしませんでした。毛沢東もまたスターリンに、この時点での参戦は困難であると弁明します。

慎重に検討した結果、軍事行動は厳しい結果を招くという結論に達しました。我が軍の装備は貧弱で、米軍に勝つ自信はありません。さらに今中国軍が参戦すれば、米国との全面戦争に突入する危険があります。今は我慢の時ではないでしょうか。

ところが、金日成には奮起を促すだけで一向に取り合わなかったスターリンが、毛沢東には彼の弱腰をとがめだてして参戦をけしかけます。

いずれ戦火は中国におよび、日本の軍国主義が復活すると揺さぶりをかけます。

戦争に巻き込まれることを恐れるべきではない。戦争が不可避ならば、今起こせばいいのだ。さもなくば数年後には日本が米国の同盟国として再び軍事力を持ち、中国大陸への足場を築くことだろう。

この書簡は1950年10月に送られています。こうしたやり取りの後、毛沢東は決断を下し、現地部隊に命令を發します。

明天晚上、渡鴨緑江

明日夜、鴨緑江を渡れ

金日成と毛沢東を米国の矢面に立たせ、自らは一向に闘おうとはしないスターリンの

狙いはどこにあったのでしょうか。朝鮮半島で国連軍と中国軍、北朝鮮軍が死闘を尽くしていたこの時、スターリンはモスクワに東欧諸国の共産党指導者を集め、

無敵と言われた米国は北朝鮮にさえ勝てない。これで米国は、今後2～3年はアジアにくぎ付けにされるだろう。これは我々にとって好都合だ。我々はヨーロッパにおける軍事基盤を固め、さらに強固なものにするために、このチャンスを有効に活かすべきだ。

と演説しております。こうしてスターリンはヨーロッパの覇権争いを有利に進めようとしておりました。くわえて、スターリンは、スペイン、フランス、ドイツを支配下に置こうとさえ、たくらんでおりました。スターリンの野望はここにあったのです。元々ロシアは伝統的に地続きのヨーロッパに領土指向を持っていた国でした。共産主義国家になっても、この指向性は変わらなかったようです。

アメリカをアジアに釘付けにし、ヨーロッパの覇権を有利に進めようとしたスターリンの思惑通り、朝鮮戦争は中国軍の人海戦術で泥沼化します。マッカーサーはワシントンに書簡で、

We face an entirely new war.

と書き送っています。アメリカは二百三高地の戦いを経験しておりません。日本は無謀な戦いを日露戦争で戦っておりました。雲霞のように襲い掛かってくる中国兵に、アメリカは恐怖します。そして、朝鮮戦争をさらに凄惨なものにした大規模な空爆を行います。そして、戦局が進むにつれ、大規模にエスカレートしていきます。空爆は次第に無差別に行われ、機銃掃射で非戦闘員も容赦なく撃たれます。この戦争の前に、太平洋戦争でアメリカが日本本土に投下した爆弾の量が16万800トンでした。朝鮮戦争では、66万9000トンに上りました。この爆撃の指揮を執ったのは、アメリカ戦略空軍、カーチス・ロメイ司令官でした。太平洋戦争にあって東京大空襲など、日本焦土化作戦を指揮した人物でした。彼はそのころ、陸海軍に比べて空軍は何の役にも立たない、国家のお荷物、おもちゃといった扱いだったことに憤懣を抱き、より過激な攻撃を日本とドイツに仕掛けて空軍の存在価値を見せつけることに利用しました。これによって空軍は認められ、彼も後にアメリカ空軍の父と呼ばれることになります。

朝鮮戦争にあって、共産主義陣営を封じ込め、叩き潰すためには激しい空爆もやむを得ず、かつ米国兵の犠牲を出さぬようにするための有効な手段だと正当化されました。ロメイ司令官は後に、

我々は3年にわたり、朝鮮半島の全ての都市を焼き尽くし、人口の2割を犠牲にした。それが許されたのだ。

と述べています。これがよくわからない。誰が許したのでしょうか。多分、アメリカ大統領に許されたのでしょうか。神に、ではありますまい。のちに、彼はベトナム戦争でも同じことをやります。ヒトラー以上の虐殺者です。彼も、アメリカ大統領も。

朝鮮半島を一気に制圧できると思い込んで開戦した金日成、自らは矢面に立たず、金日成を裏で操るスターリン、スターリンに見くびられ、面子のために人民をいけにえにする毛沢東、北進統一を叫んでアメリカの背中に隠れる李承晩、そしてまるで朝鮮人を根絶やしにしても許されると勘違いしているアメリカ軍人、朝鮮戦争はこうした様々な権力者の野望渦巻く戦争でした。この戦争は中国の参戦で形勢が一変しました。1950年12月にマッカーサーがワシントンに送った書簡があります。

- Vladvostoks 2
- Vorshiov 1
- Khabarosk 2
- Port Artnur 1
- Peking 1
- Dairen 2
- Dolensk Sahalin 1
- Komosomlsk 2
- Blagoveshchensk 1
- Mukden 2
- Harbin 1
- Irkutsk 1
- Chita 1
- Ulan Ude 1
- Petropavvak 1
- Nakhodka 1
- Taiantao 1
- Artem 1
- Kuibyashevtal 1

これは米国原爆投下計画書に書かれた投下予定都市のリストです。この案をまとめたのはマッカーサーでした。

中国軍の参戦は、朝鮮戦争の形勢を一気に変えてしまいました。中国軍にはそれまでの日中戦争や国共内戦での戦いに、充分経験を積んだ古参兵と、ソ連が供給する最新兵器、それに日本軍の残した兵器があり、三選当時は米軍を圧倒したのですが、ここでもやはり補給線が伸び切って来たことが影響し始め、次第に攻勢をよわめることになってきます。これにたいして、国連軍はアメリカおよびイギリスからの最新兵器の調達が順調になり、劣勢であった戦況をはねかえすまでになってきました。そして3月14日、一度は追われたソウルを再奪還します。しかし戦況は38度線辺りで膠着状態に陥ります。これは後のベトナム戦争で北ベトナム軍も取った戦術ですが、大規模な土塁と塹壕、洞窟陣地を築き、米軍と相対峙します。このとき中国軍の人員は64万2000人、北朝鮮軍は22万5000人の計86万7000人にたっしていました。国連軍の方は60万人でしたから、これをはるかに凌駕しております。国連軍は相手を上回る軍事兵器と確かな補給線、中国軍と北朝鮮軍は人海戦術をもってお互い戦っておりました。この事態を打開しようとして立案されたのが、マッカーサーの原爆投下案でした。

しかし、さすがにトルーマンもこれを承認するのはためらいました。日本に二発の原爆を投下することにためらわなかったトルーマンも、ソ連からの原爆による報復を受ける可能性があると感じた途端、朝鮮戦争で核兵器を使って事態を打開しようとするマッカーサーは、危険分子にしか見えなかったようです。勝つためにはあらゆる手段、戦術を駆使するという根っからの軍人氣質のマッカーサーは危険でした。

時系列を正確にしておきましょう。1951年3月24日にはもうトルーマンは停戦を呼びかけようとしていました。ところが、これを事前に知ったマッカーサーは突如参戦してきた中国軍を叩きのめすとの声明を発表します。ところが、これはマッカーサーの独善的な発表であって、政府の同意も許可も受けてはいませんでした。その後、これも彼だけの判断で、国連軍に38度線を越えての進撃を命じます。さらに満州に対してB-50による戦略空軍の爆撃や、中国軍の補給路に放射性物質をまき散らすことをトルーマンに進言します。こうした作戦は、朝鮮半島の戦闘を解決しようとしていた国連や米国政府の意向を全く無視した内容でした。国連と米国政府から見ると、これはマッカーサーの独りよがりの暴走でしかありませんでした。国連はこれによってソ連を刺激し、第三次世界大戦にまで至ることを恐れておりました。それ故トルーマンはマッカーサーを全ての地位から解任しました。

こうした展開の中、最前線では膠着状態が続き、戦闘も散発的となって次第に停戦から休戦へと動き出します。1951年7月10日からケソンに置いて休戦会議が断続的に繰り返されます。事態が大きく動いたのは、皮肉にも、アメリカ、ソ連の指導者の交代によってでした。アメリカはアイゼンハワーが大統領になり、ソ連はスターリンが死去します。

マッカーサーの解任に前後して、米国は1951年7月よりパンムンジョムで休戦協定の協議を始めます。しかしこの休戦協定に応じるかどうかで、共産主義陣営の中での駆け引きが続きました。金日成は連合軍の激しい空爆と核の脅威に、休戦を望みました。毛沢東は自らの面子を重んじ、休戦には応じるべきではないと、断固拒否しました。彼は金日成に、

金日成同志よ、休戦は敗戦に繋がるだいいっぽである。我々はこの戦争のおかげで鍛えられ、アメリカ帝国主義と戦う貴重な経験を得ているではないか。

と説得します。金日成はこれに納得せず、スターリンに直談判を試みます。

朝鮮人民は今極めて厳しい状況に追い込まれています。早急の停戦協定締結を望んでいます。

しかしスターリンは全く取り合おうとはしませんでした。

我々は中国代表団とこのことにつき、討議したが、休戦には応じないという結論に達した。以上。

これ以上はない突き放し方でした。

こうした中、戦争の犠牲者は増え続けます。アメリカ軍、3万3000人、中国軍、11万6000人（推定）、韓国軍、北緒戦軍合わせて66万人、民間人200万人以上。

共産陣営の指導者同士の駆け引きに、皮肉な結末が待っていました。スターリンの死でした。これを機に毛沢東も停戦に応じ、パンムンジョムでの停戦協定協議が一気に進展します。開戦以来3年、こののち38度線での分断が続くことになります。

1953年7月27日、パンムンジヨム、板門店で、休戦協定が結ばれます。これに調印したのは金日成、肩書は朝鮮人民軍最高司令官、そして彭徳懐中国人民志願軍司令官、M.W.クラーク国際連合軍司令部総司令官でありました。こうして3年間続いた朝鮮戦争は一端終結を見たのですが、これはあくまで停戦中ということです。昨今の米朝会談でも終戦宣言が交渉の大きな議題の一つになっています。そして、もう一つ、韓国軍はこれに調印しておりません。それは、ここに来てでもお北進統一にこだわり、停戦を不服として李承晩がボイコットしたからです。それ故、終戦宣言については、ムンジェイン大統領は関与できないのです。北朝鮮と中国、相手は国連軍、この枠組みの中で協議される議題であるわけで、韓国と北朝鮮は今も交戦中なわけです。ですから、2010年11月23日、北朝鮮軍が[に移動](#) ヨンピョン島を突如砲撃しますが、これとて交戦状態である以上、あるべき姿です。

休戦協定が結ばれた後、金日成には大きな不信感が残りました。その不信感の対象は、ソビエトと中国でした。金日成が停戦を望んだ時、スターリンも毛沢東も相手にしませんでした。金日成は自らが小国と侮られたこと、とくにスターリンにあやつられ、利用されるだけ利用されたという思いがありました。そして、もう一つ、大事な教訓をえました。それは、核を持てば最強国アメリカも手を出さないということでした。彼はこれを、身をもって知りました。このあと、北朝鮮は、三代にわたって核開発にひた走ります。彼は決して核を放棄しすまい。持っていれば、手を出されることはないからです。

資本主義経済は、その時々市場経済で自然に発生した経済体制だといえます。それに対してマルクスは、産業革命以後の資本主義社会の矛盾を理論的に解明し、その矛盾を解決する処方箋を描きました。つまり自然に任せた経済体制ではなく、人間の理性によって創造された、想像による経済体制であったわけです。それゆえ革命は、マルクスによって予言された先進資本主義国から起こらず、農民革命として先ずロシア、次いで中国、それから各国に伝播してゆきました。マルクスは共産主義革命に正義を与えました。プロレタリア独裁という美名を与えて、それを正義としたのです。プロレタリアによる独裁が正義となって、独裁者が生まれました。それはヒトラーともムッソリーニとも、ロシア専制君主とも、なんら変わらぬ独裁者でありました。ヒトラーのユダヤ人虐殺が非難されますが、スターリンのロシア人民虐殺はどうでしょう。毛沢東の文化革命での死者、天安門事件の犠牲者、ポルポトによる虐殺は、眼鏡を掛けているから、学歴があるから、学校の先生だから、医者だから、村の指導者だったから、そんな単純な理由で反革命とレッテルを貼っての殺人でした。マルクスはプロレタリア独裁を必須の革命の手段としましたが、これが単なる独裁者の出現に及ぶとは想像しなかったのでしょうか。革命が独裁者を産む一手段に過ぎなくなるとは思わなかったのでしょうか。スターリンはヒトラーに勝る虐殺者でした。権力者に正義という美名を与えてはなりません。革命はかけ離れた野心のぶつかり合いだったと思います。そして朝鮮戦争は、マルクスという理想家が理性で創造した経済体制の実験が失敗であったことを証明した最初の戦争であったと思います。

ピノコパパのエッセイ集 時に 句と詩集

<http://p.booklog.jp/book/10075>

著者 : pinokopapa

著者プロフィール : <http://p.booklog.jp/users/pinokopapa/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/10075>

ブックログのpapier本棚へ入れる

<http://booklog.jp/puboo/book/10075>

電子書籍プラットフォーム : ブックログのpapier (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社 : 株式会社paperboy&co.